奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4

杉遺跡（すぎいせき）

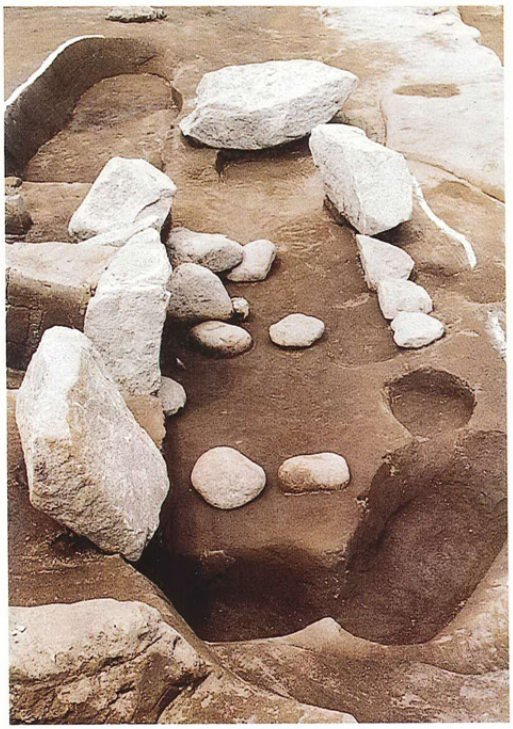
杉地区ほ場整備事業に伴う調査報告

2000

岡山県奥津町教育委員会

杉地区遠景

土壙墓２（南西より）



古墳石室（東より）

土壙26出土遺物

土壙27出土遺物

序

岡山県の最北部、中国山脈の内懐に抱かれた奥津町は、急峻な連山を源とする吉井川が、数多くの大小支流を受けながら、尽きることなく清い流れをつくって町の中央部を北から南へ縦貫し、この流れに沿って国道179号が走り、点在的に平地が開けております。

町の面積の20％に満たない平地には、古くから集落が形成され、稲作を中心とした農業生活が営まれて来ました。

近年の農業構造の変化により、地域の開発は時代の要請でありますが、埋蔵された貴重な文化遺産が失われることは一面忍びない限りでもあります。 町内に数多くの埋蔵文化財が点在するなかで、このたび杉地区において農業生産基盤整備事業によりほ場整備が実施されることとなり、これに伴う発掘調査を実施致しました。

調査範囲は平成８年度で4,000㎡、平成９年度で12,640㎡合わせて16,640㎡についてトレンチ調査を行い、平面的な遺跡の広がり見られ、埋蔵文化財が確認されたため発掘調査を実施しました。

工事計画の先行するなかで、加えて途中で担当職員の交替等、数々の厳しい条件を背に調査を行い、弥生時代中期から古墳時代後期の住居跡をはじめ、特に古墳時代後期の横穴式石室と多種め遺物、人骨等が発見されされました。

恵まれた自然の中で永い年月を経て残された数多くの遺構と土師器片等の遺物が検出され、歴史的文化遺産であり、先人の辿った文化の足跡を正しく後世に伝承すべき報告書がここにできあがりました。

この発掘調査には岡山県教育庁文化課をはじめ、古代吉備文化財センターの絶大なご指導とご支援を戴きながら関係諸機関、地権者各位の格別のご理解とご協力を賜りさらには、この発掘から報告書の作成に至るまで直接従事いただいた多数の関係各位のご努力に感謝すると共に、本書が文化財保護の資料として幅広くご活用戴けますことを願ってやみません。

平成12年3月28日

奥津町教育委員会
教育長　水　田　和　稔

例　　言

1．本書は、奥津町杉地区農業生産基盤整備事業に伴い、奥津町農村整備課の依頼を受け、奥津町教育委員会が発掘調査を実施した「杉遺跡」の報告書である。

2．遺跡は岡山県苫田郡奥津町杉494-1 番地他に所在する。

3．確認調査は岡山県教育庁文化課の指導を受けて、上杉地区については奥津町教育委員会河田裕司が1996（平成８）年10月８日から10月31日まで実施し、石原地区については同日下隆春が1998（平成10）年２月９日から３月５日まで実施した。

4．全面調査は平成８年度は河田が、平成９年度は日下が担当した。その調査面積は平成８年度4,000㎡、平成９年度12,640㎡合計16,640㎡である。

5．本報告書の作成は日下が担当し、1998・99（平成10・11）年度に行った。

6．本報告書の執筆、編集は日下が行った。

7．写真撮影は調査現場のものに関しては河田、日下が行い、遺物写真に関しては日下が行った。

8．古墳出土人骨は井上貴央氏（鳥取大学）に鑑定及び報告文執筆を依頼した。

9．本書に用いた高度は海抜高であり、方位はすべて磁北である。

10．出土遺物ならびに図面、写真等は奥津町教育委員会（岡山県苫田郡奥津町井坂495)にて一括保存している。

11．発掘調査及び報告書作成にあたり下記の方々に御教示を得た。記して厚く御礼申し上げます。
伊藤晃、江見正己、岡田博、小郷利幸、亀山行雄、小嶋善邦、佐藤寛介、島崎東、杉山一雄、高梨政大、高畑知功、武本章司、圍正雄、橋本惣司、平井泰男、福田正継、松本和男、光永真一、宗森英之、村松篤、安川豊史、行田裕美、渡邊恵理子（敬称略・五十音順）

凡　　例

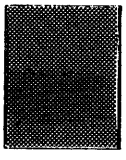
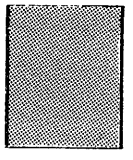
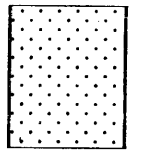
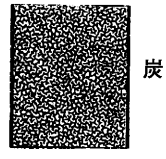
1．本報告書に用いた方位は磁北で、図５・６のみ真北を指す。また、高度はすべて海抜高である。

2．本報告書に掲載した遺物は土器、土製品、石器、金属器、玉類に分けて通し番号をつけた。なお、土器以外に関しては下記を番号の前に付けた。
　土製品：C　　石器：S　　金属器：M　　玉類：O

3．土器類の実測図については、須恵器、陶磁器については断面を黒塗りし、弥生土器、土師器、瓦質土器については白抜きとした。

4．遺構・遺物実測図の縮尺率については図目次に示す通りである。

5．遺構実測図中に示すトーン部分の表現は以下の通りである。


被熱面（強）

被熱面（弱）

貼床

炭

6．土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径推定が困難であったものである。

7．本報告書で使用した地図のうち図６については国土地理院発行の１／50,000地図を拡大、複製し、加筆したものである。

8．本報告書の遺構・遺物の縮尺率は以下の通りであり、以下に記載のない遺構・遺物及び縮尺率の異なる遺物に関しては図目次において縮尺率を明記している。
竪穴住居：1/60　掘立柱建物：1/80　井戸：1/50　溝：1/20　土壙：1/30
土壙墓：1/20　土器類：1/4　土製品：1/2　石器：1/2　金属器：1/2

目　　次

カラー図版
序
例言
凡例
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……2
　第３節　日誌抄……5
　第４節　報告書の作成……11
　第５節　調査と報告書の体制……11
第２章　地理的歴史的環境
　第１節　奥津町の地理的歴史的環境……12
　第２節　遺跡周辺の環境……14
第３章　遺構と遺物
　竪穴住居……20
　掘立柱建物……51
　井戸……55
　溝……56
　炉……60
　柱穴列……63
　土壙……64
　土壙墓……78
　土器溜り……81
　古墳……84
　遺構に伴わない遺物……87
第４章　まとめ
　１．縄文時代の遺物について……95
　２．弥生時代の集落と遺物……95
　３．須恵器の年代……99
　４．竪穴住居址にみる生活様式……100
　５．古墳について……102
　６．中近世の様相……102
　７．その他の遺物……103
　８．結語……105
表
　土器観察表……107
　土製品観察表……110
　石器観察表……110
　金属器観察表……111
　玉類観察表……111
　新旧遺構対応表……112
付載　杉古墳から検出された人骨について……113
図版

目　次

図１　遺構区割図（１／2500）……４
図２　遺跡範囲内トレンチ設定図（１／3000）…７
図３　遺構配置図（１／1000）……９
図４　奥津町位置図 ……12
図５　奥津町遺跡分布図 ……13
図６　杉遺跡周辺図（1/25000） ……14
図７　１区遺構配置図（１／500） ……15
図８　３区遺構配置図（１／500） ……17
図９　２区遺構配置図（１／500） ……18
図10　４区遺構配置図（１／500） ……19
図11　５区遺構配置図（１／500） ……19
図12　竪穴住居１ ……20
図13　竪穴住居１出土遺物（M1～3: 1/9） ……21
図14　竪穴住居２ ……22
図15　竪穴住居２出土遺物 ……23
図16　竪穴住居３ ……24
図17　竪穴住居３出土遺物（O1:1/1）……24
図18　竪穴住居４ ……25
図19　竪穴住居４出土遺物 ……25
図20　竪穴住居５ ……26
図21　竪穴住居５出土遺物 ……26
図22　竪穴住居６ ……27
図23　竪穴住居６出土遺物 ……27
図24　竪穴住居７ ……27
図25　竪穴住居７（完掘後）……28
図26　竪穴住居７出土遺物 ……28
図27　竪穴住居出土遺物 ……29
図28　竪穴住居８ ……29
図29　竪穴住居８出土遺物 ……29
図30　竪穴住居９ ……30
図31　竪穴住居９出土遺物 ……31
図32　竪穴住居10 ……32
図33　竪穴住居10出土遺物 ……32
図34　竪穴住居11 ……33
図35　竪穴住居11出土遺物 ……33
図36　竪穴住居12 ……34
図37　竪穴住居12出土遺物 ……34
図38　竪穴住居13 ……35
図39　竪穴住居13出土遺物 ……35
図40　竪穴住居14 ……36
図41　竪穴住居14出土遺物 ……37
図42　竪穴住居15 ……37
図43　竪穴住居16 ……38
図44　竪穴住居17 ……38
図45　竪穴住居18 ……39
図46　竪穴住居18（完掘後）……39
図47　竪穴住居18出土遺物 ……40
図48　竪穴住居19 ……41
図49　竪穴住居19（完掘後） ……41
図50　竪穴住居19出土遺物 ……42
図51　竪穴住居20 ……43
図52　竪穴住居20出土遺物 ……43
図53　竪穴住居21 ……43
図54　竪穴住居21出土遺物 ……43
図55　竪穴住居22出土遺物 ……44
図56　竪穴住居22 ……44
図57　竪穴住居23 ……45
図58　竪穴住居24 ……46
図59　竪穴住居24出土遺物 ……46
図60　竪穴住居25 ……47
図61　竪穴住居26 ……47
図62　竪穴住居26出土遺物 ……47
図63　竪穴住居27 ……48
図64　竪穴住居27出土遺物 ……48
図65　竪穴住居28 ……49
図66　竪穴住居28 ……49
図67　竪穴住居29 ……50
図68　竪穴住居29 ……50
図69　掘立柱建物１ ……51
図70　掘立柱建物２ ……51
図71　掘立柱建物３ ……52
図72　掘立柱建物４ ……53
図73　掘立柱建物５出土遺物 ……53
図74　掘立柱建物５ ……54
図75　井戸１ ……55
図76　井戸１出土遺物 ……55
図77　井戸２ ……55
図78　溝１断面 ……56
図79　溝２出土遺物（土器95･96 ：1/2）……56
図80　溝２断面 ……56
図81　溝３－１断面 ……57
図82　溝３－３出土遺物 ……57
図83　溝３－２断面 ……57
図84　溝４断面 ……58
図85　溝４出土遺物 ……58
図86　溝５出土遺物 ……59
図87　溝５断面 ……59
図88　炉１（１／50）……60
図89　炉２（１／30）……60
図90　炉３（１／50）……61
図91　炉３完掘（１／100) ……61
図92　炉４（１／20） ……62
図93　炉４出土遺物（１／４） ……62
図94　柱穴列（１／80） ……63

図95　土壙 ……64
図96　土壙２ ……64
図97　土壙３ ……64
図98　土壙 ……65
図99　土壙 ……65
図100 土壙６ ……65
図101 土壙７ ……65
図102 土壙８（１／50）……66
図103 土壙９（１／50 ……66
図104 土壙10（１／50）……66
図105 土壙11（１／50）……67
図106 土壙12（１／50）……67
図107 土壙13（１／50）……67
図108 土壙14（１／50 ……67
図109 土壙15（１／50）……68
図110 土壙16（１／50）……68
図111 土壙17 ……68
図112 土壙18 ……69
図113 土壙18出土遺物 ……69
図114 土壙19 ……69
図115 土壙19出土遺物 ……69
図116 土壙20 ……69
図117 土壙20出土遺物 ……69
図118 土壙21 ……70
図119 土壙22 ……70
図120 土壙22出土遺物 ……70
図121 土壙23 ……70
図122 土壙24 ……71
図123 土壙24出土遺物 ……71
図124 土壙25 ……71
図125 土壙26 ……72
図126 土壙26出土遺物 ……72
図127 土壙27 ……72
図128 土壙27出土遺物 ……72
図129 土壙28 ……73
図130 土壙29 ……73
図131 土壙29出土遺物 ……73
図132 土壙30 ……73
図133 土壙30出土遺物 ……73
図134 土壙31 ……74
図135 土壙32 ……74
図136 土壙33 ……74
図137 土壙34（１／60） ……75
図138 土壙34出土遺物（Ｍ６：2/3） …… 75
図139 土壙35（１／60） ……75
図140 土壙35出土遺物 ……75
図141 土壙36 ……76
図142 土壙36 ……76
図143 土壙37 ……76
図144 土壙37出土遺物 ……76
図145 土壙38 ……77
図146 土壙39 ……77
図147 土壙墓１ ……78
図148 土壙墓１出土遺物（M16･17:1/3,M20:2/3)…78
図149 土壙墓２ ……79
図150 土壙墓２出土遺物 （すべて2/3）……79
図151 土壙墓３ ……80
図152 土壙墓４（１／30） ……80
図153 土器溜り（１／20） ……81
図154 土器溜り出土遺物 ……82
図155 土器溜り出土遺物 ……83
図156 古墳石室（１／30） ……85
図157 古墳　人骨・遺物出土状況（１／15） …86
図158 古墳出土遺物（１／４） ……86
図159 遺構に伴わない遺物弥生土器 ……87
図160 遺構に伴わない遺物土師器・須恵器 …88
図161 遺構に伴わない遺物中世土器･陶磁器　89
図162 遺構に伴わない遺物土製品 ……90
図163 遺構に伴わない遺物土製品 ……91
図164 遺構に伴わない遺物石器･玉類（O2:1/1）…93
図165 遺構に伴わない遺物金属器（M45:2/3）…94
図166 弥生土器編年図 ……97
図167 須恵器編年図 ……101
図168 津山市西吉田北遺跡出土鉄鐸 ……105

図版目次

図版１　１．１区全景（南より）
　　２．２区西半（東より）
　　３．２区東半（南西より）
図版２　１．３区北部（東より）
　　２．３区南部（南より）
　　３．３区東部（南西より）
図版３　１．４区東部（南西より）
　　２．４区東部（南より）
　　３．５区全景（南より）
図版４　１．竪穴住居１（東より）
　　２．竪穴住居２（北西より）
　　３．竪穴住居３（北より）
図版５　１．竪穴住居３遺物出土状況図版20
　　２．竪穴住居４（北西より）
　　３．竪穴住居５（東より）
図版６　１．竪穴住居６（西より）
　　２．竪穴住居７（南より）
　　３．竪穴住居７（南より）
図版７　１．竪穴住居８（南東より）
　　２．竪穴住居９（南東より）
　　３．竪穴住居９カマド（南東より）
図版８　１．竪穴住居10（南より）
　　２．竪穴住居11（東より）
　　３．竪穴住居12（南東より）
図版９　１．竪穴住居13（南東より）
　　２．竪穴住居14（南より）
　　３．竪穴住居15（南より）
図版10　１．竪穴住居16（南より）
　　２．竪穴住居17（南より）
　　３．竪穴住居18（南より）
図版11　１．竪穴住居18（南より）
　　２．竪穴住居19（南東より）
　　３．竪穴住居19（南東より）
図版12　１．竪穴住居20（南東より）
　　２．竪穴住居21（南より）
　　３．竪穴住居22（東南より）
図版13　１．竪穴住居23（南より）
　　２．竪穴住居24（南より）
　　３．竪穴住居24出土遺物
図版14　１．竪穴住居25（南より）
　　２．竪穴住居26（南より）
　　３．竪穴住居28（南東より）
図版15　１．竪穴住居29（北より）
　　２．掘立柱建物１・２（西より）
　　３．掘立柱建物４（南より）
図版16　１．掘立柱建物５（南より）
　　２．溝４（南西より）
　　３．溝４作業風景
図版17　１．溝４
　　２．炉３（北より）
　　３．土壙26（南東より）
図版18　１．土壙27（北東より）
　　２．土壙27遺物出土状況
　　３．土壙38（北より）
図版19　１．土壙墓１（北より）
　　２．土壙墓１（北より）
　　３．土壙墓２（南より）
　　１．土壙墓２（南より）
　　２．土壙墓２（南より）
　　３．土壙墓４（南西より）
図版21　１．土器溜り（西より）
　　２．古墳人骨検出状況
　　３．古墳・人骨（北より）
図版22　１．古墳遺物出土状況
　　２．人骨（下顎骨）
　　３．石室（東より）
図版23　１．石室（北より）
　　２．作業風景
　　３．調査終了後
図版24　竪穴住居１・２出土遺物
図版25　竪穴住居３・４・５出土遺物
図版26　竪穴住居５・７・８・９・11出土遺物
図版27　竪穴住居13・18出土遺物
図版28　竪穴住居19・22・24出土遺物
図版29　竪穴住居27・28・29出土遺物
図版30　溝２・５、炉４出土遺物
図版31　炉４、土壙18・20・24出土遺物
図版32　土壙26・27・29・34・37、土壙墓１出土遺物
図版33　土壙墓２、土器溜り出土遺物
図版34　土器溜り、古墳出土遺物
図版33　包含層出土遺物
図版34　包含層出土遺物
図版35　包含層出土居物
図版36　包含層出土遺物
図版37　包含層出土遺物
図版38　包含層出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

杉地区は奥津町域南部、町内を南北に流れる吉井川の左岸に広がる河岸段丘に展開される集落であり、現在建設省により工事が進められている苫田ダム完成後はダム管理区間上流端となる場所に位置する地区である。1996（平成８）年、奥津町農村整備課ではこの杉地区において農業生産基盤整備事業を計画したが、計画範囲内の田畑からは過去の分布調査により弥生土器及び土師器・須恵器・中世備前焼等が散布することが確認されており、「杉遺跡」として周知の遺跡と扱われていた。そのため県文化課、町農村整備課、町教育委員会の三者で埋蔵文化財の扱いについての協議を行い、その結果、確認調査を行い遺跡の性格及び範囲を把握した後、計画範囲内の遺跡の存在する箇所の全面発掘調査を行うこととなった。

奥津町では蒜山美作リゾート構想の中で計画されている奥津リフレッシュビレッジ開発計画（仮称）をはじめとした各種の大規模な工事が計画・施工されており、それに伴い、埋蔵文化財の調査及び保護の必要が増加することが予想され、平成８年度より埋蔵文化財専門職員が在職しており、確認調査は奥津町教育委員会河田裕司が行った。

調査の方法はまず工事を先に着手する石原川から、吉井川の上流部にかけての地区をトレンチにより遺跡の存在を確認する方法を採用した。吉井川沿いの河岸段丘上に位置するこの地区では長い歴史の中で水害による被害を受けたことも少なくないであろうことが予想され、川沿いでは遺跡が存在していたとしても遺構等が遺存していない可能性が高いと判断した。しかし、本来ならば工事計画範囲内であればトレンチにより遺跡の有無を確認するべきなのであるが、与えられた期間及び人員で行き届いた調査を行うことは非常に困難であり、遺跡が存在していれば遺構等が遺存しているであろう山手側を中心に計62本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。期間は平成８年10月８日から同31日までであり、調査面積は960㎡である。

トレンチは重機にて表土を掘削し、遺構面までを作業員の手によって検出して平面的に遺跡の広がりを確認し、さらに一部を深く掘り下げ土層観察を行い断面的な広がりを確認した。確認調査の結果、杉橋付近から東側に向けて弥生時代～中世までの柱穴・土壙・住居址と思われる遺構が同一面にて確認された。この遺構面より下層には川砂が厚く堆積しており遺跡の存在は確認されなかった。遺構面の直上は後世の攪乱により包含層となっており弥生土器・土師器・須恵器・土師器皿・瓦質土器・備前焼・青磁等の遺物が出土した。また、水田造成等の際に多少の削平は受けているものの吉井川付近まで比較的遺構が残存していた。全面調査は遺構・遺物が確認された範囲全域を調査することが望ましいのであるが杉遺跡においては時代の幅も広く、遺構・遺物量は相当数と考えられ、前述の通り与えられた期間と人員で全域を調査することは不可能に近く、協議の結果、調査範囲を特に遺構・遺物の多くみられた区域に限定し、調査区外の区域に関しては極力遺構面までの掘削を控え、工事中に遺構及び遺物がまとまって発見された場合、直ちに教育委員会に連絡し調査の是非を協議することとした。当初の調査予定面積は12,202㎡調査終了予定日は平成10年３月31日である。

第２節　調査の経過

全面調査は平成８年11月25日より開始された。平成８年度調査予定地は中国電力鉄塔移築区の528㎡（２区）と杉橋より下流側の3,470㎡（１区）であり、まずは急を要する鉄塔移築部分の調査を着手した。調査予定面積15,800㎡を平成９年度内で完了するには月平均約1,000㎡の調査が必要であった。これまで町教育委員会は３件の発掘調査を実施したが、いずれも１ヵ月前後の短期間の調査で、このような大規模な調査を実施することは前代未聞のことであり、様々な困難が予想された。まずは作業人員の確保である。苫田ダム建設により人口が激減し、以後過疎化が急速に進む奥津町では満足な人数を確保することは厳しく、まして発掘調査経験者を集めることなどは不可能に近かった。幸い地元地権者の皆様に作業員として従事していただき、ある程度の人員は確保できたもののベルトコンベア等大規模な調査に必要不可欠な資材はなく、測量器材も満足に揃っていない状態で、厳しい町財政の中から発掘調査のみのために高額な資材を一通り揃えることは難しく当初は排土の運搬も全て手作業にて行わざるを得ない状態で、高齢な作業員には大きな負担を強いるのみならず作業の能率の低下も否めなかった。また、岡山県北部の山間部に位置するこの地では冬の積雪量は甚大で調査期間中も積雪には大いに悩まされ、作業の能率がさらに低下せざるを得なかったが、月1,000㎡の調査面積をクリアするためには雪のために作業を中断することはできず、終日除雪作業の日々が続きながらも調査は中断することなく休日も返上で行われた。鉄塔移築部分の調査では多数のピットが検出され、１区の調査では弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴住居址計６棟及び土器溜り・土壙・溝・ピットなど多種の遺構が検出され、弥生土器・土師器・須恵器・土師器皿・瓦質土器等の土器類と石器・鉄器等の遺物が多数出土した。しかし、作業の進行と図面の進行のバランスが取れず、また、一人一人の作業に調査員の目が行き届かず、慣れない作業員により遺構の検出具合及び遺物の出土状態が不確かなものが多く存在する結果となってしまった。それゆえ本来ならば実測しなければならない多くの図面を割愛せざるを得なかったことは非常に残念である。しかし、それでも図面の進行は追い付かず、県古代吉備文化財センター職員の皆様と学生アルバイトの諸君に多大なる協力を得ることができたおかげで平成９年３月31日年度最後の日にようやく調査予定面積を終了することができたが悪天候により全景写真のみは残された。

平成９年度も残り12,200㎡の調査を完了させなければならない厳しい状況にあり、調査担当は河田の退職により町教育委員会日下隆春が引き継ぐことになった。４月６日には地元住民中心に１区の現地説明会が開催され、小雨の中、橋本惣司先生（当時久米郡久米中学校教頭）の説明が行われ、約80名の参加者をみることができた。

１区は４月８日に調査区全景の写真撮影を行ない、調査を完全に終了し、引き続き２区の調査に移ることとなった。２区は鉄塔移築部分は前年度に調査が終了しており、残り4,050㎡を５つの地区に分けてまずは鉄塔の西側から調査を実施し、引き続いて東側の調査を行うこととなった。５月１日、吉井川に沿って１区より約130ｍ下流にてほ場整備工事を実施していた業者より人骨が出土したとの報告を受けた。

写真１　現地説明会風景

この地点は確認調査の際に遺構等は存在しないであろうと予想し、敢えてトレンチを設定しなかった箇所であった。現地にて実見してみると人骨と若干の土器の出土がみられ、周辺には50㎝前後の石が並ぶように配置されており、かなり破壊されているものの古墳の可能性が強く、県文化課、町農村整備課との協議の結果、急遽この人骨出土地点周辺440㎡を発掘調査することが決定し、調査中の２区を一時中断し、調査を行うこととなった（５区)。しかし当初の調査予定面積を完了することでさえ困難な状況にある中で新たに調査区を増やすことは調査員及び作業員にとって大きな負担であり、また、古墳調査の場合これまでよりもさらに精度の高い調査が要求されることから、現段階での体制で調査を行うことは非常に厳しく、県古代吉備文化財センターに派遣職員を依頼し、同職員杉山一雄氏に来町いただき５月21日～28日まで調査の指導及び協力を得ることができた。

調査の結果、古墳時代後期の横穴式石室と判明し、墳丘の盛土は失われているものの石室の一部が残存し、石室内からは人骨と土師器・須恵器が出土した。人骨については鳥取大学井上貴央教授に来町いただき人骨鑑定を依頼し、火葬骨との返答を得た。なお発掘調査時、町内には古墳は町域北部の長藤に１基しか存在せず、今回調査した古墳は町内２例目であり調査終了後、地権者のご好意により保存されることとなり、破壊される事なく再度埋め戻され、盛土も新たに復元され町重要文化財に指定されるに至った。

５区の調査終了後は２区の調査を再開したが、町道の付け替え工事を施工するために３区の調査を９月中に終了するよう農村整備課より依頼があり、再度２区を中断し３区の調査に取り掛かった。３区は最も面積の広い調査区であり、１区との位置関係からも相当量の遺構・遺物が見込まれた。調査は６月中旬、日差しの強くなり始めた頃より開始され、真夏の猛暑の中作業は続けられた。３区の調査中より新たに作業員が増員され、学生アルバイトも多数参加し、県古代吉備文化財センターよりベルトコンベアーを貸与して頂いたことにより作業の能率は大幅に向上した。しかし、連日の酷暑の中思うように作業ははかどらず、しかも３区は特に急を要する箇所であり、作業員は満足な休憩も取れず、また、作業員は最大時25名に及び、調査員は連日作業員の作業の段取りの設定のみに終始せざるを得なくなり、肝心な遺構検出作業等に目が行き届かず、遺物の出土状況等においても把握できなかったものが多く、不備な点が多かったことが大いに悔やまれてならない。図面実測においても作業の進行上多くの図面を割愛せざるを得ず、実測作業の終了した箇所から随時遺構が破壊される中での調査は作業員・調査員共に精神的にも肉体的にも厳しい状況の中での調査であった。その結果、古墳時代後期の竪穴住居９棟をはじめ、弥生時代～中世にかけての集落址・墓地等が見つかり、大きな成果をあげることができた。

写真２　杉古墳

３区終了後は引き続き２区東部の調査を再開した。この地区は表土掘削時より住居址の存在が確認されており、調査の結果、計13棟の住居址が連日相次いで見つかり、１日で住居址を数棟検出する日もあり図面が大幅に遅れる場面もあったが、11月中旬に無事作業を終了することができた。

２区終了後は東部に位置する４区の調査に移った。幸いこの年は暖冬に恵まれ、例年よりも雪が少なく、前年度の様に除雪作業に時間を取られる必要

がなかった分順調に調査を進めることができた。４区は掘立柱建物をはじめ多くの柱穴と、古瀬戸・肥前系陶器等中世を中心とした貴重な資料を多く見ることができた。また、中世遺構の下層からは北東～南西方向に延びる弥生時代の溝が見つかり、そこから多くの特徴的な土器が出土した。この溝は調査区外へ延びており本来ならば圃場整備対象地区ならば調査するべきなのであるが、時間的な制約もあり全長を確認することができなかったことは残念であったが、平成10年２月下旬、調査予定面積合計16,250㎡を全て終了することができた。

調査終了後、引き続き吉井川より下流域に位置する石原地区の確認調査に移った。遺跡の存在が確認できれば次年度の調査予定地となる箇所である。調査方法は、主に地形の流れに沿って高地から低地にむけて長いトレンチを設定した。しかし水田より数十cm下より湧水が激しく、かつては湿地帯であったと思われ、遺構・遺物ともに確認できず遺跡は存在しないと判断し、３月５日、杉地区における全調査を無事終了することができた。　なお発掘調査に当たっては、猛暑・厳寒の中、快く作業に従事してくださった作業員の皆様、埋蔵文化財発掘調査にご理解・ご協力いただいた地権者及び奥津町役場農村整備課の皆様、調査において指導・助言・協力いただいた岡山県古代吉備文化財センター・津山弥生の里文化財センター職員をはじめとする県内外の研究者の皆様に謹んで厚く御礼申し上げます。

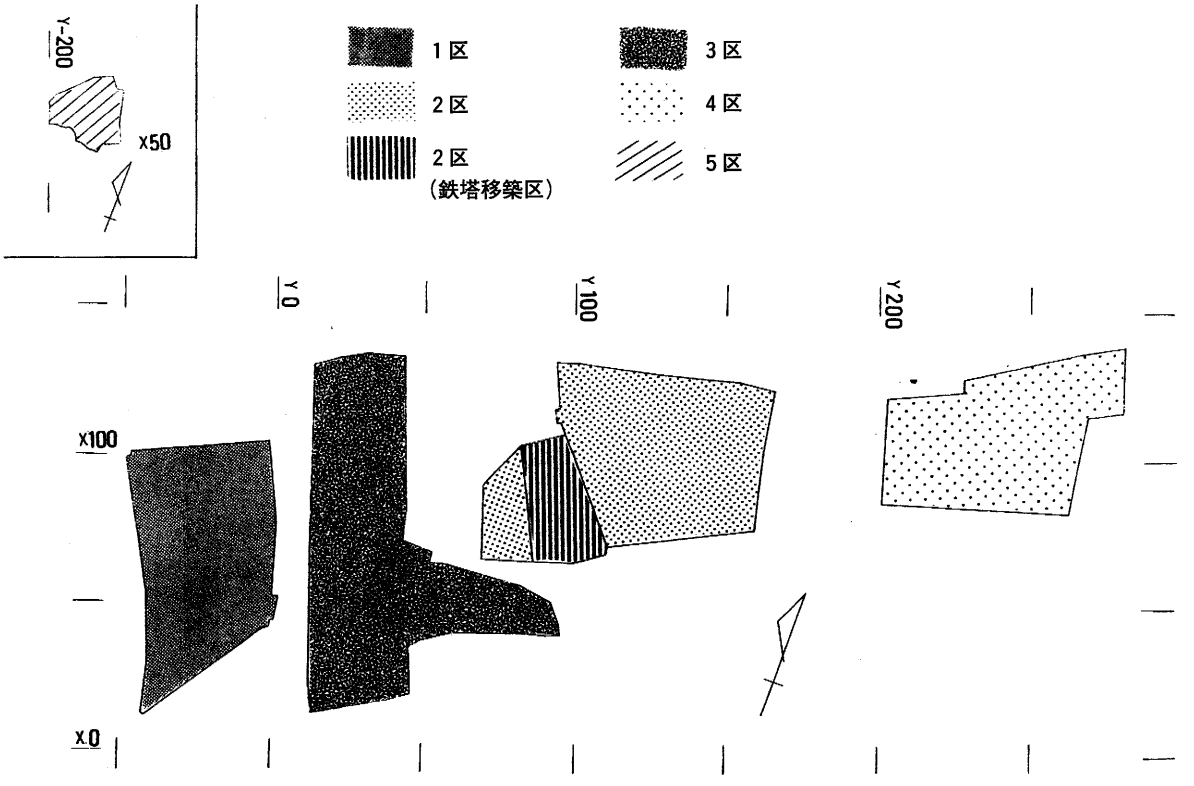


図１　遺構区割図

第３節　日誌抄

確認調査

平成８年10月８日　確認調査開始。
10月31日　確認調査終了。

全面調査

平成８年11月25日　全面調査開始。中国電力鉄塔移築区表土掘削。
12月12日　１区南半表土掘削開始。
12月13日　中国電力鉄塔移築区平板測量、全景写真撮影。調査終了。
12月19日　１区南半表土掘削終了。調査開始。
平成９年２月４日　１区北半表土掘削開始。（～10日）
３月25日　１区遺構平板測量。（～31日）
４月６日　現地説明会。
４月８日　１区全景写真撮影。１区調査終了。
４月14日　２区表土掘削開始。（～５月12日）
４月16日　２区調査開始。
５月２日　２区調査一時中断。５区調査開始。
５月21日　県派遣職員杉山一雄氏来町。（～28日）
５月28日　鳥取大学井上貴央教授来町。人骨鑑定依頼。
５月29日　５区全景写真撮影。
５月30日　５区調査終了。
６月２日　２区調査再開。
６月18日　３区表土掘削開始。（～７月１日）
６月23日　２区調査一時中断。３区調査開始。
10月９日　３区全景写真撮影。平板測量。（～14日）２区調査再開。
10月15日　３区調査終了。
11月４日　２区全景写真撮影。平板測量。（～11日）
11月７日　４区表土掘削開始。（～21日）
11月12日　２区調査終了。
11月18日　４区調査開始。
平成10年２月６日　４区全景写真撮影。平板実測（～19日）
２月20日　４区調査終了。

石原調査区確認調査

平成10年２月26日　表土掘削。確認調査開始。
３月５日　確認調査終了。遺跡の存在が確認されず、資材撤去。

図２　遺跡範囲内トレンチ設定図

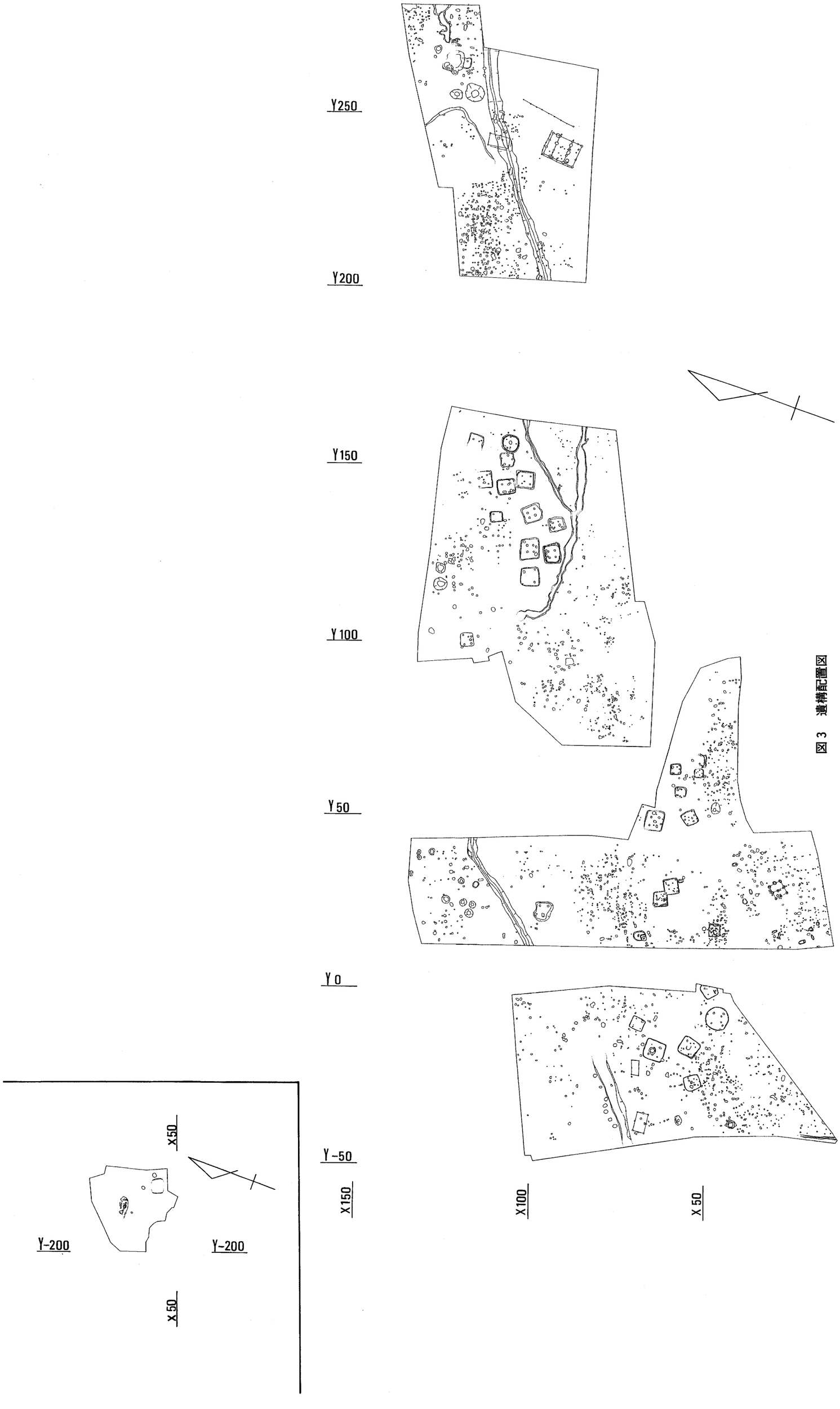


図３　遺構配置図

第４節　報告書の作成

報告書の作成は平成10・11年度中に行われた。しかし、これまで大規模な発掘調査を実施していない奥津町では整理作業を行うための条件整備が整われておらず、まず作業場の確保と、整理作業員の雇用に困難を極め、本格的に整理作業が開始されたのは平成10年８月に入ってからであった。それまでの間、図面整理と遺物の洗浄は行われており、以降の作業は遺物の注記、接合、復元を２名の整理作業員が担当し、遺物の実測、遺構・遺物のトレース、執筆、編集を調査員が行い、平成10年10月より作業員を１名増員し実測を担当した。しかし、調査員・作業員共に経験不足により作業は非常に難航し、コンテナ50箱に及ぶ遺物と数多くの遺構を限られた期間内で整理し報告書としてまとめあげることは至難の業で、さらに平成10年10月より、（仮称）奥津リフレッシュビレッジ開発に伴う発掘調査が実施されるに伴い、調査員は発掘調査を優先せざるを得なくなり、さらに厳しい状況となった。

こうした過程で作業が続けられるに及んで、形状が不明瞭なもの、遺物を伴わないもの、時期が不明なものの一部の遺構については全体図に掲載するのみで、個別の説明は割愛した。遺物についてはできるだけ掲載するよう努力したが、時間的な制約もあり包含層出土遺物または出土位置不明なものについては一部の特徴的な遺物を掲載するのみとした。

なお報告書作成作業にあたっては充分な体制の整わない中で作業に従事して頂いた整理作業員の皆様、鉄器の保存処理及び復元作業のご指導を頂いた津山弥生の里文化財センターの皆様、多忙中のところ、遺物の実測・トレースの大部分を協力頂いた佐藤陽子、谷村雅世、米戸典子ら諸氏には謹んで厚く御礼申し上げます。

第５節　調査と報告書の体制

平成８年度	平成９年度	平成10年度	平成11年度
奥津町教育委員会	奥津町教育委員会	奥津町教育委員会	奥津町教育委員会
教育長　沖田　穂	教育長　沖田　穂	教育長　水田和稔	教育長　水田和稔
主　査　光永雅彦	参　事　光永雅彦	参　事　光永雅彦	参　与　水田喜富
主事補　河田裕司（調査担当）	主事補　日下隆春（調査担当）	主　事　日下隆春（調査担当）	主　事　日下隆春（調査担当）

発掘調査協力者　　赤坂シヅ子、赤坂正郎、赤坂泰、安藤栄子、安藤重美、岡田忠敏、加藤マツ子、岸川高明、小谷清子、小林淳能、小林勝美、小林秀子、小林秀治、小林政子、小林雅子、小林美保子、坂手忠次、坂手敏子、坂手婦美香、武本慶子、武本章司、成瀬靖子、西村秀子、牧野繁一、牧野丈夫、牧野寿子、森安由利子、山下弘志、山中久和、赤坂史紀、赤坂元、石原信彦、石原聖仁、小林俊彦、武本幸典、福井邦彰、佐藤昭三

整理作業協力者　　生駒喜美枝、小椋明美、甲坂めぐみ、小林典子、友保典子、仁木紀恵、廣野スマ子、佐藤陽子、谷村雅世、米戸典子

第２章　地理的歴史的環境

第１節　奥津町の地理的歴史的環境

奥津町は岡山県北部、中国山地の奥深く、吉井川の上流域に位置する。北は上斎原村、鳥取県東伯郡三朝町、西は中和村、富村、南と東は鏡野町に隣接し、町内には津黒山、花知ヶ山、泉山等1,000m級の山々がそびえＶ字谷を形成し、その谷間を吉井川とその支流である羽出川が流れ、川沿いの狭小な段丘上に小規模集落が点在する。町域の約９割を山林原野が占め、森林資源が豊富であり、また、花崗岩地帯で良質の砂鉄が採れるこの地はたたら場として利用され古代から鉄の一大生産地として製鉄業が営まれ、山間部には砂鉄採集の際の「鉄穴流し」跡や製鉄炉跡が今でも多く残る。また、近世以降木地師の里としても知られており、古くから地の利を生かした産業が盛んであったと思われる。

町北部には古くからその存在が知られる美作三湯の一つ「奥津温泉」が存在し、「作陽誌」によれば宇喜多秀家の従弟である浮田左京亮（宇喜多詮家）がこの地で湯治したと記されている。また、近世には津山藩主の湯治場としても利用され、その湯は「鍵湯」と称され現在も利用されている。

現在奥津町には約160ヵ所の遺跡が知られており、そのうち約８割が製鉄関連遺跡である。山間部には分布調査を実施していない箇所が多くあり、今後製鉄遺跡を中心にさらに増加する可能性は高い。発掘調査は苫田ダム建設が現実化したここ数年激増し、苫田ダム建設やリゾート開発に伴う大規模な調査が相次いで実施されており、現在のところ町内における原始・古代の解明はこれらの成果に依る所が大きい。

町内における旧石器遺跡は分布調査にて１ヵ所周知されているが、黒曜石のスクレイパーが１点見つかっているのみで確たる実証はできないでいる。しかし縄文遺跡に関しては吉井川沿いの低地、台地・丘陵等に早期から各時期にわたる土器片が採集されており、過去における調査でも土路江遺跡や西屋Ａ遺跡において落とし穴が見つかっている。現在調査中の（仮称）奥津リフレッシュビレッジ開発計画に伴う発掘調査では、山間部の緩やかな斜面において流れ込みと思われる後期の土器片も出土しており、高地にも集落が展開されていたことが窺える。また、平成11年には、苫田ダム建設に伴う調査で久田原遺跡より、晩期の竪穴住居址が見つかり町内で初めて縄文集落を明らかにした。久田原遺跡からは管玉や石刀なども見つかっており、今後の成果に大いに期待できるであろう。

弥生遺跡では平成３年、町北部に位置する奥津川西地区において弥生後期の住居址が見つかり、これまで不毛の地と考えられていた吉井川上流部において初めて集落の存在を明らかにした。その後苫田ダム関連の調査では住居址の他、水田や土壙等の遺構や鉄器、青銅器等も出土しており、町内における弥生時代中期から後期の様相が次第に明らかになっている。古墳時代では、これまで北部の長藤地区において後期横穴式石室墳である石引山古墳１基のみであったが、久田原遺跡より河岸段丘の水田下から９基の古墳が発見された。鉄滓が副葬されているものもあり、被葬者は製鉄に従事する集団の首長と考えられているが、古代になるとこの地に官衙的な建物が並び製鉄関連の役所が想定されており、この地が製鉄管

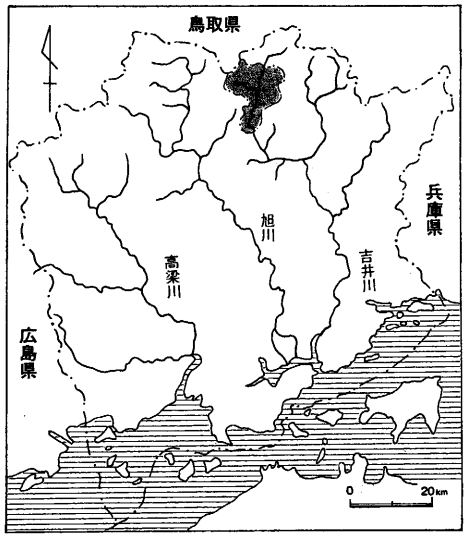
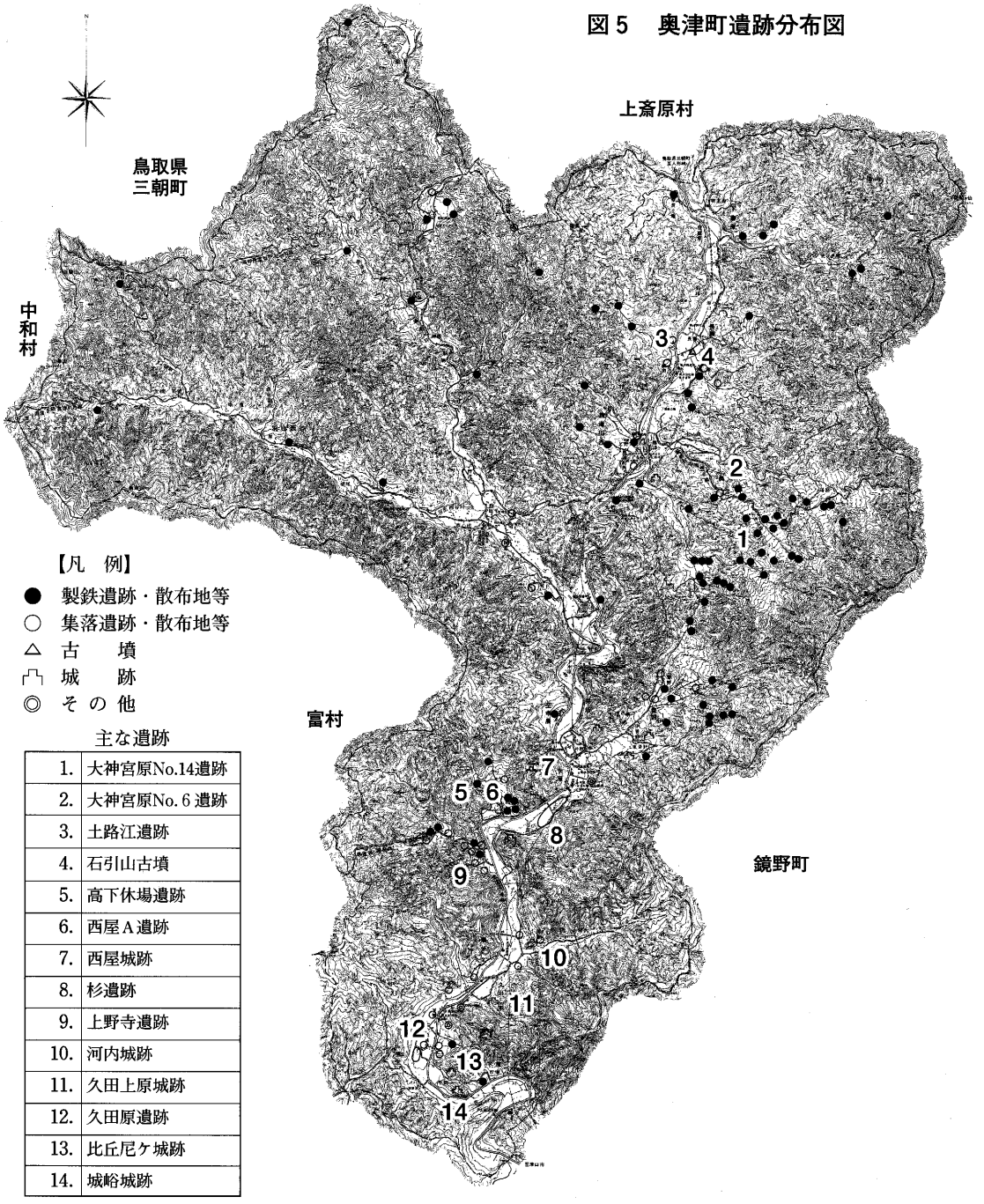


図４　奥津町位置図

図５　奥津町遺跡分布図



主な遺跡

1.	大神宮原No.14遺跡
2.	大神宮原No. 6 遺跡
3.	土路江遺跡
4.	石引山古墳
5.	高下休場遺跡
6.	西屋Ａ遺跡
7.	西屋城跡
8.	杉遺跡
9.	上野寺遺跡
10.	河内城跡
11.	久田上原城跡
12.	久田原遺跡
13.	比丘尼ケ城跡
14.	城峪城跡

理の中心地として連綿と続いていたことが窺われる。さらに大神宮原一帯を中心に町内各地に古代と思われる箱形炉も多く見つかっており、古代においては一大製鉄産地の様相を呈する。

中世になると山名・赤松らの戦乱の舞台となり、町内においても吉井川沿いの拠点に自衛のための山城が築かれる。苫田ダム関連の調査でも河内城、久田上原城、城峪城、比丘尼ケ城が調査され鎌倉～室町初期の特徴的な構造が明らかになっている。室町後期になると美作・伯耆を制するための戦略上の拠点となるこの地では、尼子・毛利・宇喜多ら戦国大名の群雄割拠の争点となり、天正10（1582）年毛利氏により落城したと伝えられる西屋城では今でも戦にまつわる多くの伝説を残している。

近世には津山藩や幕府の支配下に置かれ、北部の花崗岩地域を中心ににたたら製鉄が盛んに営まれた。たたら製鉄は近代まで続いており、山間部にはおびただしい鉄滓の散布や、鉄穴流しによる地形の著しい変化も見られ、往時を偲ばせる。

第２節　遺跡周辺の環境

杉遺跡は奥津町南部、吉井川左岸の低位河岸段丘上に位置し、低地には水田、山麓に集落が形成される。右岸は急峻な山がそびえ、その頂には本章第１節で述べた尼子・毛利・宇喜多氏の攻防の拠点となった西屋城址が存在する。山頂と周囲にのびる尾根を利用して築かれた連郭式の山城で、三方に堀切をもつものであり、保存状態も良好である。その麓には西屋城落城の際に、乳母とともに落ち延びていた城主の若君が殺された地と伝えられ、今でも祀られている「若子様」がある。杉地区も西屋城の攻防の際には激戦地となったといわれ、遺跡の範囲内にも戦死者を葬ったと伝えられる塚がいくつかみられる。西屋城址の南西に広がる斜面にはかつて西屋城の根小屋集落があったと記録に残るが、鉄滓の散布地が点在し、近世にはたたら製鉄が盛行していたと思われる。反対側の谷の斜面に位置する高下休場遺跡では平成７年の調査により古代と思われる箱形炉が見つかっている。また、西屋Ａ遺跡では縄文時代の落とし穴が見つかっている。西屋地区の下流に位置する箱地区では上野寺遺跡などで縄文早期～中期までの土器片及び石器が採集されており付近に縄文集落の存在する可能性も高い。

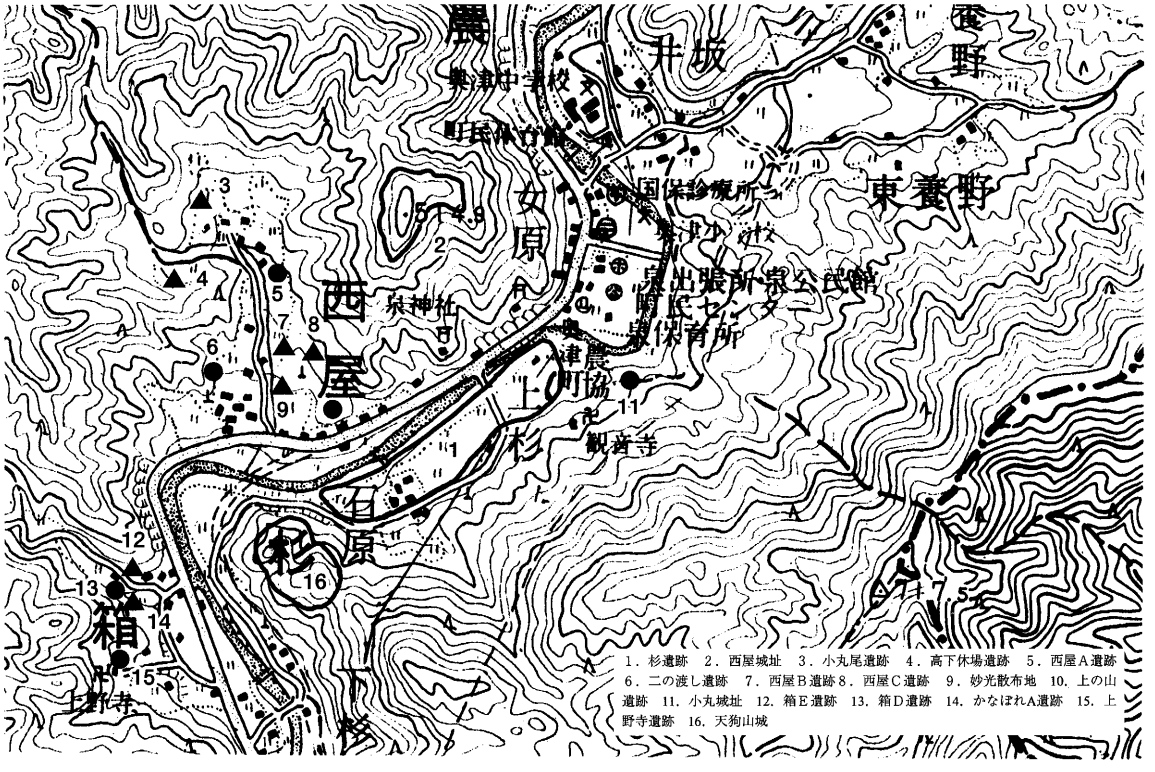
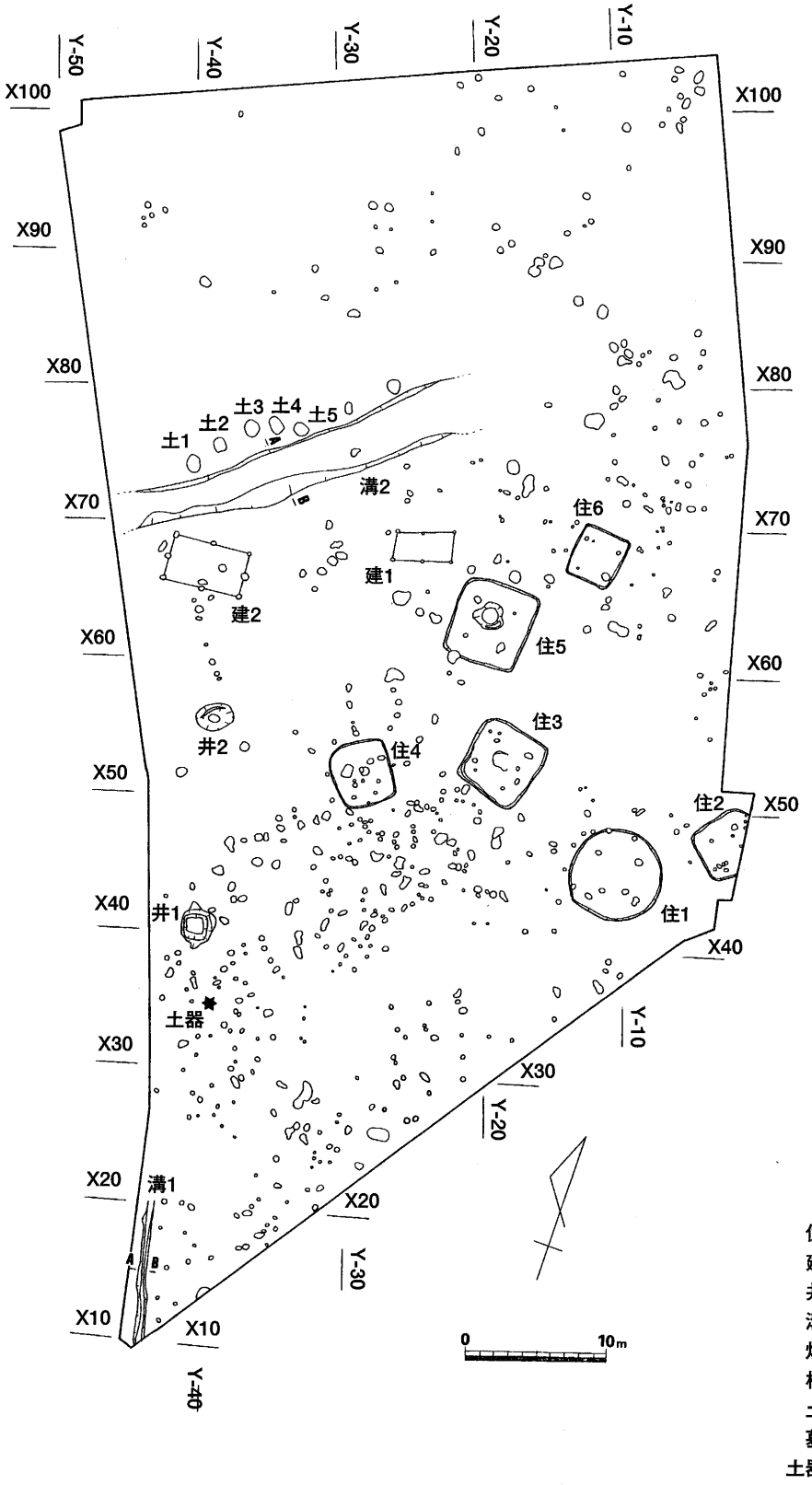


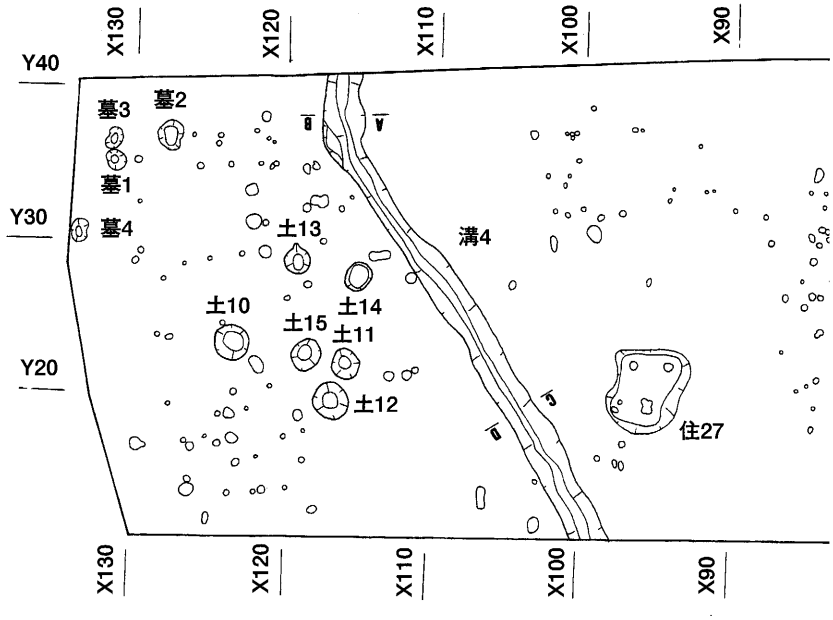
図６　杉遺跡周辺図　　●集落遺跡　▲製鉄遺跡

《参考文献》
・橋本惣司　「奥津町」『岡山県地名大事典』　角川書店　1989年
・宗森英之　「奥津町」『岡山県の地名』　日本歴史地名大系34　平凡社　1988年
・岡山県史編纂委員会　「吉井川上流の山と谷」『岡山県史・自然風土』　1983年
・橋本惣司　「土路江遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告１』　奥津町教育委員会　1993年
・松本和男　「高下休場遺跡・西屋Ａ遺跡」『奥津町埋蔵文化財報告２』　奥津町教育委員会　1995年・
・日下隆春　「大神宮原No.14 遺跡」『奥津町埋蔵文化財報告３』　奥津町教育委員会　1997年
・『発掘された久田の埋蔵文化財』Ⅰ　建設省苫田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター　1997年
・『久田原遺跡現地説明会資料』　岡山県古代吉備文化財センター・建設省苫田ダム工事事務所　1997･1999 年
・長尾勝明　新訂訳文『作陽誌』　日本文教出版株式会社　1963年



住：竪穴住居
建：掘立柱建物
井：井戸
溝：溝
炉：炉
柱：柱穴列
土：土壙
墓：土壙墓
土器：土器だまり

図７　１区遺構配置図


X130
X120
X110
X100
X90
Y40
Y30
Y20
墓3
墓2
墓1
墓4
土13
土10
土14
土15
土11
土12
溝4
住27

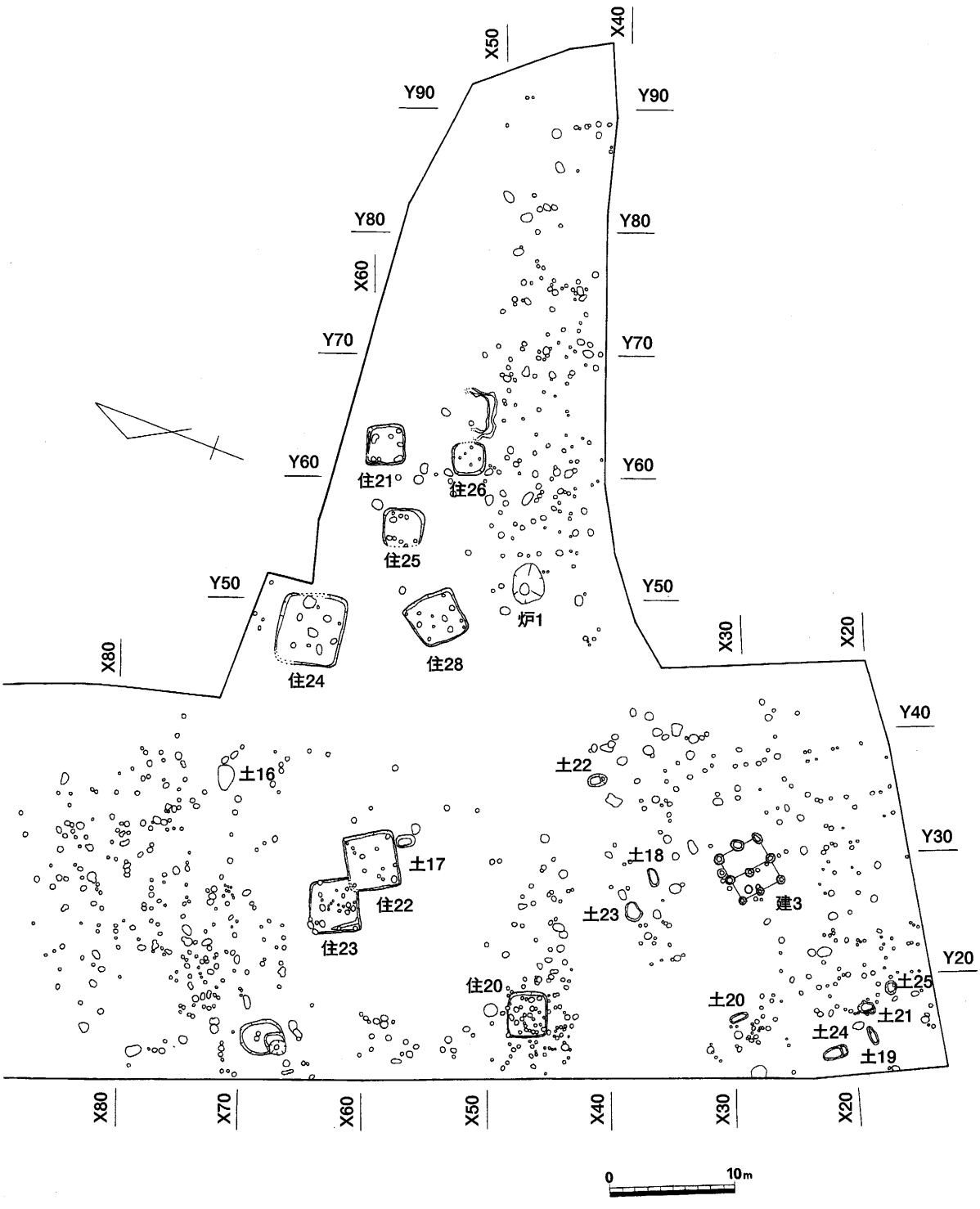

X50
X40
Y90
Y90
Y80
Y80
X60
Y70
Y70
Y60
Y60
住21
住26
住25
Y50
Y50
炉1
X80
住24
住28
X30
X20
Y40
土16
土22
Y30
土17
土18
住22
建3
土23
住23
Y20
住20
土25
土20
土21
土24
土19
X80
X70
X60
X50
X40
X30
X20
0
10m

図 8　3 区遺構配置図

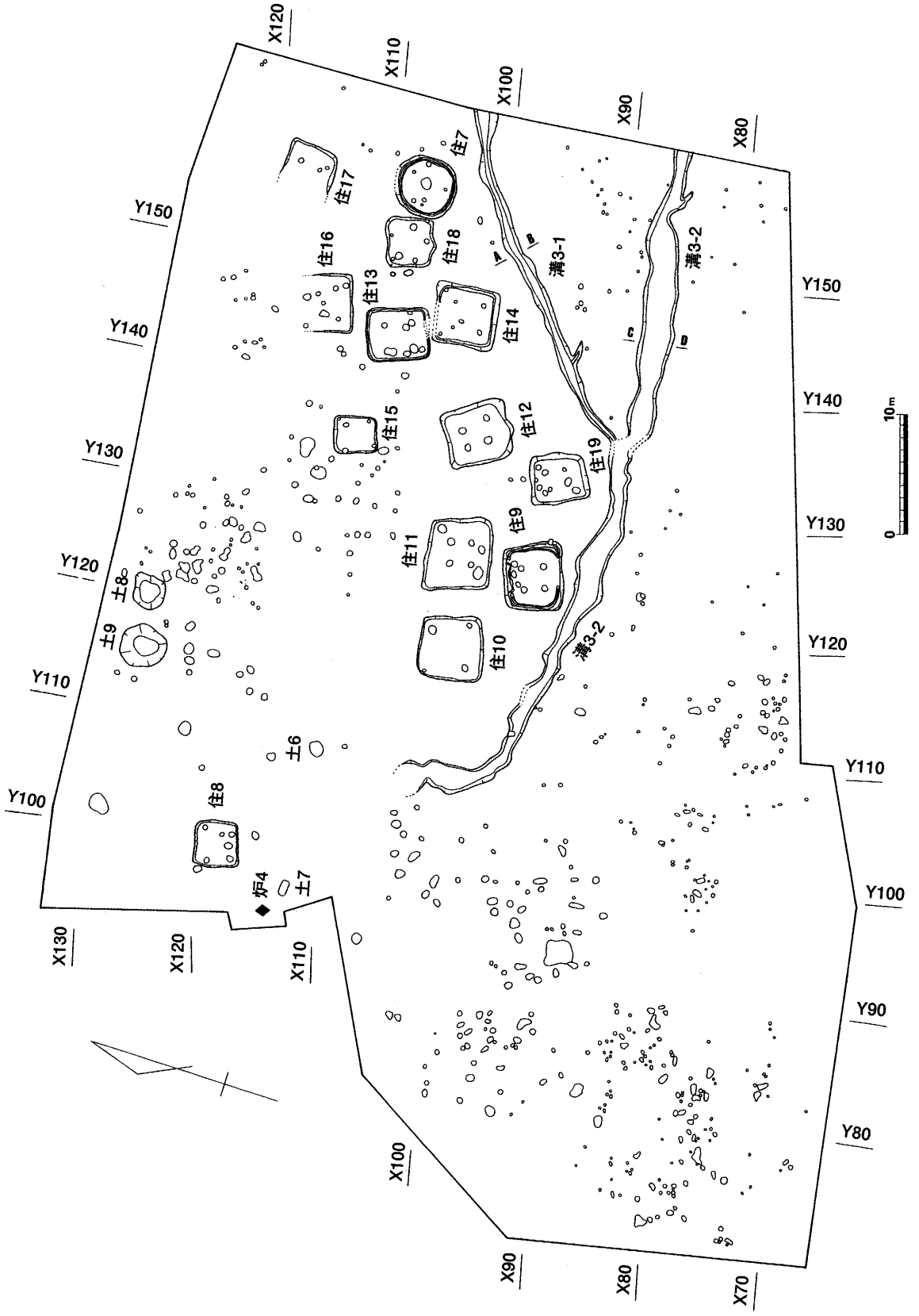

X120
X110
X100
X90
X80
X130
X70
Y150
Y140
Y130
Y120
Y110
Y100
Y90
Y80
住7
住17
住16
住18
住13
住14
住15
住12
住19
住9
住11
住10
住8
溝3-1
溝3-2
±8
±9
±6
±7
炉4
10m
0

図９　２区遺構配置図

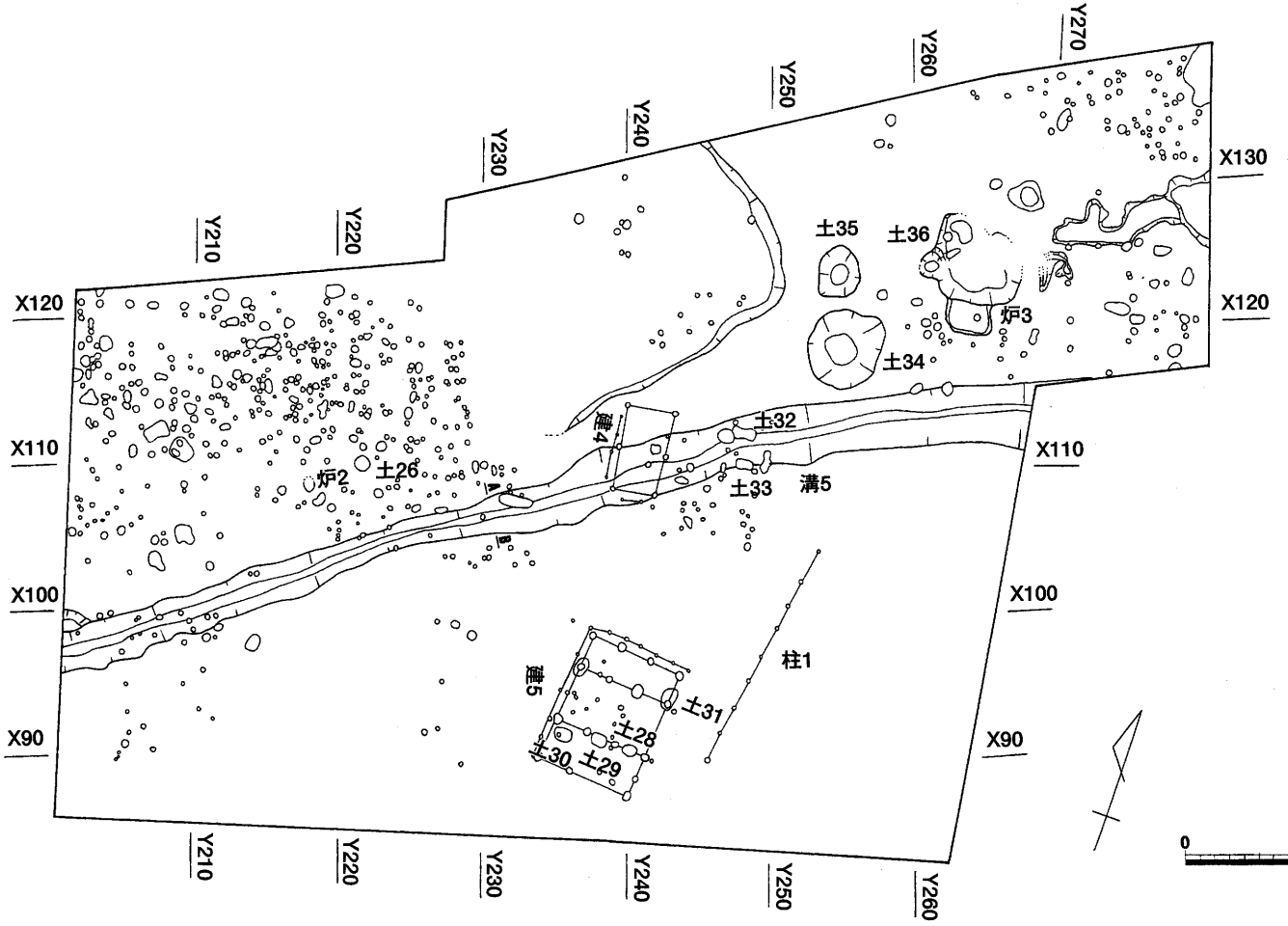


図10　4区遺構配置図

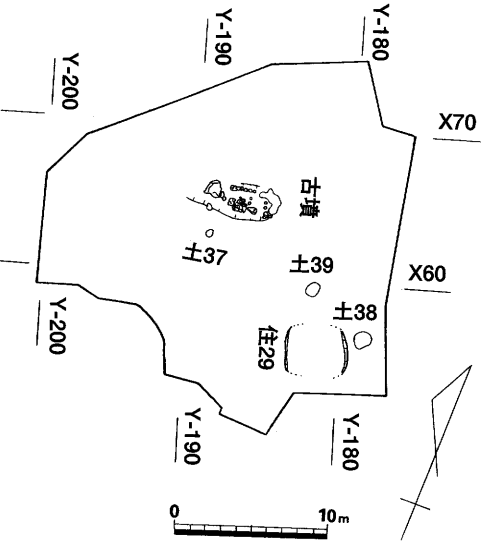


図11　5区遺構配置図

第３章　遺構と遺物

竪穴住居

竪穴住居は計29棟確認することができた。河岸段丘上に位置し、良好な立地条件とは言い難く、そのうちいくつかは微砂質の不安定な基盤層上に建てられており、攪乱により削平を受けていたものも存在した。本遺跡において最も古い住居址は弥生時代中期後葉のものと思われ、弥生時代の住居址は３軒存在する。残りは古墳時代のもので、その殆どから須恵器が出土した。以下、順次遺構の概要について述べる。ただし、時代別に報告していないことをあらかじめ断っておく。

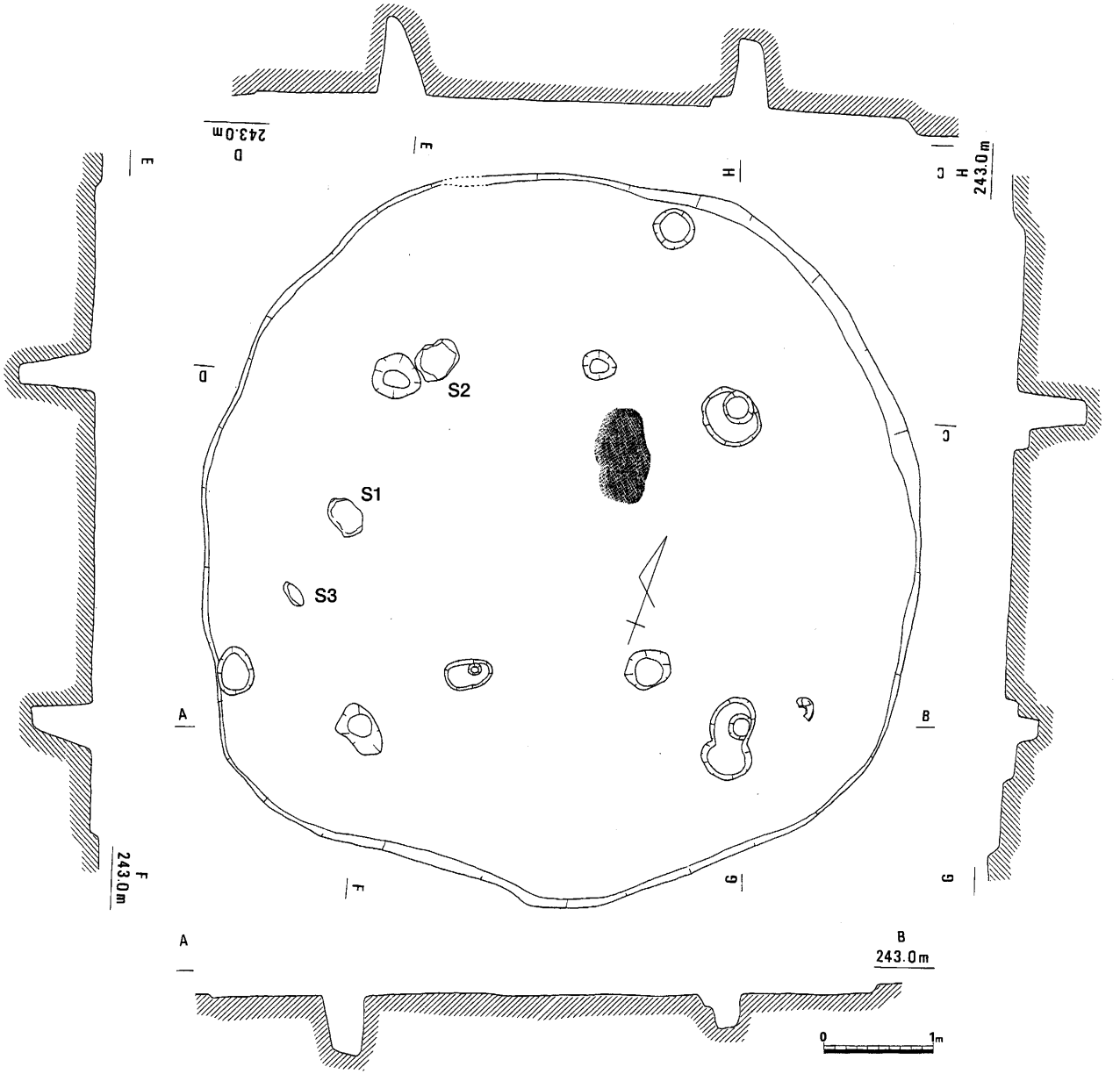
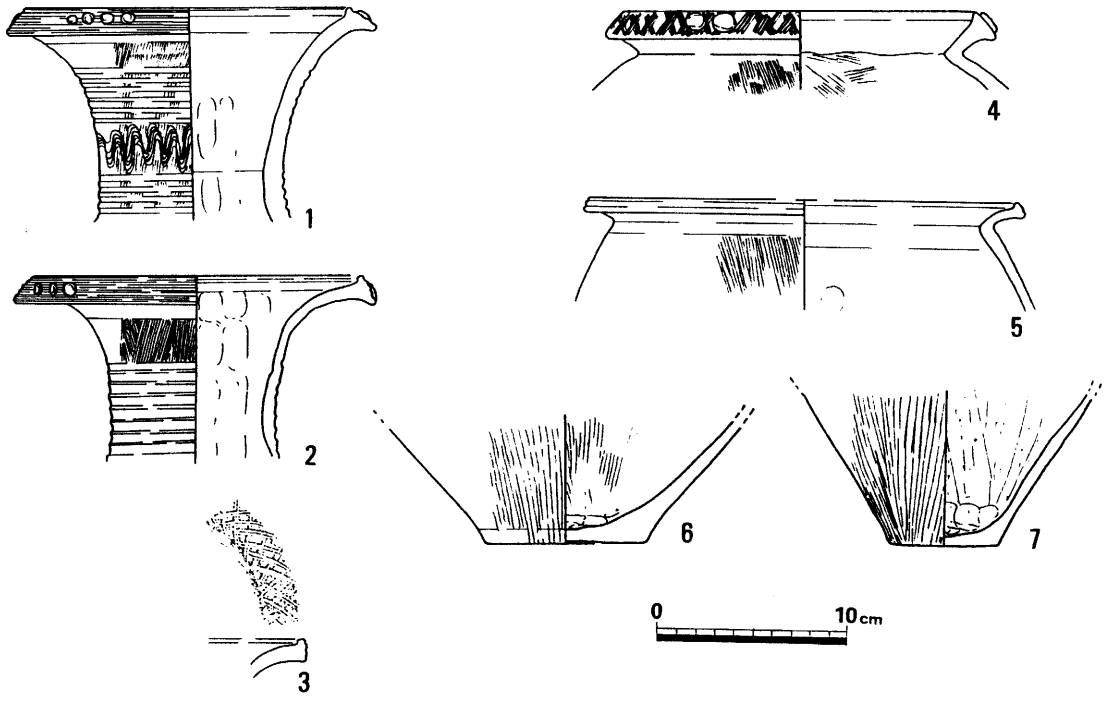
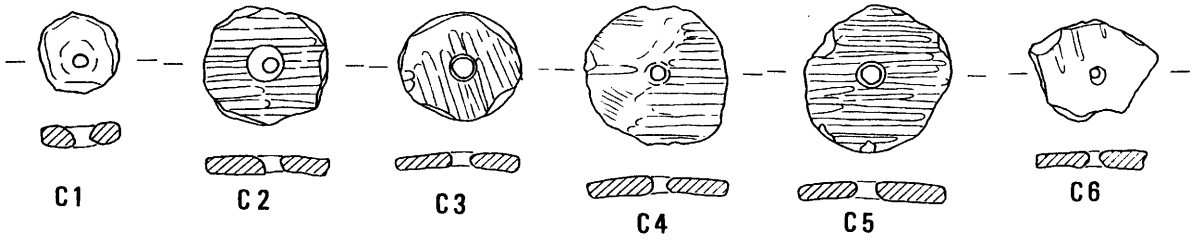


図12　竪穴住居１





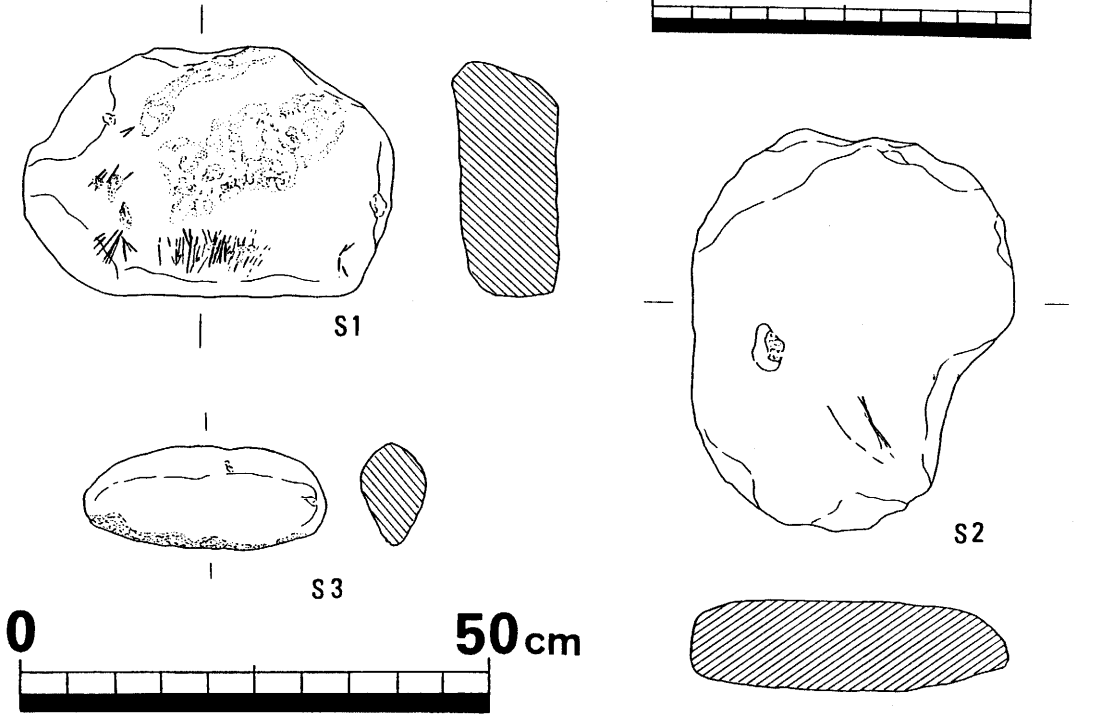


図13　竪穴住居１出土遺物

竪穴住居１

１区の南東に位置する。円形を呈し、最大径705cmを測る。柱穴はいくつか確認されたが、断面図に表現した４本の柱穴をもつものと想定される。中央よりやや北側に被熱面をもち、壁体溝、中央穴等は存在しなかった。

遺物は弥生土器、紡錘車、作業台、叩き石等が出土した。**１～４**は壺型土器の口縁部である。**１～３**は長頸広口壺で、頸部外面にはハケメののち凹線を巡らし、**１**は凹線の間に櫛描波状文を巡らす。口縁部は緩やかに外反するが、**２**は**１**よりも大きく外反する。端部を上下に拡張し、端面には１は４条の凹線を巡らせたのち４個１単位の円形浮文を６ヵ所に配し、**２**は５条の凹線を巡らし、３個１単位の円形浮文を５ヵ所に配する。内面はユビオサエのちナデで仕上げる。胎土には雲母を多く含む。**３**は口縁部上面にヘラ描きによる斜格子文が施される。**４**は端部が上下に拡張し、端面に文様が施される。内面はハケメ仕上げである。**５**は甕の口縁部である。口縁部が「く」字状に外反し、内面はハケメ仕上げである。**５**は口縁端部が上方にのみ拡張し、端面に凹線が巡る。**６・７**は底部である。共に外面は縦方向のミガキが施され、下端は横方向のナデで仕上げる。内面は**６**はハケメのちナデ、**７**はケズリが施されてあった。**Ｃ１～Ｃ６**は土器片を転用した紡錘車である。**Ｃ６**を除きいずれも円形を呈し、径2.1 ～4.0cmを測る。**Ｓ１～Ｓ３**はそれぞれ住居址床面から出土した。**Ｓ１**は中央西寄りから出土した、花崗斑岩の作業台である。上面は平坦であるが、敲打痕及び擦切痕がみられ、一部に磨かれた砥面もみられた。**Ｓ２**も作業台と思われる。上面は平坦で、一部に擦切痕がみられた。**Ｓ３**は叩き石である。楕円形を呈し、片面に敲打痕がみられる。

竪穴住居２

竪穴住居１の北東約３ｍに位置する。調査区の境に接しているため、全体の規模は明らかではないが、東西約420cm、南北約440cmの隅丸方形を呈すると思われる。柱穴はいくつか検出されたが、おそらく４本の柱穴を持つものと想定される。火処、壁体溝、中央穴等は確認できなかった。

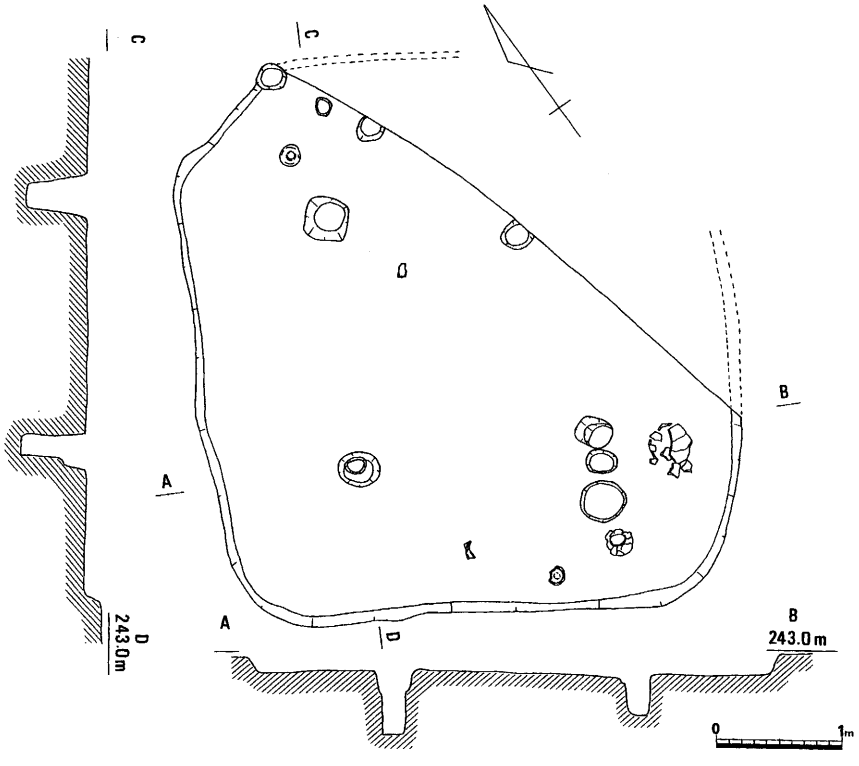


図14　竪穴住居２

遺物は須恵器の杯身、杯蓋、有蓋高杯、壺を図示する。いずれも出土状況については明らかではない。

８～10は杯蓋である。口縁部は**８**は丸みを帯びやや内傾するが、他は外方に開く。いずれも口縁端部は丸くおさめる。**11～13**は杯身である。**12・13**は、立ち上がりが低く、内傾の度合いが強いが、**11**は高い立ち上がりを

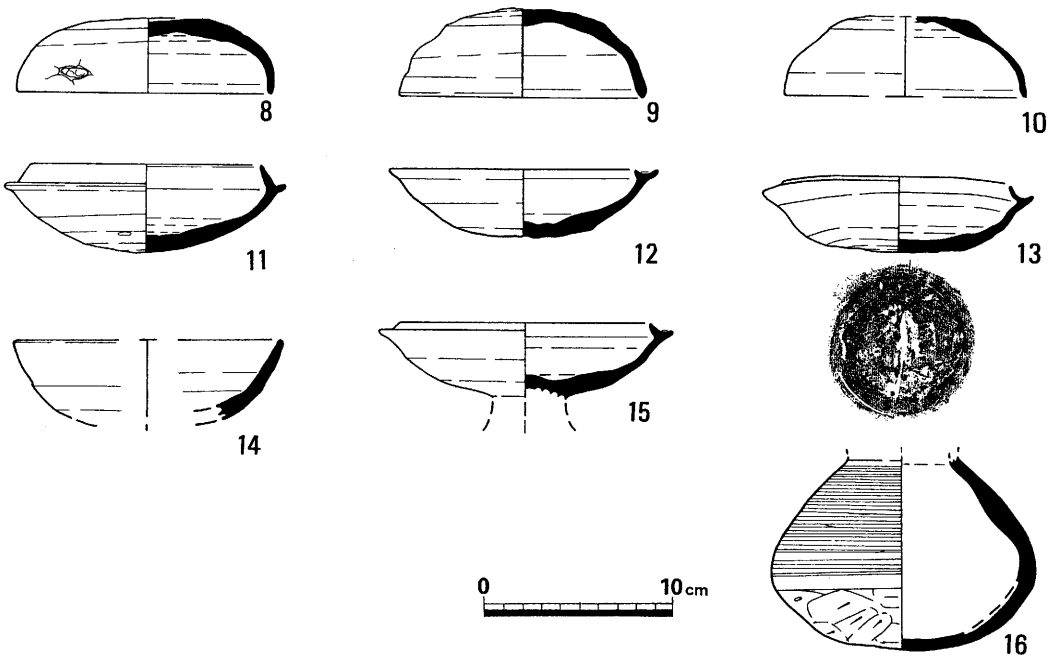


図15　竪穴住居２出土遺物

もち、ヘラケズリの範囲も広く、前二者と様相を異にする。**14**は高杯の杯部である。口縁部には鈍い稜が施される。**15**は脚部が欠損するが有蓋高杯である。杯部は**12・13**と同様低い立ち上がりをもつ。黄白色を呈し焼成は不良である。**12・13**はヘラケズリが省略されている。他は皆、時計回りである。**16**は壺である。口縁部は欠損するが、直口壺と思われる。胴部下半に最大径をもち、最大径上部にカキメが施される。下部は不定方向のケズリで仕上げる。特異な形を示すが、この頃の岡山県北部において稀に見られる形式である。その他図化できなかったが、土師器の甕、甑が出土している。

竪穴住居３

竪穴住居１の西約5.5mに位置する。東西490cm、南北530cmの隅丸方形を呈す。中央に径１00×115cmのやや浅い中央穴をもち、中から焼土が確認された。柱穴はいくつか検出されたが、おそらく断面図に示した４本の柱をもつものと想定される。住居内床面南側約1/2 に壁体溝が巡るが、遺存状態はあまり良好でない。

遺物は以下の５点を図示する。**17**は甑と思われる。口縁部はわずかに外反し、胴部内面はヘラケズリ、外面は粗いハケメが施される。口縁部はハケメののちナデで仕上げられる。内面には粗いハケメ痕が残る。**18**は土師器の甕である。胴部内面はケズリ、外面はハケメが施され、口縁部はナデで仕上げられる。口縁部の一部には煤が付着する。**19**は須恵器の甕である。焼成が甘く、乳白色を呈す。胴部にはカキメが巡らされ、口縁部外面には焼成前に刻まれたヘラ記号と思われる２本の線が認められた。**20**は杯身である。底部が平高台状を呈し、外反気味に立ち上がる特異な形を示す。底部にはヘラケズリは認められない。立ち上がりは低く、端部は丸くおさめる。**O１**は**20**の杯身付近で出土した、碧玉製の管玉である。暗オリーブ灰色を呈し、片面穿孔である。遺物はこれらの他にも土師器、須恵器の破片が多く出土している。

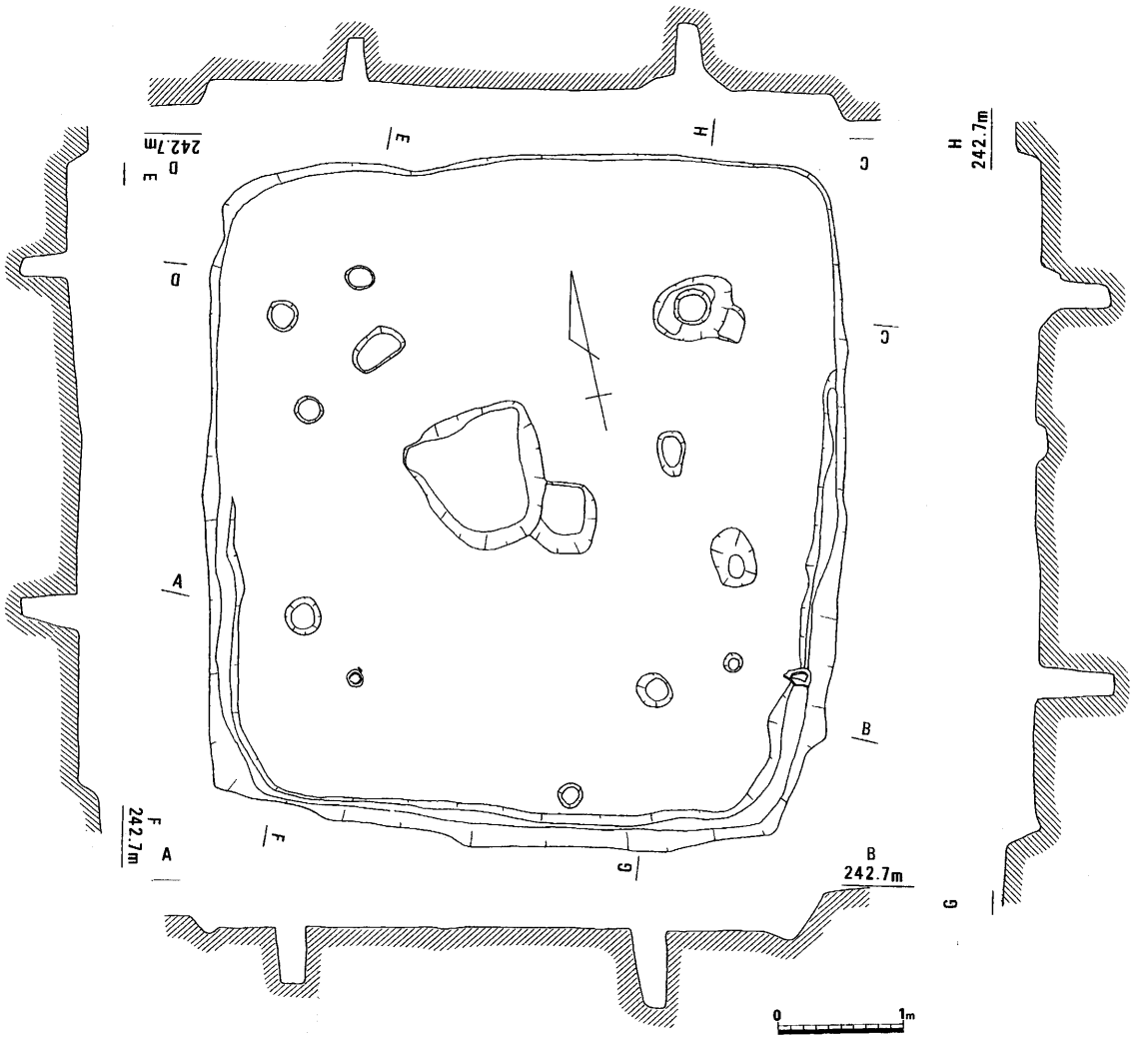


図16　竪穴住居 3

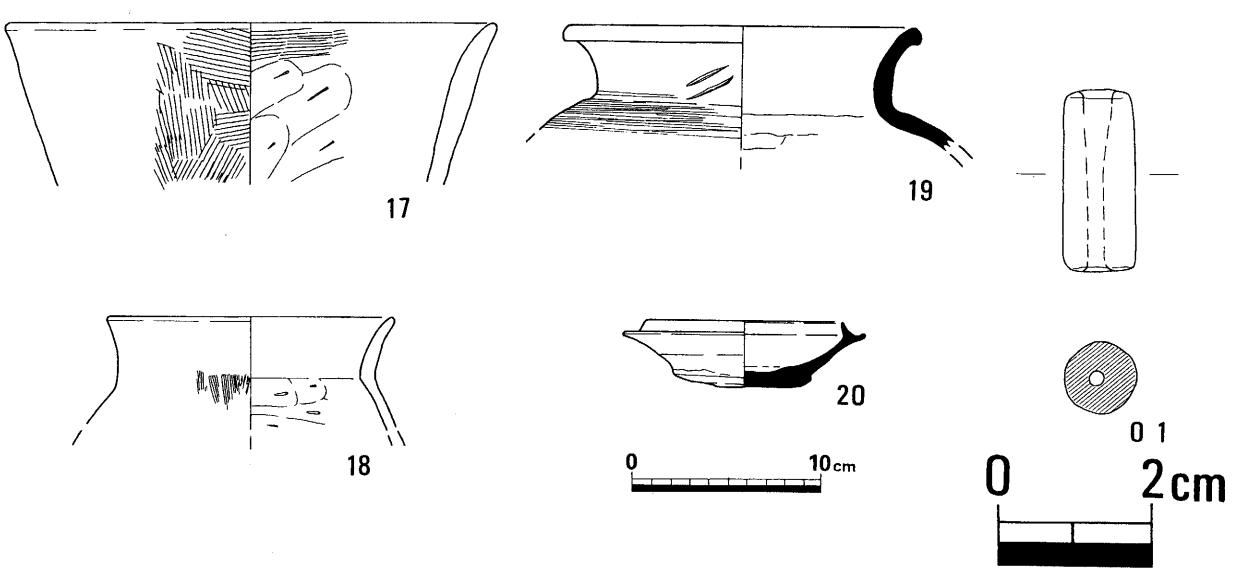


図17　竪穴住居 3 出土遺物

竪穴住居 4

竪穴住居３の南西約５ｍに位置する。東西410cm、南北436cmの隅丸方形を呈す。ほぼ中央に68×79cmの中央穴をもち、４本の柱穴をもつと想定される。壁体溝は存在しなかった。

遺物は杯身**21**、**22**が出土した。**21**は焼成が甘く、摩滅が激しい。器壁は他よりも比較的厚くつくられている。両者とも立ち上がりは低く、内傾する。ヘラケズリは**21**は反時計回り、**22**は時計回りである。出土遺物はこの他にも土師器や、須恵器の甕も破片で出土している。

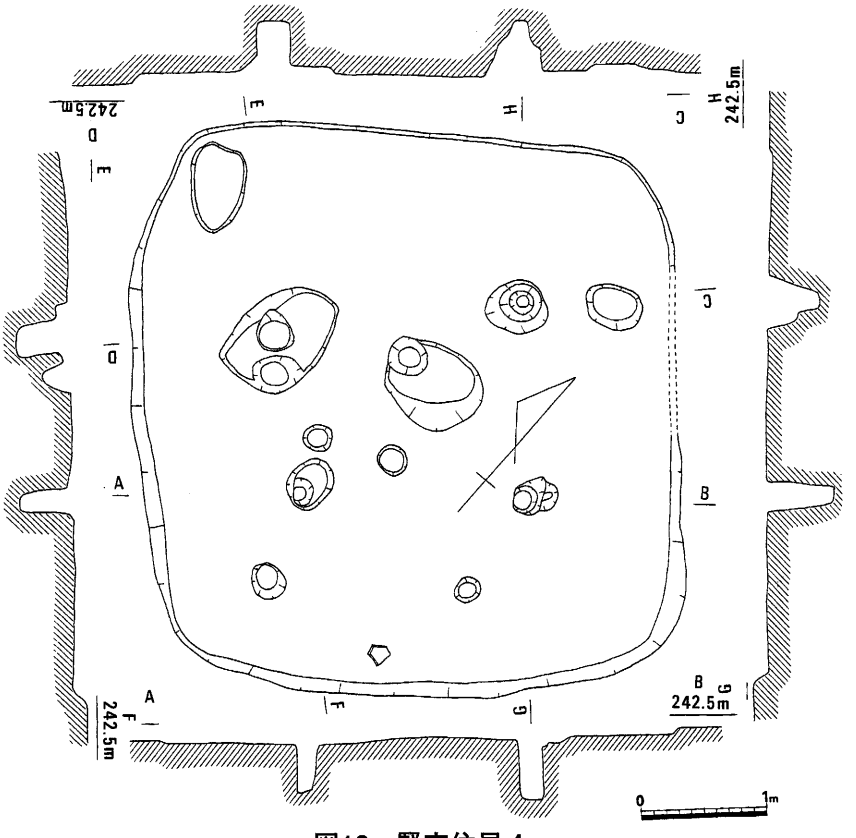


図18　竪穴住居 4

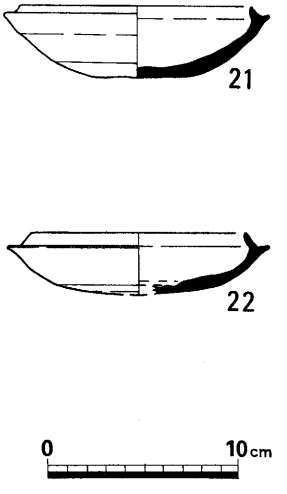


図19
竪穴住居 4 出土遺物

竪穴住居 5

竪穴住居３の北西約5.5mに位置する。床面より東西530cm、南北584cmの隅丸方形を呈する。４本柱をもち、中央やや北寄りに132×114cmのいびつな円形を呈し、途中に段を有する中央穴をもつ。埋土には炭、焼土が確認され、被熱面も見受けられたことから炉として使用されたと思われる。壁体溝等その他の施設は存在しなかったと思われる。

遺物は土師器、須恵器が出土した。**23**は甕である。焼成が甘く細部の調整は不明であるが内面にケズリが施される。胎土は粗い。**24・25**は杯蓋である。いずれも口縁部と天井部の境に稜をもたず、端部を丸くおさめるものである。**25**は焼成が甘く、淡灰白色を呈する。**26～28**は杯身である。いずれもたちあがりは短く内傾し、端部は丸くおさめる。ヘラケズリは**25**が反時計回りで、残りは皆時計回りであった。**29**は甕である。口縁部は外反し、端部を折り曲げ、玉縁状を呈する。

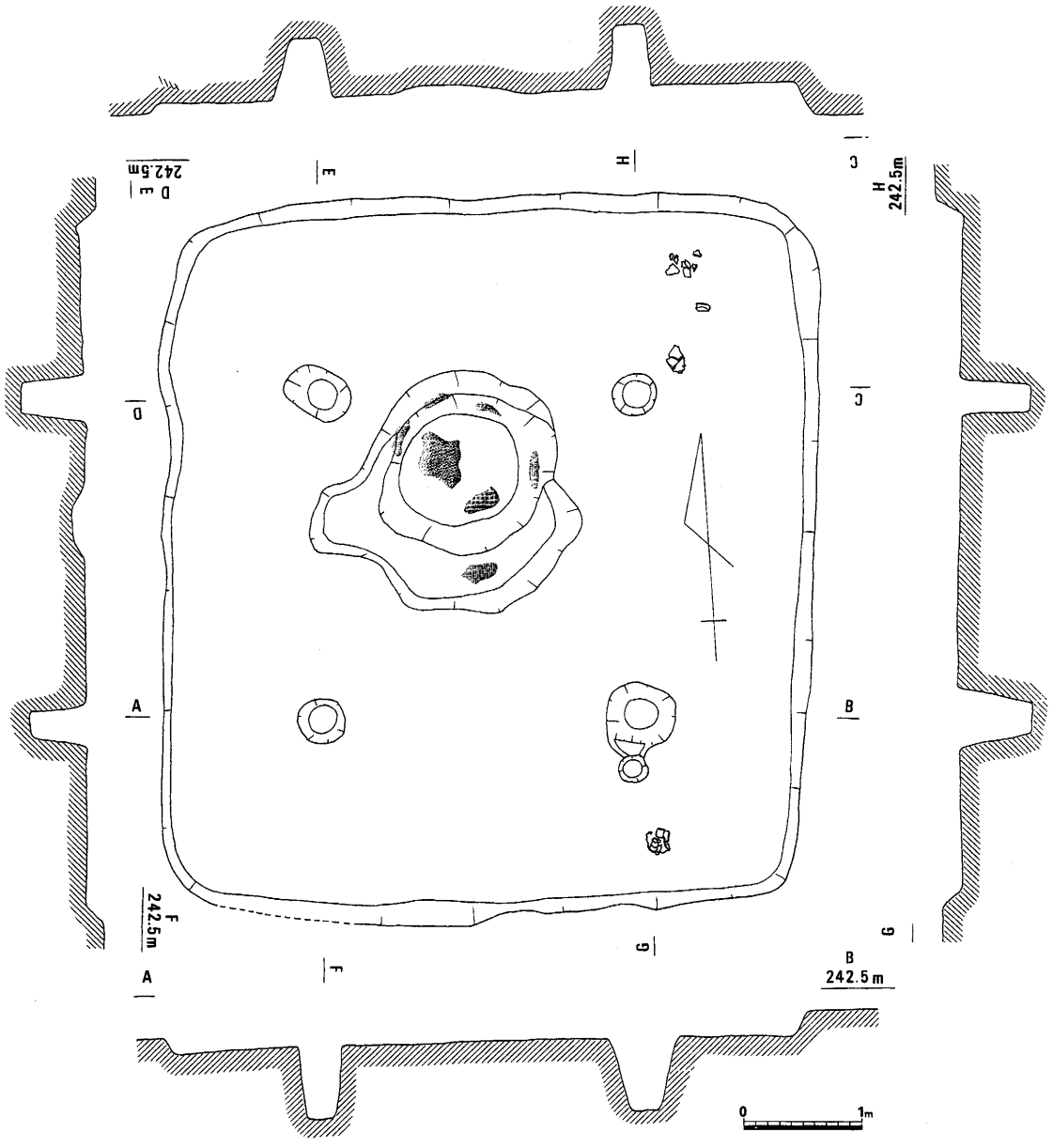


図20　竪穴住居 5

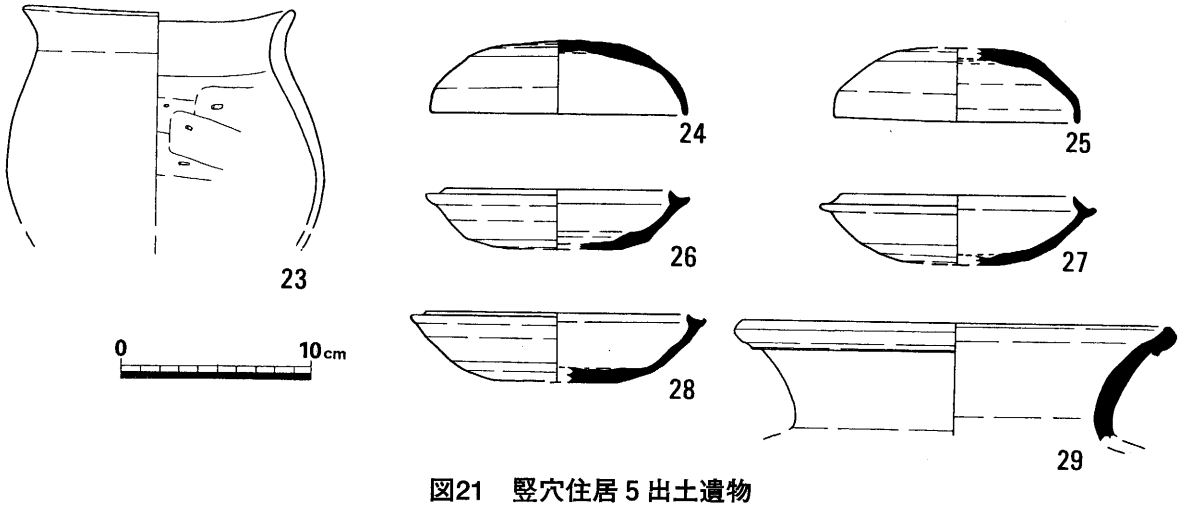


図21　竪穴住居 5 出土遺物

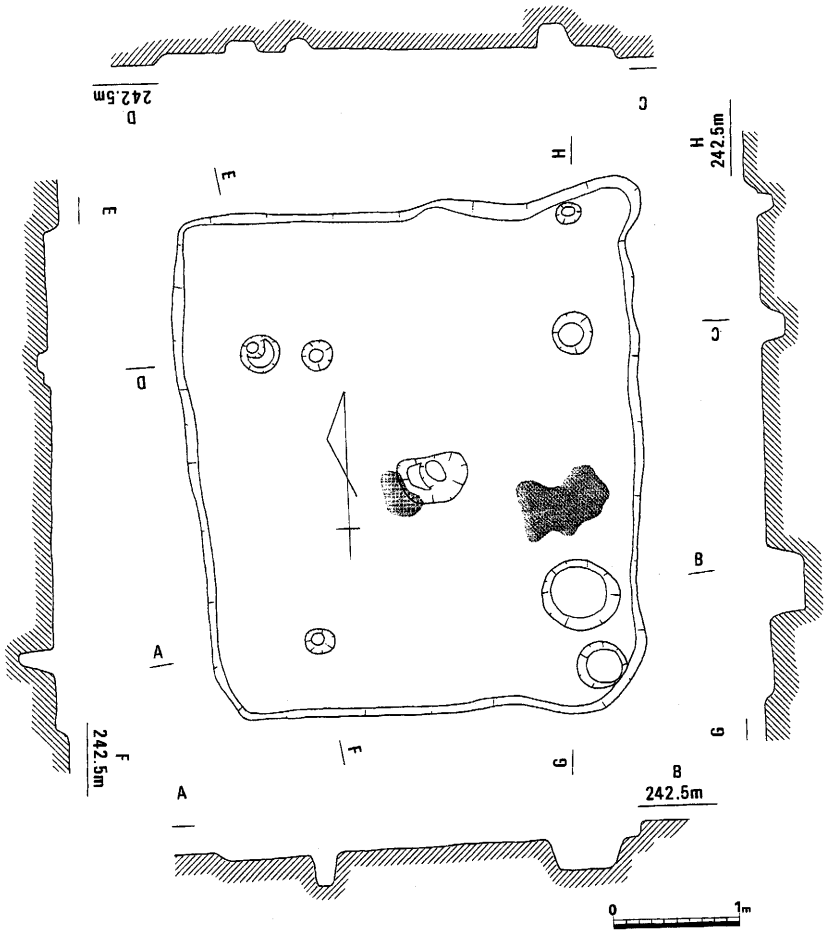


図22　竪穴住居 6

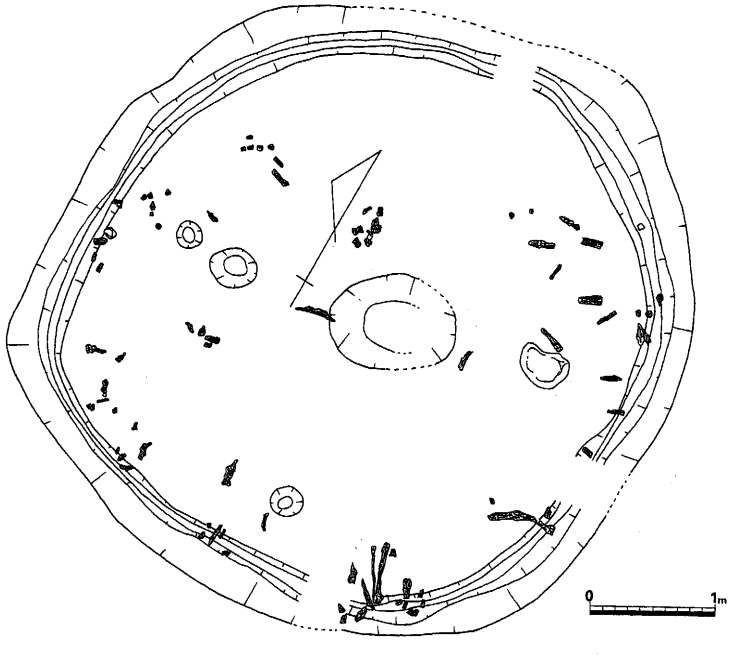


図23　竪穴住居 7

竪穴住居 6

竪穴住居住居５の北約３ｍに位置する。東西348cm、南北386cmの北東端がやや張り出した隅丸方形を呈する。４本柱をもつと考えられるが、北西の柱穴がやや浅く定かではない。52×36cmの中央穴をもち、埋土に炭、焼土を含み、被熱面をもつことから炉として使用されたと思われる。また、東側の床面にも70×40cmの範囲で被熱面が確認された。

遺物は土師器がわずかに出土した。**30**は甕である。摩滅が激しく細部の調整は明らかではないが、内面はケズリ、口縁部はナデで仕上げられる。須恵器は出土していない。

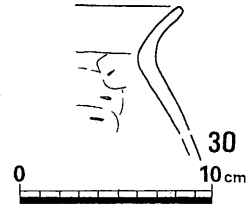


図23　竪穴住居 6 出土遺物

竪穴住居 7

２区東端付近に位置する。長径512cm、短径424cmの不整円形を呈する。調査時住居址内の広い範囲に炭化材が検出されており、焼失家屋の可能性がある。また、壁体溝と100×76cmの楕円形を呈する中央穴をもち、

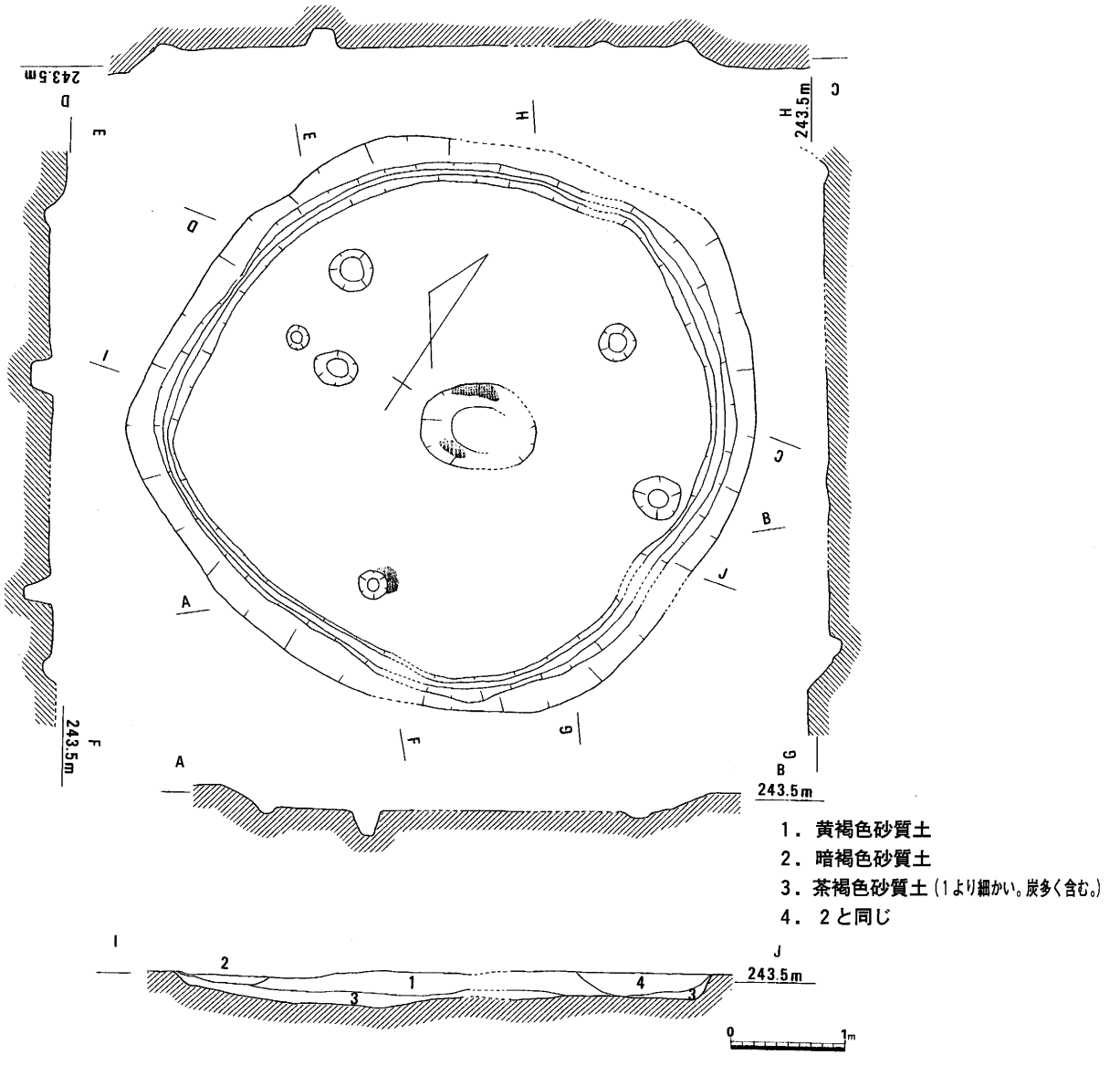


図25　竪穴住居７（完掘後）

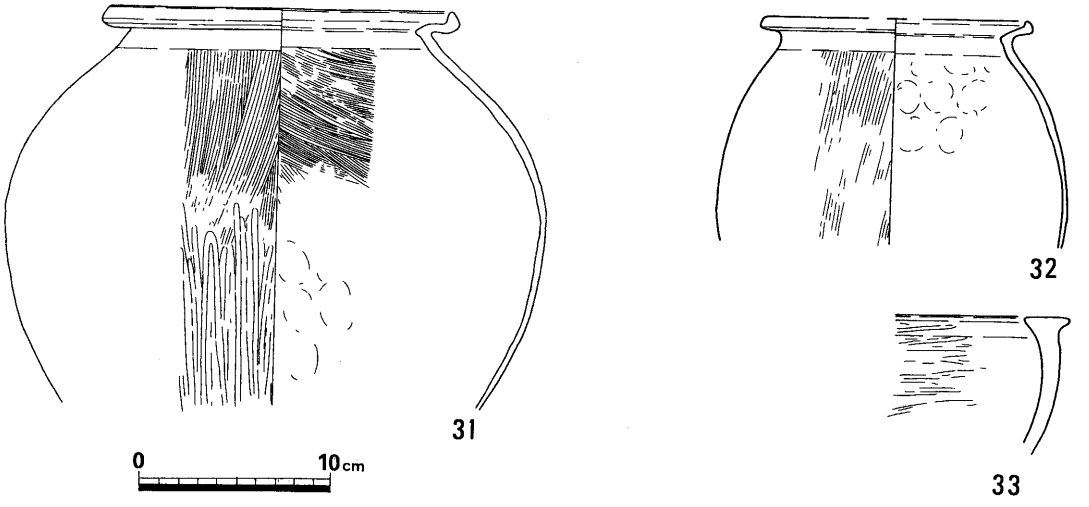


図26　竪穴住居７出土遺物

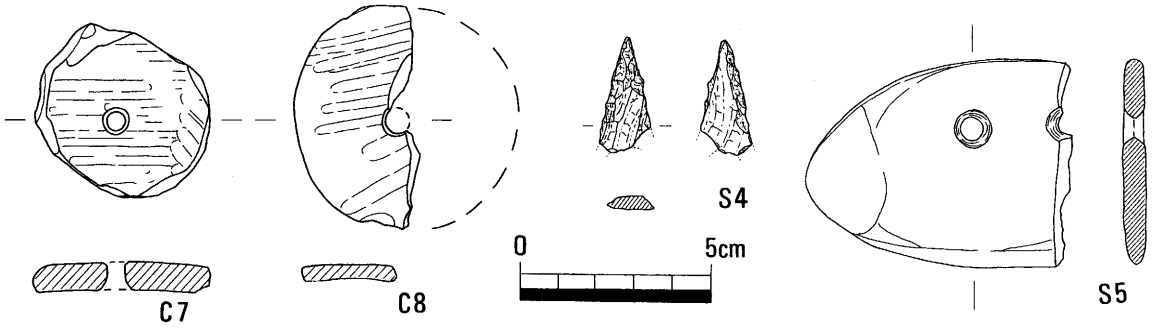


図27　竪穴住居７出土遺物

被熱面をもつことから炉として使用されたものと考えられる。柱穴はいくつか見つかっているが、浅く規則性がないため主柱穴かどうか定かではない。

遺物は弥生土器と石器が住居址床面より出土した。**31・32**は甕である。いずれも口縁部がやや水平方向に屈曲し、端部はつまみ出すように上方に拡張する。**31**は胴部が大きく張る。調整は**30**は外面胴部上半はハケメ、下半はミガキが施される。内面上半はハケメ、下半には指頭圧痕が残る。**32**は外面はハケメ、内面にはユビオサエによる指頭圧痕が残る。口縁部はいずれもナデで仕上げる。**33**は高杯である。口縁部は内湾し、端部は外方に肥厚する。内外面共に丁寧なミガキが施される。**C７・C８**は土製紡錘車である。いずれも土器片を転用したものである。**S４**はサヌカイト製の石鏃である。裏面は仕上げられておらず剥片と共に出土しており、製作途中に廃棄されたものであろうか。**S５**は結晶片岩製の磨製石庖丁である。表面及び刃部、背部共丁寧に研磨されている。

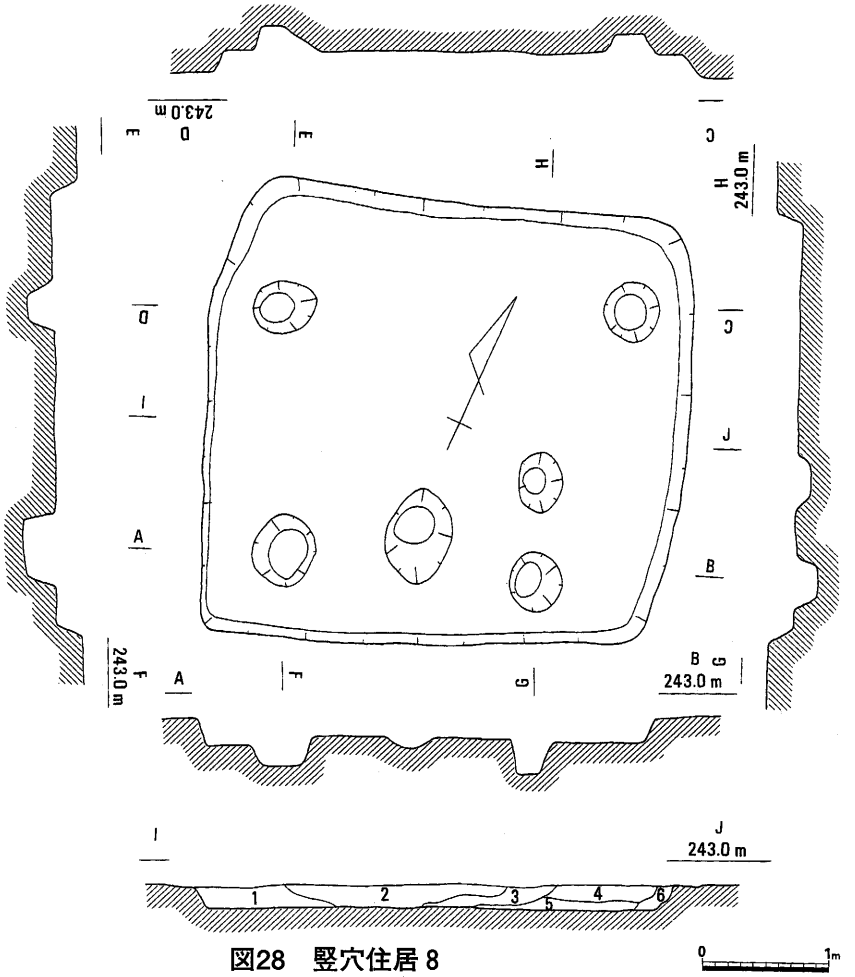


図28　竪穴住居８

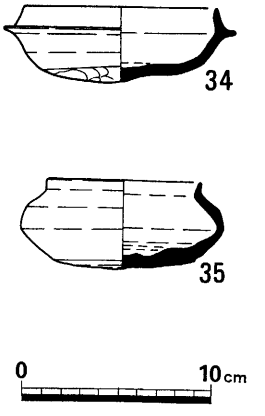


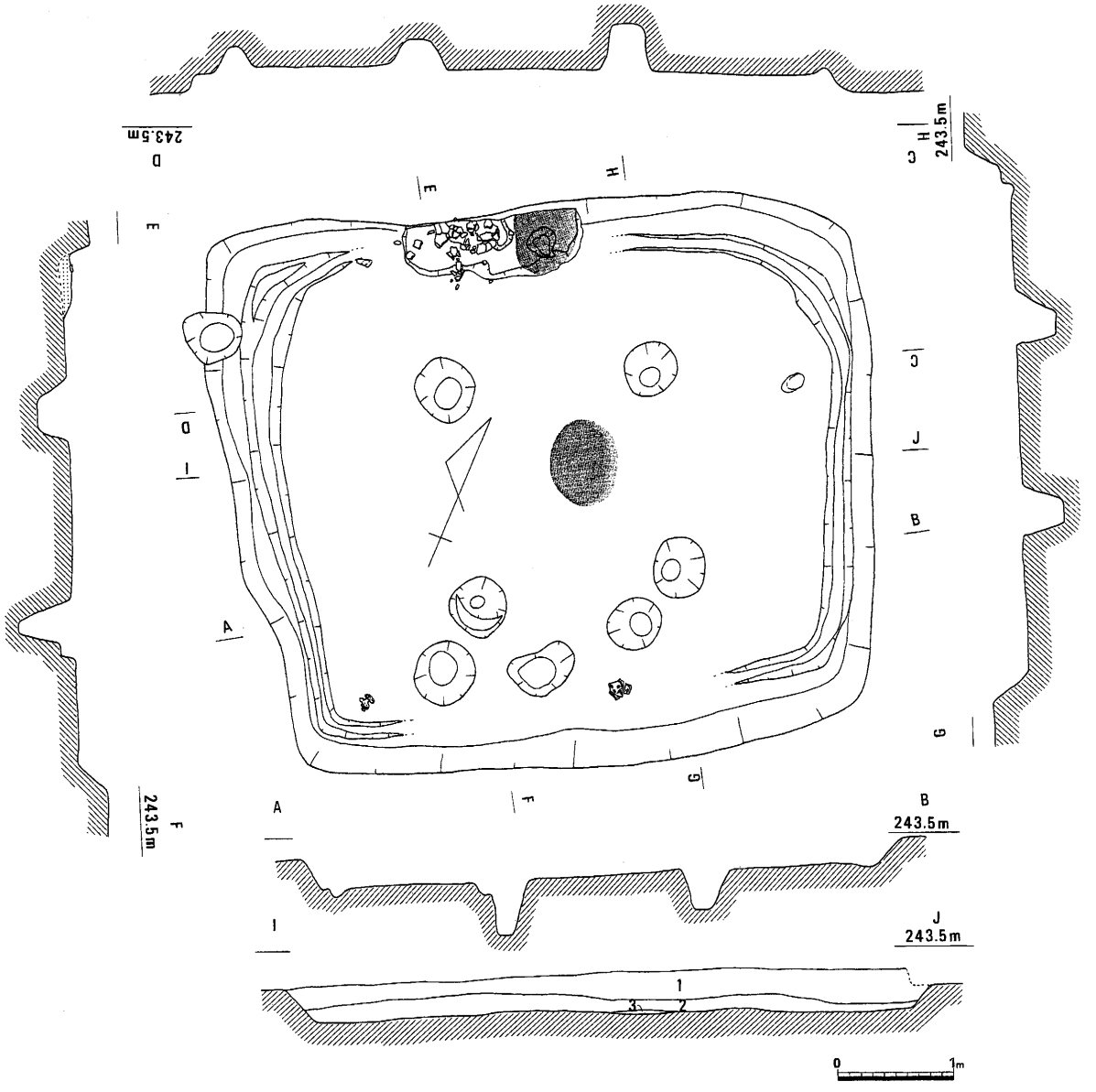
図29　竪穴住居８出土遺物

1．淡褐色粗砂
2．にぶい茶褐色微砂（洪水砂？）
3．暗褐色粗砂
4．茶褐色微砂（小礫混じる）
5．暗黄褐色粗砂
6．暗褐色微砂

竪穴住居 8

２区北西部に位置する。東西370cm、南北330cmの隅丸方形を呈する。柱穴はいくつか検出されたが、主柱穴と考えられるものは確認されなかった。壁体溝、中央穴等も認められなかったが、中央南寄りにピットがみられる。埋土に焼土・炭などは含まれていなかったことから炉として使用されたものではなかったと思われる。

遺物は下記の２点の須恵器が出土したが、床面よりもかなり浮いた位置からの出土であり、住居に伴うものかどうかの判断は難しい。**34**は杯身である。たちあがりが殆ど垂直に高く立ち上がり、高さは約1.2cmを測る。端部は丸くおさめる。底部は不定方向になでた痕跡がみられる。**35**は小型の短頸壺である。器高が4.7cmと低く、口縁部は短くやや外反して立ち上がる。底部はヘラケズリが施されない。その他の遺物は見つかっていない。



1．暗褐色砂質土
2．暗黄褐色砂質土（炭わずかに含む）
3．赤褐色砂質土（被熱面）

図30　竪穴住居 9

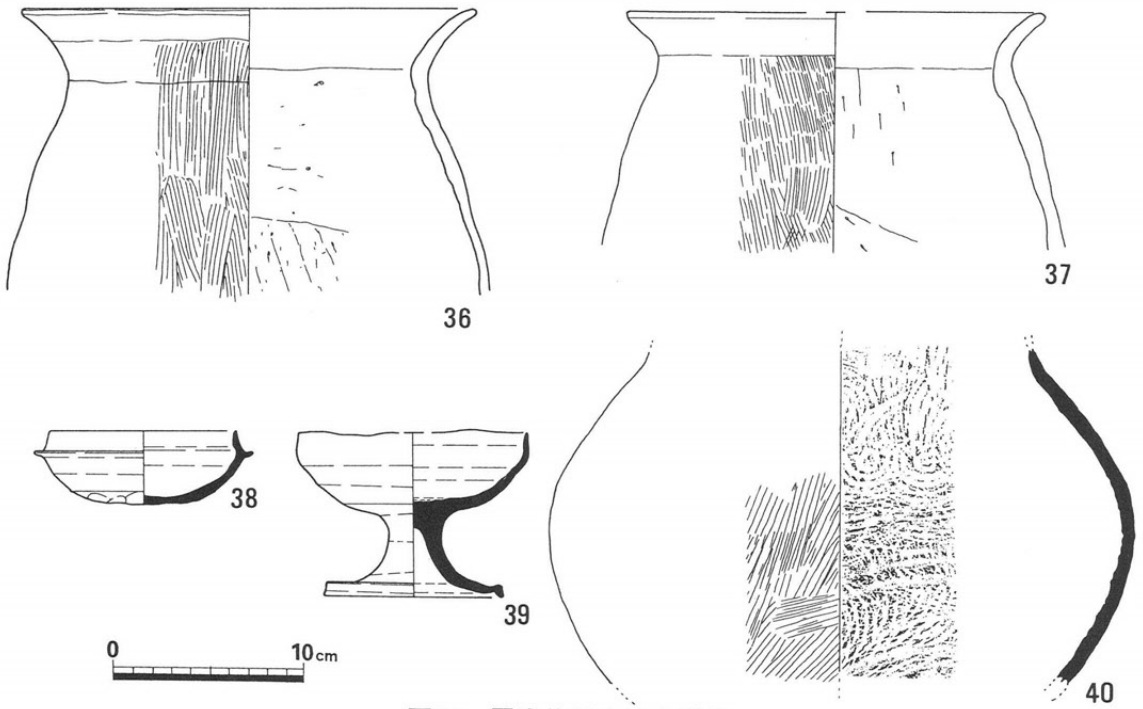


図31　竪穴住居９出土遺物

竪穴住居９

２区のほぼ中央部、竪穴住居11の南約1.5ｍに位置し、床面より東西525㎝、南北442㎝を測る。隅丸方形を呈し、４本の主柱をもつものと考えられる。中央やや東寄りに78×58㎝の範囲で被熱面が検出され、さらに北壁中央には粘土で固められた高まりが存在し、上面には土器片が散乱し、被熱面も確認されたことから、カマドも使用されていたのではないかと考えられる。また、周囲にはカマド部分と南壁の一部を除き壁体溝が巡る。

遺物は土師器、須恵器が出土した。**36・37**は土師器の甕である。いずれも口縁部は緩やかに外反し、外面には粗いハケメ、内面には粗いケズリが施される。口縁部はナデで仕上げる。胎土には２～５㎜の砂粒を多く含み、外面には一部に煤が付着する。**38**は杯身である。たちあがりほぼ垂直に高く立ち上がり、高さも約1.0㎝を測る。端部は丸くおさめ、底部は不定方向になでられる。**39**は高杯である。住居址南隅床面より出土した。多少歪みがあるが、杯部は椀型を呈し口縁部は垂直に立ち上がる。脚部は短く、脚端部は下方向につまみ出すように拡張する。この他にも須恵器の甕、杯蓋等の破片が出土している。**40**は甕である。外面に叩き目、内面には青海波文の当て具痕がみられ、一部に横方向になでられた痕跡がみられる。

写真３　竪穴住居９カマド

竪穴住居10

竪穴住居11の西約2.3ｍに位置する。床面より東西496㎝、南北508㎝を測り、方形を呈する。四隅に柱穴が検出されたが、深さも規模もまちまちで住居址に伴う柱穴とは判断し難く、特に主柱穴は持たなかったものと思われる。中央に65×58㎝の範囲で被熱面が検出されたが、中央穴・壁体溝等は存在しなかった。

遺物は土師器・須恵器がまとまって出土したものの図化可能な資料が少なく、下記の３点のみ報告

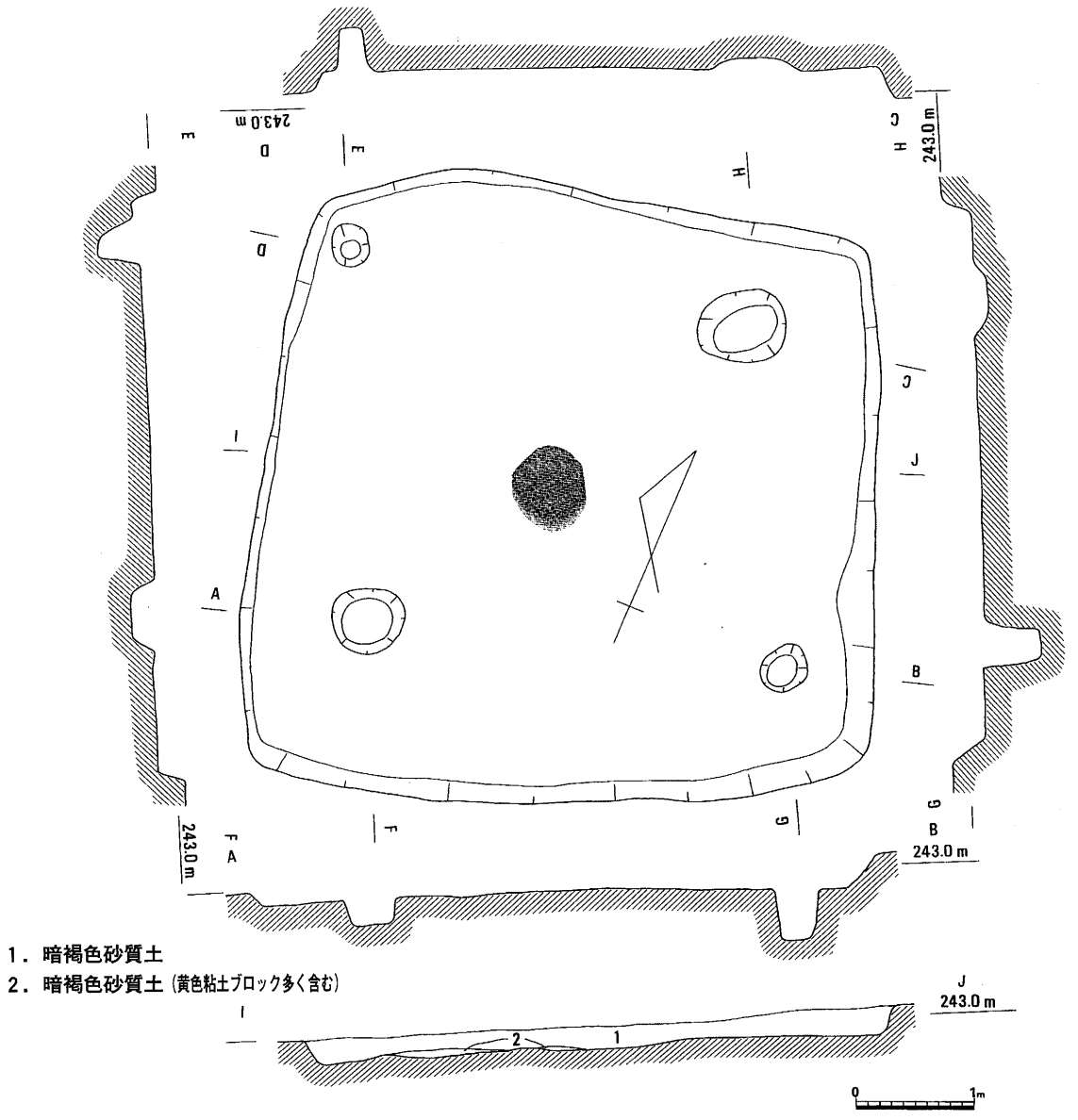


図32　竪穴住居10

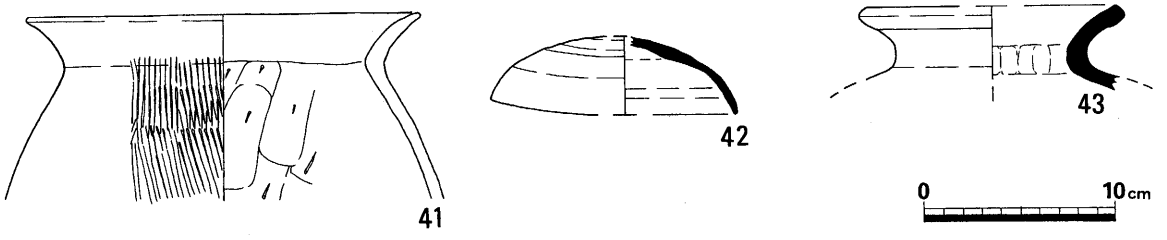


図33　竪穴住居10出土遺物

する。41は甕である。外面は粗いハケメ、内面には粗いケズリが施される。口縁部はナデで仕上げ、胎土には２～３㎜の砂粒を多く含む。42は杯身である。黒灰色を呈し歪みが激しいが、稜をもたない丸みを帯びたもので、ヘラケズリは時計回りである。43は甕である。口縁部に鈍い稜線をもつ。

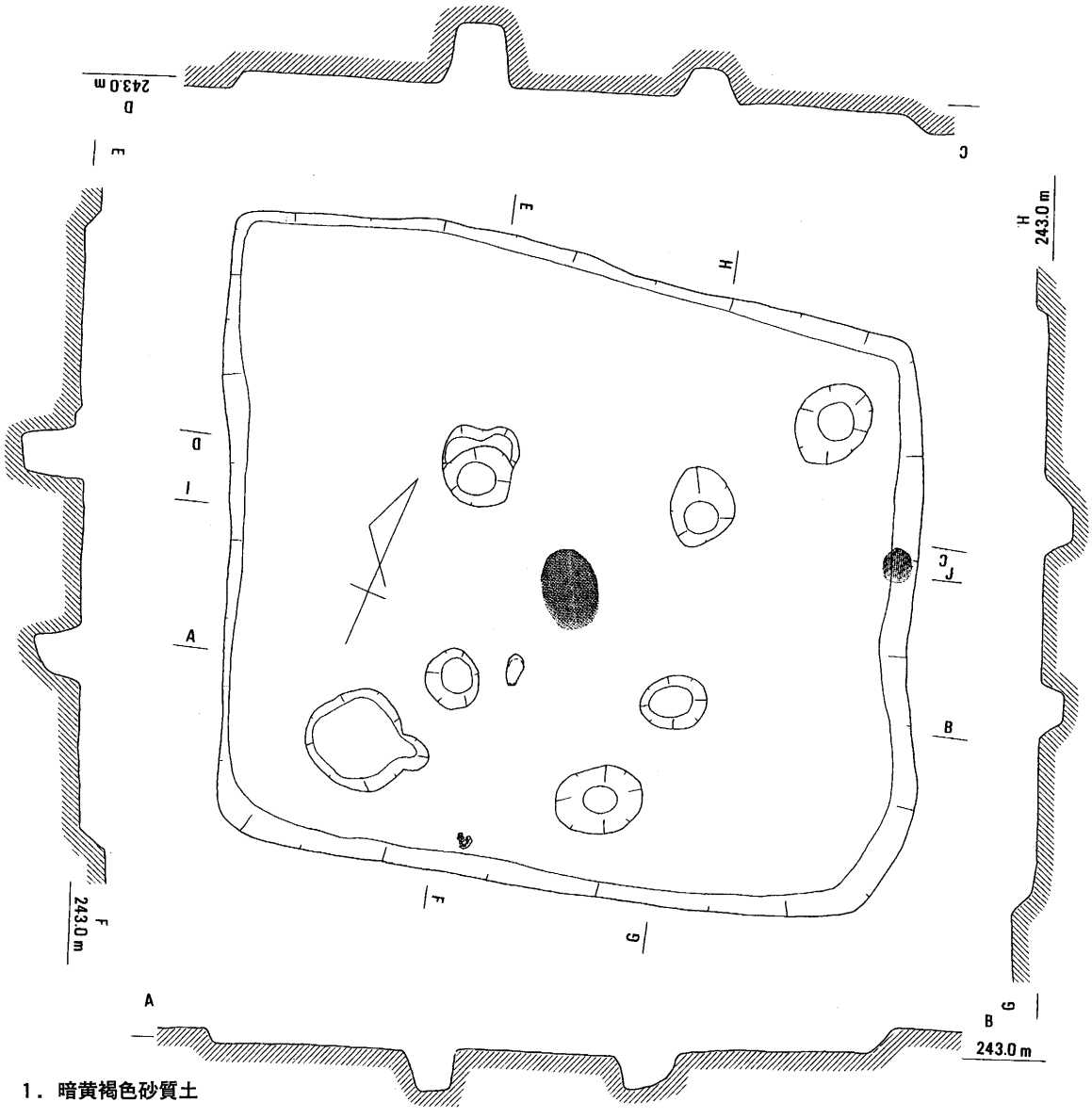


図34　竪穴住居11

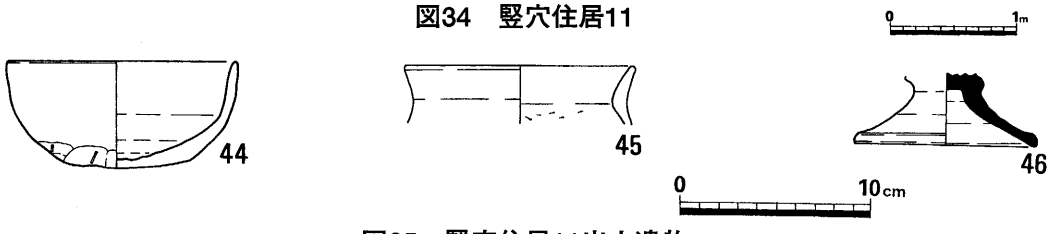


図35　竪穴住居11出土遺物

竪穴住居11

竪穴住居10の北1.5mに位置する。東西552cm、南北506cmを測り、方形を呈す４本の柱をもつものと考えられる。中央に63×44cm、東壁中央付近に20×24cmの範囲で被熱面が確認されたが、カマド等の痕跡はみられなかった。

遺物は土師器・須恵器が出土している。**44**は土師器の小型の鉢である。摩滅により、細部の調整は

不明だが、底部に不定方向のヘラケズリが施される。胎土は粗く、２～４㎜程度の砂粒が多く含まれる。**45**は甕である。小型を呈し、いずれも内面はヘラケズリ、外面にはナデが施される。胎土は粗い。**46**は高杯の脚部である。焼成不良のため白灰色を呈し、摩滅が激しい。

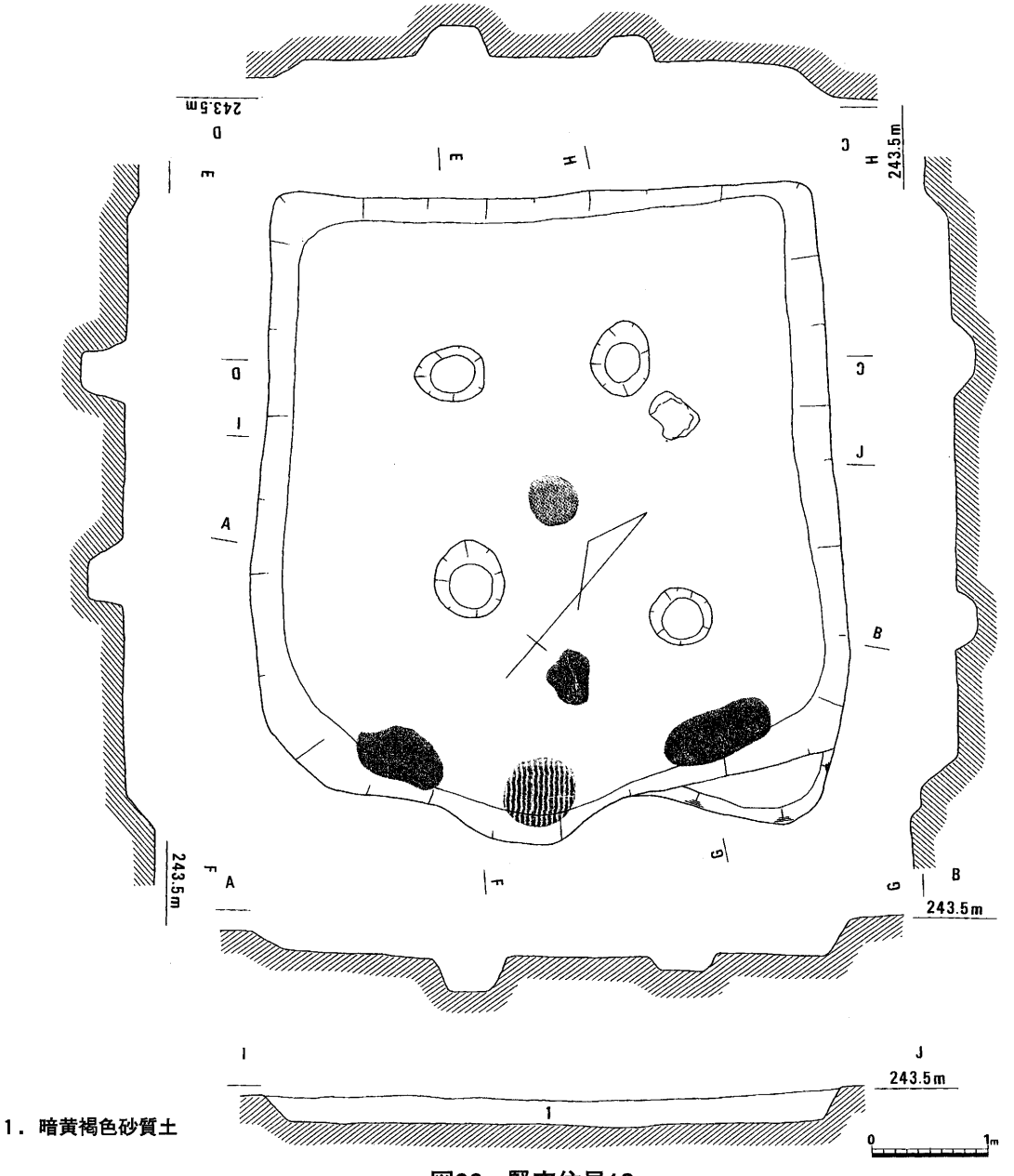


図36　竪穴住居12

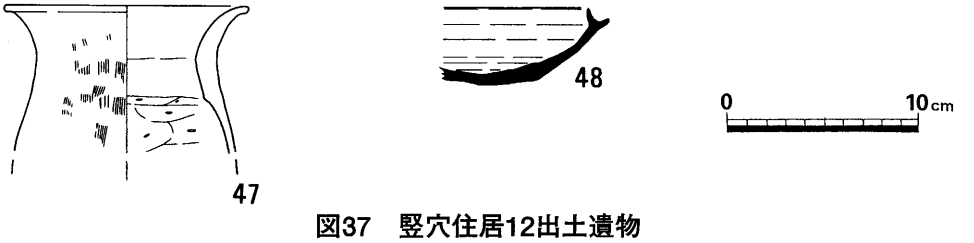


図37　竪穴住居12出土遺物

竪穴住居12

竪穴住居11の東3.1ｍに位置する。床面より東西460cm、南北510cmを測り、南壁中央付近がやや張り出す不整方形を呈する。４本柱をもち、中央と南壁張り出し部に被熱面が確認され、南壁被熱面周辺

からは炭化材が検出されたがカマド等の痕跡は見られなかった。

遺物は2点を図示する。**47**は土師器の甕である。口縁部はなだらかに外反し、内面には口縁くびれ部よりやや下方からヘラケズリが施される。**48**は杯身である。たちあがりは低く内傾する。端部は丸くおさめる。外面には自然釉が付着する。これらの他にも土師器の甑、須恵器の大甕、高杯などがいずれも破片で見つかっているが図化することは不可能であった。

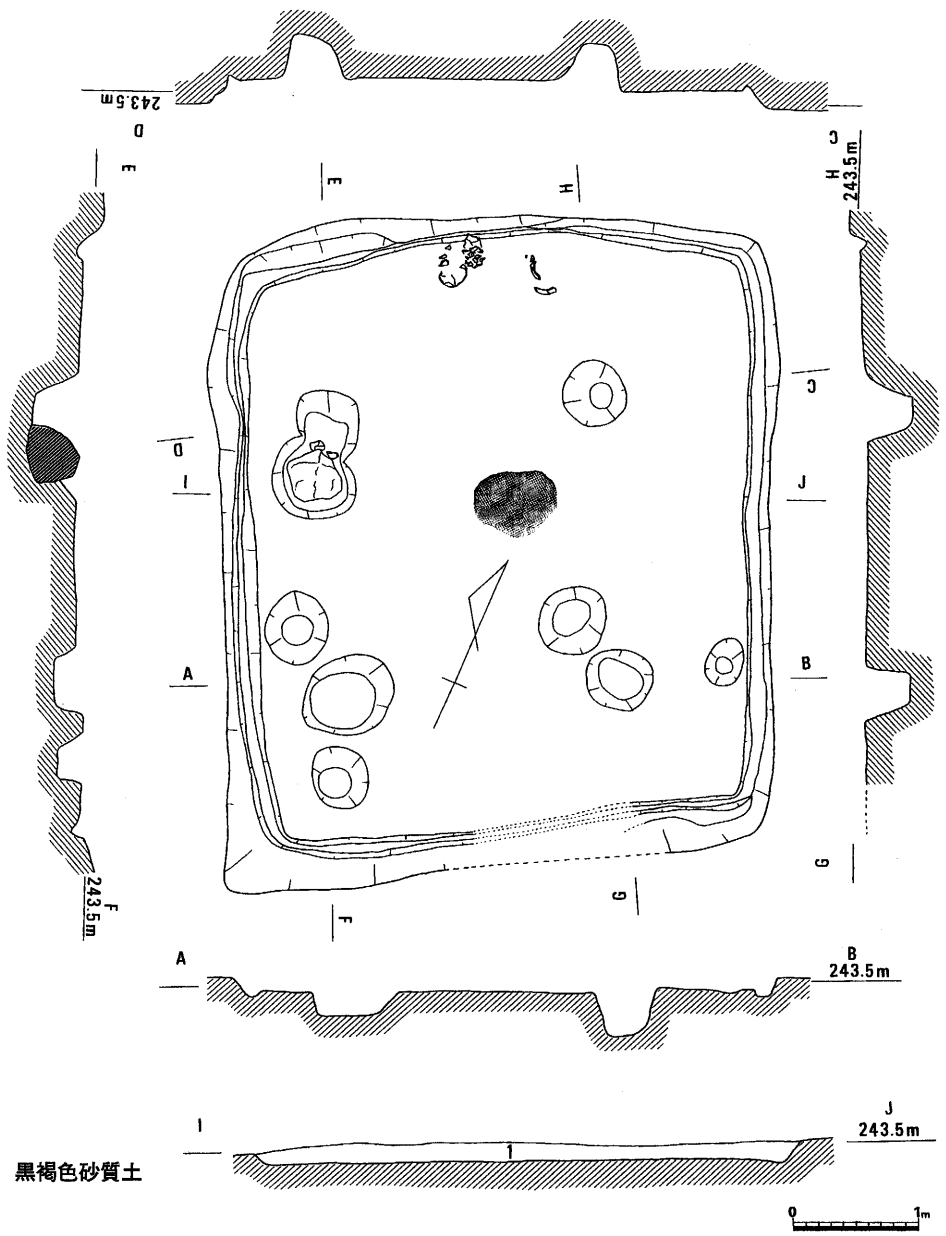


図38　竪穴住居13

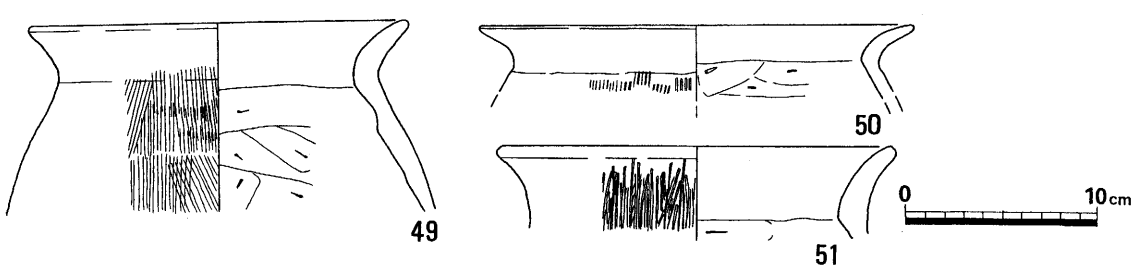


図39　竪穴住居13出土遺物

竪穴住居13

竪穴住居14の北西に隣接する。東西426cm、南北490cmを測り、方形を呈する。中央に63×43cmの範囲で被熱面が認められた。柱穴はいくつか存在したが断面に図示する４本の主柱穴をもつものと思われる。床面の周囲には壁体溝が巡る。

遺物は３点を図示する。**49**～**51**とも土師器の甕である。いずれも内面は口縁くびれ部付近までヘラケズリ、外面は粗いハケメが施され、口縁部はナデで仕上げるが、**51**は口縁端部付近までハケメが残る。胎土は粗い。

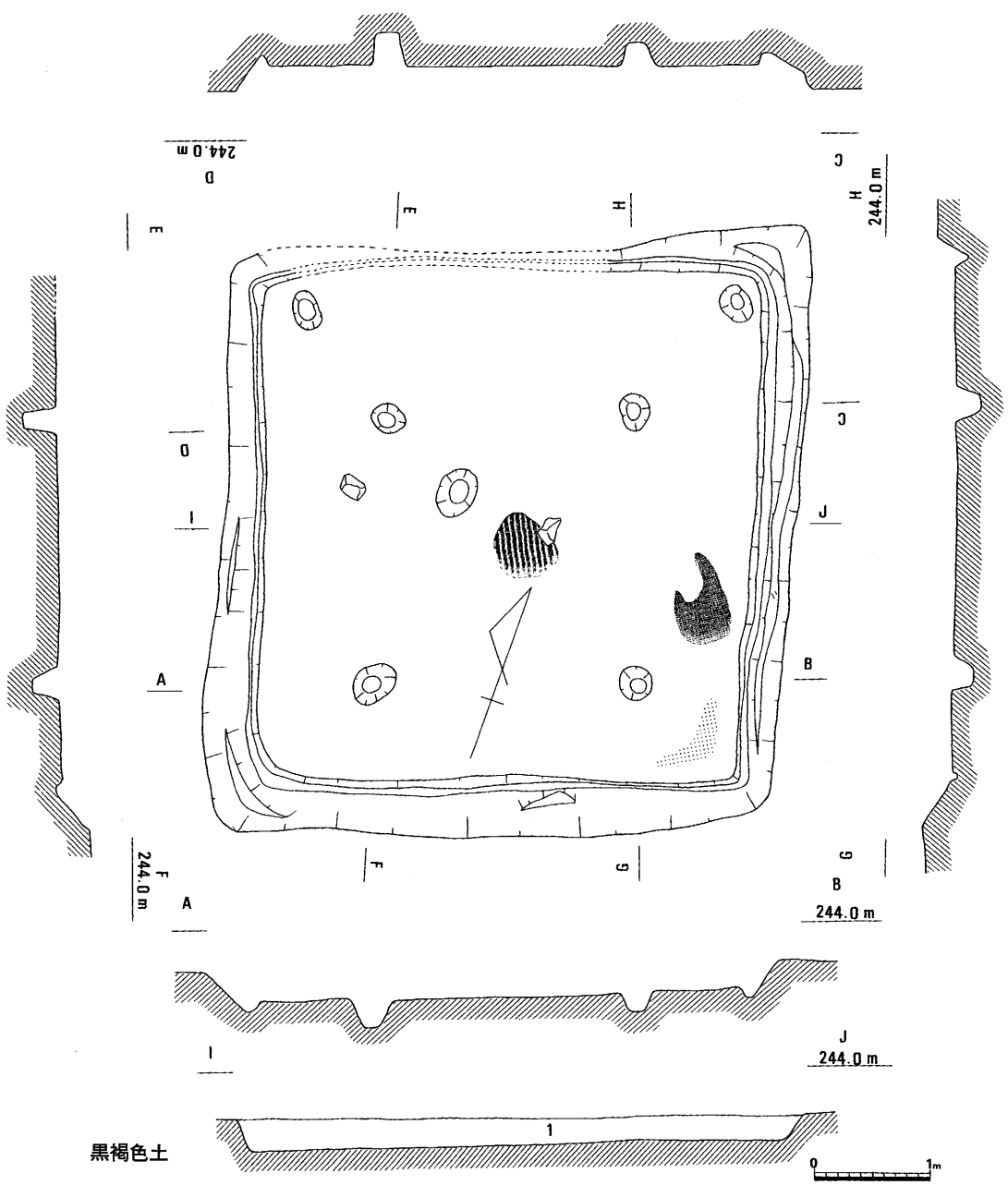


図40　竪穴住居14

図41　竪穴住居14出土遺物

竪穴住居14

竪穴住居12の東3.8mに位置する。東西426cm、南北462cmを測り、方形を呈する。4本柱を持つと思われ、周囲には壁体溝が巡る。中央と東壁やや南寄り付近の2ヵ所に被熱面が認められる。また南東隅にL字状の粘土による貼り床が確認された。

遺物は土師器・須恵器等が出土したが、いずれも小片で図化可能なものがほとんどみられなかった。**52・53**は土師器の甕である。口縁部は「く」字状に外反し、外面はハケメ、内面はケズリ、口縁部はナデが施される。これらの他にも土師器・須恵器の甕の破片等が出土している。

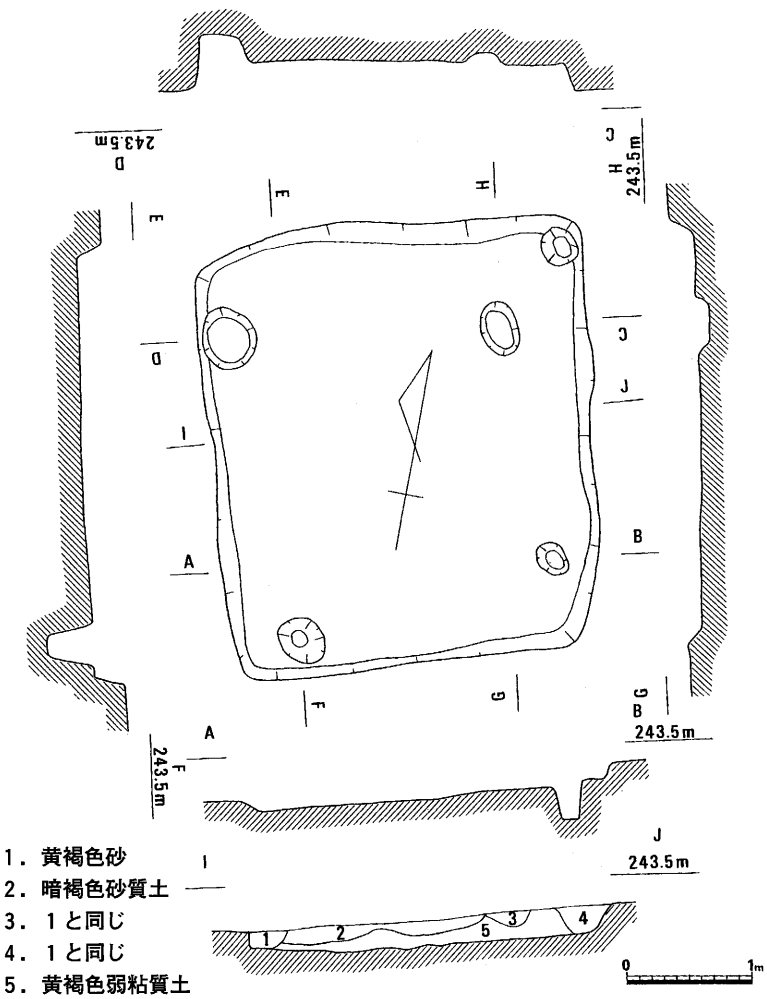


図42　竪穴住居15

竪穴住居15

竪穴住居13の西5.1mに位置する。東西284cm、南北335cmを測り、方形を呈する比較的小型の住居址である。柱穴はいくつか見つかっているが深さも規模もまちまちで、おそらく主柱穴は存在しなかったものと思われる。埋土に河原石・川砂を多く含み、床面も安定していない。遺存状況は良好でなく、遺物も出土していない。

竪穴住居16

竪穴住居13の北1.2mに位置する。東西452cmを測り、北半部分及び上面はは削平を受けており、南北の規模や床面の状態は明らかではないが、方形を呈するものと思われる。竪穴住居15と同様、遺存状況は良好ではない。遺物も出土していない。

竪穴住居17

竪穴住居7の北5.1mに位置する。南北382cmを測り、西半部分及び上面は削平を受けており、東西の規模は明らかではなく、検出面から床面の高さも10数cm程度である。方形を呈するものと思われる。柱穴は東側の2本のみ遺存し、本来は4本柱をもつものと想定できる。竪穴住居15・16と同様遺存状況は良好ではない。

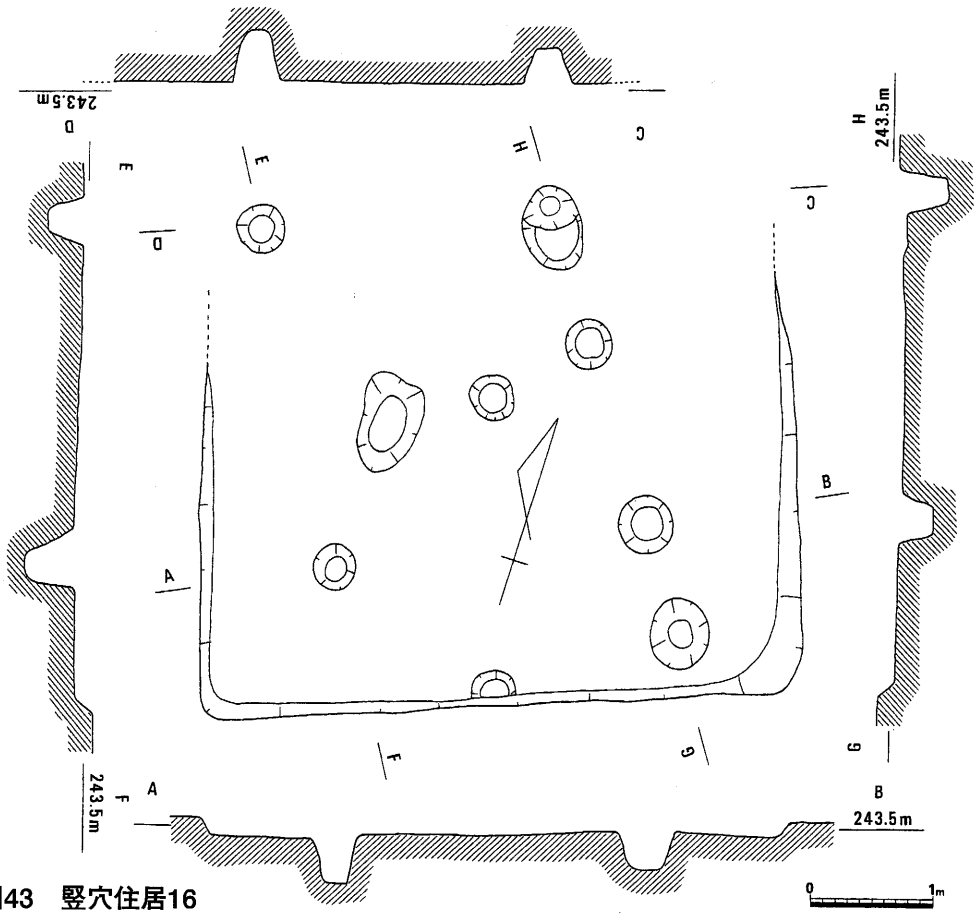


図43　竪穴住居16

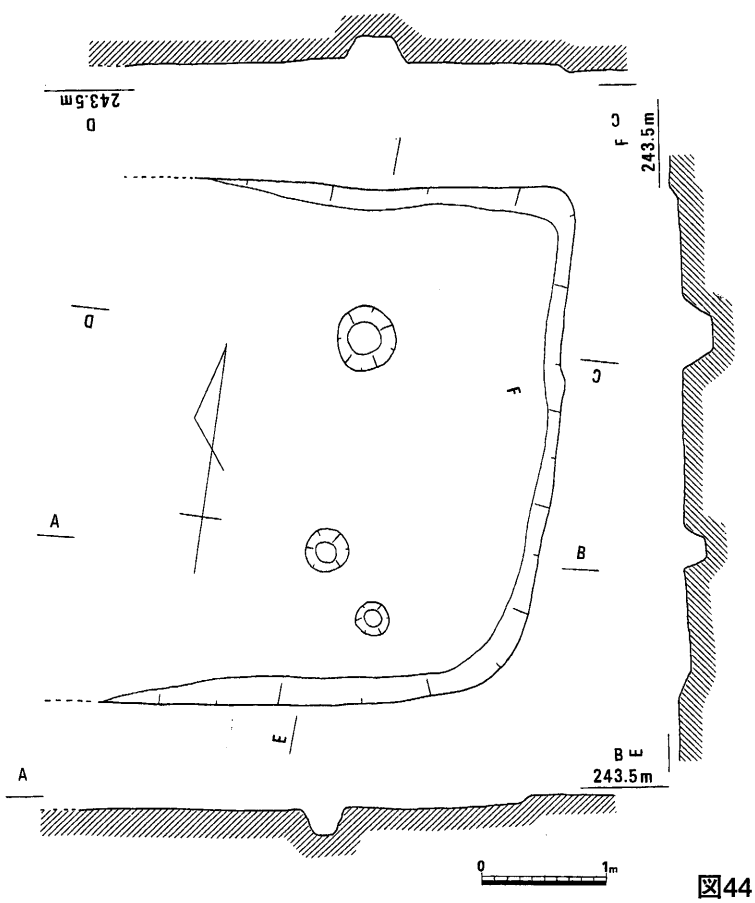


図44　竪穴住居17

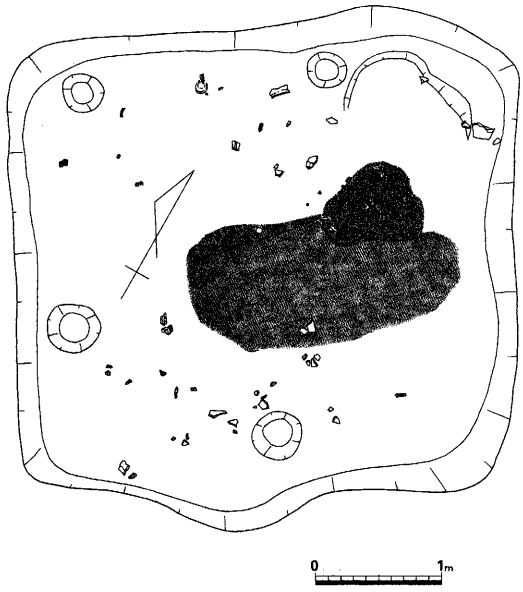


図45　竪穴住居18

竪穴住居18

竪穴住居７の西に隣接する。東西358cm、南北360cmを測り、南壁がやや張り出す不整隅丸方形を呈する。柱穴はいくつか検出されたが、主柱穴はＡ－Ｂ断面に示す２本か、あるいは柱穴をもたなかったものと思われる。調査時、住居址床面中央において、広い範囲で被熱面が検出され、床面全体に炭が認められた。焼失家屋の可能性も考えられる。完掘後は床面中央、南壁張り出し部付近、北西部に被熱面が確認された。また、北東隅において粘土による高まりが検出された。中央には環状に被熱した部分が認められ、カマドとして使用されたのではないかと考えられる遺構である。

遺物は比較的多くの遺物が出土している。**54**～

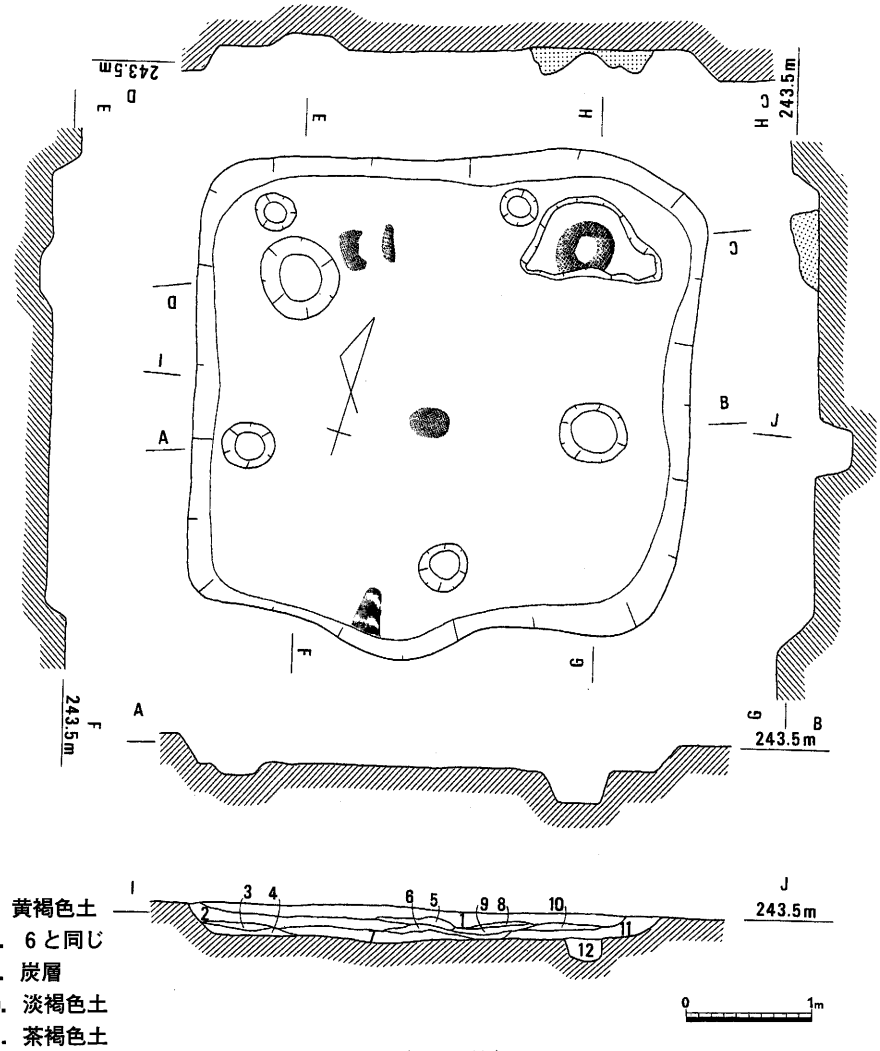


図46　竪穴住居18（完掘後）

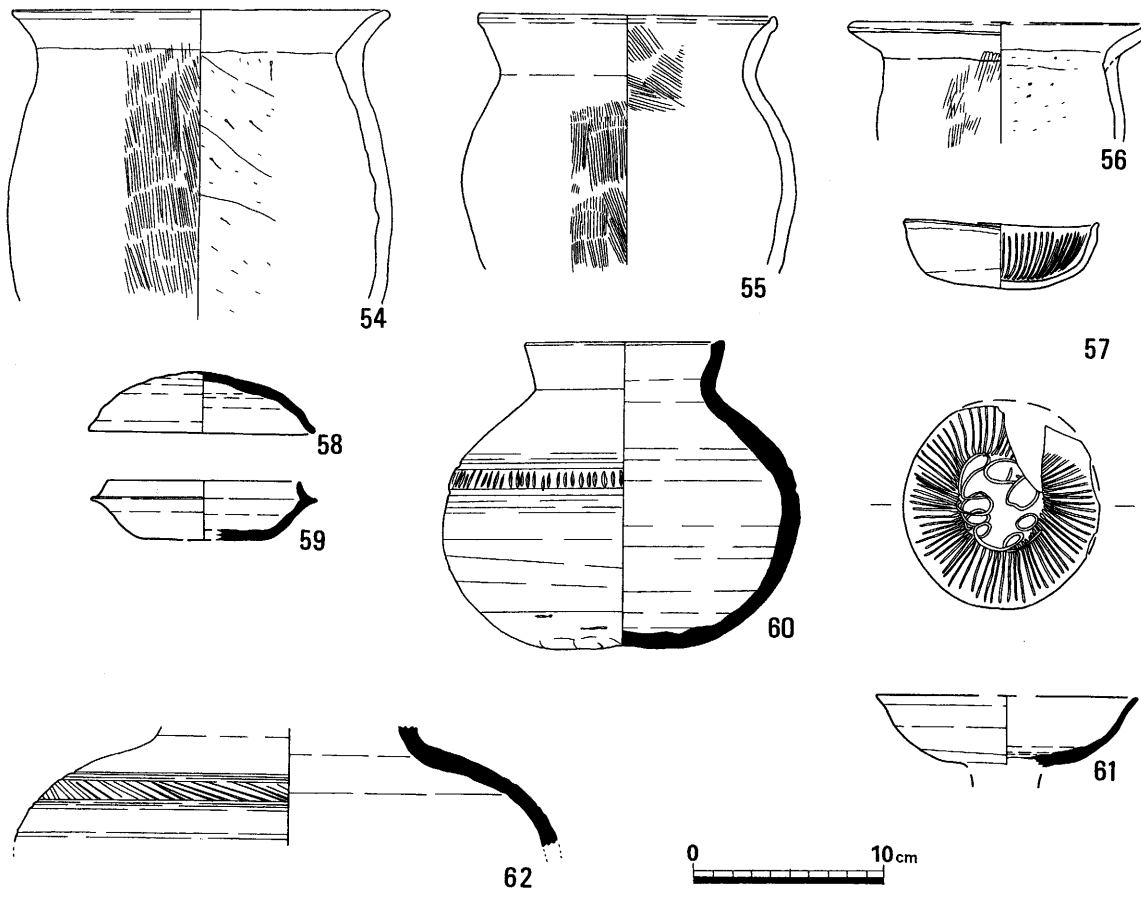


図47　竪穴住居18出土遺物

56は土師器の甕である。口縁部は緩やかに外反する**54**・**55**と「く」字状に外反する**56**の２通り存在し、調整は内面はケズリ、外面はハケメが施され、口縁部はナデで仕上げる。**54**には二次焼成を受けた痕跡があり、一部黒色を呈する。**54**・**55**の外面には煤が付着する。**57**は土師器の杯である。内外面をナデで仕上げ、内面には暗文が放射状に施される注目すべき遺物である。**58**～**62**は須恵器である。**58**の杯蓋は全体的に丸みを帯びたものであるが、口縁部付近でわずかに外方に屈曲する。**59**は杯身である。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさめる。いずれもヘラケズリは施されない。**60**は短頸壺である。口縁部はやや外傾気味に立ち上がり、胴部最大径付近に刻み目の文様を持つ。**61**は高杯である。焼成が甘く細部の調整については明らかではないが、口縁部がやや外反する椀状の杯部をもつものである。**62**は甕である。肩部にヘラ状工具による斜方向の文様が不規則に施される。

竪穴住居19

竪穴住居９の東4.5ｍに位置する。東西356cm、南北383cmを測り、方形を呈する。調査時、住居址内の広い範囲に炭化材及び拳大～20cm前後の礫が多く見られ、火災による消失後放棄された可能性が高い。柱穴はいくつか認められたが４本の棟持柱をもつものと考えている。中央と北壁中央付近に被熱面が検出されたがカマド等の痕跡は見られなかった。

遺物は以下の４点を図示する。**63**は甕である。焼成が甘く、外面の調整は摩滅のため明らかでないが、口縁部付近にわずかにハケメの痕跡がみられる。内面にはヘラ削り痕が残される。口縁部はわずかに外反し、胴部中央付近に最大径をもつものと考えられる。**64**は住居址南東隅の床面より出土した鍋である。口縁部は直立し、端部は肥厚する。底部は丸底である。胴部には１対の把手が付くが欠損

しており形状については明らかでない。内面はヘラケズリ、外面はハケメ、口縁部はナデで仕上げる。**65**は甑である。口縁部は直立し、端部は肥厚する。体部は筒状で１対の把手が付く。底部は存在しない。調整は内面はケズリ、外面はハケメ、口縁部にはナデが施される。**66**は竈の胴部と思われる。

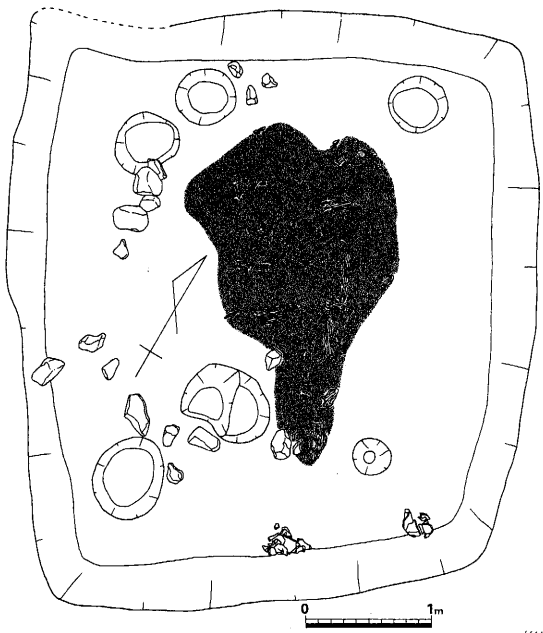


図48　竪穴住居19

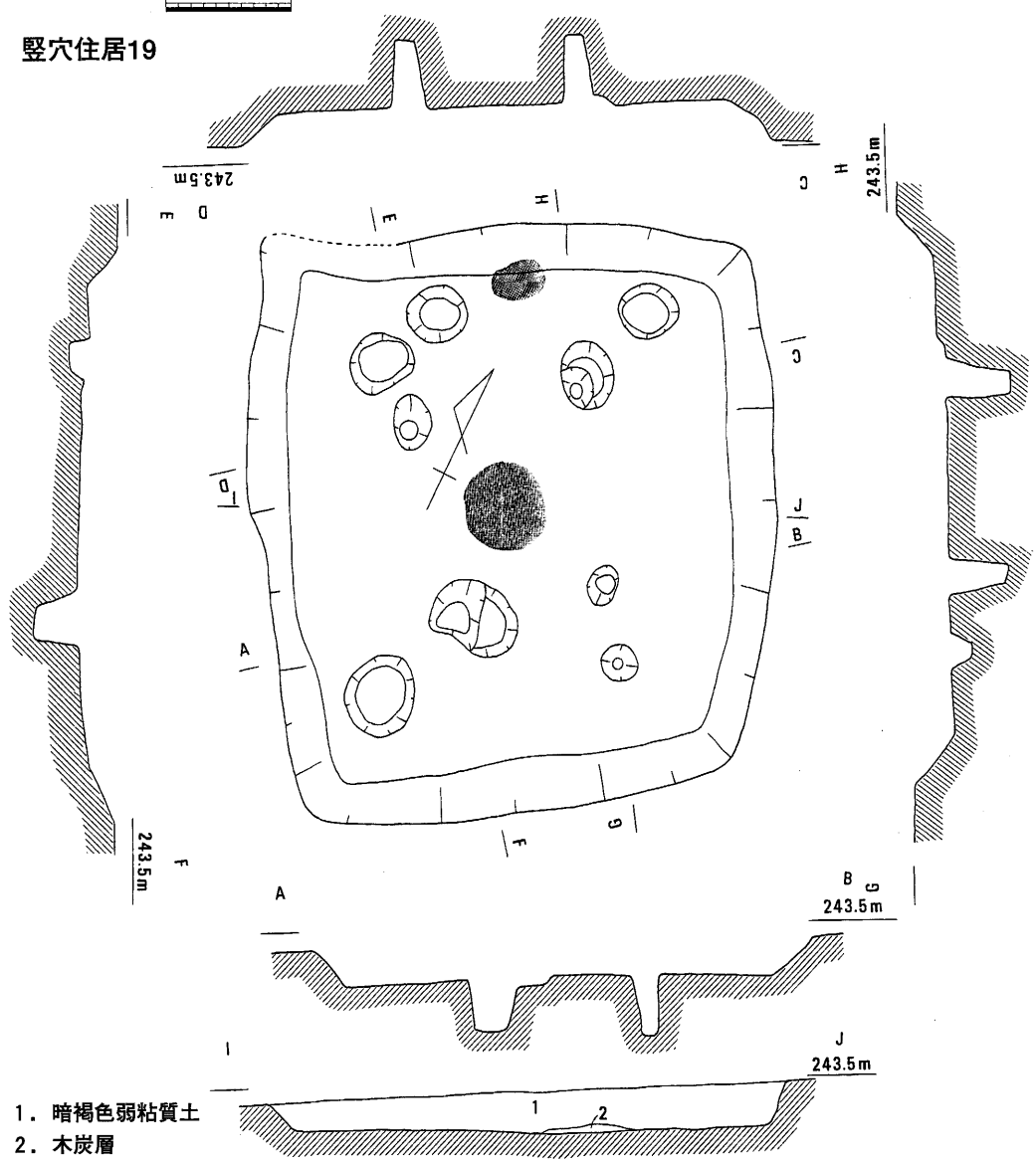


図49　竪穴住居19（完掘後）

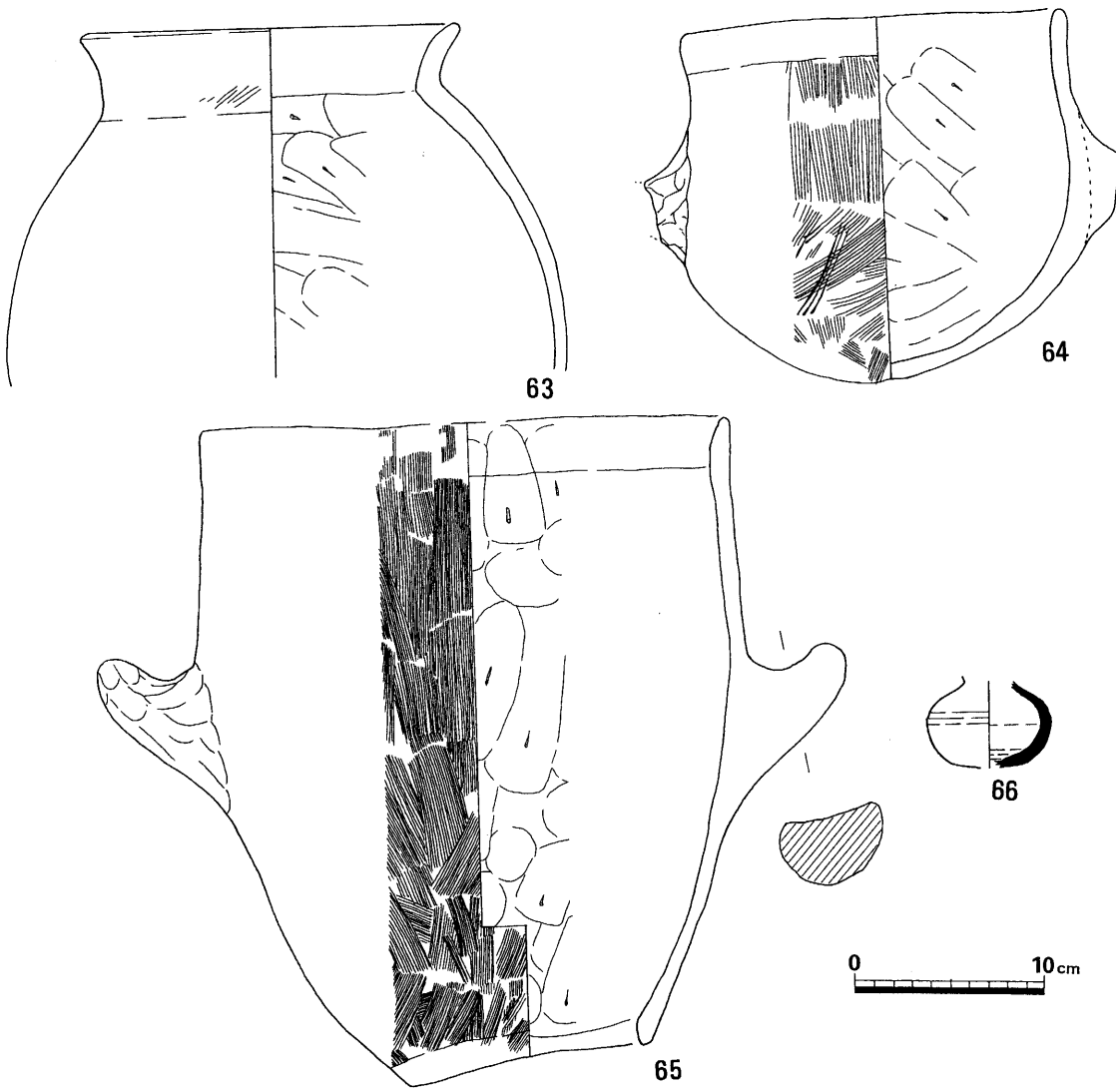


図50　竪穴住居19出土遺物

竪穴住居20

３区南西部に位置する。東西356cm、南北321cmを測り、方形を呈する。後世の削平が著しく、検出面から床面の深さが６cm程度で遺存状況は良好でない。また、後世のピットが多く含まれており、柱穴の判別が非常に困難であったが、おそらく主柱穴を持たない住居であったと考えられ、中央やや西寄りに被熱面が認められた。

遺物は土器類はいずれも細片のため図化することはできなかったが、土師器・須恵器がわずかに出土している。また、床面中央付近より鉄鎌**M１**が出土した。全体の形状は明らかでないが、直刃鎌と思われる。

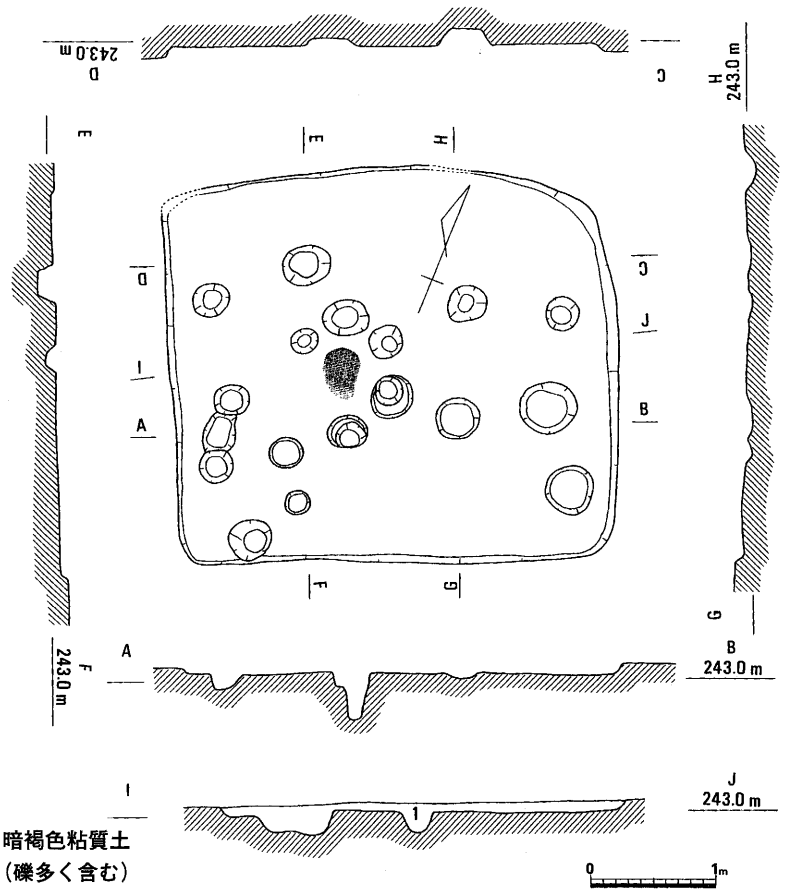


図51　竪穴住居20

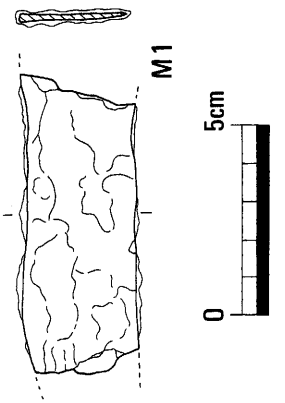


図52
竪穴住居20出土遺物

竪穴住居21

3区東張出部の中央北側に位置する。東西294cm、南北290cmを測りほぼ正方形の隅丸方形を呈す。床面にはたわみ状の浅い窪みがいくつか検出されたものの柱穴と思われるものは認められず主柱穴は持たなかったものと考えられる。中央に被熱面をもち、北壁から西壁にかけて部分的に壁体溝が検出され

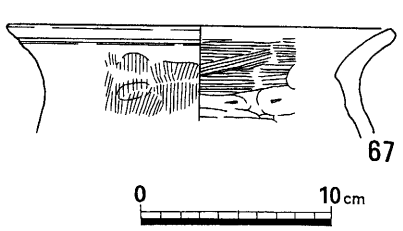


図54　竪穴住居21出土遺物

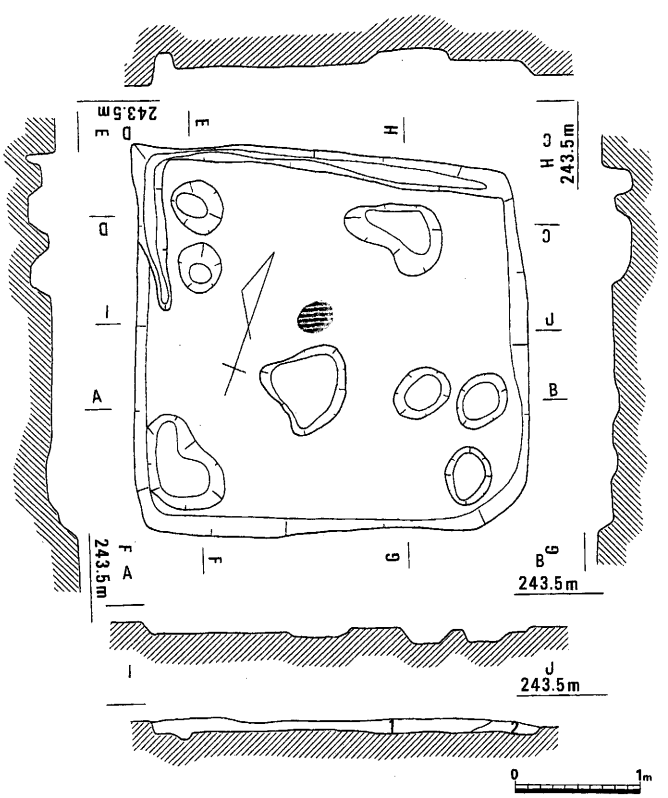


図53　竪穴住居21

ている。

遺物は細片が10数点出土したのみであった。**67**は土師器の甕である。口縁部は「く」字状に外反し、一条のヘラ描きの沈線が巡る。調整は内面はケズリ、口縁部はハケメのちナデ、外面はハケメが施される。このほか須恵器の破片が出土している。

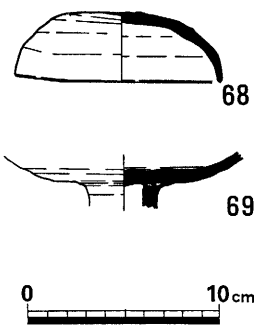


図55　竪穴住居22出土遺物

竪穴住居22

3区中央よりやや南に位置する。東西404cm、南北394cmを測り方形を呈する。竪穴住居23と北西部が一部重複する。柱穴はいくつか検出されたが、断面図に示した4本柱をもつものと考えられ、中央には被熱面が確認された。

遺物は僅かしか見つかっていない。**68**は須恵器の杯蓋である。住居址西壁沿いの床面より出土した。やや小型で天井部と口縁部の境に稜を持たず口縁部は丸くおさめるものである。ヘラケズリは施されていない。**69**は須恵器の高杯である。

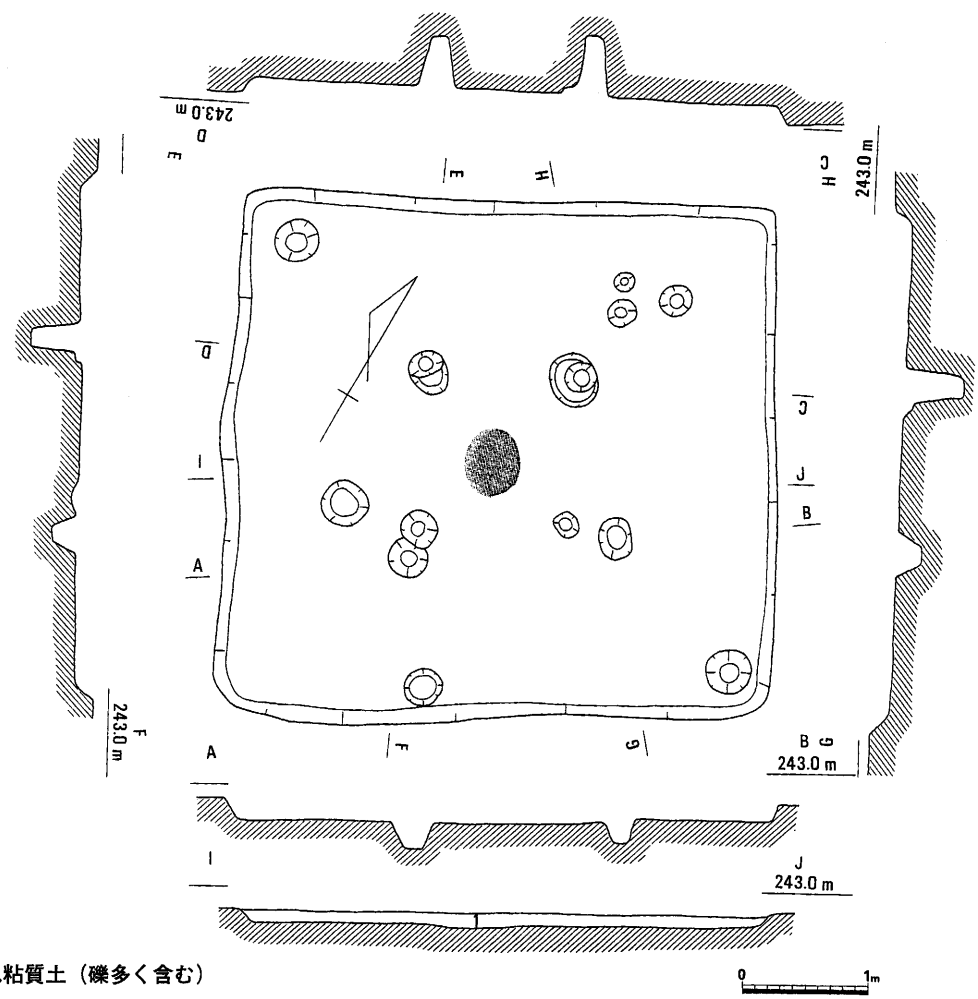


図56　竪穴住居22

竪穴住居23

竪穴住居21の北西に隣接し、南東部が一部重複する。東西404cm、南北378cmを測り、方形を呈する。柱穴はいくつか見つかっているが、断面に示す4本柱をもつものと思われる。中央には被熱面が検出された。南壁西寄りから西壁に沿って236cmの溝が延びる。後世の削平が著しく深さは検出面より10cm前後であり、遺存状況は良好ではない。遺物は細片のみで図化可能なものはなく、中世土器も混在しており、遺物から時期を推定することは困難であるが、竪穴住居22との切り合い関係から竪穴住居21よりは古いものと考えられる。

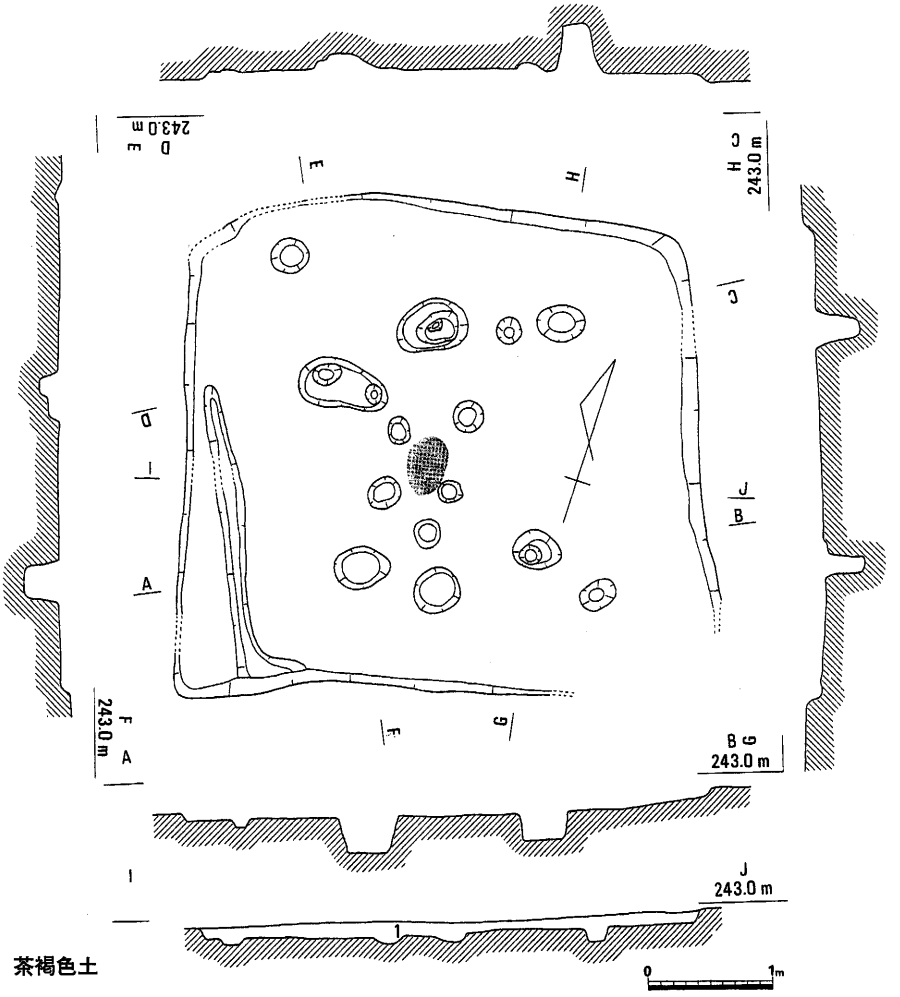


図57　竪穴住居23

竪穴住居24

3区東張出部の西北端に位置する。現代の溝により一部を切断されていたが、床面より東西約540cm、南北478cmを測り、方形を呈すと思われる。4本柱をもち、76×66cmの不整楕円形を呈する中央穴をもち、埋土には炭・焼土が検出され底部には被熱面が確認された。本遺跡にて調査された古墳時代竪穴住居のなかで最大の規模をもつものである。

遺物は多量の土器が出土した。図示するのはすべて須恵器で、**70**は杯蓋である。焼成が甘いため摩滅が激しく、細かい調整については不明であるがヘラケズリは施されない。**71**～**75**は杯身である。い

ずれも立ち上がりは低く、**72・73**は内傾する。端部は丸くおさめる。ヘラケズリは**72·73·74**に時計回りに施される。**76**は高杯である。脚部は低く、裾部は大きく広がる。脚端部近くに１状の凹線を巡らしている。**77**は短頸壺である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部はわずかに肥厚する。**M２**は鉄鎌である。端部を折り曲げ、曲刃を呈するものと思われる。

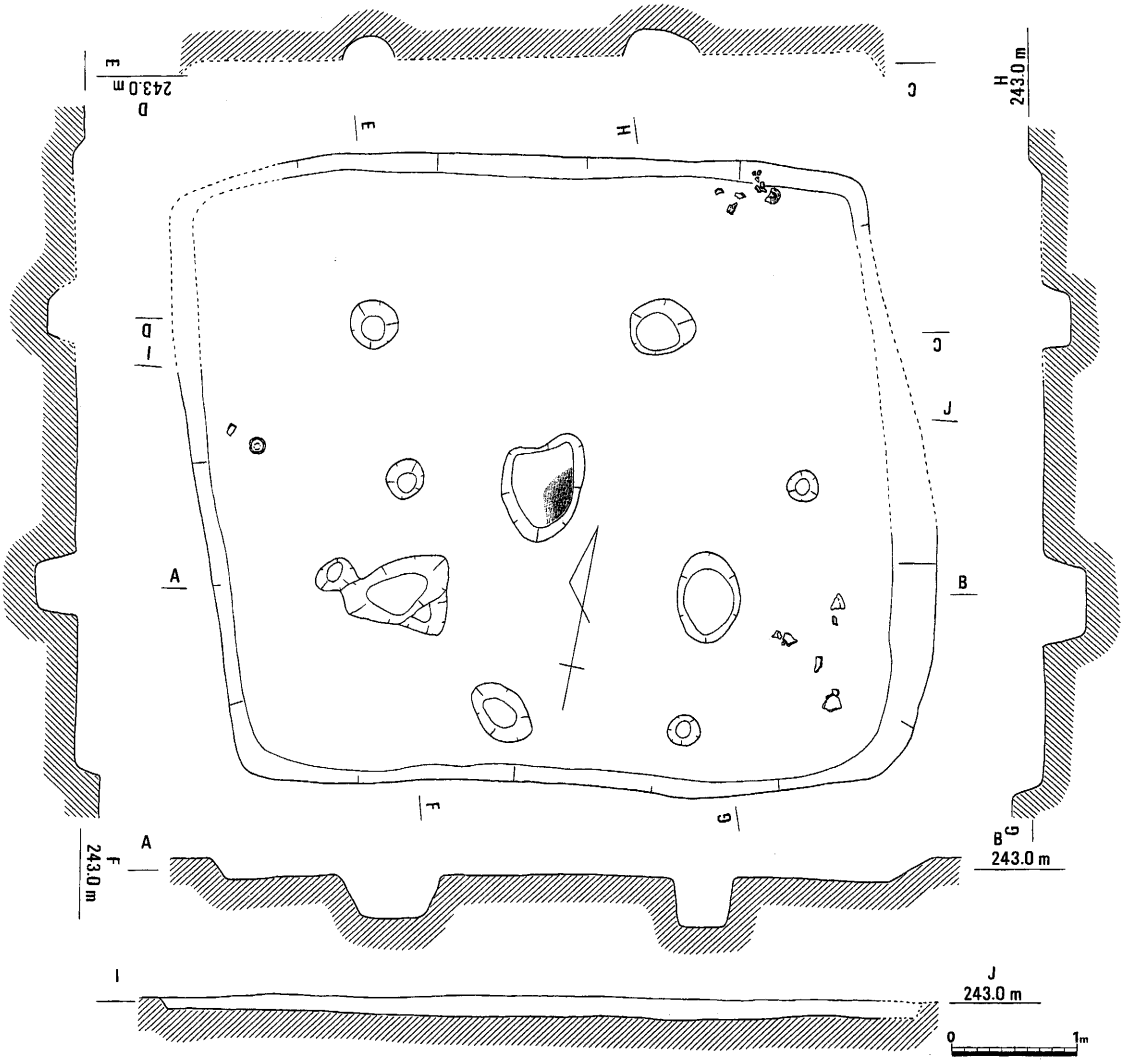


図58　竪穴住居24

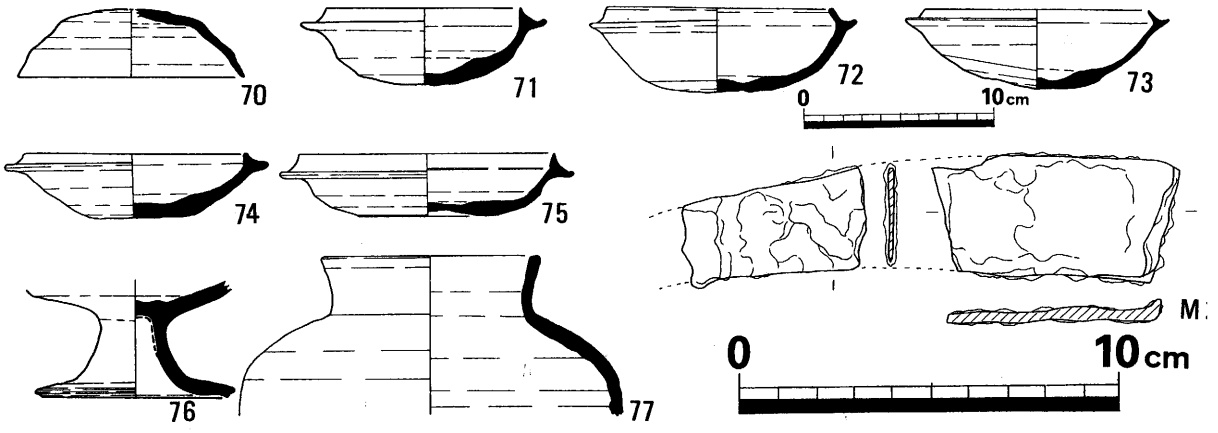


図59　竪穴住居24出土遺物

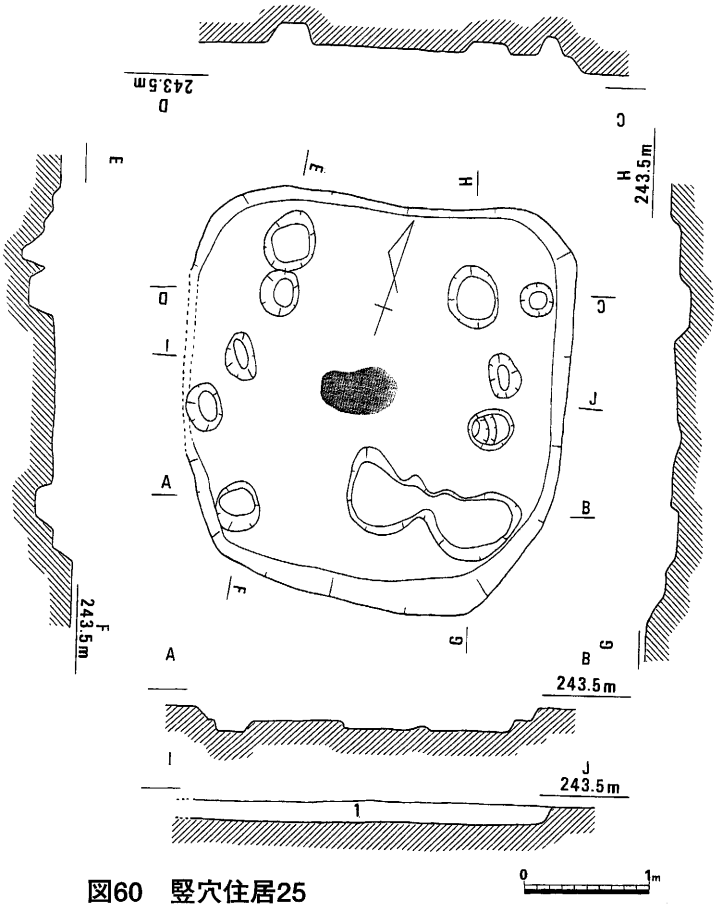


図60　竪穴住居25

竪穴住居25

竪穴住居21の西約4.3mに位置する。東西295cm、南北292cmを測り、ややいびつな隅丸正方形を呈する。床面には柱穴やたわみ状の浅い窪みがいくつか検出されたものの主柱穴と思われるものは確認できなかった。中央には被熱面が検出された。

遺物は細片が僅かしか出土していない。図化可能なものはなかったが、土師器の胴部及び須恵器の破片がみられる。

竪穴住居26

竪穴住居21の南約3.5mに位置する。本遺跡で調査された竪穴住居址の中で最も規模が小さく、調査当初は土壙と思われたが、調査を進めるに従い、床面より被熱面が検出され、小型の住居址と判断した。東西226cm、南北242cmを測り、隅丸方形を呈する。主柱穴は持たず、中央やや南寄りに66×42cmの中央穴を持ち、中から被熱面が確認された。

遺物は僅かしか出土していない。**78**は須恵器の壺の胴部である。

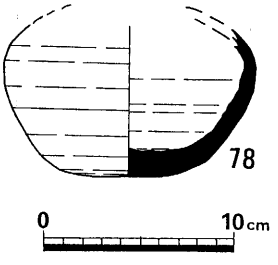


図62　竪穴住居26出土遺物

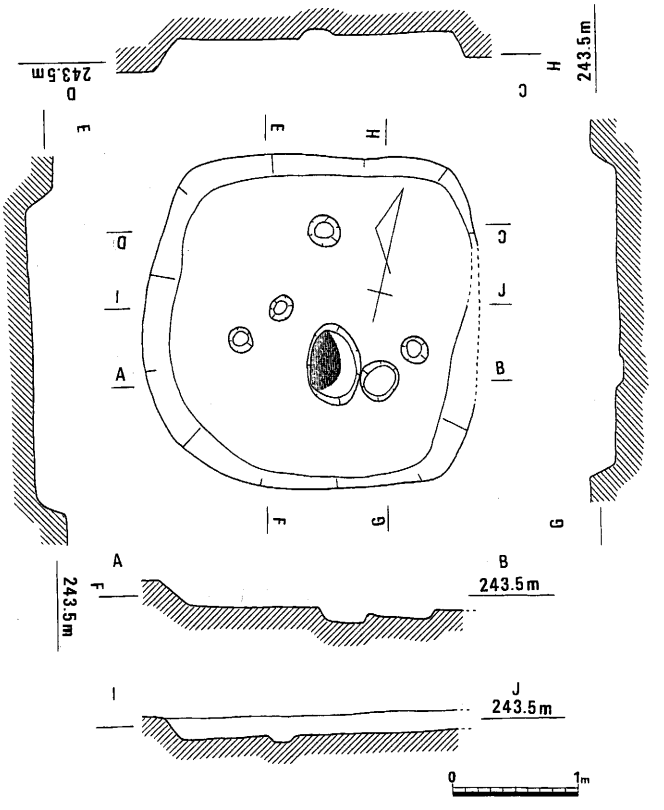


図61　竪穴住居26

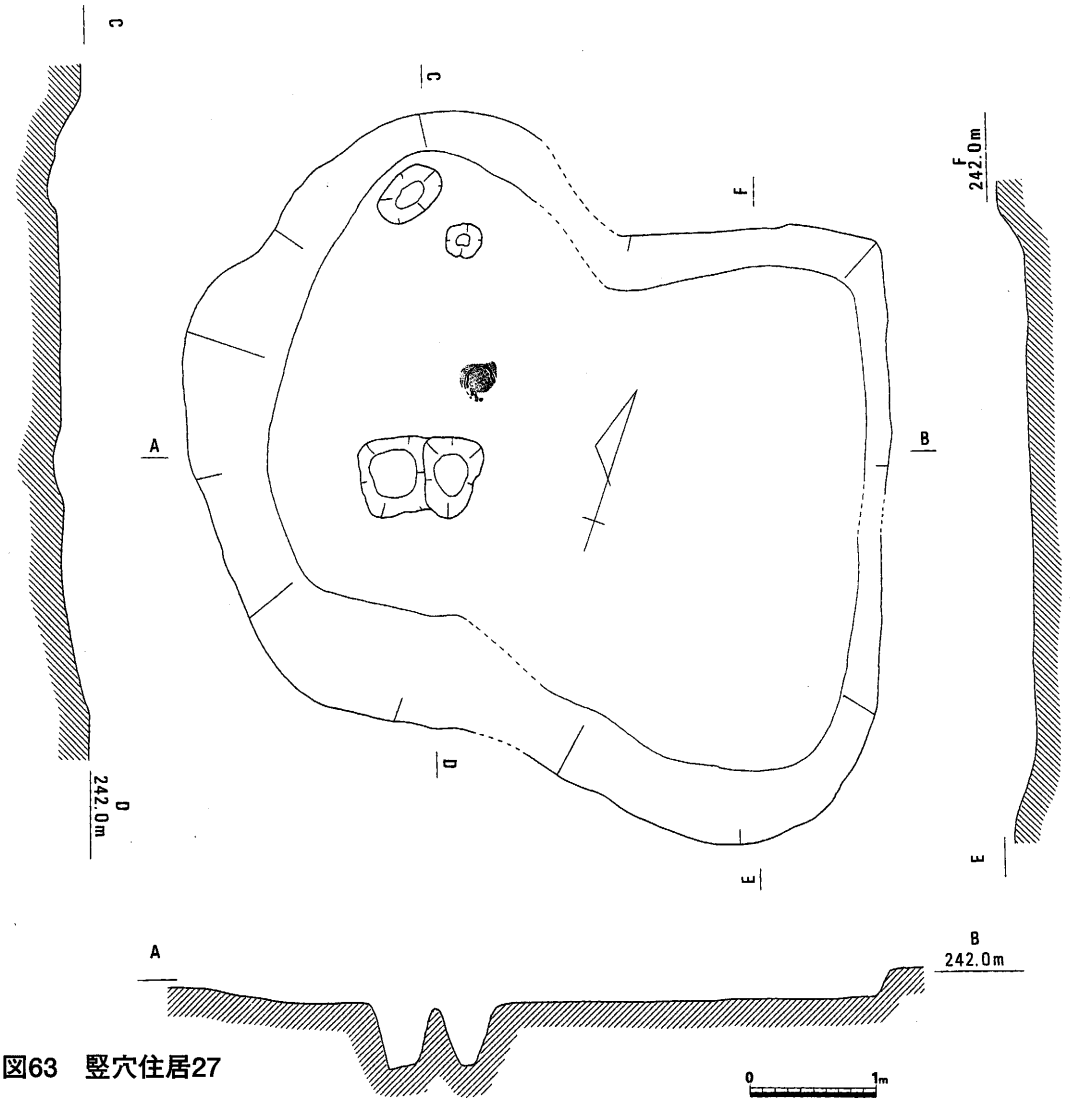


図63　竪穴住居27

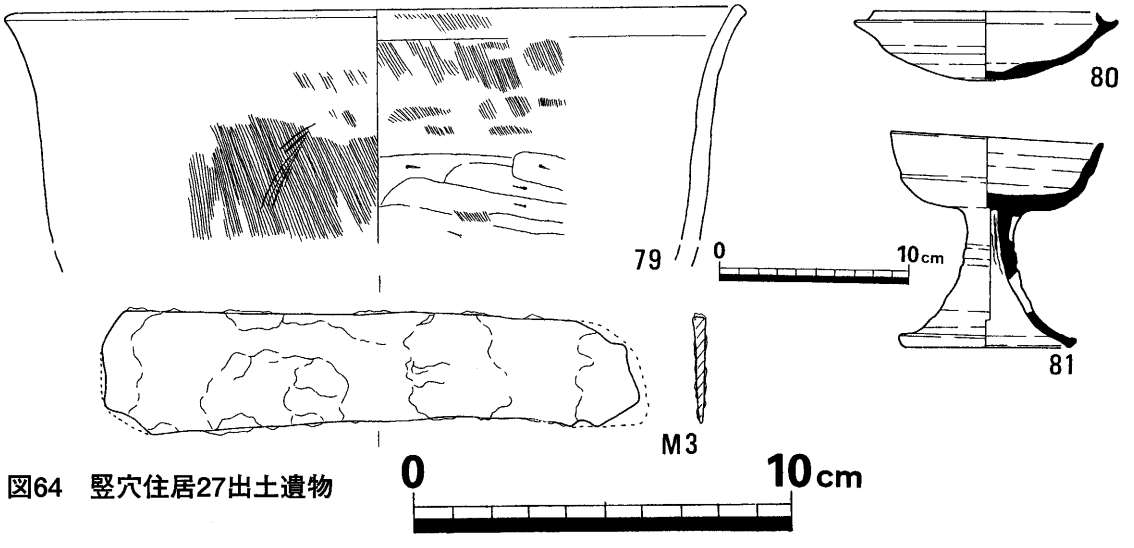


図64　竪穴住居27出土遺物

竪穴住居27

3区北部に他の住居址と離れて位置する。埋土は黒色土であり、調査時、外形線がはっきりせず、たわみとしていたが、まとまった土器の出土量と床面に被熱面をもつことから竪穴住居と判断した。床面より東西475cm、南北362cmを測り、いびつな方形を呈し、遺存状況は良好ではなく、比較的残り

の良い東壁から判断すると本来は方形を呈するのではなかったかと思われるが定かではない。柱穴はいくつか見つかっているが、主柱穴と思われるものは存在しなかった。中央やや西寄りの床面からは甕の破片を伴う被熱面が検出された。

遺物は比較的多く見つかっているが図化可能であったのは以下の３点であった。**79**は甑の口縁部と思われる。外面はハケメ、内面はハケメのちケズリ、口縁部はナデが施される。**80・81**は須恵器であるが、いずれも黄白色を呈し、焼成はあまり良好ではない。**80**は杯身である。立ち上がりは低く内傾し、端部は丸くおさめる。ヘラケズリは時計回りである。**81**は高杯である。椀状の杯部で稜を有する。脚部には２段の透かしが２ヵ所にみられるが、上段の透かしは内面まで貫通しない。**M３**は鉄鎌である。端部が一部欠損するが直刃を呈するものである。

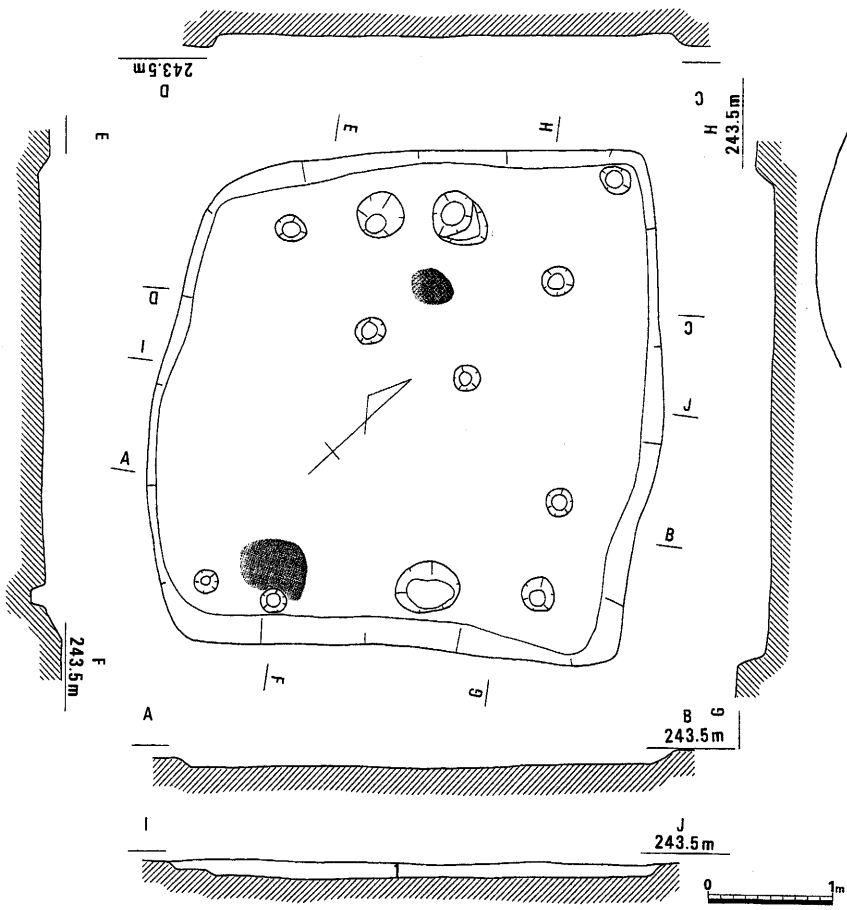
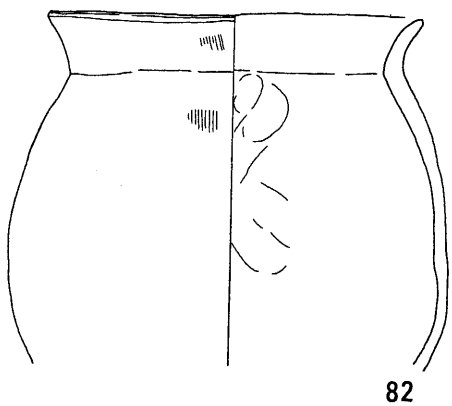


図65　竪穴住居28



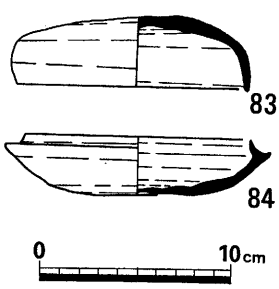


図66
竪穴住居28出土遺物

竪穴住居28

３区西部張出部の西側に位置する。東西383cm南北364cmを測り、ややいびつな方形を呈する。柱穴はいくつか見つかっているが、主柱穴は持たなかったものと考えられる。中央北寄りと南隅の２ヵ所に被熱面を持つ。

遺物は比較的多く見つかっているが図化可能なものは以下の３点であった。**82**は土師器の甕である。口縁部は「く」字状に外反する。摩滅が激しいため、細部の調整は明らかでない。**83**は須恵器の杯蓋である。多少歪みがあるが偏平な底部をもつものである。**84**は杯身である。立ち上がりは低く内傾し、端部は丸くおさめる。ヘラケズリはいずれも行われない。

竪穴住居29

5区南部に位置する。後世の削平などにより遺存状態は悪く、東西壁を僅かに残すのみであった。柱穴・被熱面は確認できなかったが、床面の一部に粘土による貼床が認められ、西壁付近より作業台と思われる偏平な石が出土した。

遺物は西南部床面を中心に弥生土器がまとまって出土している。**85**～**89**は甕の口縁部である。**85**・**86**は内傾気味に立ち上がり、端部は上下に拡張する。**87**～**89**はほぼ垂直に立ち上がり、端部は上方にのみ拡張する。**85**～**87**の口縁部には数条の凹線が巡る。内面は胴部にはいずれもヘラケズリが施され、**88**の頸部にはミガキが施される。**90**・**91**は壺または甕の底部である。**90**は外面はミガキ、内面にはヘラケズリが施される。**91**の外面の調整は不明であるが、内面は未調整である。**92**は鉢である。外面はハケメ、内面にはヘラケズリが施される。口縁部は強いナデにより、ややくびれる。端部は肥厚する。

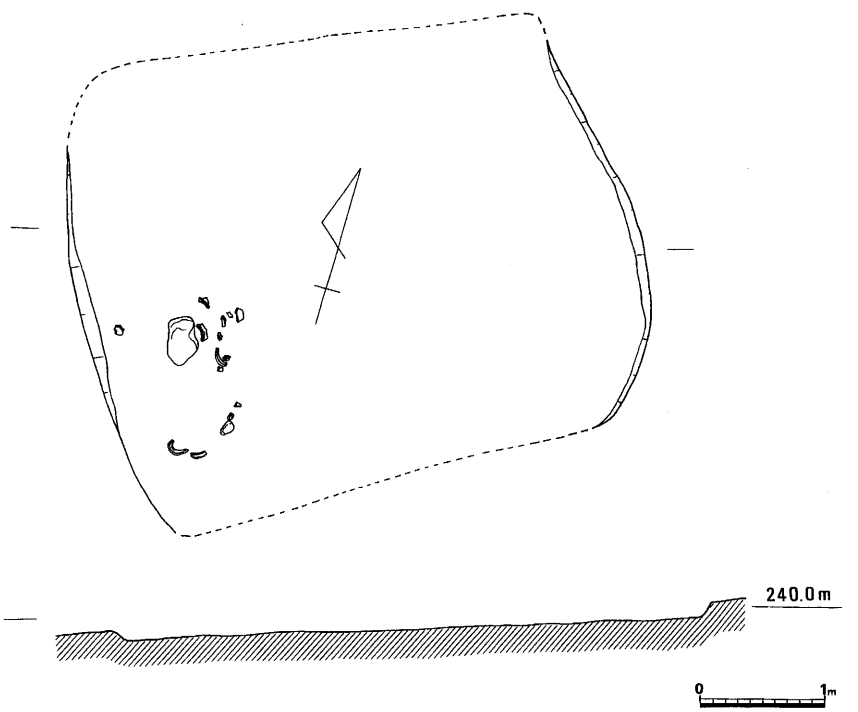


図67　竪穴住居29

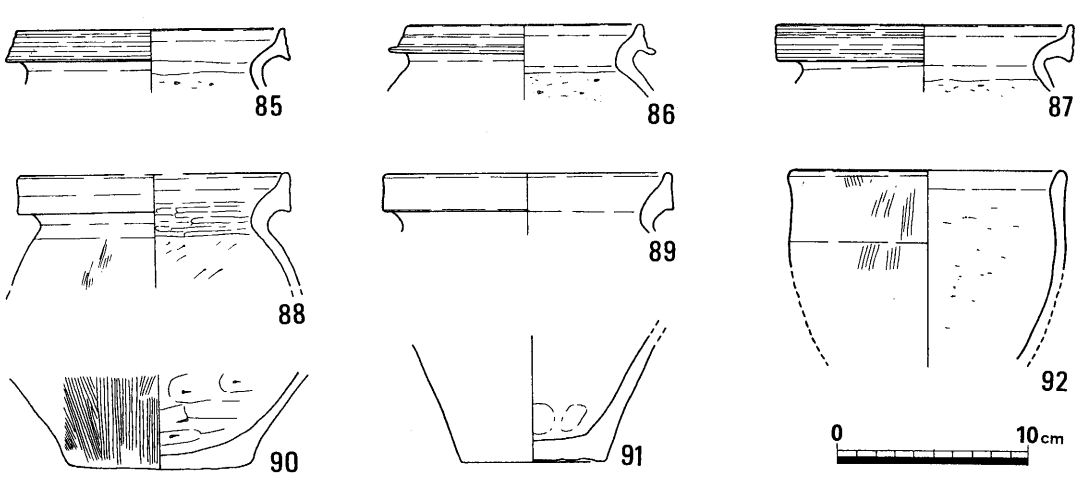


図68　竪穴住居29出土遺物

掘立柱建物

掘立柱建物は計５棟確認することができた。柱穴は各調査区より多数検出されているが、建物としてまとまらず、実際は報告する５棟以上の掘立柱建物が存在した可能性が高い。いずれも柱穴からの出土遺物が皆無あるいは極めて少なく、詳細な時期判断は困難であった。以下、順次遺構の概要について述べる。

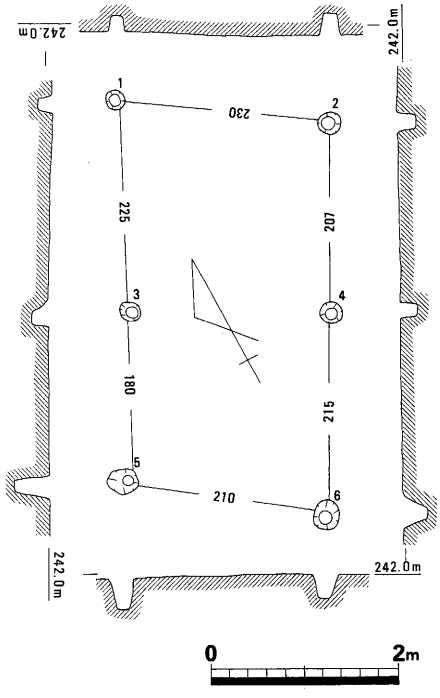


図69　掘立柱建物１

掘立柱建物１

１区のほぼ中央、竪穴住居５の北東２ｍに位置する２×１間の建物である。桁行405 ～422cm、梁間210 ～230cm、桁行の柱間が180 ～225cmとやや不揃いである。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈しその規模は径21～34cm、深さは検出面より16～36cmを測る。出土遺物は柱穴６より弥生土器１片が出土した。細片のため図化することは不可能であり、また、出土状況からは建物の築造された時期にあてはまる遺物であるかどうかの判断はできなかった。

掘立柱建物２

掘立柱建物１の西約９ｍに位置する。ほぼ東西に主軸を持った２×２間の建物である。桁行546 ～558cm、梁間334 ～336cm、桁行の柱間が265 ～283cm、梁間の柱間が160 ～176cmを測る。梁間の柱間を短く揃えていることが特徴的であり、柱穴４、５は棟持柱とも考えられたが、柱穴が柱筋を通っており、柱穴と考えることが妥当であろう。

柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、その規模は径31～59cm、深さは検出面より42～61cmを測る。出土遺物は柱穴３、５、８よりそれぞれ土師器片が少量出土したが、細片のため図化することも時代を特定することも不可能であった。

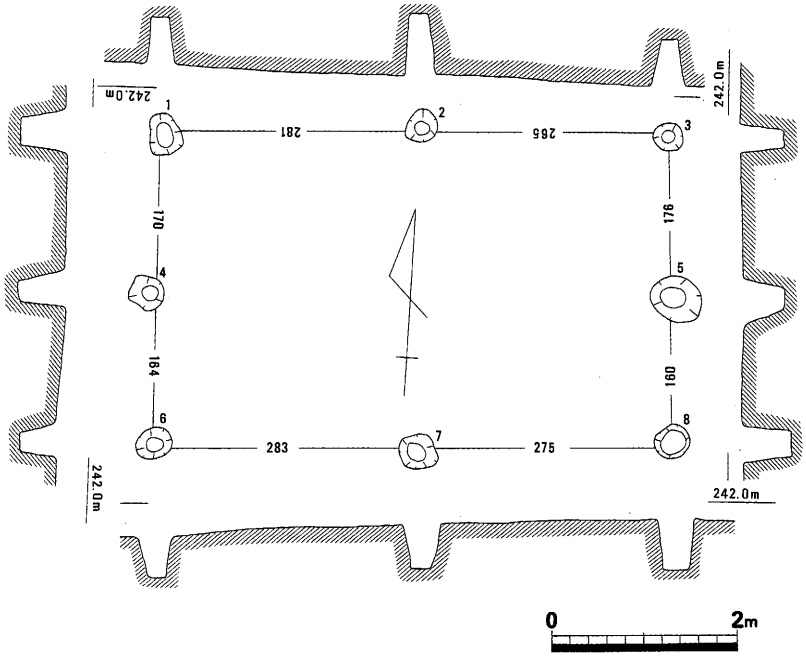


図70　掘立柱建物２

掘立柱建物３

３区南部に位置する２×２間の総柱の建物である。梁間357 ～361cm、桁行390 ～400cmを測る。梁間の柱間は159 ～198cm、桁行の柱間は190 ～209cmで、桁行は対応する辺の柱間距離が近い数値で構成されている。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、その規模は70～104cm、深さは検出面より18～44cmを測り、平坦な底部を持つ。柱穴から遺物は出土せず、付近に同様の遺構が存在しないため時期は不明である。

掘立柱建物４

４区中央付近よりやや西寄りに位置する。ほぼ南北に主軸を持った２×１間の建物である。梁間307 ～323cm、桁行517 ～569cm、桁行の柱間が217 ～300cmを測る。柱穴の掘り方は円形を呈し、その規模は径26～42cmを測り、西側中央の柱穴が若干規模が小さく、残りの柱穴はほぼ同程度の規模であり、深さも58～64cmでおおむね一定する。

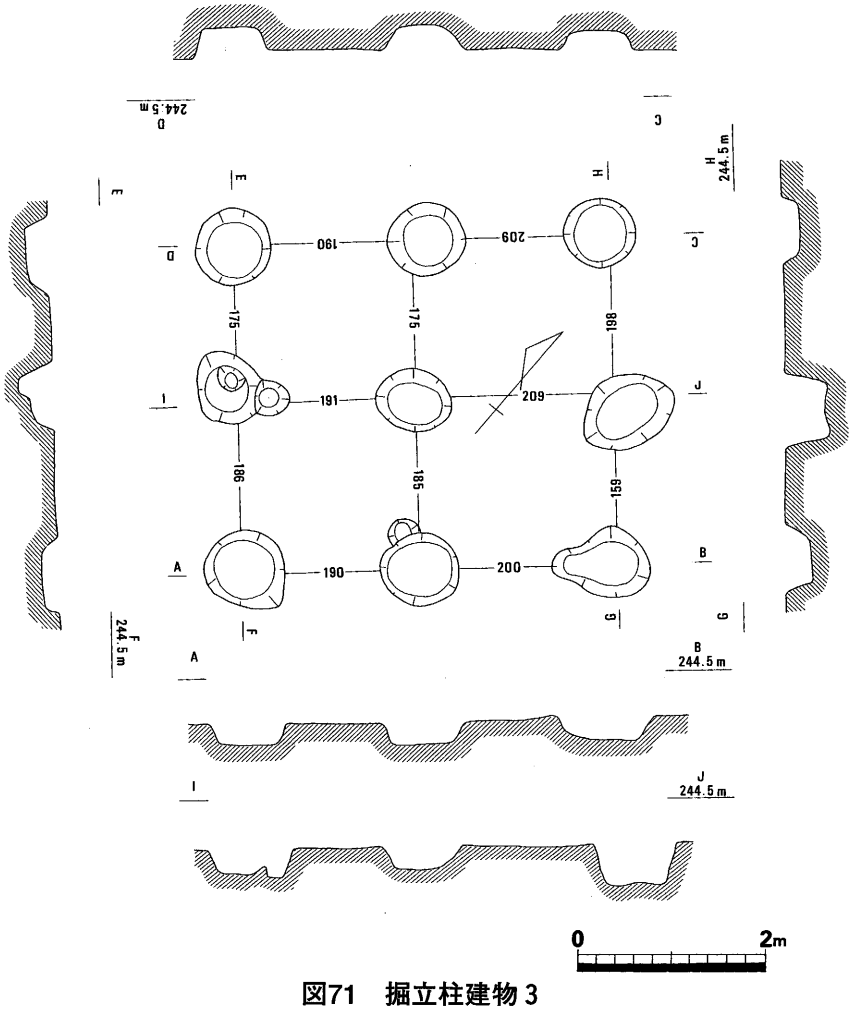


図71　掘立柱建物３

また、建物の西側には桁に沿って４本、南側には梁間に沿って２本の柱穴が検出さた。それぞれの柱間は123～175cm、掘り方は円形で規模は径18～24cmを測り、建物の柱穴の約半分の規模であった。この柱穴列はその位置関係から建物に伴う何らかの付属施設に関するものと判断したが、性格については不明である。

出土遺物はいずれの柱穴からも見つかっていないが、付近の土師皿等が出土した柱穴や、次に述べる建物５と同じ埋土であり、これらと大差のない時期のものであると思われる。

掘立柱建物５

４区中央南寄りに位置するほぼ南北に主軸を持った３×３間の建物である。桁行の柱間距離は北より230 ～233cm、339 ～337 cm、290 ～297cmを測り、桁ごとにそれぞれ柱間距離が異なることが特徴である。柱穴の掘り方は、円形ないし楕円形を基本とするが、柱穴５、７、８のみが方形の広い掘り方を持つ。建物内にはこのような隅丸長方形を呈する同様の土壙が柱穴の間に３ヵ所確認されており

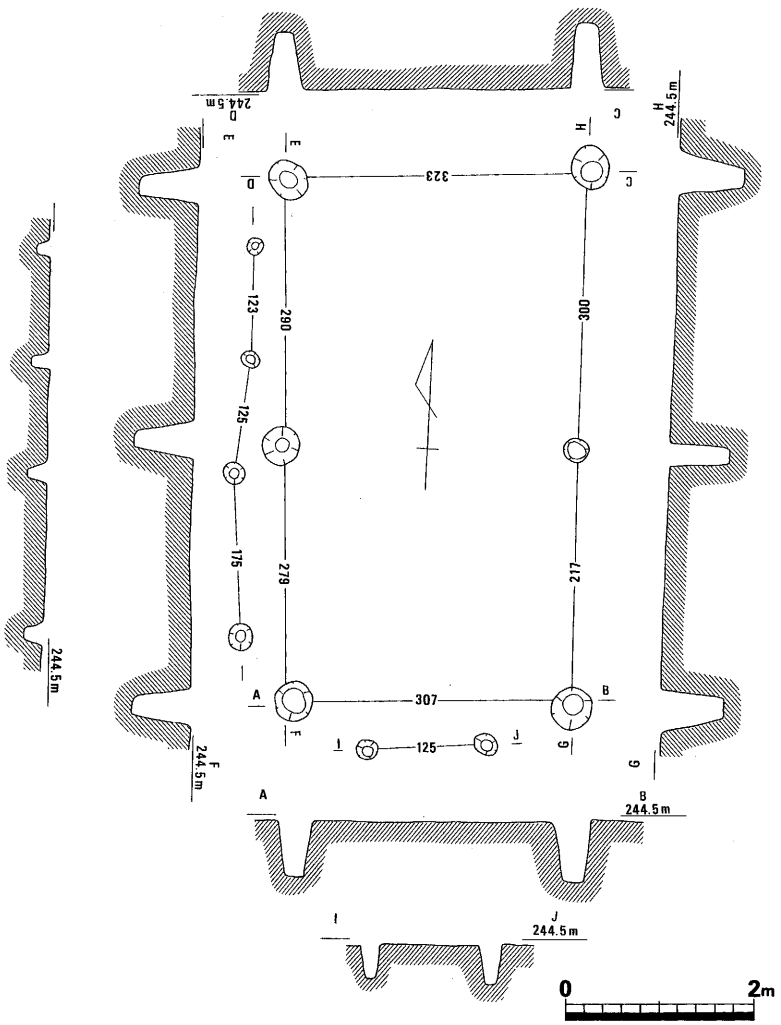


図72　掘立柱建物４

（土壙28～31）、出土遺物から建物と大差のない時期と思われるが、果たして建物に伴うものなのかどうか埋土や遺物からは判断し難い状況であった。

また、建物の北側、西側にはそれぞれ桁行、梁間に並行して柱穴列が検出された。柱間は北側が105 ～131cm、西側が146 ～265cmを測り、西側の方が間隔が広い。掘り方は円形で、規模は16～26cmを測り、深さは一定しない。

出土遺物は、柱穴より甕片、土師器片、鉄釘などが少量ではあるが出土した。**93**は柱穴１より出土した土師皿片である。推定口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測り、鈍い橙色を呈す。胎土には0.5 ～１㎜程度の砂粒を多く含み、焼成は良好でなく、摩耗のため調整は明らかではない。なお、柱穴８の掘り方より炭化材が出土しており、この建物に伴う建築部材の可能性も考えられる。周辺には炭が散見しているものの被熱面は確認されず、この建物が消失したものであるかどうか判断し難い。

建物の北側、西側の柱穴列からは、遺物は出土しなかった。しかし、柱穴の配列からこの建物に伴う付属施設には間違いないであろう。柱穴の規模から、建物の柱よりも細い柱を浅めに立てており、柵か塀のような遺構が考えられたが、建物からの距離を考えると、柵や塀とは考え難く、遺構の性格は明らかでない。

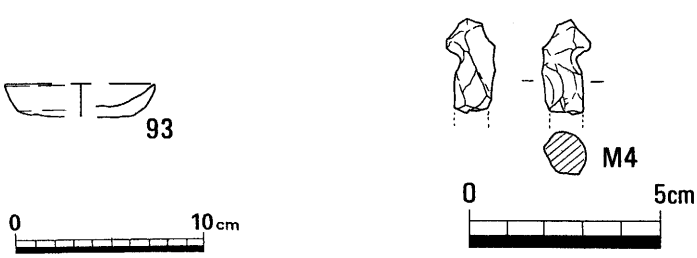


図73　掘立柱建物５出土遺物

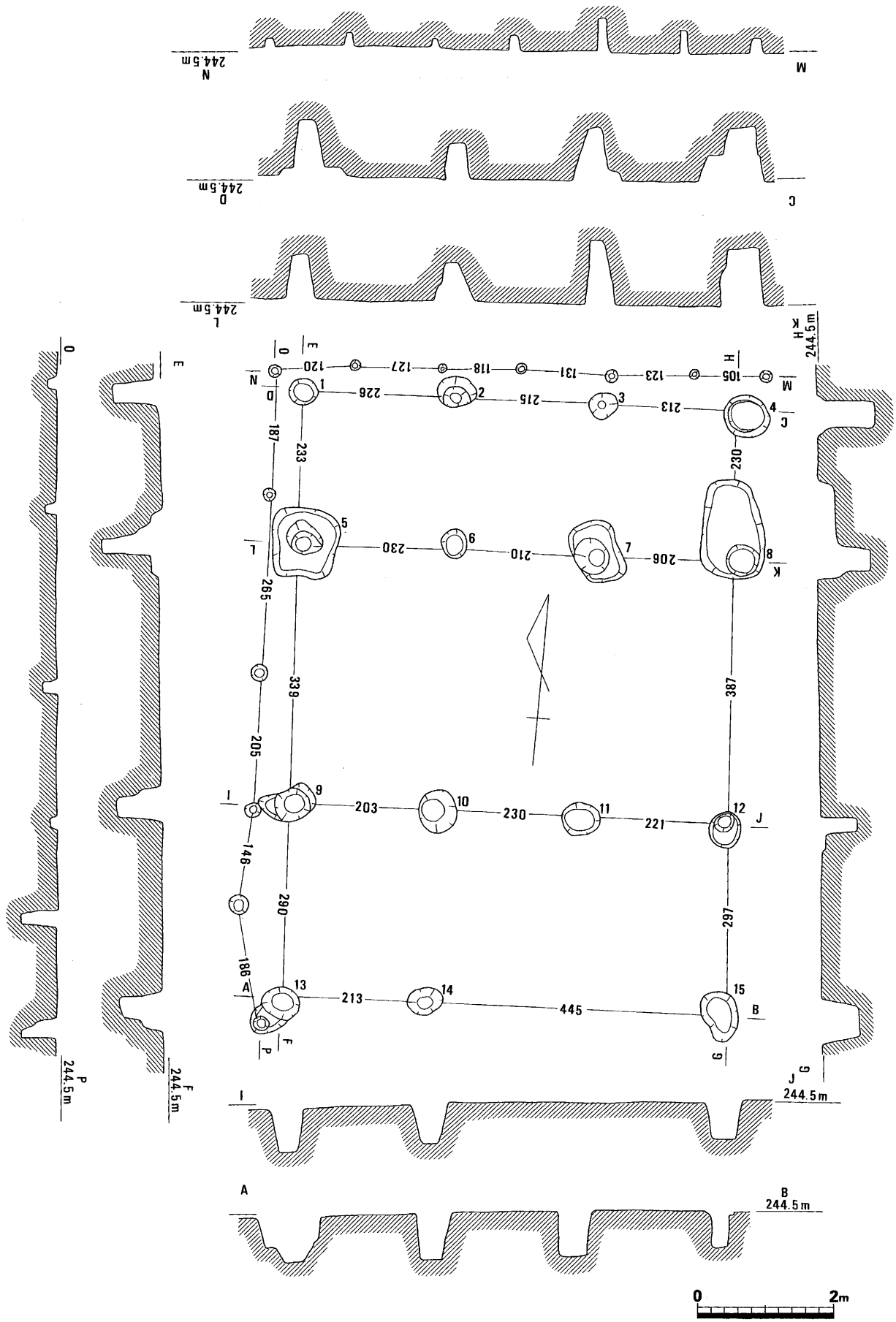


図74　掘立柱建物5

井　戸

井戸としては２基報告する。いずれも１区から検出された。掘り方の規模、深さ、立地条件などにより土壙と区別し、井戸と判断した。以下順次遺構の概要について述べる。

井戸１

１区西部寄りに位置する。不整方形を呈し長径335cm、短径246cmを測り、平坦な底部をもつ。深さは検出面より163cmを測る。出土遺物は弥生土器がややまとまって出土したものの図化できるものは少なかった。**94**は壺の口縁部である。端部を上下に拡張し、端面は刻み目を施した上に３～４条の凹線をめぐらせ、円形浮文を配する。外面調整にハケメを施す。

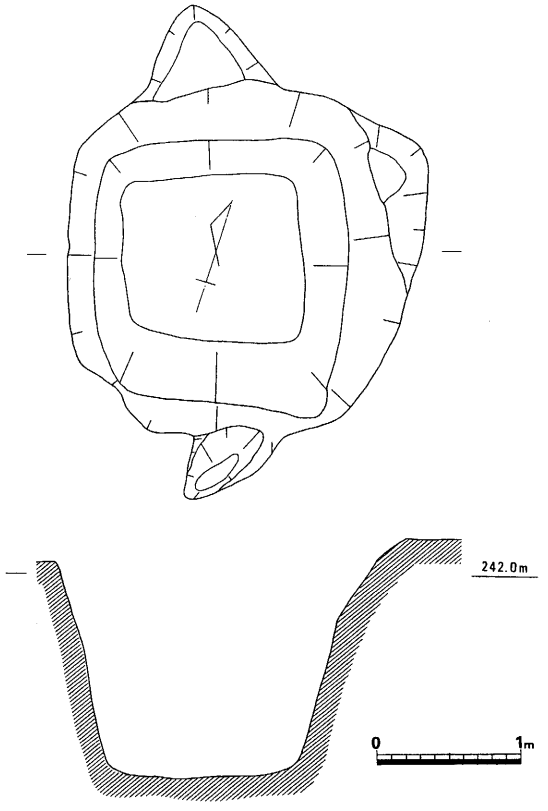


図75　井戸１

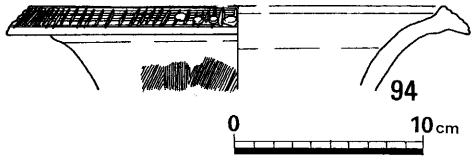
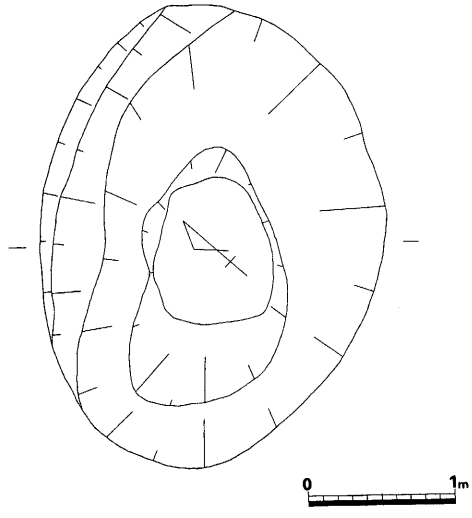
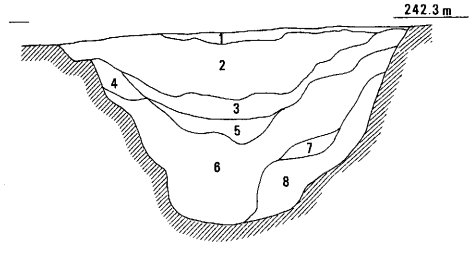


図76　井戸１出土遺物





1．暗茶褐色土　　5．にぶい褐色土
2．黒褐色土　　6．暗褐色土
3．褐色土（炭わずかに含む）　　7．淡褐色土
4．褐色土　　8．明褐色土

図77　井戸２

井戸２

１区中央部西寄り、井戸１の南約15mに位置する。楕円形を呈し、長径325cm、短径243cmを測る。北側が段を有しながら複雑に落ち込んでいき、底部に至る。深さは検出面より134cmを測り、底部はやや丸底を呈す。出土遺物はなく、詳細な時期については不明である。

溝

溝は本遺跡では５条の溝が検出された。溝１を除きいずれも東西に延びるものであった。以下順次遺構の概要について述べる。

溝１

１区南端にて検出された。全長約9.1m、幅0.5 ～0.75m、深さは検出面より0.05～0.11mを測る。断面の形状は浅い皿状を呈する。埋土の堆積状況は確認できず、用途についても不明である。遺物も出土しておらず、従って時期についても明らかではない。

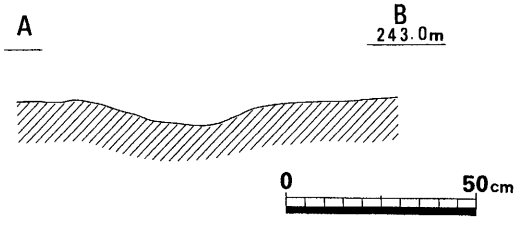


図78　溝１断面

溝２

１区中央やや北側に位置し、東西に延びるものである。本来は東西にさらに延長するものと思われるが、削平が著しく遺存状況は良好でないが、全長24.2m、幅2.4 ～3.9m、深さ0.1 ～0.17mを測る。断面の形状は浅い皿状から断面図のようなＬ字状を呈する箇所もあり、不規則である。埋土は黒色土であった。

遺物は弥生土器が若干出土している。**95**・**96**は壺である。**95**は口縁部が下方に垂れ下がるもので上面から端面にかけて凹線が施され、その上に大小の円形浮文が付く。**96**は口縁部上面に斜格子文、端面には刻み目が施される。**97**は甕である。口縁部は「く」字状に外反し、くびれ部に刻み目を施した粘土帯を貼りつける。口縁端部は内傾しながら上方に拡張する。口縁端面にも刻み目が施される。**98**は台付壺の脚台部である。くびれ部に２条の沈線が巡り、その下に三角形の透かしが施されるが、いずれも裏面まで貫通しない。Ｓ６は結晶片岩製の石庖丁の未製品である。

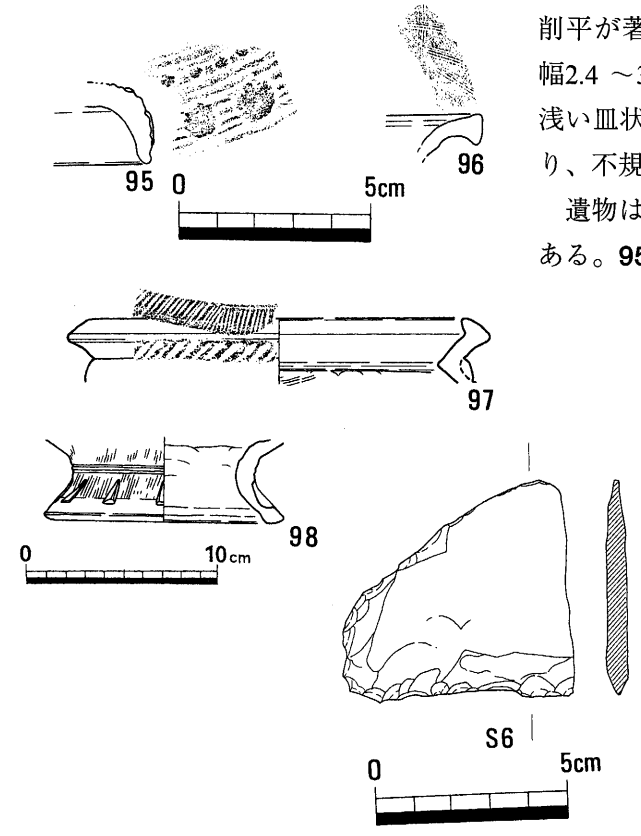


図79　溝２出土遺物

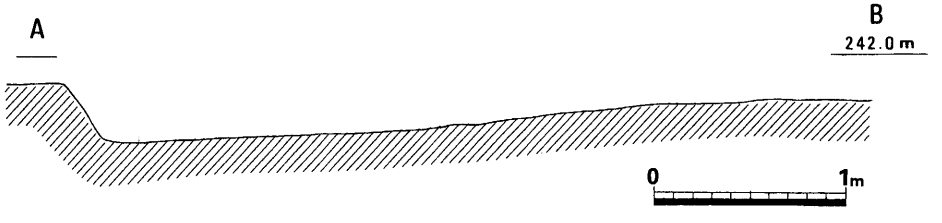


図80　溝２断面

溝3

2区中央部、竪穴住居址群の南側に位置し、中央やや東側にて二股に分かれる。北側の北東から南西方向に延びる溝を3－1、南側の東西に延びる溝を3－2、合流部分を3－3とする。3－1よりそれぞれ全長30、25.2、33.3m、幅0.8 ～2.7m、深さは検出面より0.08～0.35mを測る。3－1は椀状の断面形を呈する。3－2・3－3は皿状の断面形を呈し、3－3の途中で消滅しているが、本来はさらに西へ延長するものと思われる。　出土遺物はいずれも細片でしかも上面より出土したものばかりであり、直接遺構の時期を示すと思われる資料は見つからなかった。**99**は土師器の甕である。3－3上面より出土した。緩やかに外反する口縁部で外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。口縁部はナデで仕上げるが、内面にはハケ目痕が残る。3－3は溝3の中でも特に削平の著しい箇所であり、遺物も付近の竪穴住居址からの流れ込みの可能性が高く、詳細な時期を決定することは不可能であった。

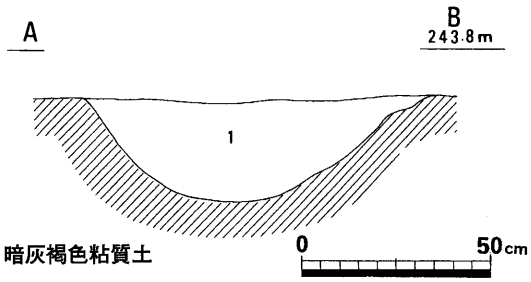


図81　溝3—1断面

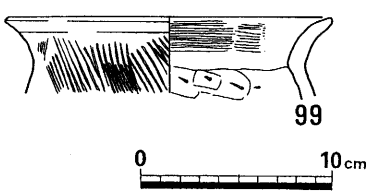


図82　溝3—3出土遺物

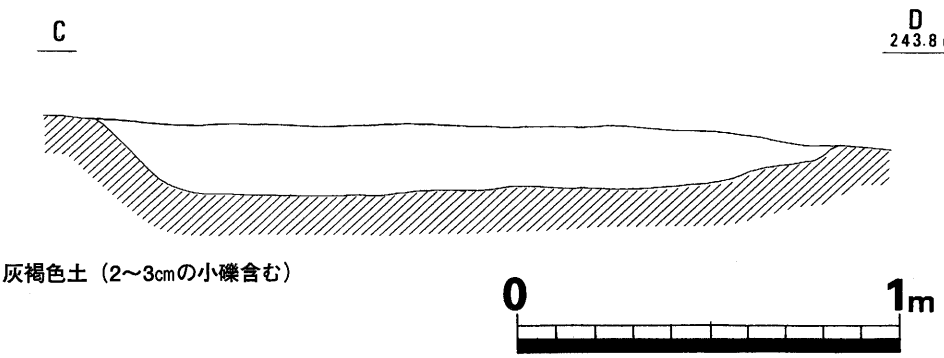
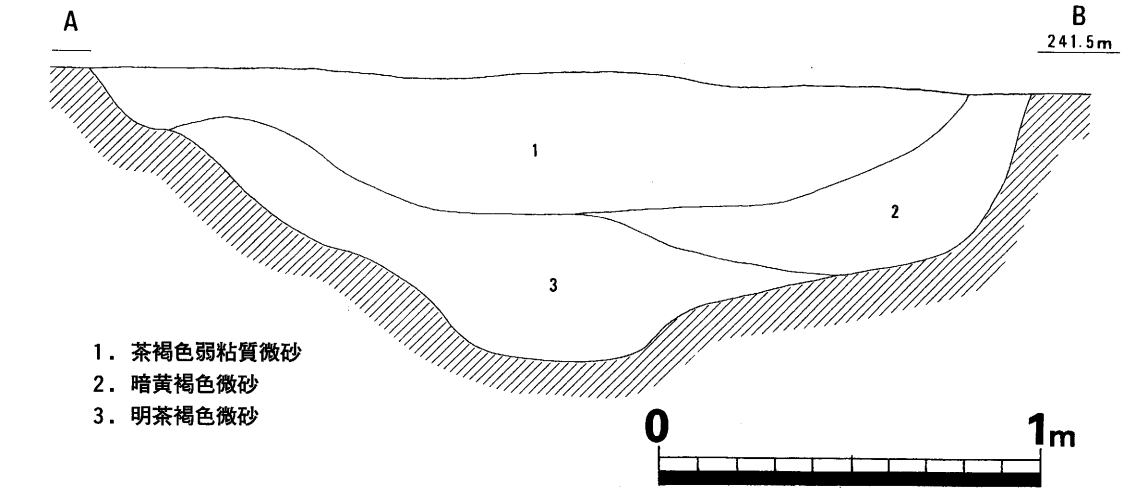


図83　溝3—2断面

溝4

3区北部に位置し、北東から南西に延びる。水田造成時の削平のため、北東部が若干低くなっている。全長35m、幅1.15～3.23m、深さは検出面より0.74～1.12mを測る。断面は急な斜面をもち、底部の狭いいわゆるV字溝である。

遺物は溝の中からはほとんど出土しなかった。**100·101**は弥生土器の甕である。それぞれ口縁部は「く」字状に外反し、端部は拡張する。**S 8**はサヌカイト製の石匙である。南西部より出土した。縄文時代の所産と考えられる。以上2点以外の出土遺物以外は細片がわずかに過ぎず、詳細な時期を推定するには資料に乏しいが、溝内からは土師器・須恵器は出土せず、埋没後に溝直上ににおいて、被熱面と共に土師器等が出土していることから考えても、遺構の時期は古墳時代以前であろう。



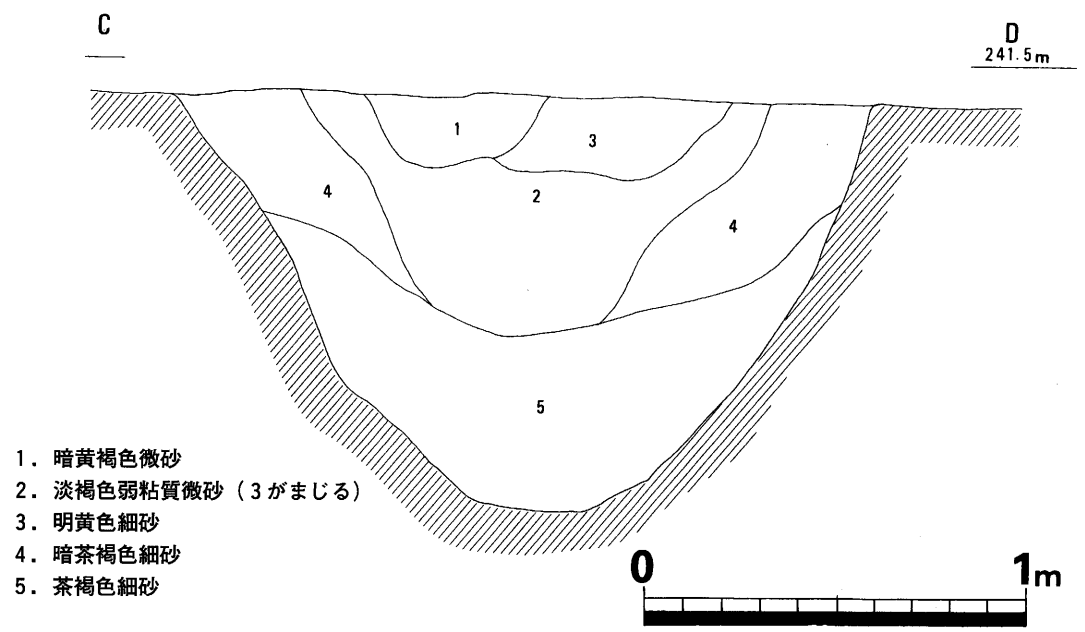


図84　溝4断面

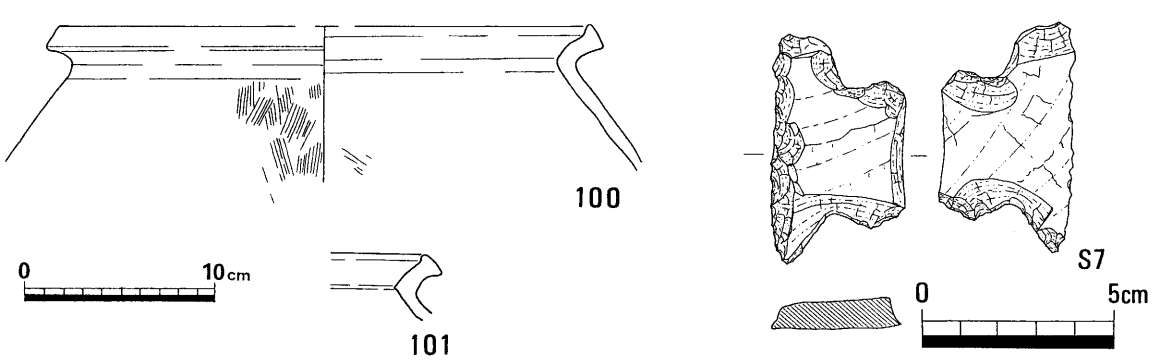


図85　溝4断面出土遺物

溝5

4区中央を北東から南西に延びる。両端ともさらに延長すると思われるが、調査区の境に接しており、残念ながら全体の規模は明らかでない。しかし、検出された全長は70.7m、幅1.79～4.05m、深さは検出面より0.62～1.01mを測る。断面は深い椀型もしくは緩やかなV字状を呈する。

遺物は弥生土器が北東部を中心に出土している。**102**～**108**は壺である。いずれも口縁端部は上下に拡張するが、内傾気味に拡張する**102**·**103**·**105**とほぼ垂直に拡張する**104**·**106**·**107**と外傾気味に拡張する**108**の3通りを示す。端面には凹線が巡り、**102**·**103**·**105**·**107**には刻み目が施され、**105**にはさらに円形浮文が配される。頸部には**102**·**103**·**105**は指頭圧痕による刺突文が1段ないし2段にわたって巡らされる。**104**は4条の沈線が巡り、肩部に櫛描波状文が施される。**105**·**107**には凹線が巡る。調整は外面はハケメのちナデ、内面はナデで一部に指頭圧痕が残るものもある。**102**にはハケメ痕もみられる。**109**は甕である。口縁部は内傾気味に上方に拡張し、端面には円形浮文が施される。肩部にはヘラ描きによる斜格子文が施される。**110**·**111**は高杯である。**110**は赤褐色を呈し、全面にミガキが施されたいわゆる丹塗磨研土器である。櫛描沈線文と三角形の透かしが2段にわたって施されるが、内側まで貫通するものは無い。櫛描沈線にはズレがあり、透かしの間隔も不揃いで、施文は粗雑である。**111**は口縁下部で強く屈曲するものである。

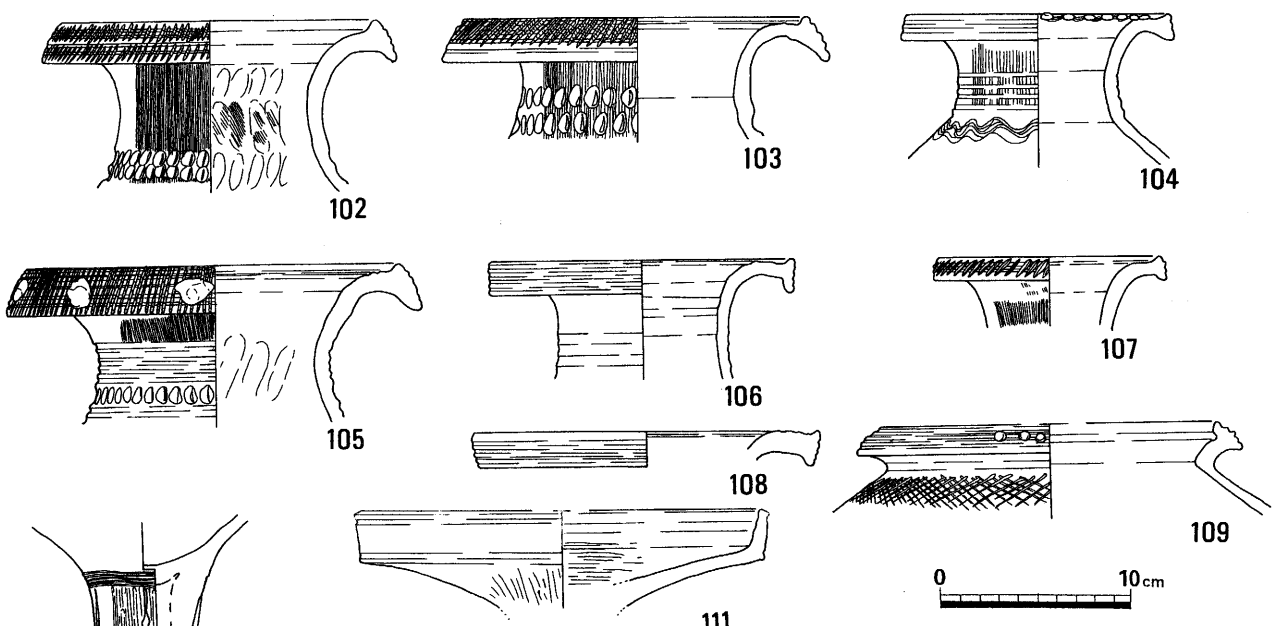


図86　溝5出土遺物

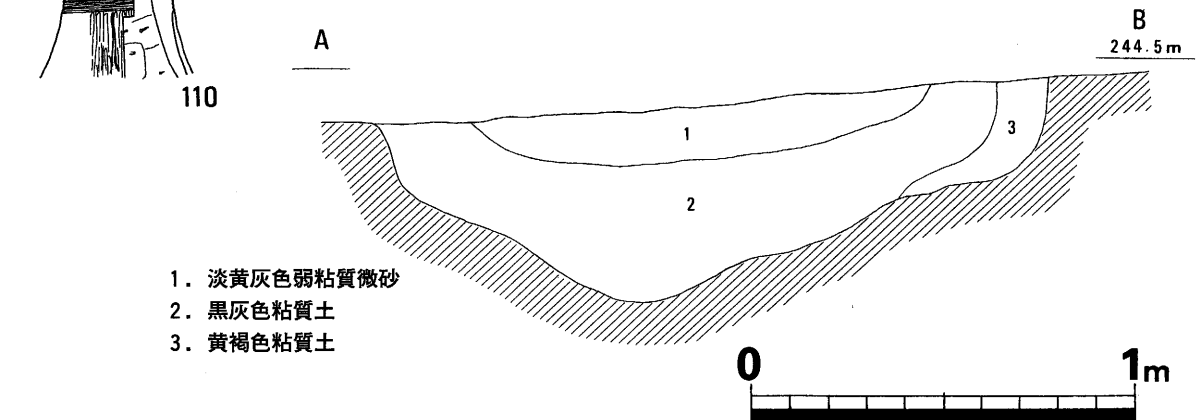


図87　溝5断面

炉

ここで炉として取り上げるものは、被熱した面を持ち、そこで何らかの作業を行った形跡が考えられるものであり、土壙状を呈するものも土壙とは区別してここで報告する。しかし、埋土に炭や焼土を含むのみのものに関しては土壙として扱っている。以下、遺構の概要について述べる。

炉1

3区東部、住居址28の南東約4mに位置する。楕円形を呈し、長径321cm、短径246cmを測る浅く掘りくぼめられた土壙である。皿状の平坦な底部をもち、土壙北西部に56×68cmの範囲で赤褐色に被熱した面を持つ。出土遺物はなく、時期については不明である。土壙周辺からは、鉄滓もわずかながら出土しているが、この遺構が、鉄生産に関わるものかどうか性格についても明らかではない。

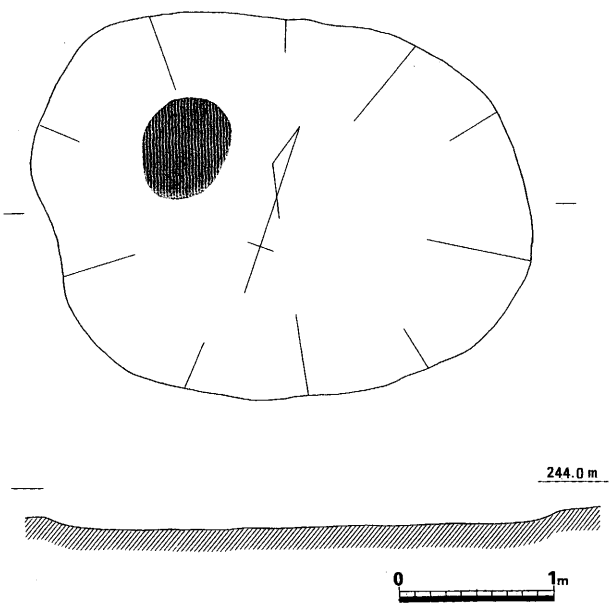
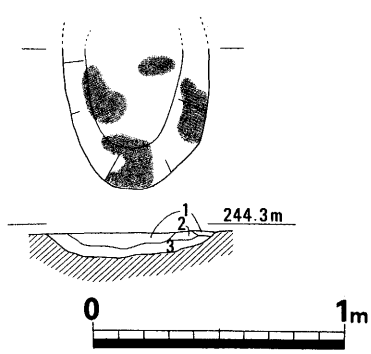


図88　炉1

炉2

4区中央部西寄りに位置する。水田造成の際の削平を受けており、全体の規模は明らかでない。断面形は皿状を呈し、埋土に炭や焼土を多く含み、土壙内は全体的に被熱し、赤褐色を呈する。遺物は出土しなかったが、検出状況などより周辺の土師器皿や、備前焼等を出土する遺構と同時期のものと思われる。



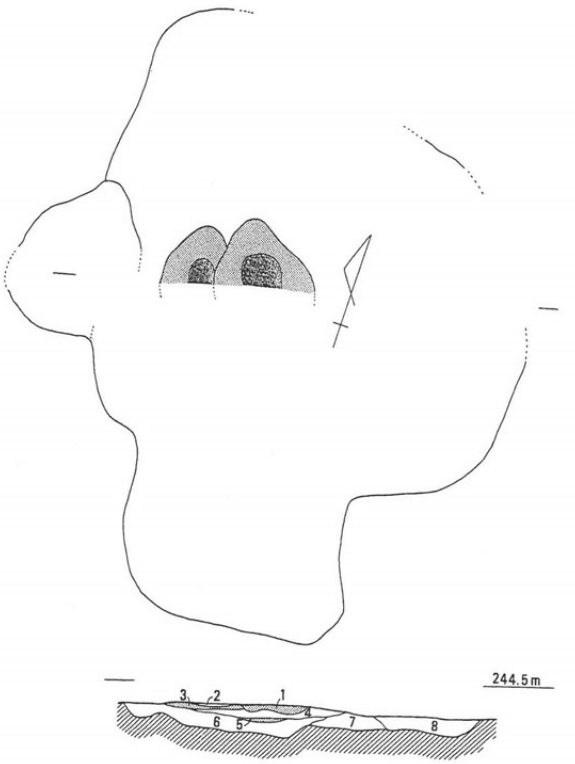
1．炭
2．暗褐色粘質土
3．淡赤褐色粘質土

図89　炉2

炉3

4区北部に位置する。北側の削平が著しく、全体の様相は明らかではないが、長径約820cm、短径約580cmを測る南側が張り出した不整形を呈する。西側には土壙36が隣接しており、埋土の状況から炉3と同時期のもので、あるいは同一遺構の可能性も考えられる。上面清掃時、土壙上面において熱を強く受け中心部が赤褐色を呈し、周囲が淡黄色を呈する粘土面を検出した。残念ながら確認調査時のトレンチに切られ、焼土面全体の規模を確認することは不可能であったが精査の結果、焼土面のすぐ下層において同様の粘土による焼土面が一部重なった状態で確認された。また、断面観察の結果、同様の遺構がさらに下層に存在することが確認された。埋土には焼土及び炭が多量に含まれていた。

完掘の結果、土壙は比較的浅い皿状を呈するが、底面は平坦



1．淡黄褐色粘土（一部赤褐色、被熱画）
2．暗黄褐色砂質土
3．1と同じ
4．暗褐色砂質土（炭・焼土含む）
5．1と同じ
6．茶褐色砂質土（炭・焼土含む）
7．淡茶褐色砂質土
8．4と同じ

図90　炉3

し部の平坦面はそれに伴う作業場と考えられ、隣接する土壙36はここでの生産活動に関係する何らかの貯蔵施設だったのではないかと思われる。出土遺物は鉄釘と備前焼、土師皿、天目茶碗がいずれも1点づつ破片で出土したが、図化することはできなかった。また、鉄滓が1点出土したことはこの遺構の性格を考える上で注目されるであろう。

炉3被熱面

ではなく、部分的にさらに浅い掘り込みがみられる箇所も存在する。南側の張り出し部は一段高くなって、平坦面を形成していた。おそらく土壙内において、粘土で炉が築かれ、作業終了時に炉が破壊され、同じ場所に再び築かれるといった工程が少なくとも3回以上は繰り返されたことが間違いないと思われる。ここにこうした炉の存在を想定すると、南に位置する張り出

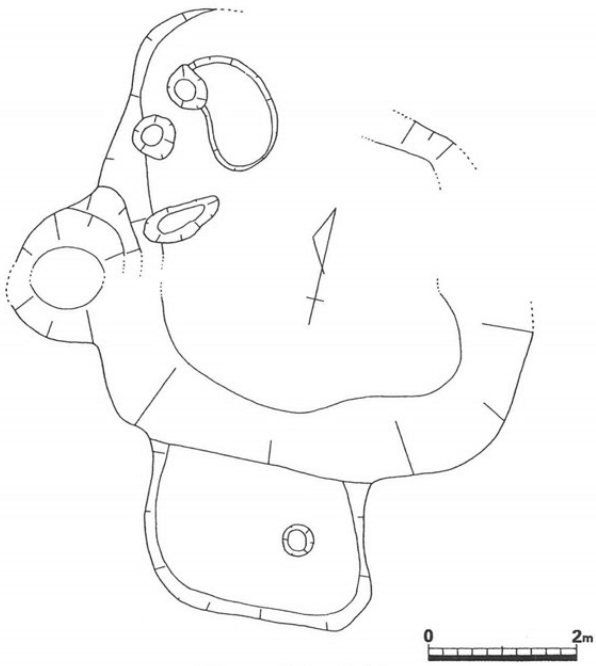


図91　炉3完掘

炉４

２区北西部、竪穴住居８の南西約4.5mに位置する。長径57cm、短径44cmの範囲で被熱面が確認された。土壙状を呈さず、平面に直接被熱する。周辺には土器が散在しており、調査時、住居址と判断して周辺を精査してみたが住居址の輪郭・柱穴等の住居址の痕跡が見られず、遺物の出土等から考えて、屋外炉であったと思われる。なお、付近にはこの他にもいくつか大小の被熱面が確認されており、これらもまた同様に屋外炉であった可能性が高いが、位置及び規模等を記録できなかったことは残念である。

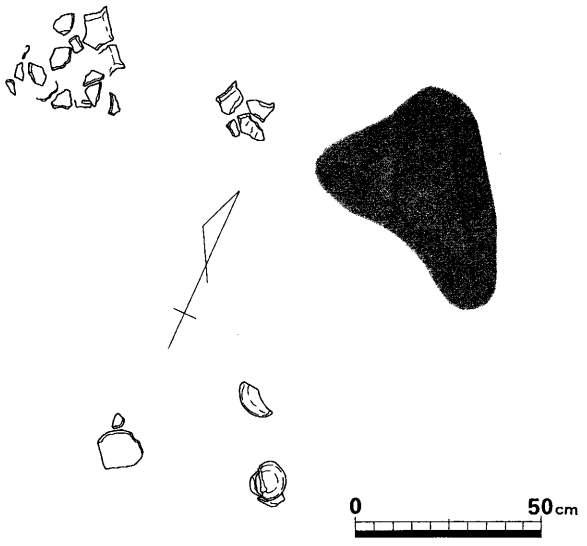


図92　炉４

遺物は被熱面より半径約１mの範囲でまとまって出土した。**112**・**113**は土師器の甕である。口縁部はいずれも「く」の字状に外反し、内面はヘラズリ、外面はハケメ、口縁部にはナデが施される。**114**は須恵器の杯蓋である。比較的平坦な天井部をもつものである。焼成が甘く細部の調整については明らかでない。**115**は杯Ｇである。口縁部は比較的平坦な底部からやや外反気味に上方にのび、端部はやや肥厚する。**116**は高杯である。歪みが激しいが、杯部が椀状を呈し、端部が上下に拡張する短い脚部をもつものである。

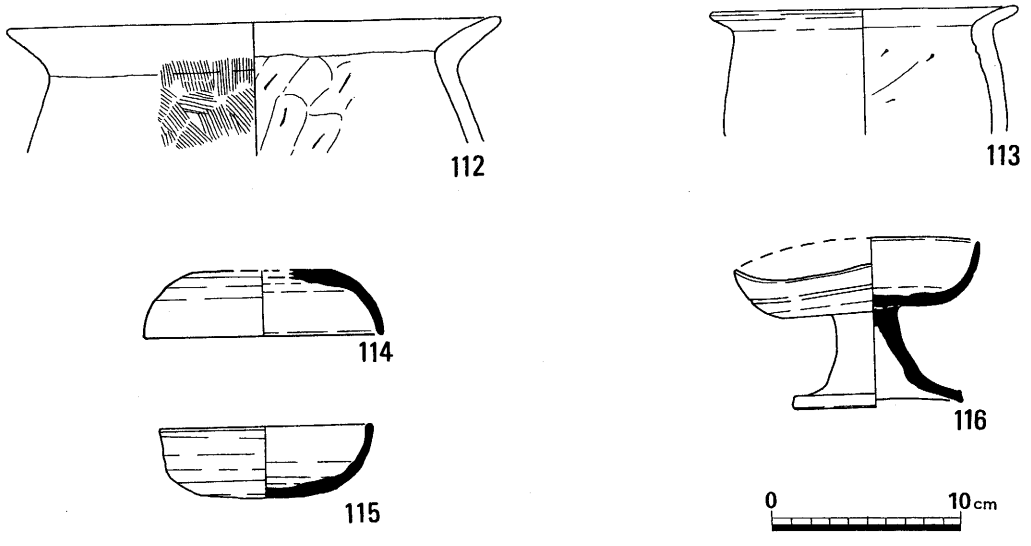


図93　炉４出土遺物

柱穴列

ここで柱穴列として扱うものは、柱穴が直線に並び、明らかに同一遺構として捉えられるものの掘立柱建物などの遺構にはなりえないものである。ここで報告するのは１例のみであるが、調査区内には柱穴が数多く検出されており、掘立柱建物同様本来はこれ以外にも多くの柱穴列が存在する可能性が高い。以下遺構の概要について述べる。

柱穴列１

４区南東部、掘立柱建物５の東４ｍ付近に位置し、主軸をほぼ南北に揃える。全長16.8ｍ、９本の柱穴で構成される。柱間の距離は177 ～210㎝を測り、掘り方は不整円形を呈する。深さは検出面より20～45㎝を測る。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかったが、掘立柱建物５の柱穴と同一の埋土をもち、さほど前後しない時期のものであると思われるが、掘立柱建物５との関連性については明らかではない。

竪穴列（手前が掘立柱建物５）

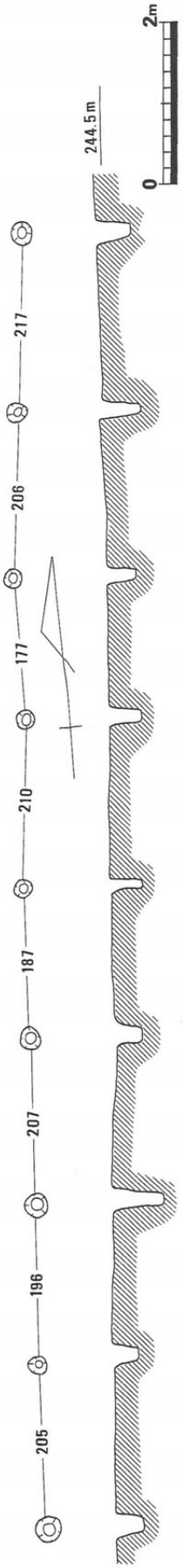


図94　柱穴列

土　壙

ここでは39基の土壙を報告する。本遺跡からはここで報告した以外にも土壙が検出されているが、不明瞭なものや出土遺物の無い一部の土壙についてはここでは報告せず、全体図にのみ掲載した。遺構の性格は不明なものが多く、中には土壙墓と思われるものもいくつか存在したが、確実でないものは土壙墓に含まず、ここで報告する。以下、遺構の概要について述べる。

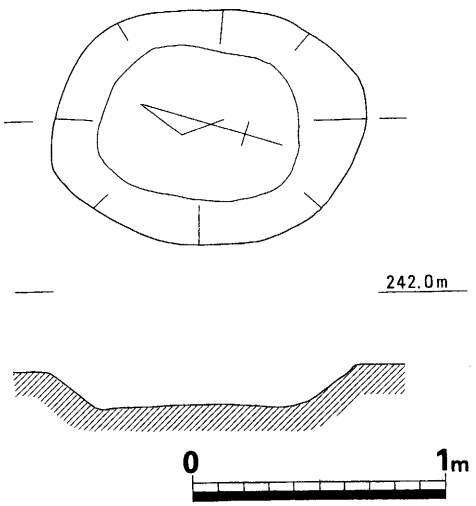


図95　土壙1

土壙1

1区溝2の北側の、東西に5基並んだ土壙群の最西端に位置する。楕円形を呈し、長径126cm、短径96cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土には炭・焼土を含む。出土遺物は弥生土器が一片出土したが小片のため、詳細な時期については明らかではないが、土壙1～5は位置関係及び埋土の状況から同じ性格を持つ同時期のものと思われる。

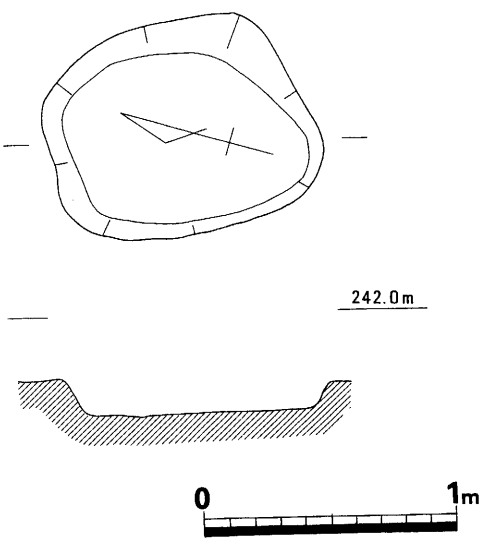


図96　土壙2

土壙2

土壙1の北東1.25mに位置する。不整円形を呈し、長径114cm、短径86cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土には土壙1と同様、炭、焼土を含む。遺物は出土していない。

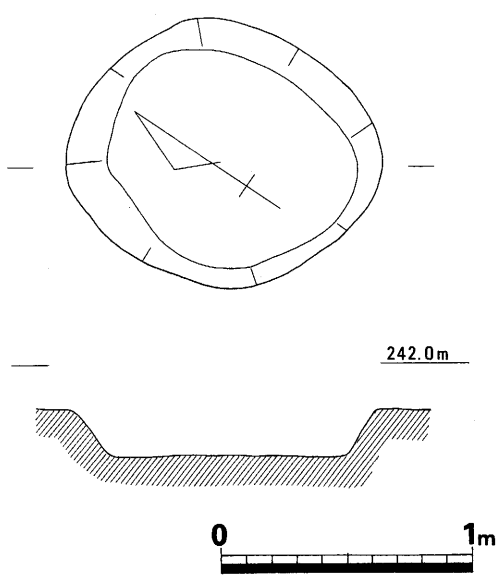


図97　土壙3

土壙3

土壙2の北東1.63mに位置する。不整円形を呈し、長径127cm、短径108cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土には炭・焼土を含む。出土遺物は弥生土器が数点出土した。いずれも小片のため図化することは不可能であったが、そのうち何点かに外面に丁寧な縦方向のミガキが施された甕形土器または、壺形土器の胴部と思われる土器が含まれていた。

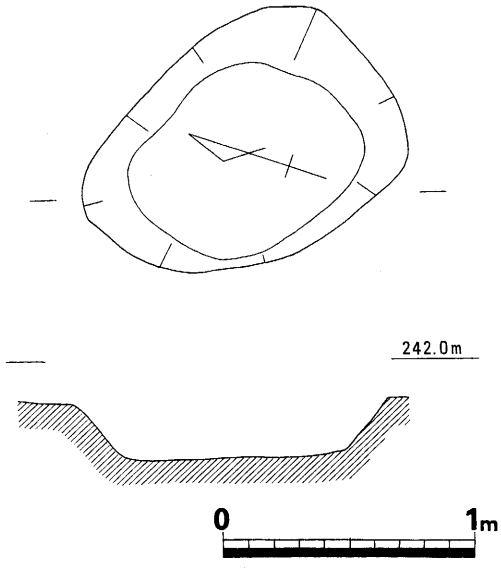


図98　土壙４

106cm、短径97cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土には炭、焼土を含む。遺物は出土していない。

土壙６

２区竪穴住居８の東約８ｍに位置する。円形を呈し長径112cm、短径95cmを測る。直線的に落ち

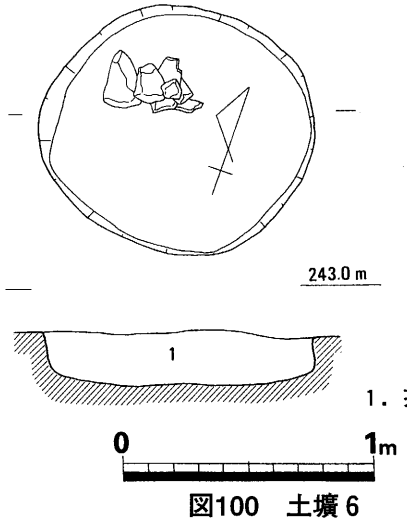


図100　土壙６

込み、底部は平坦である。底部には拳大～20cm程度の礫が固まって出土したが、遺物は出土していない。

土壙７

竪穴住居８の南約４ｍに位置する。隅丸長方形を呈し長径158cm、短径95cmを測る。出土遺物は図化できなかったが、中世の土師器皿の破片が１点出土している。

土壙４

土壙３の東0.72ｍに位置する。不整楕円形を呈し、長径131cm、短径90cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土には炭・焼土を含む。出土遺物は弥生土器、土師器片がそれぞれ数点小片で出土している。いずれも図化することは不可能であったが、弥生土器は外面にミガキが施された甕形土器または壺形土器で、土師器は内面ヘラケズリが施された甕形土器の破片と思われる。

土壙５

土壙４の東0.68ｍに位置する。円形を呈し、長径

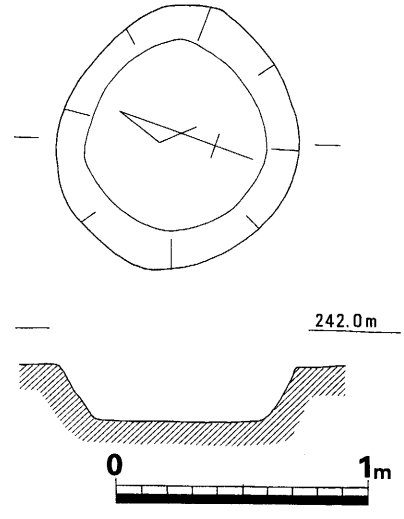


図99　土壙５

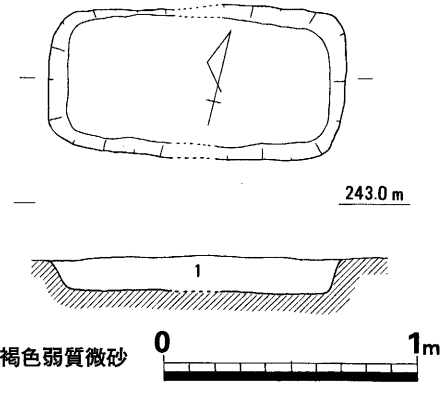


図101　土壙７

土壙８

２区北部に土壙９と並んで位置する。不整円形を呈し、長径332cm、短径281cmを測る。緩やかに落ち込み、断面は皿状を呈するが、底部にはわずかな凹凸と浅い窪みをもつ。埋土には炭をわずかに含む。遺物は出土していないが、埋土の状況及び位置関係から土壙９と同時期で同様の性格をもつものと思われる。しかし、その性格については明らかではない。

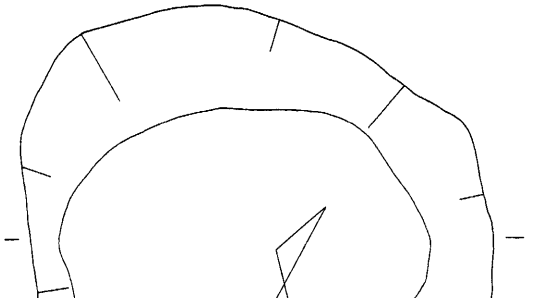
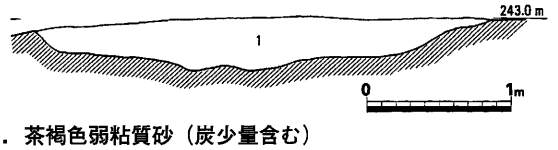


図102　土壙８

土壙９

土壙８の西隣に位置する。不整円形を呈し長径403cm、短径327cmを測る。緩やかに落ち込み、断面は皿状を呈するが、底面はわずかな凹凸があり平坦でない。埋土には炭がわずかに含まれていた。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器の釜がいずれも破片で出土している。木炭もわずかながら出土した。

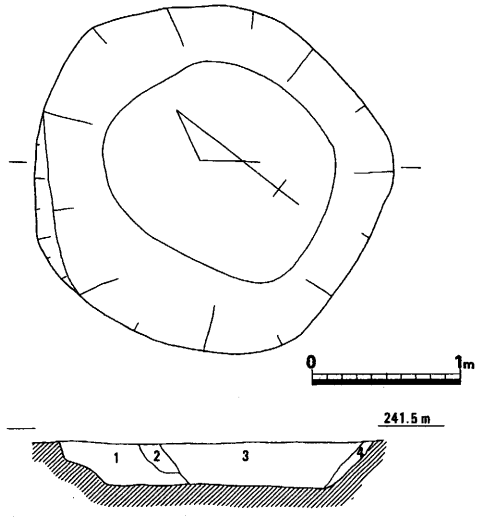


1．茶褐色弱粘質砂（炭少量含む）

図103　土壙９

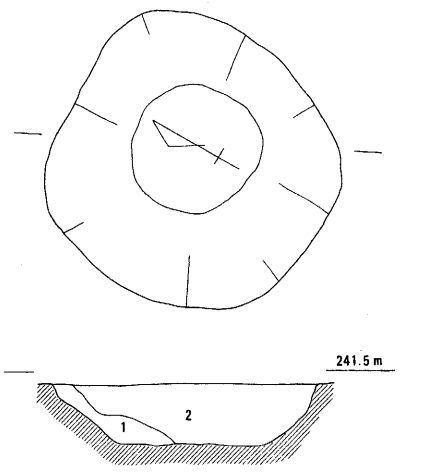
土壙10

３区北部に位置する。不整円形を呈し、長径262cm、短径245cmを測る。北西部にわずかな段をもち平坦な底部をもつ。遺物は出土しておらず、埋土に炭等も含まないが、土壙10～15は埋土の状況及び規模、位置関係などから同時期で同様の性格をもつものと考えられる。しかし、その性格については明らかではない。



1．暗黄褐色細砂
2．黄褐色細砂
3．茶褐色砂
4．１と同じ

図104　土壙10



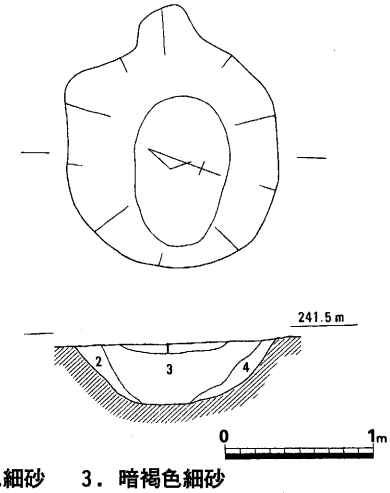
1．茶褐色細砂　2．暗茶褐色細砂

図105　土壙11

短径251cmを測、北側に段をもつ。底部は平坦である。埋土には炭等を含まず、遺物は出土していない。

土壙13

土壙14の北約2.6mに位置する。東部がやや



1．暗黄褐色細砂　3．暗褐色細砂
2．黄茶褐細砂　4．淡黄褐色細砂

図107　土壙13

土壙14

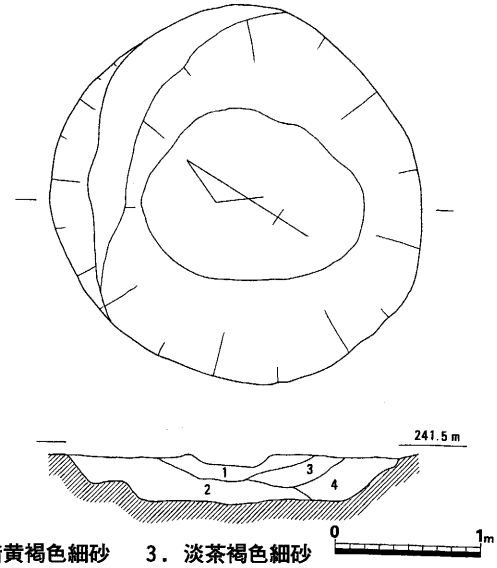
土壙13の南約2.6mに位置する。円形を呈し、長径212cm、短径178cmを測る。掘り方は3区北部の土壙群の中では比較的急な落ち込みをもつが、掘りすぎの可能性もある。遺物は出土していない。

土壙11

土壙12の東隣に位置する。円形を呈し、長径220cm、短径196cmを測り、平坦な底部をもつ。埋土に炭等は含まず、遺物も出土していない。

土壙12

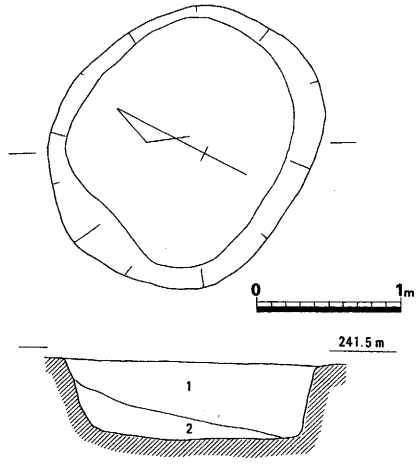
土壙11の西隣りに位置する。円形を呈し、長径273cm、



1．暗黄褐色細砂　3．淡茶褐色細砂
2．暗茶褐色砂　4．茶褐色細砂

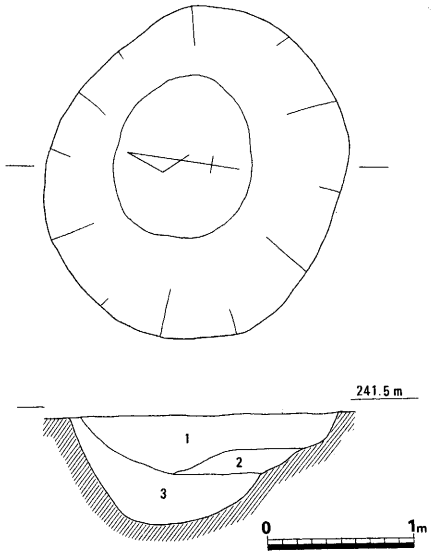
図106　土壙12

張り出した不規則な円形を呈し、長径189cm、短径148cmを測る。底部は平坦でなく、断面は椀状を呈する。埋土に炭等を含まず、遺物も出土していない。



1．暗黄褐色細砂　2．暗茶褐色砂

図108　土壙14



1．茶褐色弱粘質微砂
2．暗黄褐色微砂
3．明茶褐色微砂

図109　土壙15

程度の礫が、埋土と共に多く埋められていたが、遺物は出土しなかった。

土壙17

3区中央部よりやや南、竪穴住居22の南隣に位置する。隅丸長方形を呈し長径153cm、短径89cmを測る。北側上面が多少削平を受けているが、北側の方が緩やかな落ち込みを呈すると思われる。底面は平坦である。出土遺物は弥生土器を中心に10数点出土しており、そのうち土師器、須恵器の破片もわずかに出土

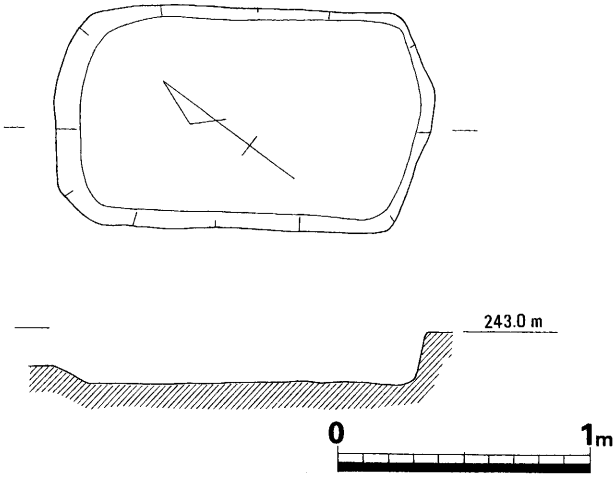


図111　土壙17

土壙15

土壙11の北0.8mに位置する。円形を呈し、長径240cm、短径206cmを測る。南側は不規則な落ち込みをもち、底面は丸底を呈する。遺物は出土していない。

土壙16

3区のほぼ中央部に位置する。楕円形を呈し、長径376cm、短径271cmを測る。掘り方は緩やかに傾斜し、底部に至る。底面は比較的平坦である。斜面には径10～50cmのピットが4ヵ所確認された。土壙に伴うものかどうかは不明である。また、土壙内には拳大～20cm

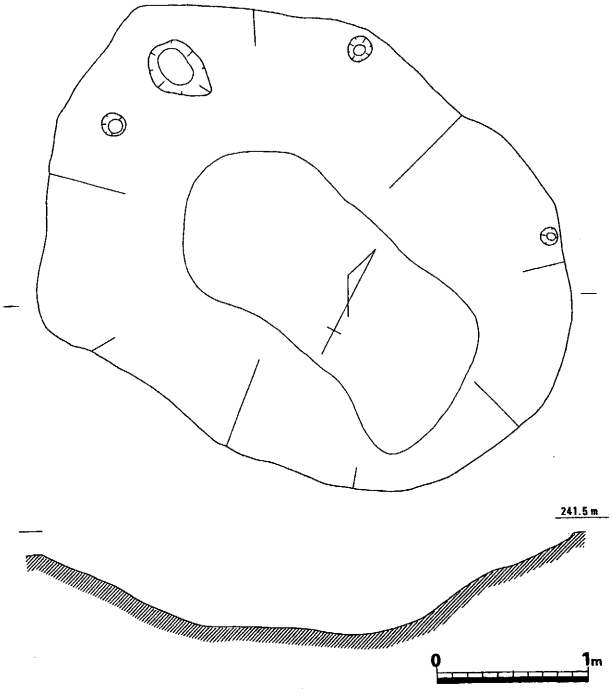


図110　土壙16

しているが、出土状況が明らかでなく、時期及び、遺構の性格の判断はし難い状況であった。

土壙18

3区南部、後述する土壙23の東2.1mに位置する。隅丸長方形を呈し、長径149cm、短径75cmを測る。掘り方はほぼ直角に近いぐらいに真っ直ぐに落ち込む。出土遺物は、須恵器の甕、土師器、瓦質土器等が出土したが、小片のためほとんどが図化することは不可能であっ

た。117は土師器皿である。底部には回転糸切り痕を残し、体部は内外面ともナデで仕上げる。C 9 は土錘である。中央付近にわずかな膨らみをもち、紡錘形を呈するものである。

土壙19

3区南端に位置する。不規則な楕円形を呈し、長径176cm、短径54cmを測る。東側よりやや浅い平坦面が段を形成し、底部に至る。底面は平坦である。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質土器がいずれも小片で出土した。

118 は土師器皿である。底部にはヘラ切り痕を残す。

土壙20

3区南部に位置する。楕円形を呈し、長径157cm、短径55cmを測る。底部は中央付近に段をもつ。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質

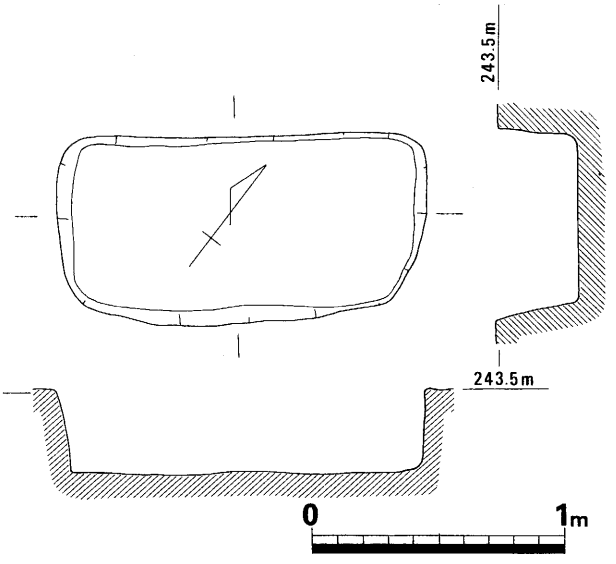


図112　土壙18

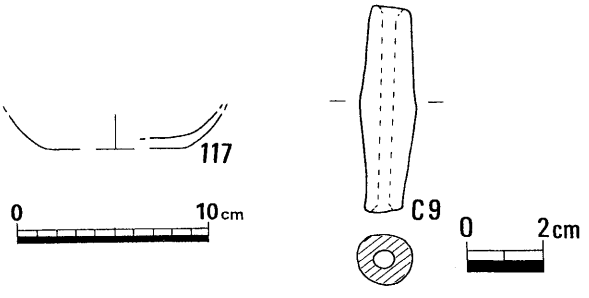


図113　土壙18出土遺物

土器がいずれも破片で出土した。119·120は瓦質土器の鍋である。口縁部の屈曲が顕著で受口状を呈し、端部が内側に肥厚する

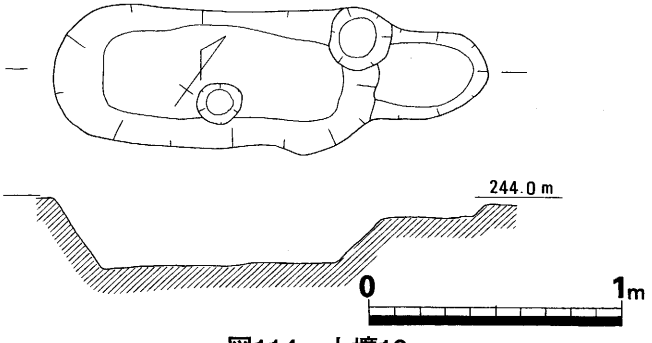


図114　土壙19

ものである。121は土師質の鍋と思われる。口縁部がほぼ水平に延びる形態をもつ。C10は土錘である。わずかに欠損するが、膨らみをもたず筒形を呈する。

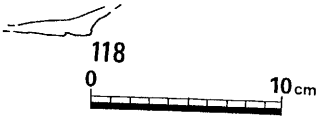


図115　土壙19出土遺物

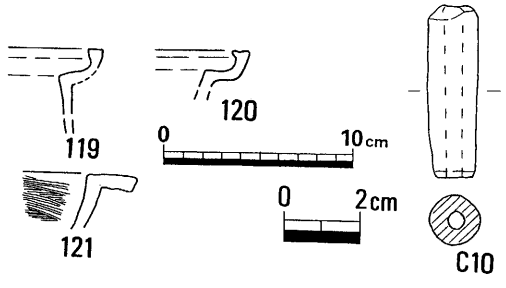


図117　土壙20出土遺物

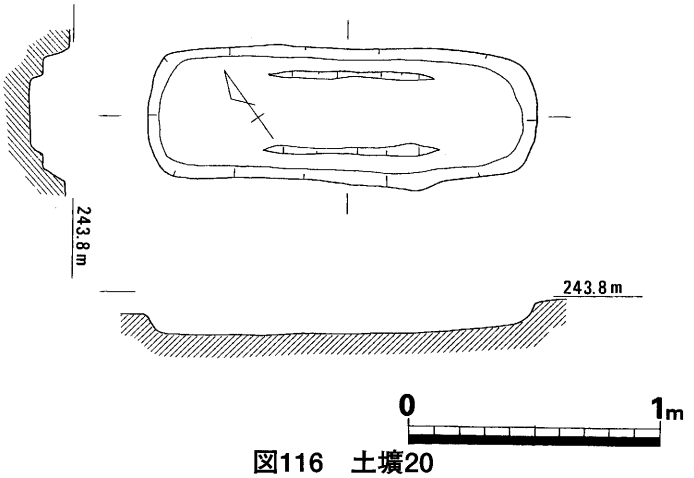


図116　土壙20

土壙21

土壙19の東１ｍに位置する。攪乱等の影響もあり、不整形を呈する。長径134㎝、短径89㎝を測る。堀り方は南側は段を有し、斜面を形成しながら底部に至るのに対し、北側は急な落ち込みを見せる。底面はやや凹凸をもつ。出土遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、青磁等がいずれも破片で出土した。**122**は勝間田焼の壺である。表面は淡茶褐色、裏面は暗灰色を呈する。独特の形態の口縁部をしており、比較的粗雑なつくりである。**123**は瓦質土器の鍋である。口縁部が受口状に屈曲し、端部がわずかに肥厚する。また、鉄滓も１点出土している。

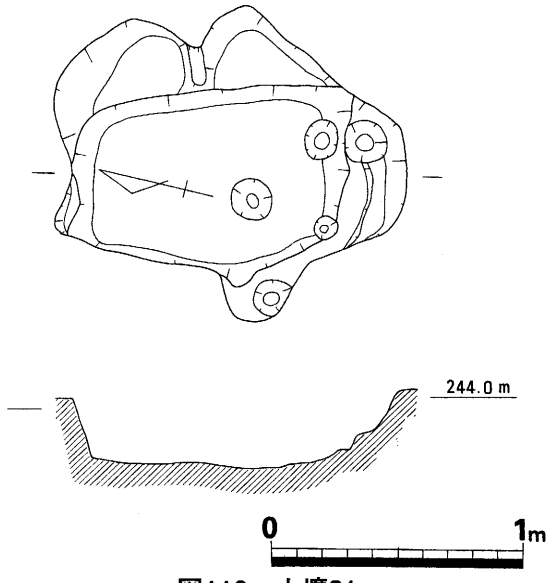


図118　土壙21

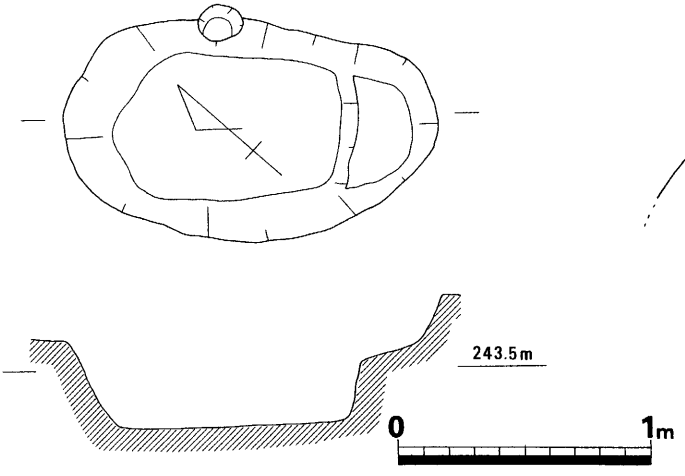


図119　土壙22

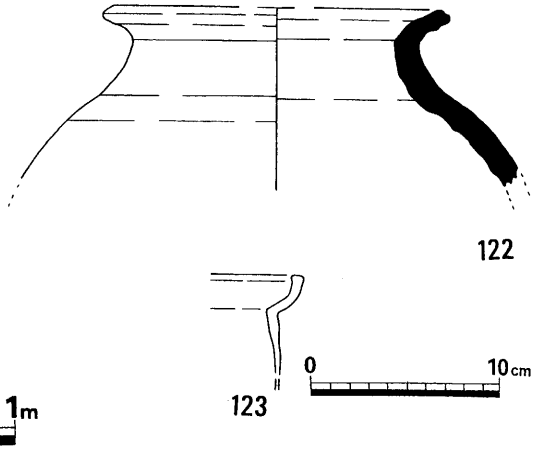


図120　土壙22出土遺物

土壙22

土壙18の北東約7.5ｍに位置する。楕円形を呈し、長径152㎝、短径86㎝を測る。堀り方は、南側の浅い平坦面が段を形成し、底部に向かって急な落ち込みをみせるが、北側は斜面を描きながら底部に至る。底面は平坦である。出土遺物は弥生土器、土師器、土師器皿がいずれも破片で出土している。

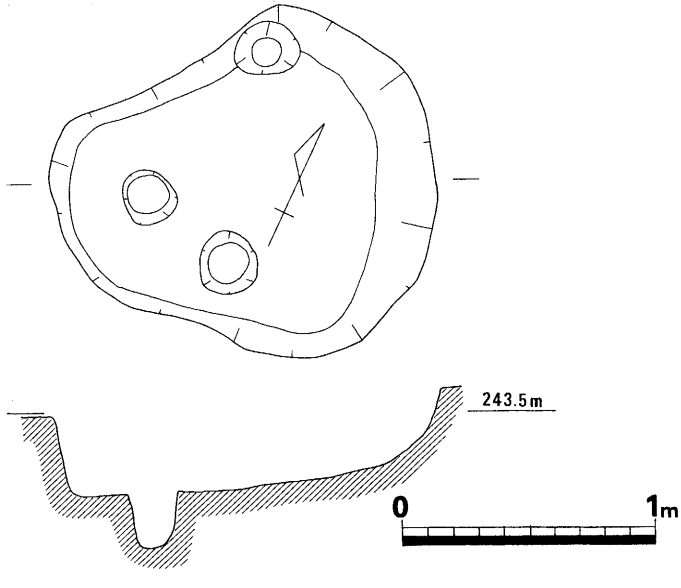


図121　土壙23

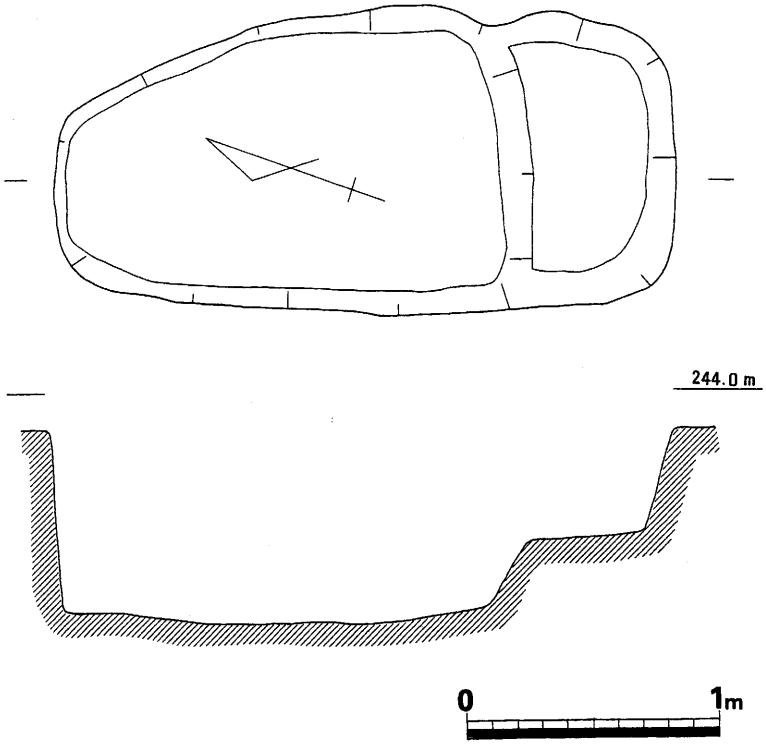


図122　土壙24

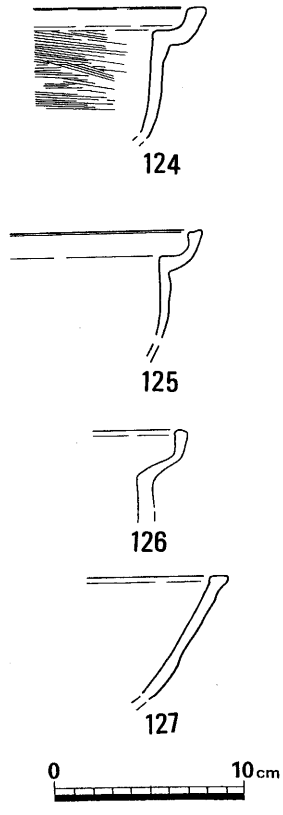


図123　土壙24出土遺物

土壙23

土壙18の西約２ｍに位置する。不整楕円形を呈し、長径157㎝、短径109㎝を測る。堀り方は東側は比較的緩やかに落ち込んでいくのに対し、西側は直線的な落ち込みをみせる。土壙内ののピットは土壙に伴うものではない。底面は比較的平坦である。遺物は出土していない。

土壙24

土壙19の北西約２ｍに位置する。楕円形を呈し、長径247㎝、短径116㎝を測る。南側に段を有し、北側は急な落ち込みをみせる。底面は平坦である。出土遺物は土師器皿、須恵器甕、備前焼擂鉢、瓦質土器鍋、釜等の破片が出土した。**124**・**125**は瓦質土器の鍋である。いずれも口縁部が受口状に屈曲し**124**は端部が外方にわずかに肥厚する。**125**はやや内湾気味に屈曲し、端部が外方にわずかに肥厚して断面三角形を呈する。**124**より薄手である。**126**は土師質の鍋である。受口状の口縁部を呈するが、前２者が胴部からほぼ真横に屈曲するのに対し、こちらは上方に屈曲する。端部は肥厚する。**127**は瓦質土器の鉢と思われる。体部が外方に直線的に開き、端部が外方に肥厚するものである。

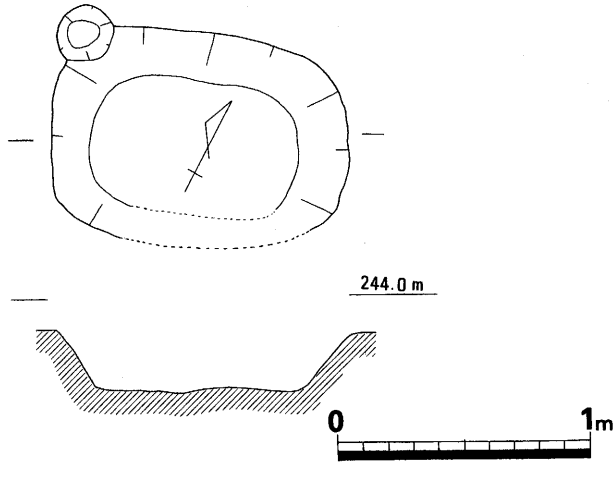
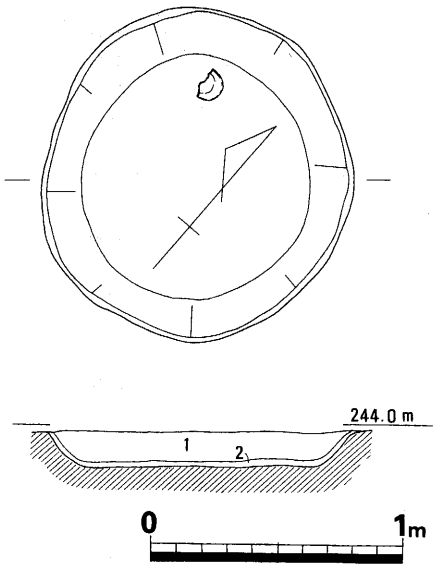


図124　土壙25



1．暗灰色粘質土（小礫含む）
2．淡緑色粘土

図125　土壙26

土壙25

土壙18の東南3.5mに位置する。一部削平を受けているが、楕円形を呈し、長径119cm、短径約85cmを測ると思われる。堀り方は斜めに落ち込み底部に至る。

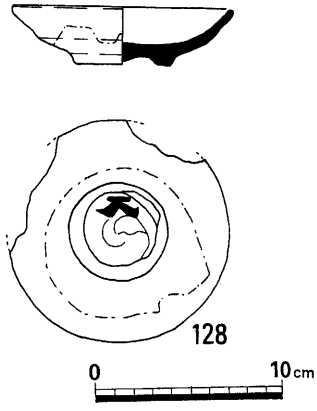


図126　土壙26出土遺物

底面は平坦であり、遺物は出土していない。

土壙26

4区西部、掘立柱建物4の西約17mに位置する。円形を呈し、長径134m、短径122mを測る。皿状の断面形を呈し、平坦な底面をもつ。土壙内全体に2cm程度の厚さで粘土を貼ってあり、おそらく貯水のための施設と考えられる。出土遺物は土壙内北側より肥前陶器の小皿**128**が出土した。高台部分周辺を除き灰釉が施されており、高台内にはおそらく「大」と書かれた墨書が確認された。16世紀初頭にその時期が求められるものである。遺物はその他にも土師器が小片で出土している。

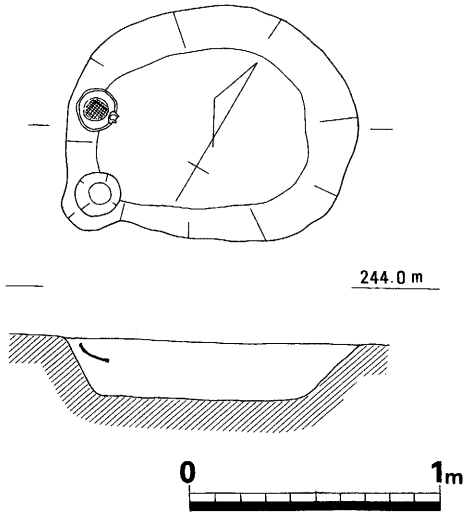


図127　土壙27

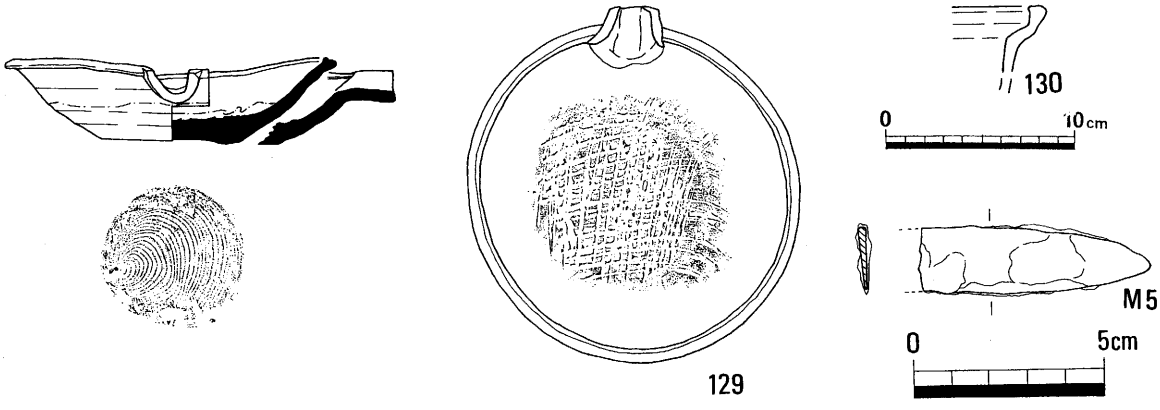
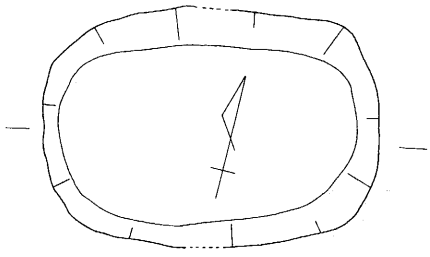


図128　土壙27出土遺物

土壙27

4区北西部に位置する。楕円形を呈し、長径117cm、短径95cmを測る。堀り方は斜めに落ち込み、底部は平坦である。西側の斜面において**129**が完形で出土した。**129**は古瀬戸の灰釉陶器の卸皿である。体部上方内外面と底面の一部に灰釉が施され、底部には回転糸切り痕を残し、15世紀前半あたりにその時期が求められる。**130**は瓦質土器の鍋である。口縁部は斜め上方に屈曲したのち、端部が外反気味に立ち上がる。端部は内側に肥厚する。**M 5**は刀子である。先端のみの出土である。遺物はこの他にも青磁、備前焼、土師器、土器類以外では鉄釘が出土している。



土壙28

4区掘立柱建物5の柱穴11と柱穴12の間に位置する。楕円形を呈し、長径136cm、短径96cmを測る。底面は平坦である。遺物は土師器皿、備前焼の破片が出土しているが、細片のため図示していない。土壙28は後述する土壙29～31と規模、埋土の状況において類似し、掘立柱建物5との関係も含め注目される。

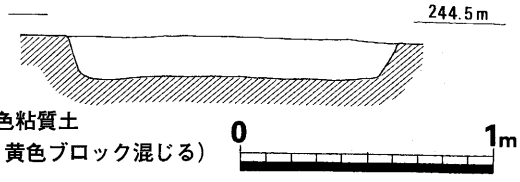


図129　土壙28

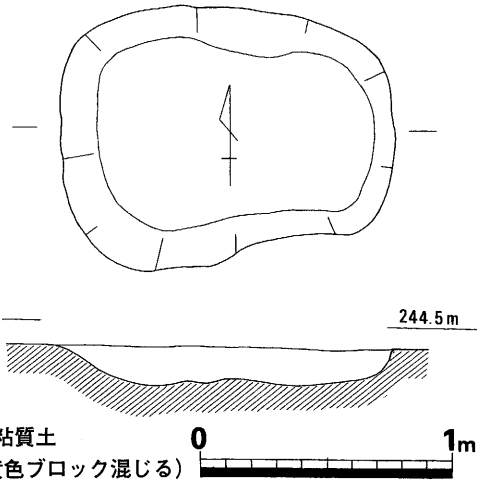


図130　土壙29

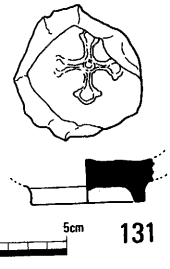


図131
土壙29出土遺物

土壙29

4区掘立柱建物5の柱穴10と柱穴11の間に位置する。楕円形を呈し、長径136cm、短径96cmを測り、断面皿状を呈する。遺物は**131**が1点出土している。印花文が施された青磁椀の底部である。

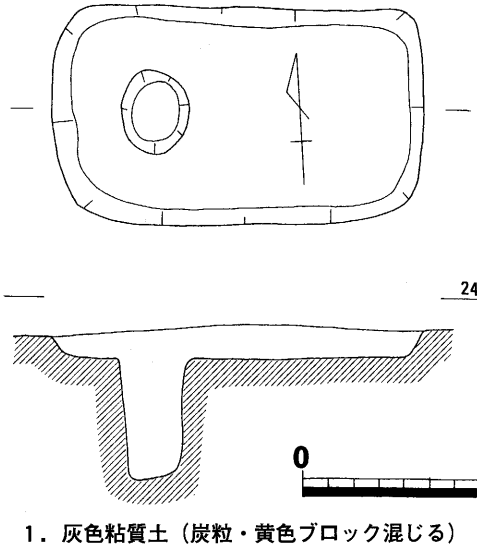


図132　土壙30

土壙30

土壙29の西約1.4 mに位置する。隅丸方形を呈し、長径149cm、短径8cmを測る。底面西よりに柱

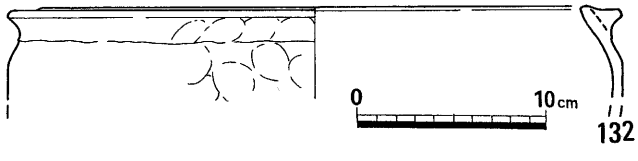
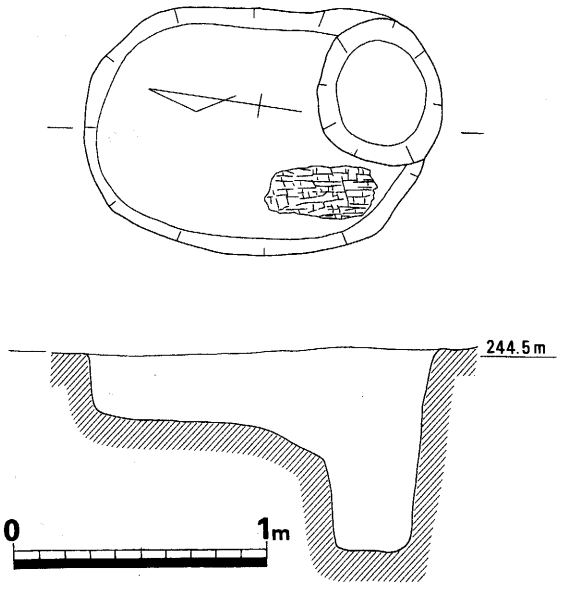


図133　土壙30出土遺物



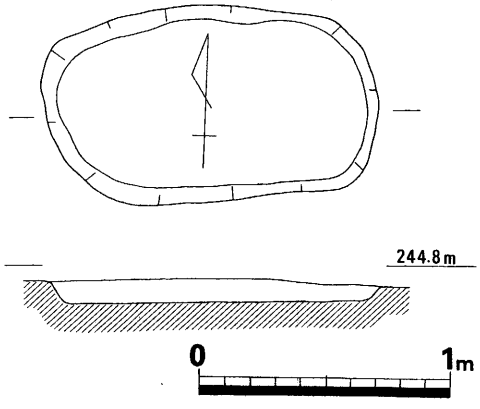
1．灰色粘質土（炭粒・黄色ブロック混じる）

図134　土壙31

呈し、長径146cm、短径99cmを測る。堀り方は比較的急な落ち込みを呈し、南側に掘立柱建物５の柱穴８が存在する。柱穴の脇には42×20cmの木炭塊が出土した。遺物は出土していないので時期は明らかではないが、木炭塊が建物に伴うものであれば、建物の時期とほぼ同時期であろう。

土壙32

掘立柱建物４の東3.2mに位置する。不整隅丸方形を呈し、長径167cm、短径85cm



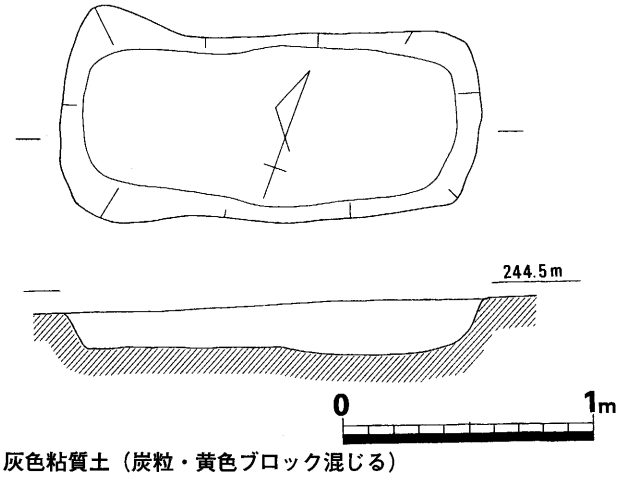
1．灰色粘質土（炭粒・黄色ブロック混じる）

図136　土壙33

穴が検出されているが、土壙との関連は明らかではない。しかし、同様の埋土であることから同時期に埋没したと思われる。遺物は柱穴より瓦質土器の釜132が１点出土した。体部から口縁部にかけて内傾して立ち上がり、口縁部外面には断面が三角形を呈する鍔がめぐる。内外面ともナデで仕上げられ、外面には煤が付着する。

土壙31

掘立柱建物５の柱穴８の堀り方とも考えられるが、他の柱穴に堀り方もつものが少なく、土壙28～30と規模等において類似する点もあり、土壙としても捉えておきたい。楕円形を



1．灰色粘質土（炭粒・黄色ブロック混じる）

図135　土壙32

を測る。断面は皿状を呈し、底部は東側が若干低くなっている。遺物は出土していないが、埋土より中世のものと思われる。

土壙33

土壙32の南1.3mに位置する。楕円形を呈し、長径134cm、短径80を測る。断面は浅い皿状を呈し、遺物は出土していないが、埋土より土壙32とほぼ同時期のものと思われる。

土壙34

４区北東部に位置する。不整円形を呈し、長径584cm、短径516cmを測る大型の土壙である。堀り方は比較的緩

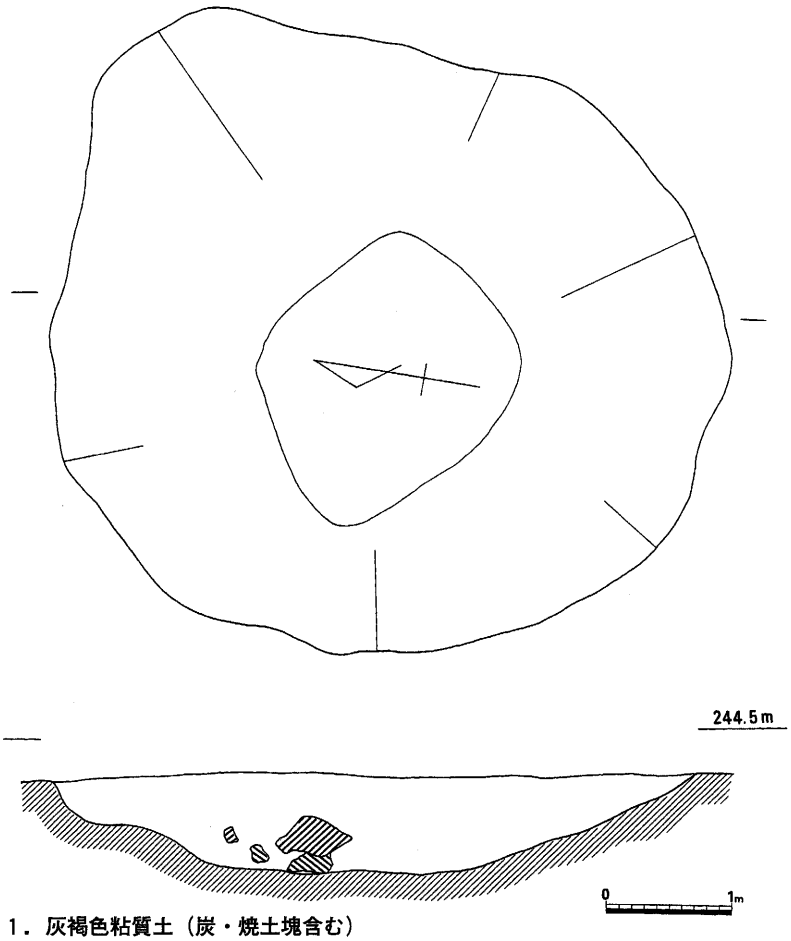


図137　土壙34

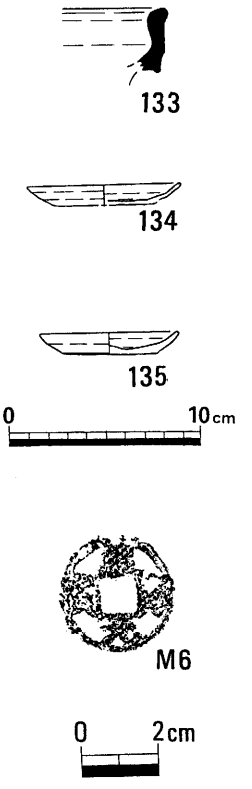


図138　土壙34出土遺物

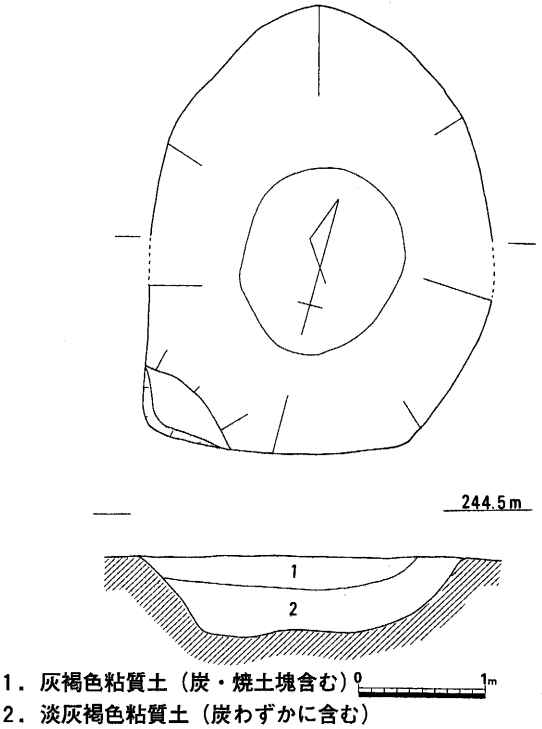


図139　土壙35

やかに落込み、断面椀型を呈する。底部には拳大～人頭大の礫がまとまってみられた。遺物は備前焼、土師器の土器類の他、銭貨、炉壁片が出土した。**133**は備前焼の擂鉢である。肥厚気味に垂直に立ち上がり、端部は外反する。**134**･**135**は土師器の小皿である。**134**は比較的薄手を呈する。**M 6** は銅銭である。風化が激しく判読は困難であったが「□□元寶」と読める。

土壙35

土壙34の北１ｍに位置する。楕円形を呈し、長径362cm、短径278cmを測る。比較的大型の土壙である。堀り方は斜めに落ち込み、断面形はややいびつな椀型を呈する。遺物は土師器、須恵器、瓦質土器がそれぞれ小片で出土した。**136**は瓦質土器の鍋である。口縁部は上方に屈曲し、端部付近で外反する。端部は内側に肥厚する。

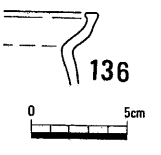


図140　土壙35出土遺物

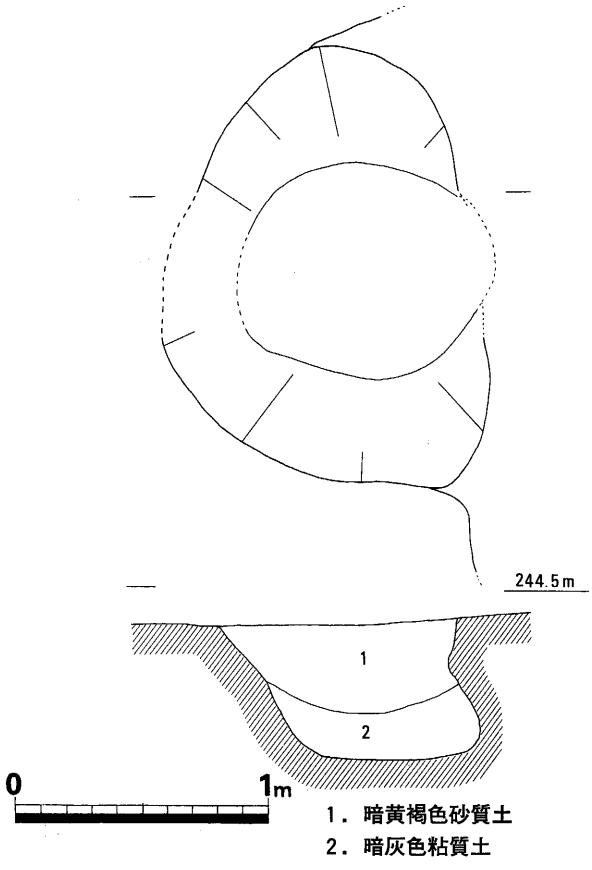


図141　土壙36

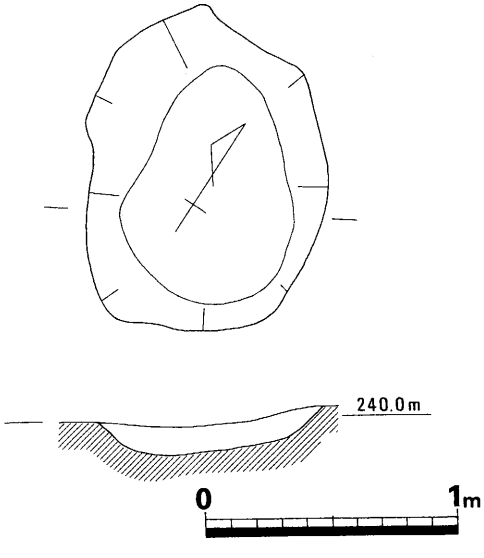


図143　土壙37

蔵穴と想定できる。遺物は備前焼片137･138が出土した。137は玉縁状を呈する甕または壺の口縁部である。138は擂鉢の口縁部である。M７は鉄釘である。断面方形を呈する。

土壙36

炉３の西側に隣接して位置する。不整楕円形を呈し、長径178cm、短径102cmを測り、底部がやや広がる袋状を呈する。埋土の状況及び位置関係から炉３の付属施設と考えられ、炉３を何らかの作業場と想定するならば、それに伴う貯

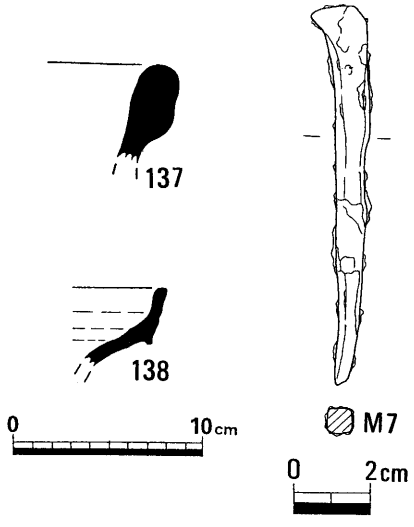


図142　土壙36出土遺物

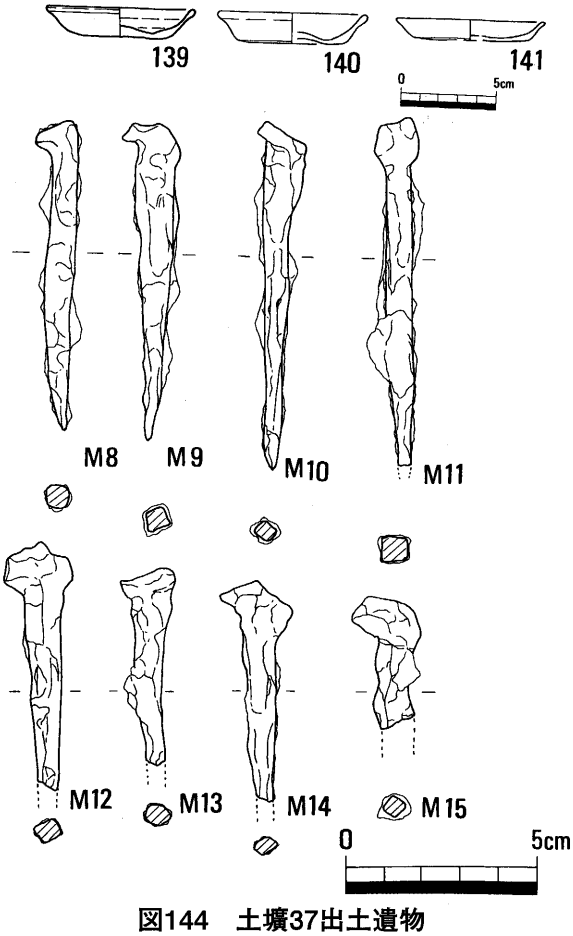


図144　土壙37出土遺物

土壙37

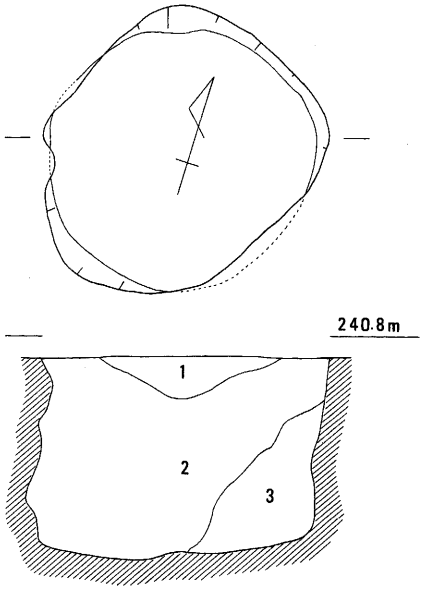
５区のほぼ中央部に位置する。いびつな楕円形を呈し、長径130cm、短径96cmを測り、底部は平坦で断面皿状を呈する。埋土には炭や焼土を多く含むが被熱面は認められず、土壙内において焼成を行った痕跡はみられなかった。遺物は土器類では土師器、瓦質土器、勝間田焼がそれぞれ破片でみつかった。**139**～**141**は土師器皿である。**139**･**140**は手づくねで、見込みに膨らみをもち、口縁端部は肥厚する。**140**は、二次焼成を受けた痕跡がある。**141**は端部は肥厚せず丸くおさめる。底部は回転糸切り痕を残す。土器類以外では、釘が多く見つかっている。いずれも断面が方形を呈し、頭部を折り曲げて造る。木質などは遺存しなかった。

土壙38

５区東隅に位置し、住居址29に隣接する。不整円形を呈し、長径116cm、短径98cmを測る。袋状を呈し、壁はいびつな立ち上がりをみせる。出土遺物は弥生土器がわずかに出土した。小片のため図化できなかったものの、住居址29出土土器と同時期と思われるもので、遺構との位置関係からも、住居址に伴う貯蔵穴であると考えられる。

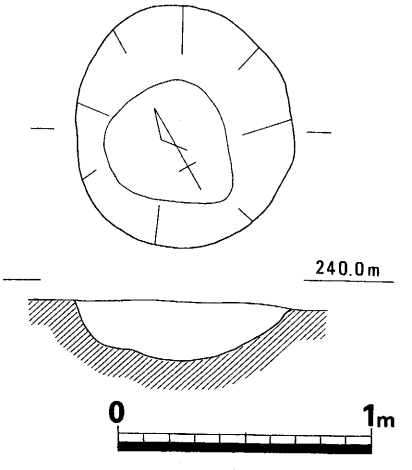
土壙39

土壙38の北西約４ｍに位置する。円形を呈し長径98cm、短径89cmを測る。断面形は椀型を呈し、底部は丸底である。遺物は出土しなかった。



1．暗褐色粘性砂質土（炭含む）
2．茶褐色砂質土
3．暗褐色粘性砂質土（黄色ブロック含む）

図145　土壙38



1．暗褐色土

図146　土壙39

土壙墓

前項で土壙として扱ったものの中にも墓としての役割を果たしたものが存在すると思われるが、ここでは明らかに墓と考えられるもののみを取り上げ、以下に記す。

土壙墓1

3区北部の先端付近に位置する。表土掘削後、河原石が墓標の如く不自然に立っており上面清掃時、周辺から骨片を確認したため、土壙墓と判断できた。長径134cm、短径115cmを測り、不整円形を呈する。深さは検出面より54cmを測る。掘り方は急な角度で落ち込み、底面は平坦である。埋土には炭を多く含み、人骨も細片となって出土した。

出土遺物**M16**は鉄製の刀子である。柄部分は欠損しているが、残存長18cmを測る。**M17**は鉄鎌である。**M18・19**は鉄釘である。断面が方形を呈し、先端を折り曲げたものである。鉄釘はこの他にも数点出土しているが、いずれも小片で出土した。銅銭は合計4枚出土した。いずれも風化が激しく、うち**M20**「聖宋元寶」のみがかろうじて判別可能であった。土器類は土師器、須恵器の細片がごくわずかに出土したが、埋葬の際に混入したものであろう。遺物の出土状態に規則性はみられなかった。

人骨はいずれも細片となっており出土量も多くはなく、土壙内に被熱の痕跡もないことから別の場所で火葬したものを土壙内に埋葬したものと思われる。鉄釘は棺釘に用いられたものであろうか。

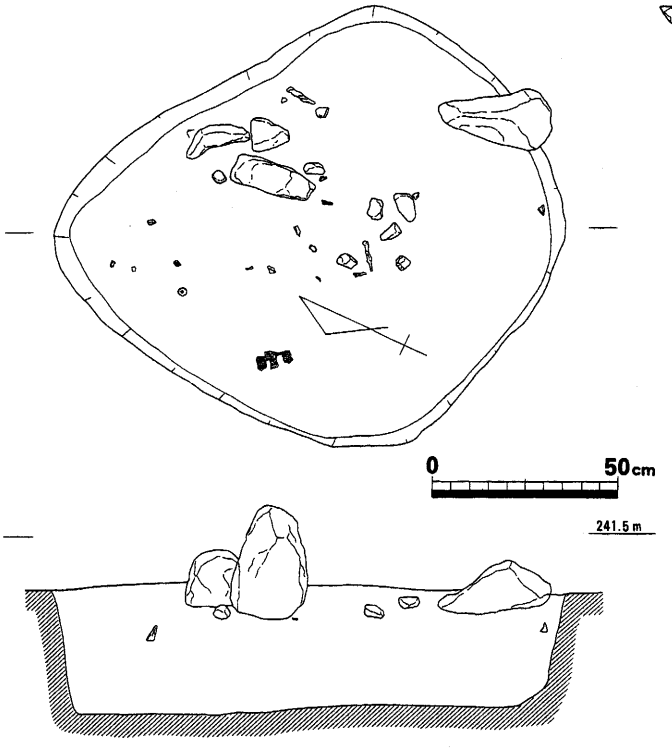


図147　土壙墓1

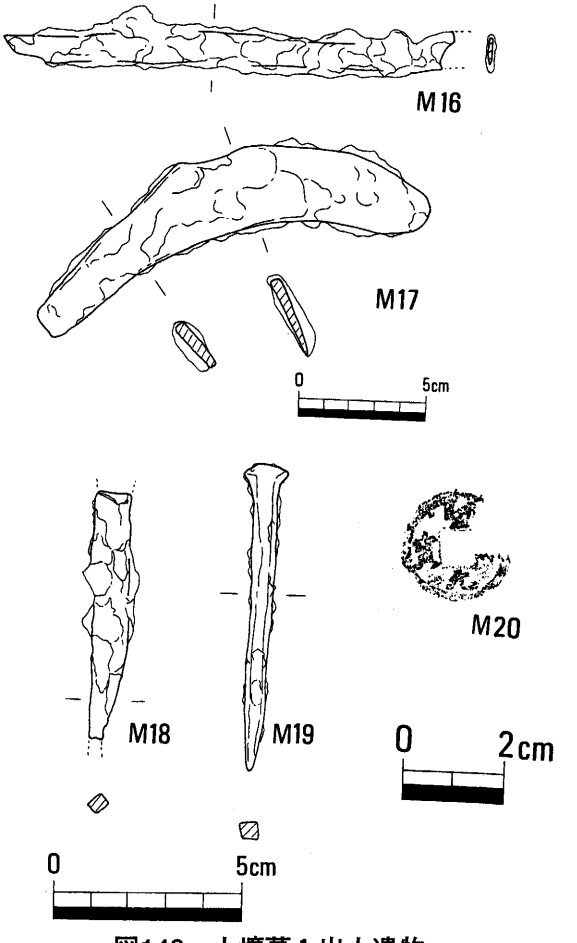


図148　土壙墓1出土遺物

土壙墓２

土壙墓１より南約３ｍに位置する。長径175cm、短径148cmを測り、不整円形を呈する。深さは検出面より約25cmを測り、土壙内やや南寄りには河原石により、長径120cm、短径77cmの方形の石組みが造られており、石組みの上からは多量の木炭と、人骨、銅銭が出土した。石組みの上面には約55×70cmの方形の黒色に焦げた跡がみられ、被熱の痕跡を残すことから、おそらくは55×70cm程度の棺に入れた亡骸を石組み上で火葬し、埋葬したと考えられるが棺にしては非常に小さく小児用とも考えられるが、出土人骨は小片となって出土しているものの成人骨と思われるものである。また、人骨は一体分揃った状態ではなく、火葬、埋葬の方法に不明な点も多い。

遺物は銅銭のみで、土壙墓１で多く見られた鉄釘は出土しなかった。銅銭は計11枚出土し、うち10枚**M21～30**が判別できた。明銭の「永樂通寶」が２枚出土しているが、残りは北宋銭と思われる。土器類も土師器、須恵器の細片が埋土よりごくわずかだが出土しているが埋葬に伴う遺物とは考えられない。

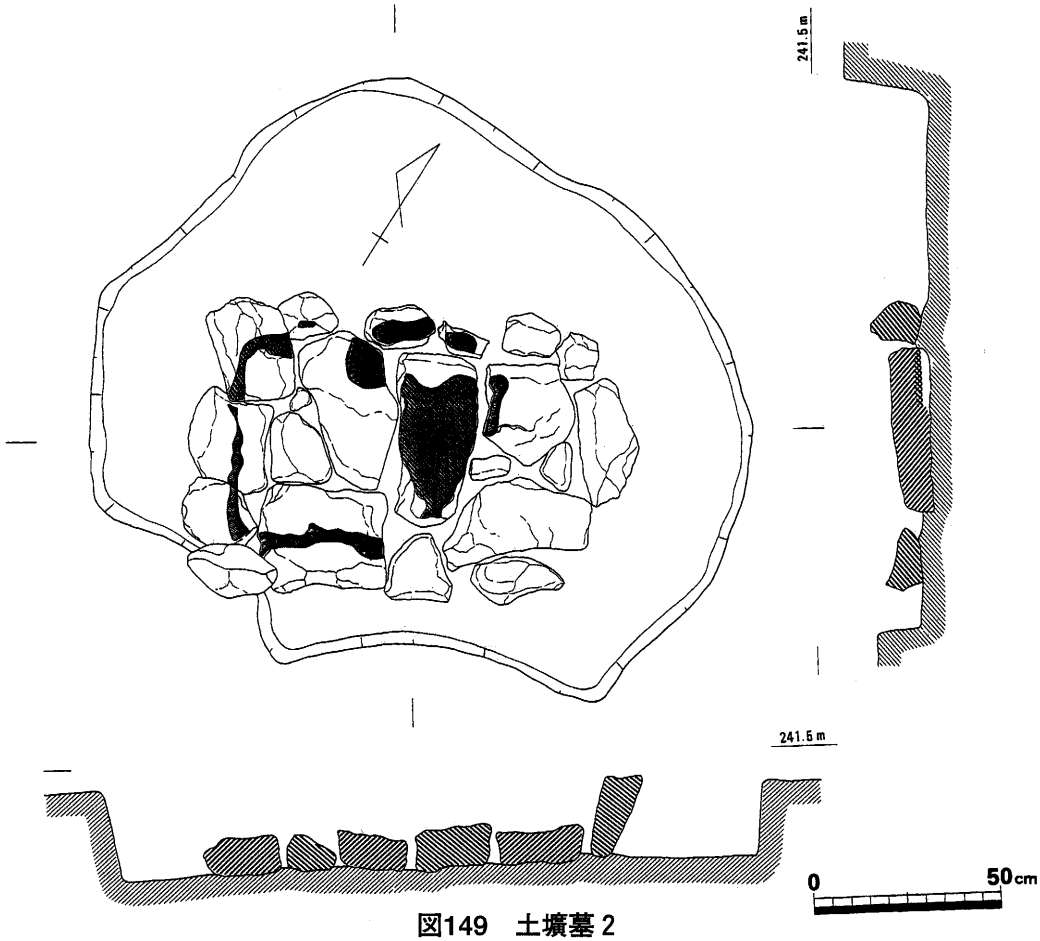


図149　土壙墓２

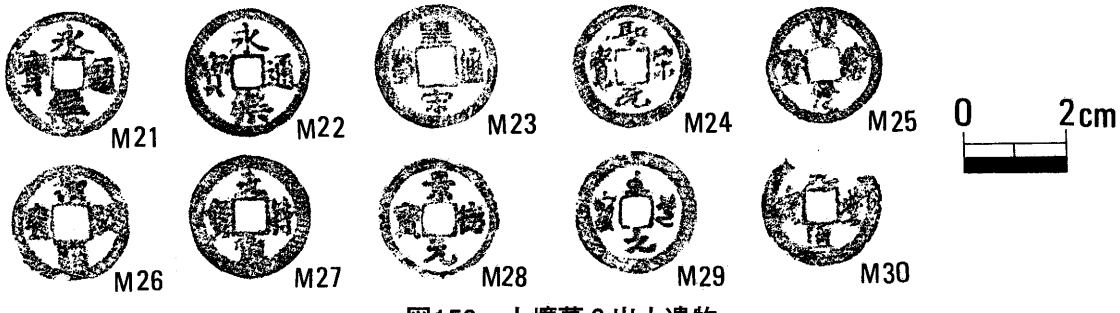


図150　土壙墓２出土遺物

土壙墓３

土壙墓１の東隣に位置する。長径117cm、短径85cmの不整円形を呈し、深さは約33cmを測る。底部は丸底を呈する。埋土には炭を含み、人骨も小片で出土した。

土壙内には被熱面は見られず、土壙墓１と同様他で火葬した人骨をここに埋葬したものと思われる。

出土遺物は刀片が数点出土した。釘、銅銭などの遺物は出土していない。

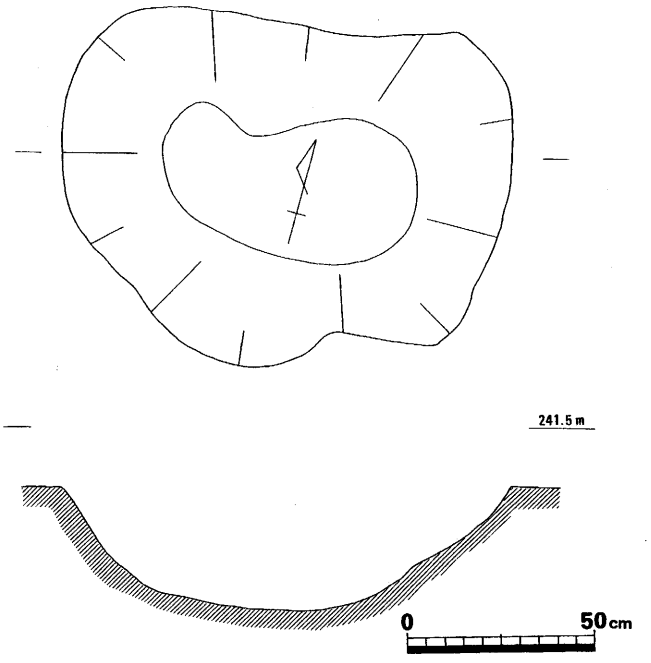


図151　土壙墓３

土壙墓４

土壙墓１より西約５ｍに位置する。調査区の境に接しているが、長径200cm、短径約180cmの不整円形を呈すると思われる。深さは検出面より約25cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。土壙上には拳大～20cm程度の河原石がややまとまった感じで見つかっており、墓標の役割を果たしたと考えられる。埋土には炭、人骨が含まれるが、量はあまり多くない。土壙内に被熱面はみられなかった。

出土遺物は刀子、鉄釘の破片が数点出土している。

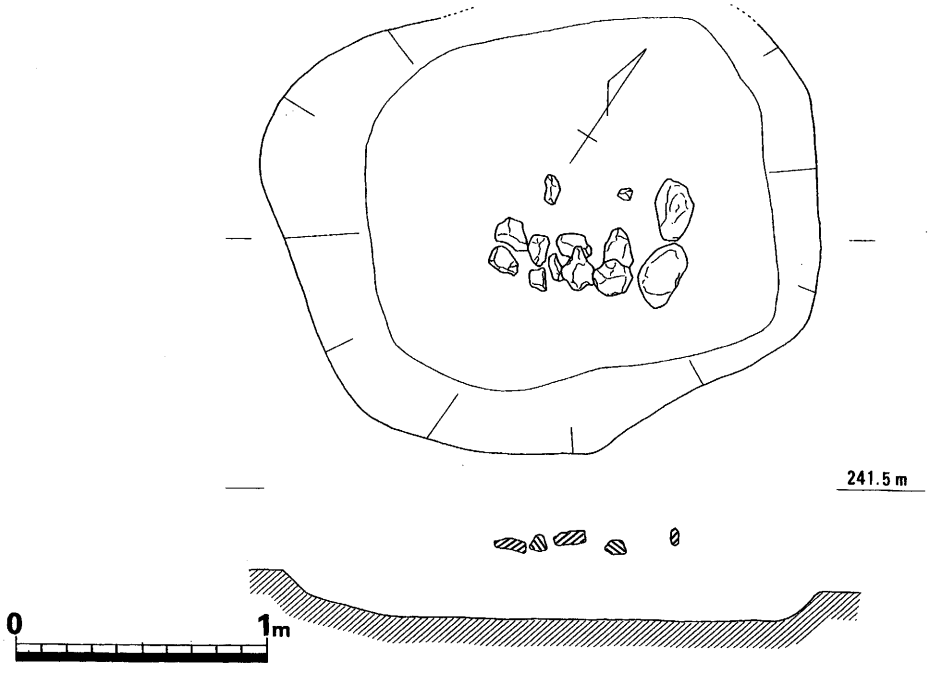


図152　土壙墓４

土器溜り

土器溜り１

１区南部において検出された。重機掘削時に見つかったもので、上面を削平された可能性も考えられ、したがって土壙状を呈していたものかどうか、あるいはどういった状況で廃棄されたものであったのかなど詳細を判断をすることができなかった。しかし、1.2 ～３ｍの範囲において遺物の散布が認められた。出土遺物は弥生土器で、壺、甕、高坏、紡錘車が出土している。完形品は無く、ほとんどが破片となって出土した。

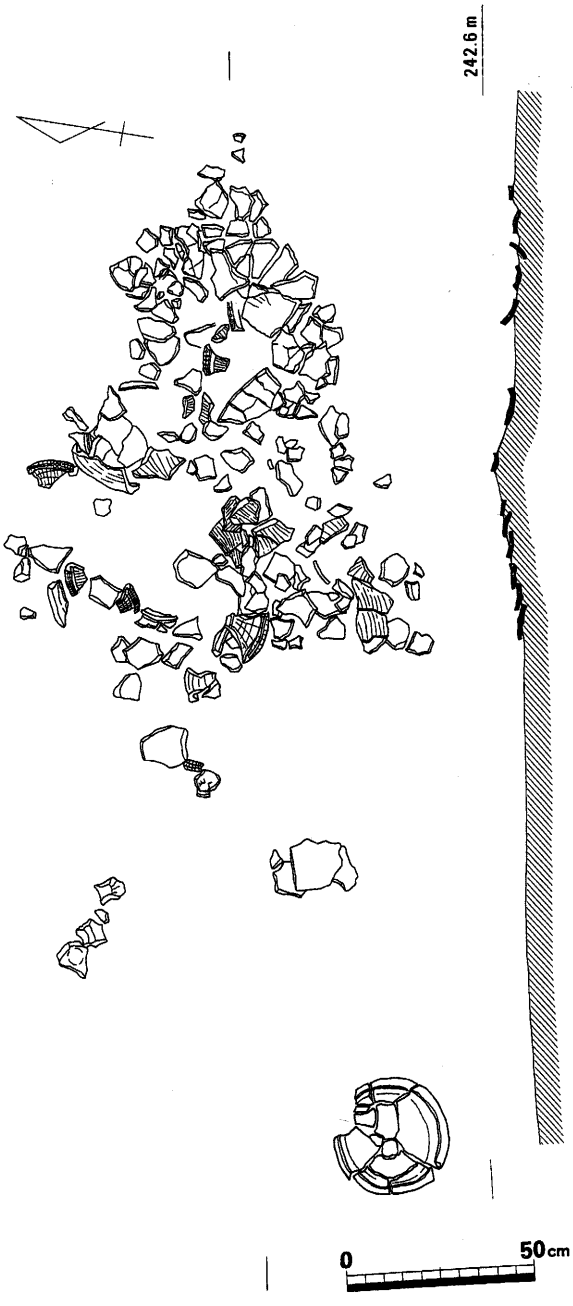


図153　土器溜り

142 ～**144**は壺である。**142**は本遺構中全体が明らかのなった唯一のものである。口縁部は頸部より斜めに外反し、端部は下方に垂れ下がるように強く拡張する。口縁部上面には刻目を施した上に円形浮文を加え、端面には刻目を施した上に４条の凹線をめぐらせ、その上に２×２の４個１単位の円形浮文を７ヵ所に配する。頸部には断面三角形の貼付突帯が付く。外面調整は胴部上半から口縁部は縦方向のハケメ、胴部下半はハケメを施した後、上方は横方向のヘラミガキ、下方には縦方向のヘラミガキが施されている。内面は、口縁部上方を横方向のハケメ、胴部を縦方向のハケメで仕上げる。**143**は口縁端部である。上面には波状文が施され、端面には５条の凹線をめぐらせ、その上に３×４の12個１単位とする円形浮文を配しているが、破片のため間隔は不明である。**144**は**142**よりも若干口縁部の外反が緩やかで、端面には２×２の４個１単位の円形浮文を６ヵ所に配する。頸部には２条の貼付突帯が付く。内外面の調整は**142**と同様の手法である。なお、**144**の底部には籾痕が残っていた。

145～**147**は高杯である。いずれも杯部は椀形を呈し、拡張する口縁部をもつが、**145**はやや上方、**146**はやや下方、**147**は多少歪みがあるものの、ほぼ水平に拡張する。**145**は口縁端部に刻目を施す。**145**･**146**は口縁拡張部に穿孔がみられ、**146**には計３ヵ所確認された。いずれも焼成前に穿孔されたものである。器面調整は内外面共にヘラミガキで、**147**に関してはヘラミガキの

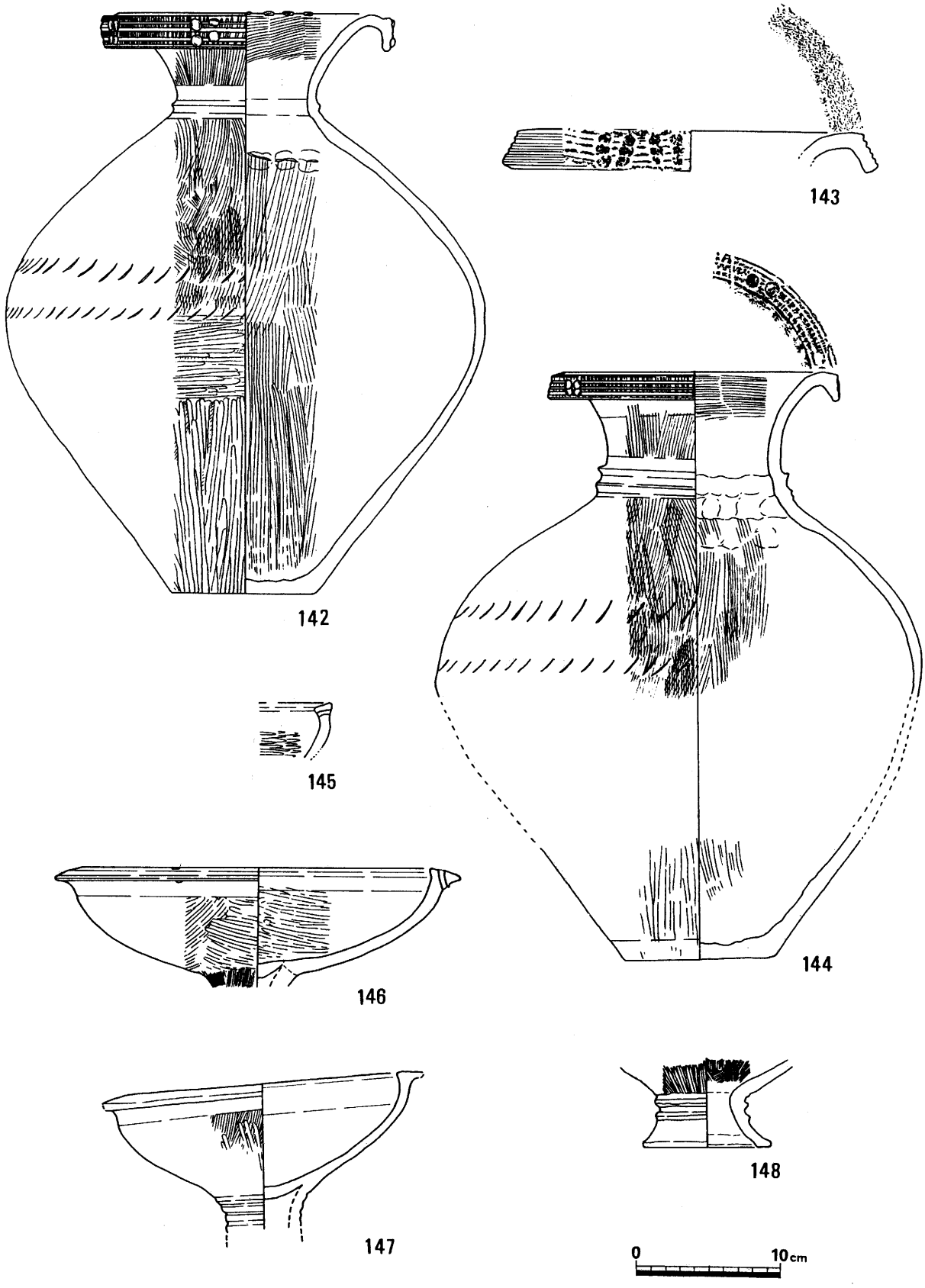


図154　土器溜り出土遺物

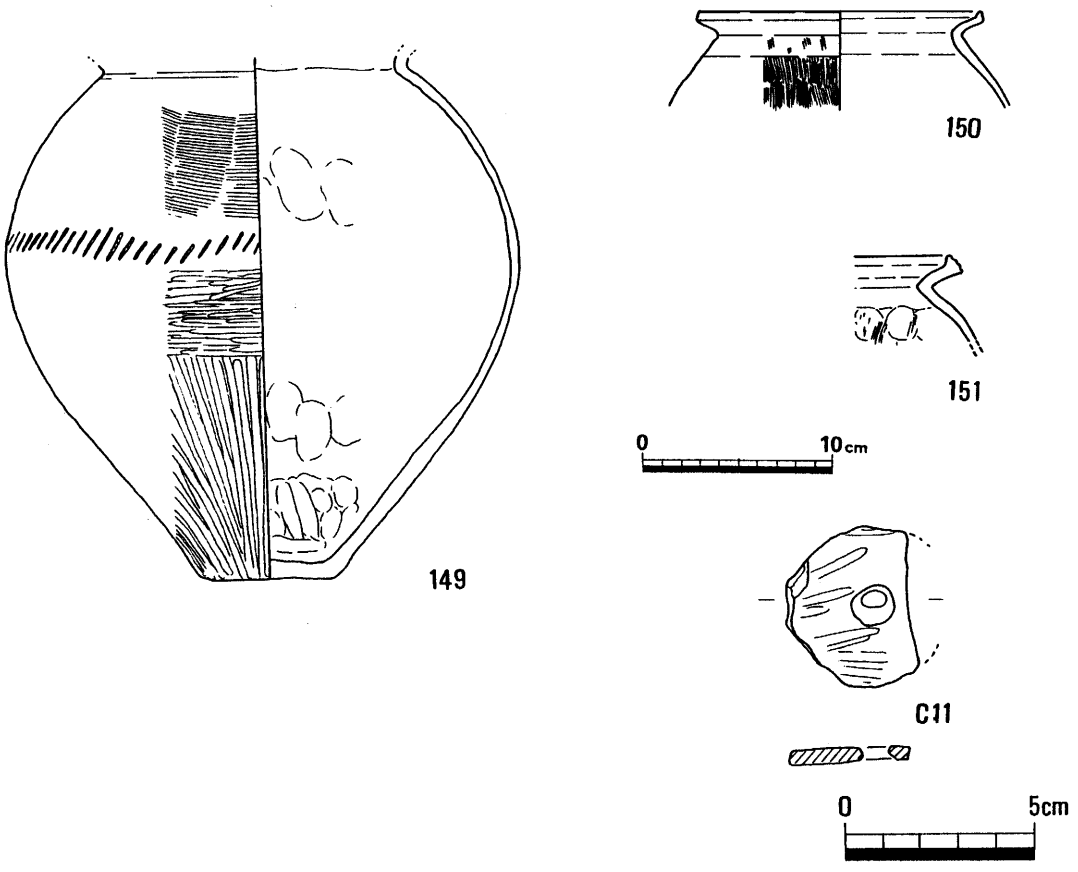


図155　土器溜り出土遺物

前にハケメが確認できた。底部は**146**·**147**共に円盤充填である。**148**は脚台で、２条の貼付突帯をもつ。外面はナデとヘラミガキ、内面はナデとハケメで仕上げる。内面には、円盤充填の剥離痕が確認された。

149～**151**は甕である。**149**の調整は、外面は胴部上半はハケメ、下半上部は横方のヘラミガキ、下部は縦方向のヘラミガキを施す。内面は底部付近にユビオサエによる指頭圧痕を残すほかは、ナデで仕上げる。**150**·**151**は頸部から「く」の字状に鋭く外反する口縁部をもつ。いずれも端部がわずかに上方に拡張する。端面は**150**には１条**151**には３条の凹線がめぐる。外面調整はいずれもハケメ、内面は**150**はナデ、**151**は口縁部はナデ、胴部はユビオサエの後ハケメである。

C11は紡錘車である。土器片を転用したものである。

古　墳

本遺跡からは１基の古墳が見つかっている。古墳の位置する周辺は吉井川に程近く、当初は遺跡は存在しないと考え、確認調査時もトレンチを設定していなかった地点であり、古墳も工事中に偶然発見され、急遽調査したものである。後世の攪乱等により遺存状況は良好でなく、石室の一部が残存するのみであった。以下、概要について述べる。

外形

５区のほぼ中央に位置する。墳丘の盛土は削平等の影響により一切残存しておらず、石室の最下段の基底石のみが水田の下層に現位置を留めており、周堀についても基盤層に堀込みを確認することができず、周堀はもともと存在しなかった可能性が高い。従って墳形については明らかではないが、石室の規模より、外形の規模は径10m前後であったと思われる。

埋葬施設

前述の通り削平が著しく、また、工事中に発見されたため重機により一部破壊されていたが、横穴式石室であることは確認できた。残存するのは１段のみであり、その一部は現位置から多少動いていると思われる。残存高は最高部が床面より約60㎝残存長は約３ｍを測る。石室主軸はＮ－63°－Ｅであり、石室東側に抜き取り痕が認められたことから東側に奥壁をもち、ほぼ西に開口すると思われる。羨道についても明確ではないが、石室南側に抜き取り痕がみられることから後世に破壊されたものと思われ、羨道部分には天井石に用いられたと思われる110 ×90㎝を測る大型の石材がみられた。石室に用いられた石材の材質については詳細に観察することができなかったが、河原石は用いられておらず、おそらく近辺の山から運んできたものであろう。

石室内部は、砂混じりの黒ボクが数㎝堆積しており、上面には人骨が散乱した状態で発見された。調査を進めていくに従い、石室床面より棺台と思われる河原石が４個配置されていることが確認でき、埋葬には木棺が用いられたと思われるが棺釘等は見つからなかった。人骨については棺台よりも３～６㎝程度上層で確認されており、出土位置から追葬された可能性が高い。また、鑑定の結果、出土人骨は火葬骨との見解を得ているが、人骨の配置に規則性がなく、埋葬の際には棺等に納めたのか、そのまま石室内に散布したものか埋葬の方法については明らかではない。

出土遺物

遺物は副葬品と思われるものが石室内及びその周辺から出土した。土器類のみの出土であり、石室内の埋土をふるいにかけ、精査してみたが、玉類・棺釘その他の遺物は出土しなかった。**152**は土師器の杯である。石室西部の北側より斜めに立てかけたような状態で出土した。検出時に破損してしまったものの、ほぼ完形で出土しており、追葬の際に片付けられたものと考えられる。口縁部に約1/2にわたってくびれをもち、内面には焼成前にヘラ状工具により施された×印の記号がみられる。調整は内外面共にナデが施され、外面底部には不定方向のケズリが施される。**152**･**153**は須恵器の高杯である。**153**はやや小型で、石室内より細片となって散乱して出土した。椀型の杯部を呈し、口縁部はやや外反気味にたちあがる。脚部にはヘラ状工具で刺突した透かしを上下２段×２ヵ所もち、いずれも下段のみ内側まで貫通する。焼成不良のため全体的に摩滅が激しく、細部の調整については明らかではないが、杯部はナデで仕上げられる。**154**は本来は羨道部であったと思われる石室南側の上層より出土しており、攪乱を受けた際に移動したものと思われる。歪みが激しいが、杯蓋を逆にしたよう

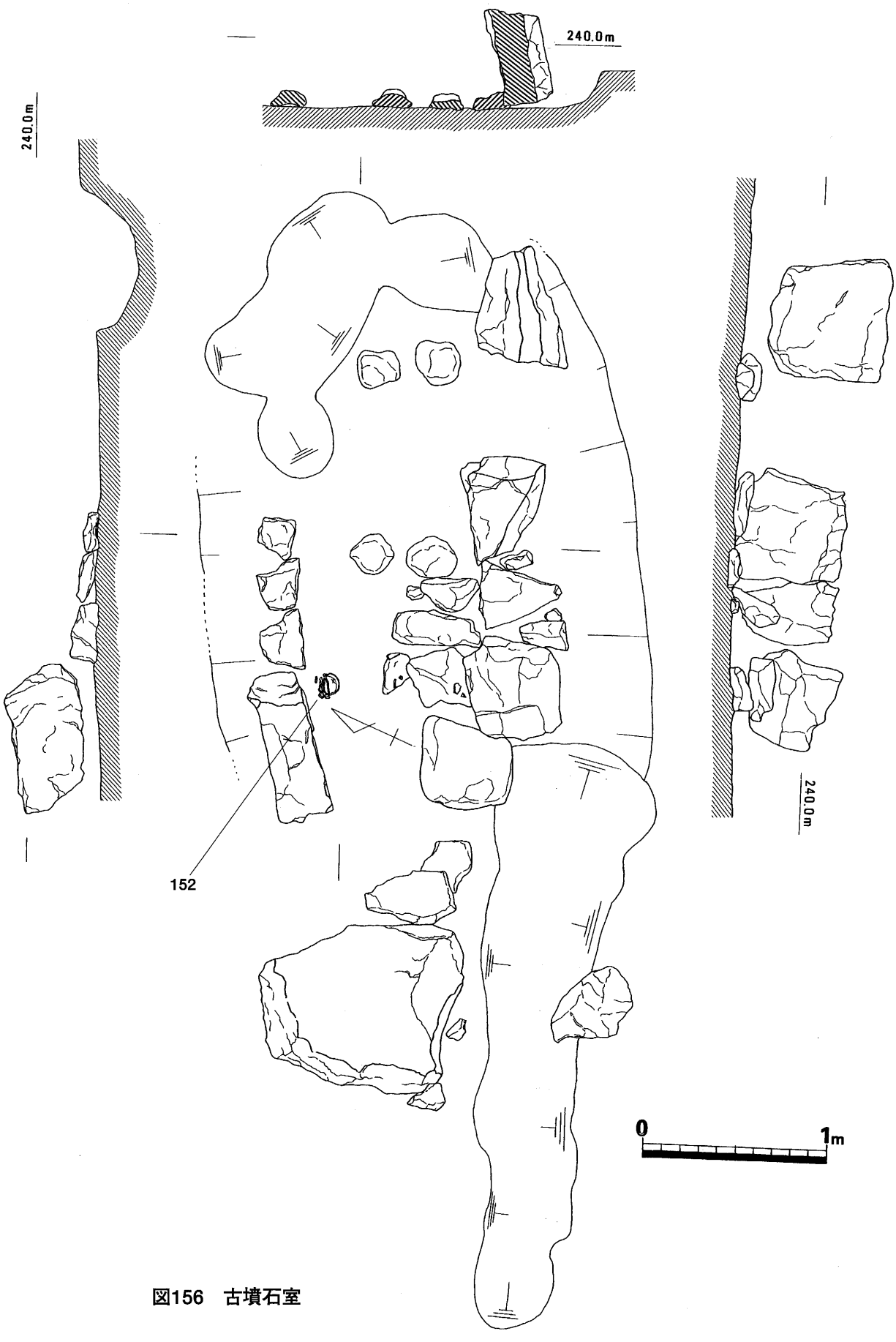


図156　古墳石室

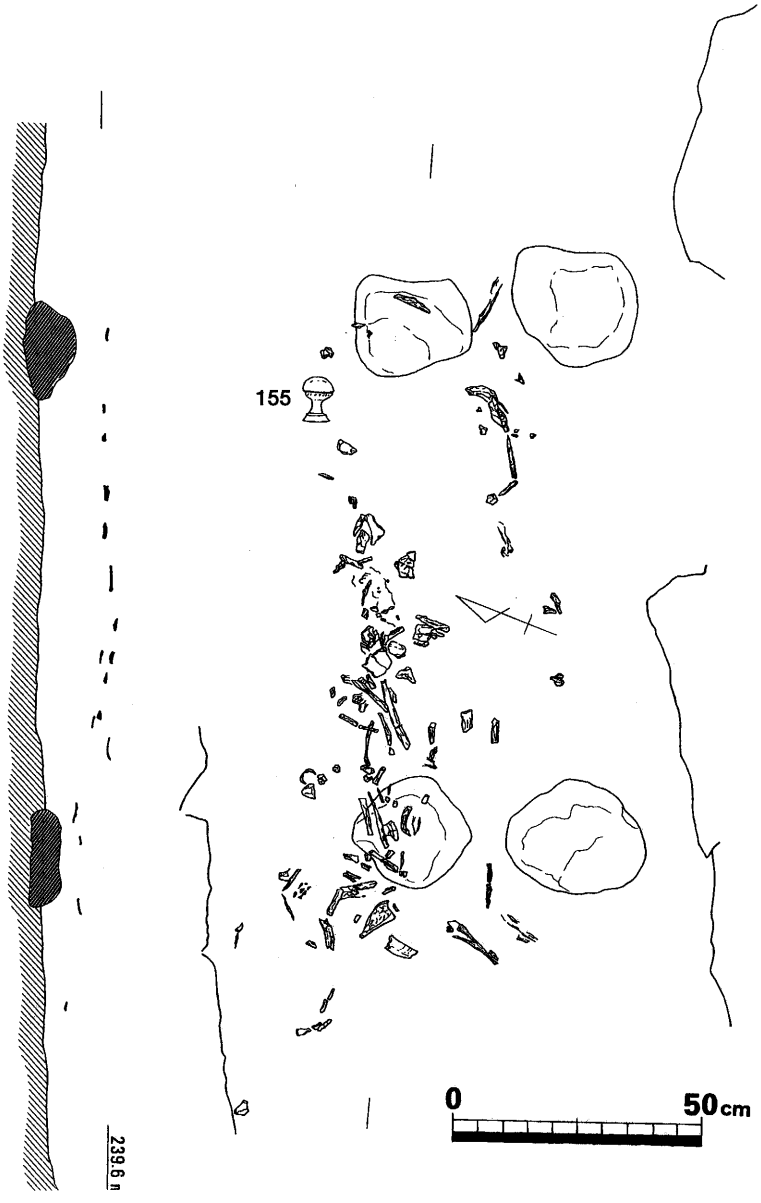


図157　人骨・遺物出土状況

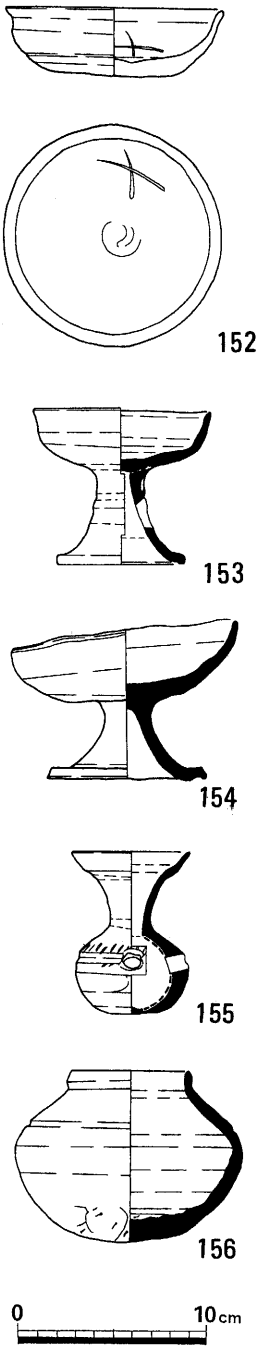


図158　古墳出土遺物

な椀状の杯部をもつ短脚の高杯である。**155**は小型の壺である。石室内北東の棺台石付近の床面より横になった状態で出土した。人骨が出土したレベルより低い位置からの出土で、人骨の埋葬される以前に副葬された可能性が高い。球形の体部をもち、体部中央に１条の沈線が、肩部には爪形の刺突文が巡る。**156**は短頸壺である。羨道部であったと思われる石室西側付近から出土した。口縁部は肥厚気味に低く立ち上がり、体部にはあまり明瞭ではないが、１条の沈線が巡る。底部は不定方向のヘラケズリが施される。

遺構に伴わない遺物

これまでに述べてきた遺構の他に、建物としてまとまらなかった柱穴や、性格不明の遺構等が多く検出されている。ここではそれらの遺構から出土した遺物に加え、包含層出土の遺構に伴わない遺物の中から特徴的なものを取り上げ、述べていきたい。

土器類

(弥生土器)

157～160は甕である。**157**、**158**は５区より出土した。口縁部には凹線が施され、**157**は内傾気味に、**158**は垂直気味にたちあがる。内面にはヘラケズリが施される。**157**は赤色顔料が施される。**159**、**160**は竪穴住居26付近の柱穴からいずれも口縁部を下に伏せた状態で出土した。外反する複合口縁部をもち、**159**は口縁部に爪形文、胴部上方に櫛描波状文が施される。**161**は甕の底部である。外面はヘラミガキ内面はユビオサエとナデで仕上げる。底部の端をつまみ出し、台状を呈する。**162**、**163**は高杯である。**162**は椀形の杯部に外方に張り出す口縁部をもつ。脚部は凹線が施され、透かしをもち、ヘラミガキが施される。**163**は口縁部が強く屈曲し、内傾気味にたちあがる。口縁部には凹線が施される。**164**は壺である。口縁部内面には同心円文の文様が施され、端面には刻み目、凹線ののち円形浮文を配す。**165**は鼓形器台である。赤色顔料が施される。

(土師器)

166･**167**は土師器の甕である。**166**は球形の胴部に大きく開く口縁部をもつ。内面は底部付近と口縁部はユビオサエ、胴部はヘラケズリが施される。外面は粗いハケメが施される。**167**は摩滅が激し

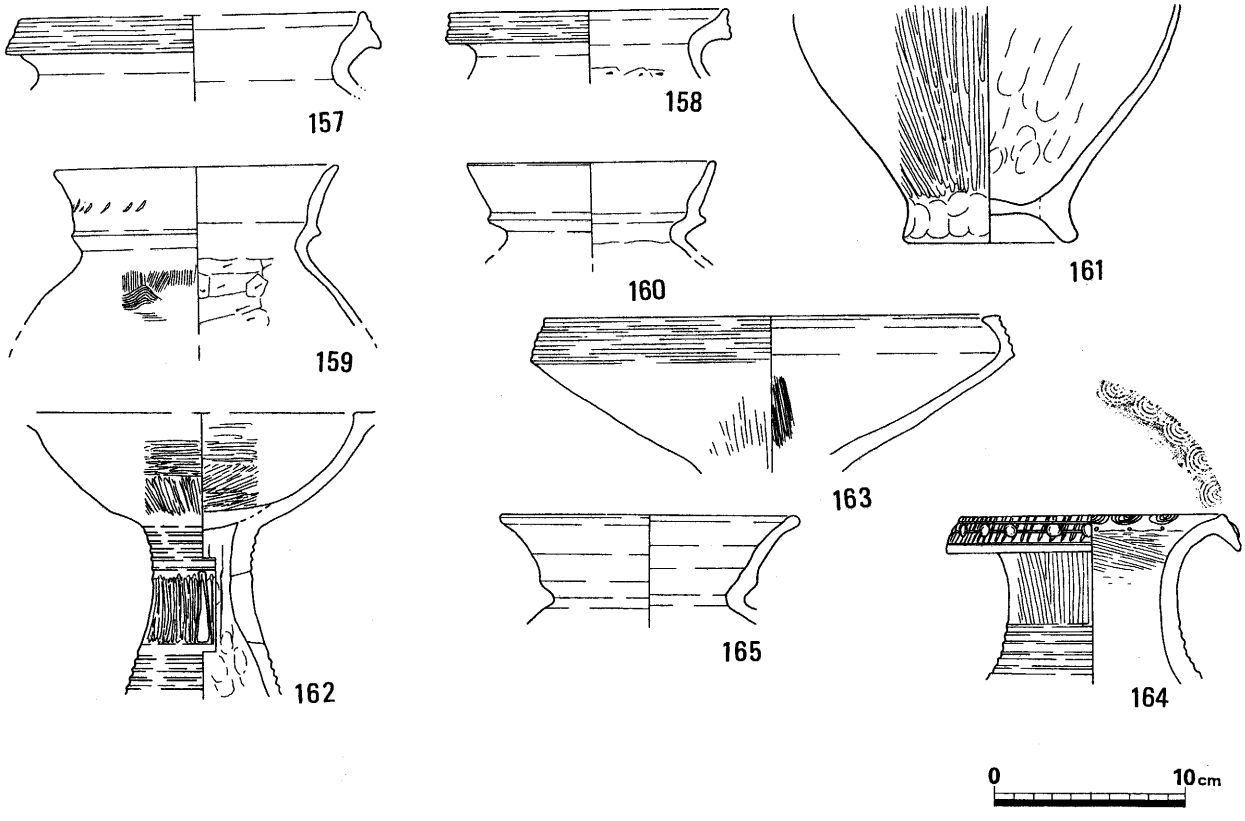


図159　遺構に伴わない遺物　弥生土器

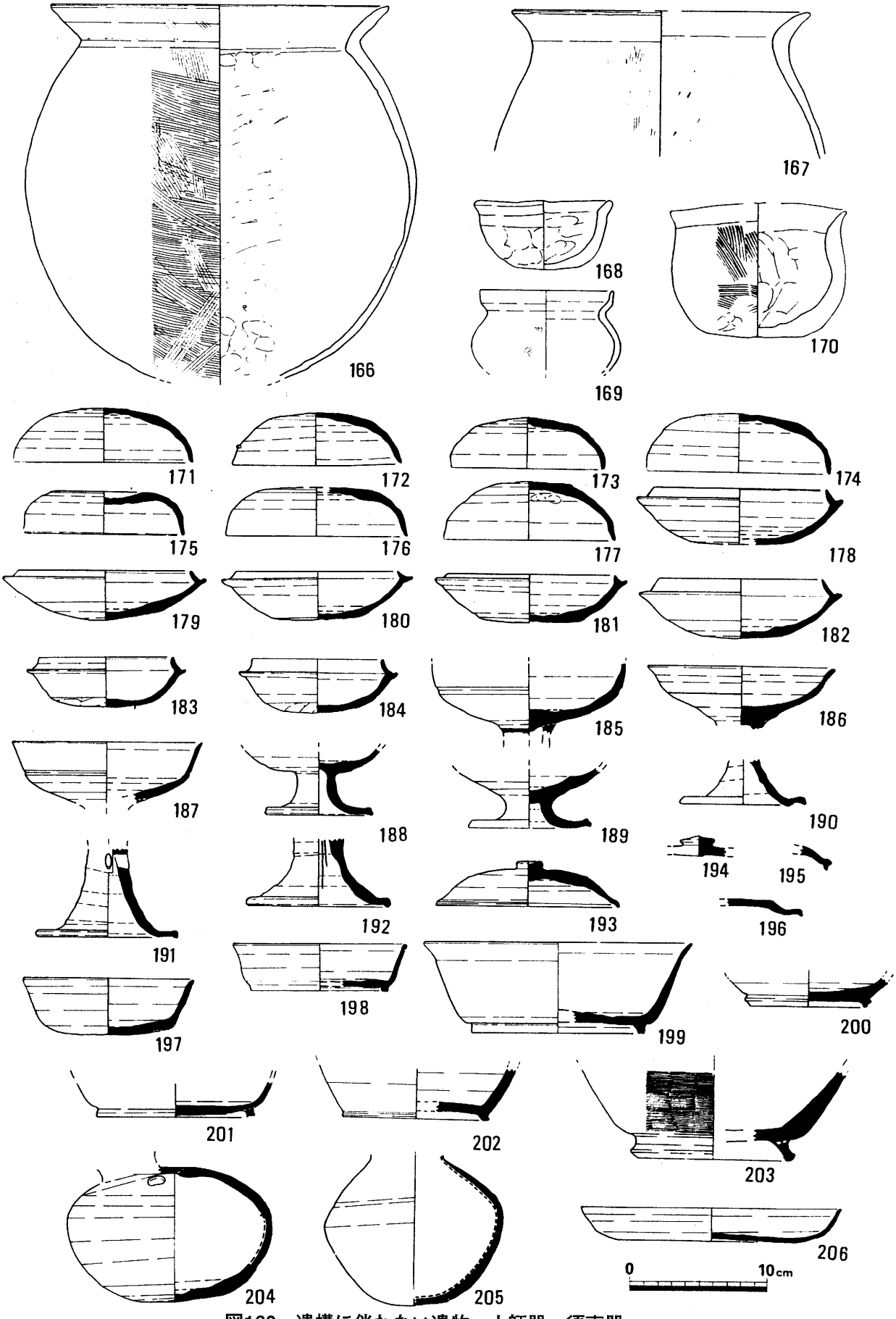


図160　遺構に伴わない遺物　土師器・須恵器

いが**166**と同様の調整が施される。いずれも「く」の字状に開く口縁部をもつ。**168·170**は手捏ねの小型の鉢である。胎土も粗く粗雑なつくりである。**170**には胴部外面に粗いハケメが施される。**169**は小型丸底壺である。口縁部は斜めに開いたあと直立気味に立ち上がる。摩滅が激しく細部の調整は明らかではないが外面にかすかにハケメ痕がみられる。

(須恵器)

171～**177**は杯蓋である。**175·177**には天井部と口縁部の境にかすかな稜がみられるがそれ以外のものは球形を呈し、**173**は口縁部がやや内傾する。口縁端部はいずれも丸くおさめる。**178**～**184**は杯身である。たちあがりはいずれも低く内傾したものであり、端部は丸くおさめるものである。ヘラケズリは身、蓋共に施されるものと省略されるものがみられる。**185**～**192**は高杯である。**185**の杯部は深

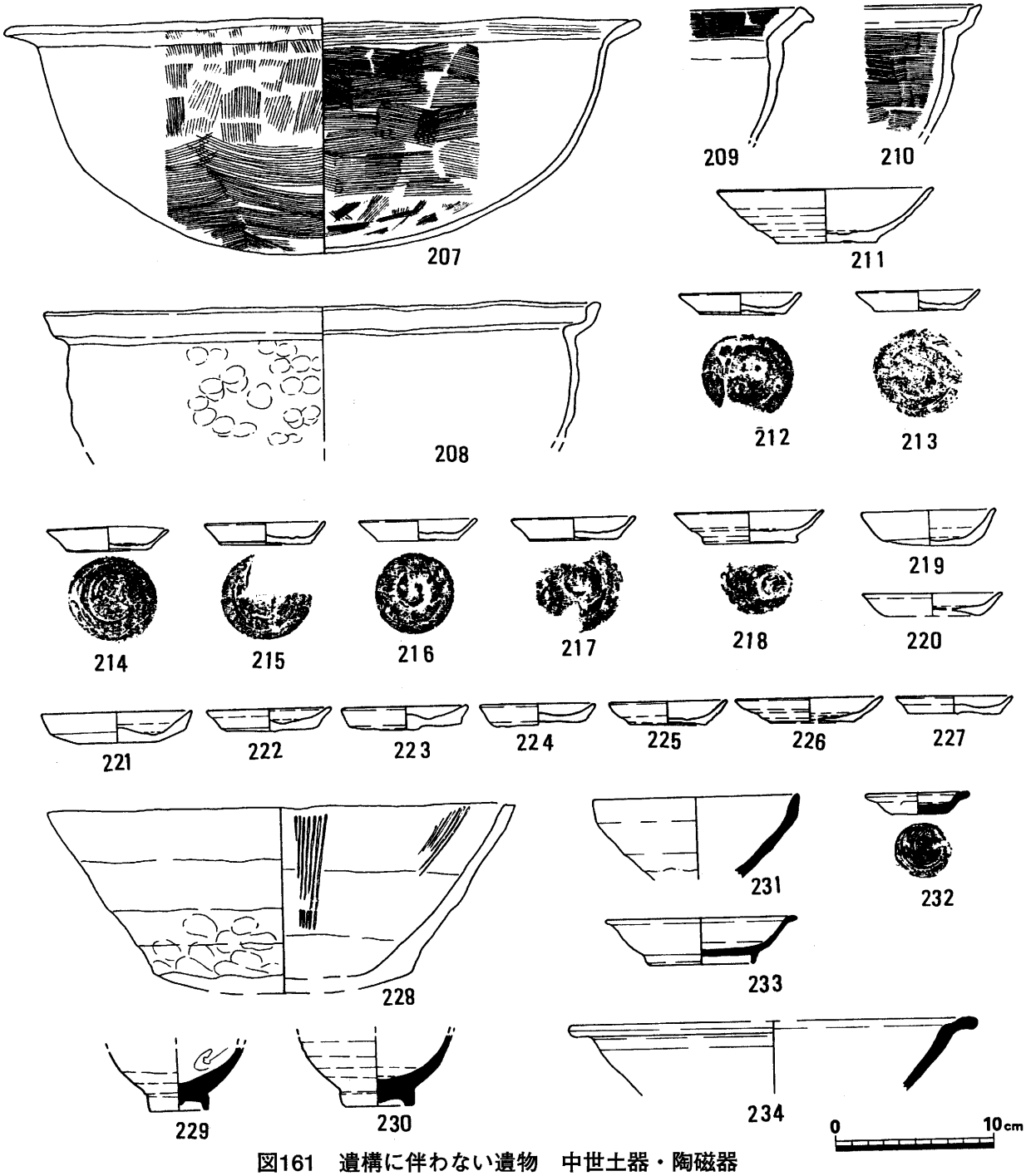


図161　遺構に伴わない遺物　中世土器・陶磁器

く椀状を呈し、底部と口縁部の境には凹線が巡る。杯部と脚部の境にはカキメが施される。**186·187**は杯部が浅く、外方に開く口縁部をもち、**187**は底部と口縁部の境に凹線が巡る。脚部は短く裾部が大きく開く**188·189**と、細長く裾部がラッパ状に開く**190**～**192**がある。**191**には楕円形の透かし穴が２ヵ所みられる。**193**～**196**は蓋である。**193·194**にはつまみが付く。**195**はかえりがみられる。**197**～**202**は杯である。いずれも低い貼付け高台をもち、わずかに外方へ張るものである。**198**～**202**は貼付け高台をもつ。**199**は体部と口縁部の境に段をもつ。**203·205**は壺である。**203**は底部に外方に張り出した貼付け高台をもつ。高台端面は外方を向き、わずかに肥厚する。胴部にはカキメを施す。**205**は最大径を胴部中央付近にもち、最大径よりやや上方に１条の凹線が巡る。**204**は平瓶である。器体は丸みをもち稜線をもたない。口縁部の形態は不明であるが、口縁部付近２箇所に粘土粒が配される。**206**は皿である。焼成が甘く、白色を呈する。胎土には径１㎜前後の石粒を多く含む。

(中世土器・陶磁器)

207～**210**は鍋である。**207**は土師器、それ以外は瓦質土器である。**207**は内外面ともに粗いハケメ

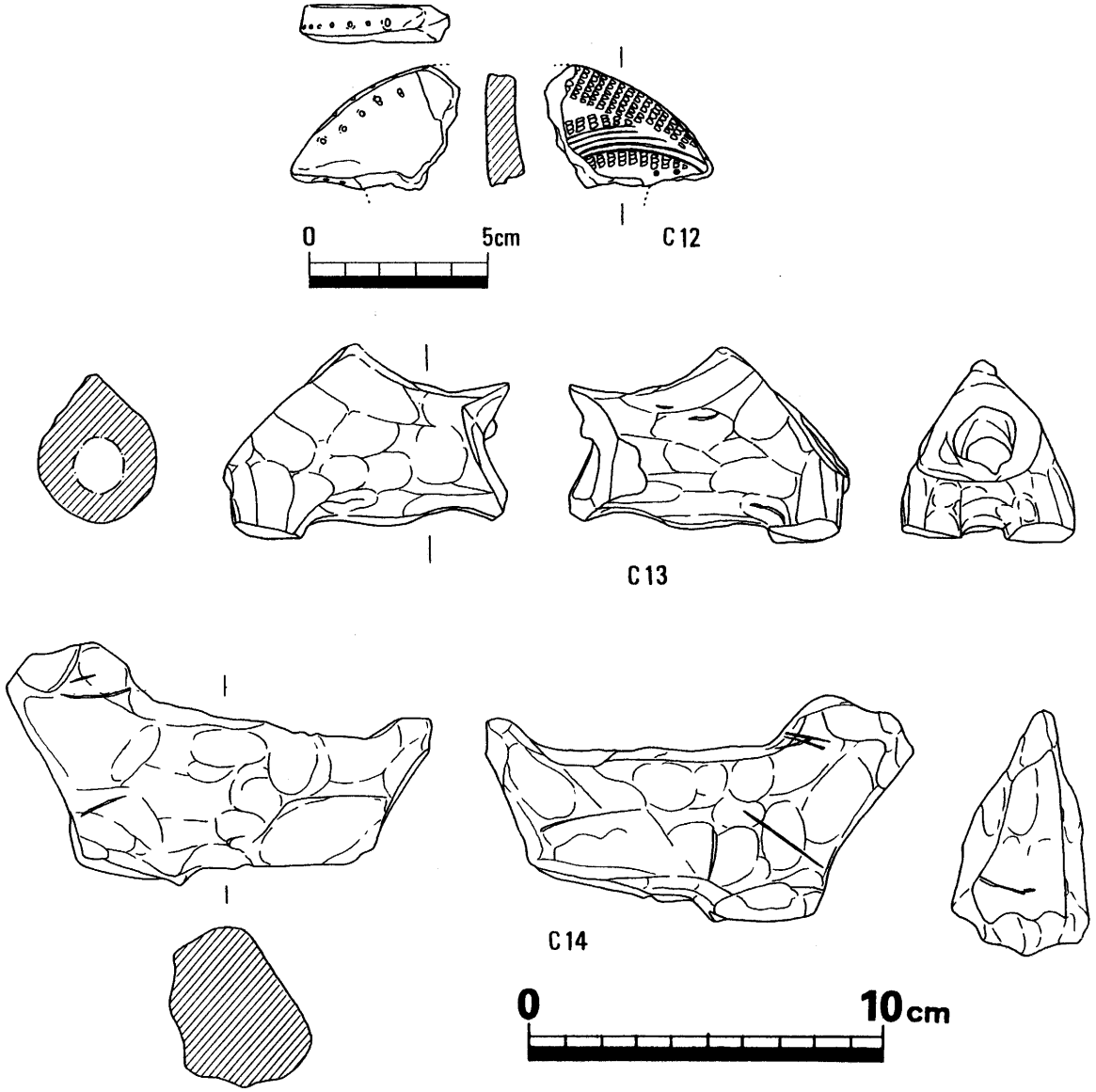


図162　遺構に伴わない遺物　土製品

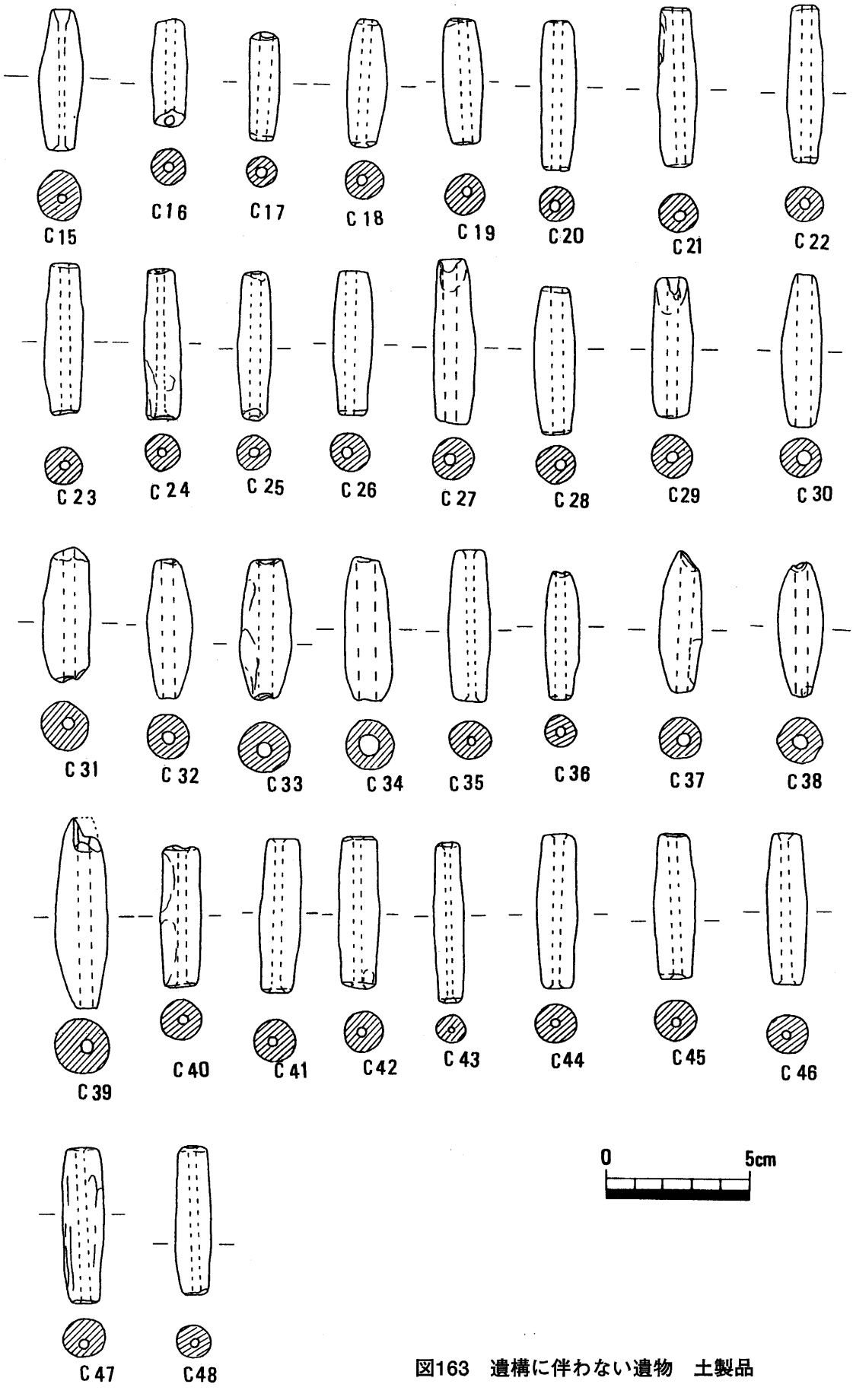


図163　遺構に伴わない遺物　土製品

が施される。口縁部は外反し、端部は肥厚して丸くおさめるものである。208の器面はハケ調整を省略しているため凹凸が激しい。208・210の口縁部は屈曲してたちあがり、受口状を呈する。209の口縁部は外反し、端部がわずかに張り出す。211は土師器杯である。大きく開く体部には回転ナデによる凹凸が認められる。底部は平高台状を呈し、底面には回転糸切り痕が認められる。212～227は土師器小皿である。212～217は同一箇所から一括して出土したもので、計9個体分出土し、図化可能な6個体を掲載した。いずれも底部は回転ヘラ切り痕を残し、胎土、色調、焼成の具合が共に共通する。218は底部が平高台状を呈し、底面は回転糸切り痕が認められる。219は深身である。底部は回転糸切り痕が認められる。220～224は底部の調整等が不明瞭である。が、221～224はやや厚い底部をもつ。226は薄手である。底部は回転糸切りである。227も同様、底部は回転糸切りである。228は土師質の擂鉢である。胎土は粗く、焼成もあまり良好ではなく細部の調整は明らかではないが、外面の整形は雑で、ユビオサエ等による凹凸が激しい。内面には8条1単位のすり目がおそらく6方向に配されていたと思われる。229・230はいずれも肥前系陶器の茶碗である。230の方が若干焼成が甘いが、削り出し高台をもち、灰釉が施される等、同様の手法が用いられている。231は瀬戸系の天目茶碗である。口縁部は体部から角度を変え、直立気味にたちあがる。233は白磁の皿である。明代の輸入陶磁であろう。薄手に作られ、口縁部は端反り形を呈する。底部は貼付け高台が付く。底部には銘が描かれている。232・234は瀬戸系の灰釉陶器である。232は小皿である。外面底部を除き全面に釉薬が施される。底部は回転糸切りである。234は折縁深皿である。

土製品

C12は分銅形土製品である。表面は刺突文と細いヘラ描き、裏面と端面は刺突文による文様が施される。C13は須恵質の陶馬である。3区より出土した。上半身のみの出土で前足の付け根部分がわずかに残るが、手足、頭部は見つからなかった。背部分にはたてがみの表現もみられる。内部は中空であった。C14は土師質の土馬である。胴体のみの出土で、下半身部分には後足の剥離面が残る。尻尾の表現もみられる。また、一部に赤色顔料がみられ、本来は全面に塗布されていた可能性が高い。C13については出土状態は明らかではないが、須恵器の大甕片が多く供伴しており、古代における祭祀の形態を考える上で注目できる。C15～C48は土錘である。土錘は杉遺跡全域に渡って数多く出土したが、遺構に伴うものは僅かしかない。ここではすべてを網羅することはできなかったが、図化可能なものを中心にできるだけ掲載してみた。いずれも孔が中央を貫通するタイプであるが、Ⅰ類：寸胴で筒形を呈するもの（C16・17・20・40・42・47)、Ⅱ類－ａ：中央がわずかに膨らみをもつもの（C21～18・34・35・41・44～46・48）、Ⅱ類－ｂ：中央がわずかに膨らみをもち、細身のもの（C36・43）、Ⅲ類：中央が大きく膨らみ紡錘形を呈するもの（C15・32・33・37～39)に分類することができよう。

石器類・玉類

S8はサヌカイト製の石匙である。縦型のもので、一部に自然面を残す。S9・S10はサヌカイト製の石鏃である。S9は平基式、S10は凸基Ⅰ式に属するものである。S11・12は石庖丁の破片である。S11は結晶片岩、S12は粘板岩製である。S13は結晶片岩製の偏平片刃石斧である。S14は粘板岩製の石庖丁の未製品である。おそらく成形段階で破損し破棄されたものであろう。S15は唯一完形で出土した石庖丁である。S16も同じく片岩製の石庖丁の破片である。約1/3を欠損する。S17～S23は砥石である。S17～19・21は流紋岩質、S20・22・23は砂岩質である。O2はコバルトブルーを呈するガラス小玉の破片である。

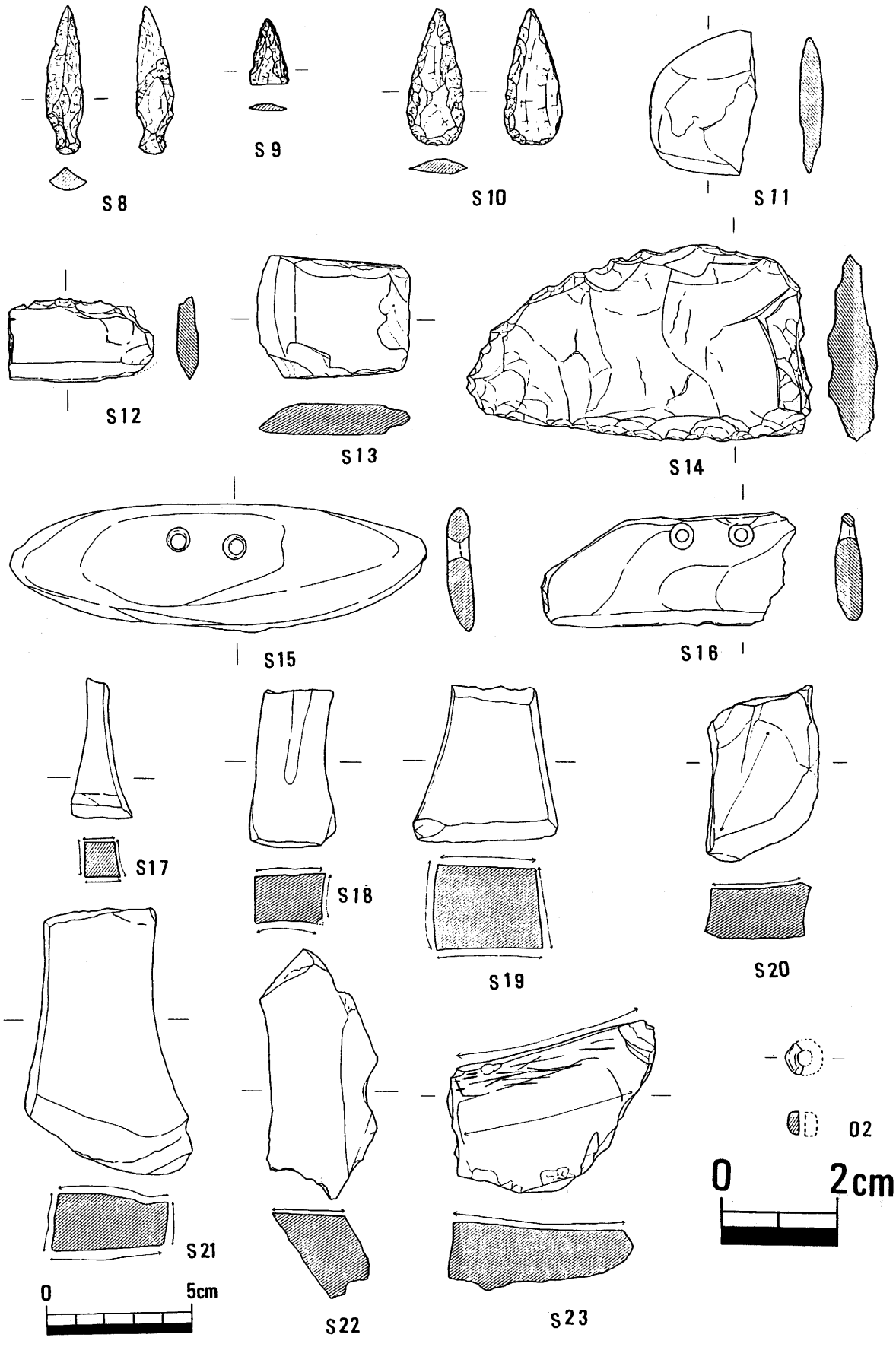


図164　遺構に伴わない遺物　石器

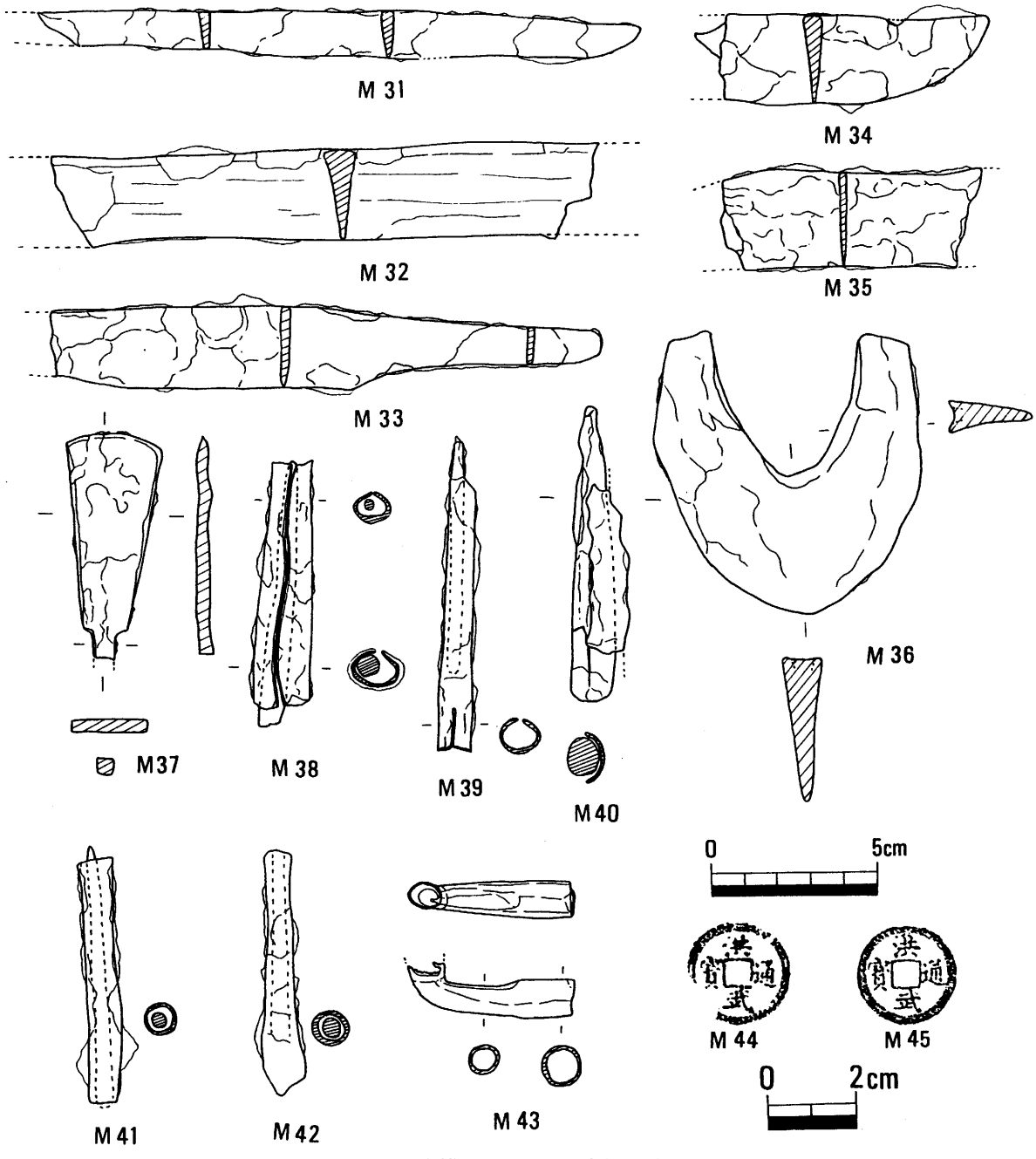


図165　遺構に伴わない遺物　金属器

金属器

M31は刀子である。柄部を欠損する。**M32～35**は鉄刀片である。**M32・M35**は刀身部である。**M33**は刀身部分は８㎝を残して欠損するが、茎部長は7.2㎝を測り、関は刃部側にあり、茎部との角度は鈍角を呈す。**M34**は切先部分である。**M36**は鋤先である。完形で出土したが錆のため袋部の状態は確認できなかった。**M37**は鉄鏃である。方頭広根に分類されるもので茎部は欠損する。**M38～42**は「鉄鐸」と思われるものである。いずれも３区北部の包含層から出土したもので、１㎜前後の鉄板を円錐または筒状に丸め鐸身をつくり中に鉄製の舌を入れるものである。錆化が激しく内部の状態を観察することが困難であったが、**M38・40**の舌は円錐状を呈し、**M39・41・42**は寸胴を呈すると思われる。舌の上端部はいずれも細くまっすぐにのびるものである。**M43**は青銅製の煙管の雁首である。**M44・45**はいずれも４区から出土した。「洪武通寶」である。

第4章　まとめ

今回の調査の結果、縄文時代から近世にかけての各時代の遺構、遺物を確認し、大きな成果を得ることができた。それらの遺構、遺物に関しての若干の考察を以下にまとめておきたい。

1．縄文時代の遺物について

今回の調査において、杉遺跡から縄文時代のものと思われる遺構は発見されなかった。ただ、遺物に関しては溝4より出土したサヌカイト製の石匙S7、包含層より出土した石匙S8が縄文時代の所産と考えられる。ただし、土器類は見つかっていない。

付近には吉井川対岸に位置する西屋地区の西屋A遺跡において平成7年度の発掘調査より丘陵部から縄文時代と思われる落とし穴が見つかっており（註1）、西屋地区及び約500m下流に位置する箱地区の丘陵部、杉遺跡より上流約1㎞に位置する井坂地区の平野部からは縄文時代早期から後期にかけての土器片やサヌカイト片が採集されている（註2）。今回の調査では、遺物のみしか確認できなかったものの、近辺に縄文時代の遺跡が存在することは明らかであり、杉地区及びその周辺において連綿と生業が営まれていたことを裏付ける格好の資料となった。

2．弥生時代の集落と遺物

（1）弥生土器について

杉遺跡における弥生時代の遺構・遺物はさほど多くはなく、出土土器の器種構成の全容についても明確ではない。こうした良好な資料に乏しい状態で編年案を語ることは非常に厳しい状況であることは承知の上で、ここでは敢えて遺構に伴う土器のみを4型式に区分し、編年を試みた。(図166)

杉1式土器

竪穴住居1、7、土器溜り1、溝2、4出土土器を標式とする。

壺は口縁部が大きく垂れ下がり、端面に凹線が巡り、円形浮文が施される一群と、口縁部が大きく広がり、口縁端部が上下に拡張するが、内傾気味に下方に大きく拡張する一群がみられる。頸部には貼付突帯文及び指頭圧痕文が巡り、胴部最大径付近には刻目が2列にわたって施される。外面調整は胴部上半はハケメ、下半はヘラミガキで仕上げる。短頸壺は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は端部をつまみ出すように上方に拡張する。

甕は口縁部が上方に拡張し、端部は無文のもの、刻目が施されるもの、凹線が施されるものがある。胴部は1点のみであるが、壺と同様、胴部最大径に刻目をもち、胴部下半は縦横のヘラミガキが施される。壺・甕共に内面にヘラケズリの技法がみられるものは見つかっていない。

高杯は椀状の杯部をもち、口縁部は内傾気味にわずかに肥厚し、外側は張り出し気味に肥厚するものが一般的と思われる。口縁部が穿孔されているものもみられる。内外面共に丹念なヘラミガキが施され、杯部と脚部の境に断面が丸みを帯びる凹線文が施されるものもあるが、脚部の出土はなく、詳細については明らかではない。

このほか台付鉢の脚部が出土している。貫通しない三角形の透かしをもち、櫛描直線文が施されるものと、2条の貼付突帯が巡るものの2通りがみられる。

杉２式土器

竪穴住居１、井戸１、包含層出土土器を標式とする。

壺は長頸のものと短頸のものがある。長頸壺は口縁部がラッパ状に広く開き、端部は上下に拡張するものと上方にわずかに拡張するものの２者が存在する。いずれも凹線が巡り、３～４個を一対とした円形浮文が施される。凹線の後に刻目が施されるものもある。頸部も凹線が巡るが、断面が丸みをもつものと、鋭角的で幅広いものの２通りが存在する。前者は凹線文帯が２段にわたって形成され、間に櫛描波状文が巡る。短頸壺は「く」字状に屈曲する頸部に上下に肥厚し、端面にも斜格子文等の文様が施される。

高杯は口縁部が内傾気味に強く屈曲し、凹線が施される。本型式は出土量が少なく、詳細な器種構成及び特徴については明らかではない。

杉３式土器

溝５出土土器を標式とする。

長頸壺は口縁部がいずれもほぼ垂直に拡張し、凹線が施される。頸部には退化した凹線が施される。短頸壺は口縁部直下に斜格子目文が施される。内面はヘラケズリが施される。

高杯は口縁部が下部で強く屈曲し、ほぼ垂直にたちあがるタイプの杯部が出土している。口縁部には退化した凹線が施される。脚部は櫛描文が２段にわたって巡り、その間には貫通しない透かしがあり、縦方向のヘラミガキが丁寧に施された丹塗りのものである。

杉４式土器

竪穴住居29出土土器を標式とする。

甕は口縁部が上下に拡張するもの、肉厚気味に肥厚し、上方に拡張するものの２者存在する。いずれも明瞭でない凹線が巡るが、凹線を施さずナデで仕上げるものもみられる。内面は胴部にはいずれもヘラケズリが施され、頸部に横方向のヘラケズリが丁寧に施されているものもみられる。胴部下半には縦方向のヘラミガキが施されている。

鉢は深型で口縁部は強いナデによりわずかにくびれる。端部はわずかに肥厚する。

以上、これら出土土器は弥生時代中期後半から後期前半にかけての特徴をもつものである。美作地方においては、中期から後期にかけての発掘例は比較的多く、資料も充実しつつあり、津山市域出土土器を中心として、編年研究も進められている。そこで、これらの編年に杉遺跡出土弥生土器を照らし合わせ、その編年的位置付けについて考えていきたい。

杉１式は壺型土器の頸部の貼付突帯及び指頭圧痕文を特徴とするが、高杯の口縁部の形状などが中期中葉の西吉田Ⅰ式（註３）・高本Ⅱ式（註４）出土遺物より古相を呈し、高本Ⅰ式期と併行する時期であると考えられる。

杉２式については壺形土器の頸部に凹線が用いられ、口縁部が上下に拡張する点に杉１式との相違を指摘することができる。ただこの時期に相当する資料が少なく詳細な特徴を把握することは困難であったが、口縁部が強く屈曲し、凹線文をもつ高杯が西吉田Ⅱ式土器に近い様相を呈する（註５）と思われ、中期後葉古段階に比定される。

杉３式については、西吉田遺跡報告書において西吉田Ⅲ式の特徴として扱われる「肩部に斜格子目文を施す壺形土器」（註６）のまさにそのものが出土しており、壺形土器の特徴などからもほぼ西吉田Ⅲ式に併行する時期とみて間違いないであろう。中期後葉新段階である。

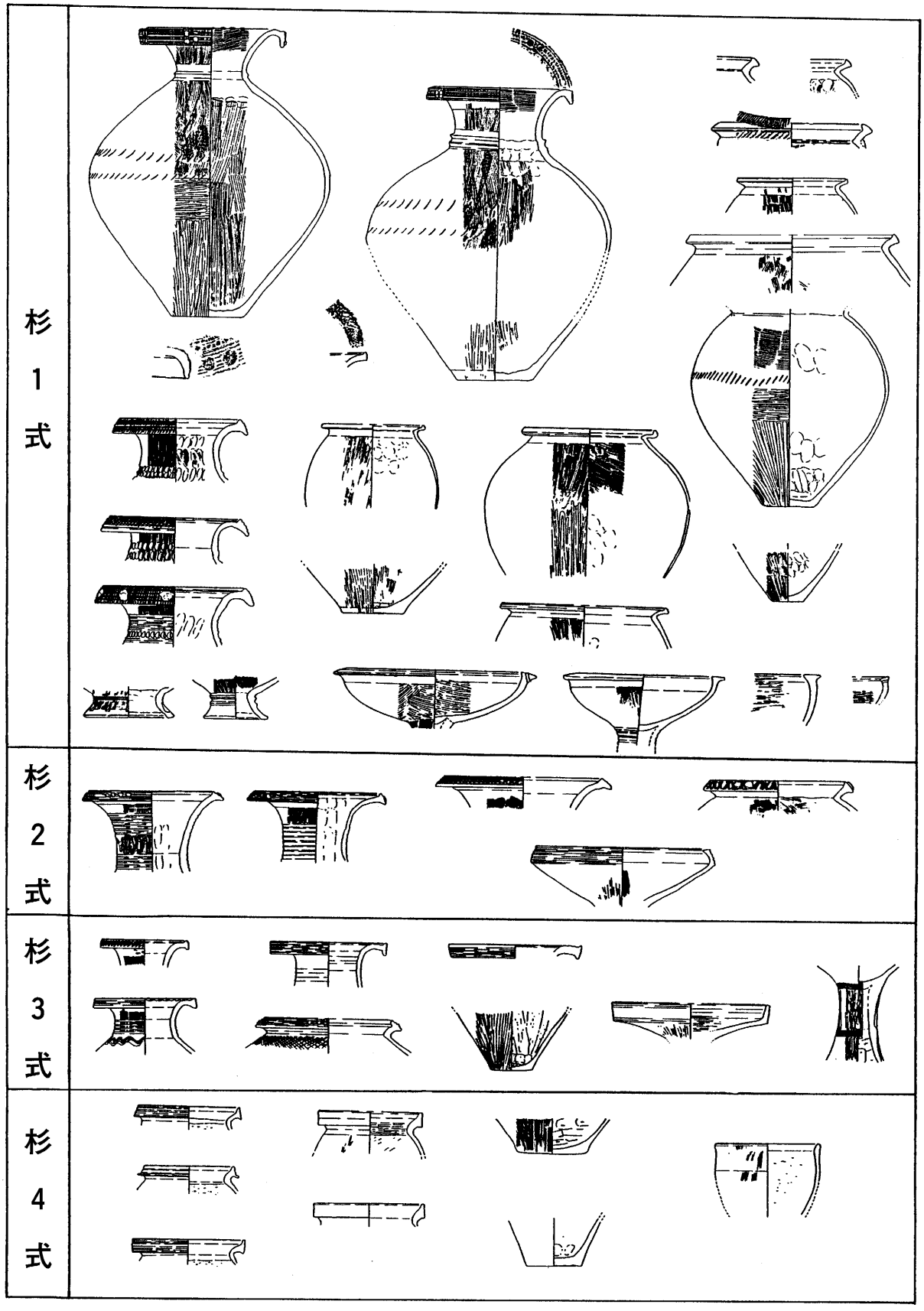


図166　弥生土器編年図

杉４式については、下方に引き伸ばし気味に拡張する口縁部及び、口縁部に巡る退化した凹線文などの特徴は津山市小原遺跡出土土器の、小原Ⅱ期（註７）、津山市大田十二社編年２式（註８）と共通する。頸部内面に横方向のヘラミガキが施される例は、小原遺跡段状遺構24出土土器（註９）、京免遺跡ＳＤ109 出土土器（註10）などにも見ることができ、その時期を後期前半新段階に求めることができるであろう。

（２）弥生時代の集落について

杉遺跡の弥生時代における遺構は前述のとおり多くはなく、土器編年より少なくとも４時期にわたって営まれた集落であったと思われるが、住居址は２棟しか見つかっておらず集落の全容を解明するには至らなかった。ただ、その中で注目すべき遺構として、吉井川にほぼ並行して掘削された溝２、４、５が挙げられるであろう。溝２、４に関しては、その位置関係及び、出土遺物より同一遺構の可能性が高く、杉１式期に比定され、残存状況の良好な溝４の断面よりＶ字溝であったと思われる。

杉遺跡においてこの時期の住居址は竪穴住居７があげられるが、この溝の存在はこのほかにも付近に竪穴住居が存在することを裏付けるものであろう。溝５に関しては杉１・３式の土器を多量に出土した遺構である。溝４より約150m北東方向に位置する。溝５が果たして溝２・４に続くものであるのかどうかを確認することはできなかったが、少なくとも近い時期に連続的にこの地に集落が営まれ定住生活が送られていたと考えられる。

津山地域周辺における編年				杉遺跡
中期	中葉	中	高本Ⅰ式	杉１式
		新	西吉田Ⅰ式･高本Ⅱ式	
	後葉	古	金井別所	杉２式
			西吉田Ⅱ式	
		新	ビシャコ谷	
			西吉田Ⅲ式･押入西･西吉田北1期	杉３式
後期	前半	古	西吉田北2期	
			小原Ⅰ期･西吉田北3期	
		新	小原Ⅱ期	杉４式

※　西吉田北遺跡報告書を参考に作成

また、包含層出土遺物及び柱穴より、後期に比定される二重口縁壺などもわずかではあるが出土している。これらから、出土土器と遺構より集落の変遷について単純に考えてみると、杉１～３式期にかけて、杉平野の上流部にまとまった集落が営まれ、少し期間をおいて杉４式期には下流部に移動していることがわかる。ただ、遺構の全容が不明なので、規模や、集落の存続期間については明らかではない。しかし、遺物の出土量から推定しても断続的な営みが中期中葉から後期後葉にわたって繰り返されていたと推定するのが妥当であろう。

現在苫田ダム建設に伴う発掘調査において調査中の久田原遺跡においても同様に吉井川沿いの平野に弥生集落が営まれており、（註11）吉井川上流部における低位段丘面の集落遺跡のあり方について今後研究を重ねていく必要がある。

（３）土路江遺跡との時期差

土路江遺跡は杉遺跡より直線約４㎞上流部に位置する奥津川西地区に所在し、平成４年に奥津町教育委員会によって調査された遺跡である（註12）。苫田ダム関連の調査においても弥生遺跡が次第に明らかになってきているが、調査は現在も進行中で、報告書も未刊であるのでここでは土路江遺跡との比較検討を行ってみたい。

土路江遺跡は吉井川右岸の高位河岸段丘上に位置し、国道179 号改良工事中に発見された遺跡である。４本柱をもつ円形竪穴住居が４軒みつかっており、うち１軒は建て替えがなされている。出土遺物より、弥生時代後期初頭から前半期に位置付けられているが、小原Ⅰ期あたりを初現とし、二重口

縁を呈する甕がわずかながら見られることから、杉遺跡と比較するとおよそ杉３式期の後から出現し、杉４式期後まで続く比較的短期間に営まれた集落と考えられる。

３．須恵器の年代

杉遺跡では多くの須恵器が出土している。ここではこれら出土須恵器から考察した杉遺跡の年代観について若干の私見を述べてみたい。

須恵器の編年研究においては、我が国に須恵器がもたらされて以来、長期にわたり使用され、且つ、時期的な変化が顕著である杯蓋の変遷をたどることが最も有効な手段であり。本稿においても杯類を中心に検討を進めていきたいと思う。

杉遺跡出土の杯蓋を概観すると、蓋は天井部と口縁部の境をもたず半球形を呈し、端部は丸くおさめるもの、身はたちあがりは低く内傾し、端部は丸くおさめ、いずれもヘラケズリは簡略化または省略されており、田辺昭三氏の陶邑編年（註13）におけるＴＫ209 型式からＴＫ217 型式の特徴をもつものが殆どで、おおむね６世紀末～７世紀前半に比定されるものである。ところで須恵器の編年であるが、近年の資料の増加に伴い、それぞれの地域で独自の編年案が確立しつつあり、それらの編年案を畿内の編年に照らし合わせ年代を求めていくというのが昨今の須恵器編年研究の実状である。畿内における６世紀末から７世紀前半の土器編年は、前述の田辺氏による和泉陶邑古窯址群の編年、西弘海氏による飛鳥・藤原京地域の編年（註14）があり、創建年代や使用年間の確かな寺院や都城関係の遺構からの出土資料を中心に作成された西氏の編年案ではより詳細な実年代を求めている。

岡山県北部におけるこの時期の須恵器編年としては久米町に所在する糠山古墳群出土資料をもとに６期に区分された編年（註15）があり、最近では糠山編年に準拠し北房町定北古墳出土資料を検討した横田美香氏の編年（註16）、勝央町畑の平古墳群出土資料をもとにした弘田和司氏による編年（註17）、同じく勝央町福吉丸山遺跡の集落址出土資料をもとにした圃正雄氏の編年（註18）など、近年活発に編年案が提示されている。

杉遺跡は集落遺跡であるが、調査時において遺物の出土位置等を把握できなかったものも少なくなく、住居址出土遺物に関しても床面出土遺物と埋土出土遺物の区別の判断ができなかったものもあり、ここでは包含層出土資料も含め、杯Ｈの形態および技法・法量などから以下のように分類を行った。また、比較的出土量の多い高杯について考察を行ってみた。但し、杯Ｇ・Ｂに関しては出土個体数も僅少で良好な資料にも恵まれておらず、今回の分類には加えないが、陶邑編年及び飛鳥・藤原京地域の編年を参考に杯Ｈとの前後関係・時期差を検討し、他の器種と共に編年案図に掲載した。なお、本報告書には掲載していないが分類の対象となる資料は他にも多く存在する。しかし、代表的な遺物は可能な限り掲載しているつもりであり、今回の編年作業を行うにあたっては報告書掲載資料のみを対象とし、未報告分に関しては割愛させていただいたことをあらかじめ断っておく。

１類：杯身・蓋ともに口径は13cm以上を測る。杯身の立ち上がりは内傾し、杉遺跡出土遺物中では比較的高く、しっかりとしており、端部は丸くおさめる。ヘラケズリいずれもは広く行われている。

２類：杯身は口径11.8～12.8cm、器高は3.8 ～4.5cmを測る。蓋は口径12.5～13.6cm、器高は４cm以上である。ヘラケズリは行われているものとそうでないものが混在するが、範囲は狭く、大半は省略され、ナデで仕上げる。

３類：杯身・蓋共に法量に大きな差は見られないが、杯身の立ち上がりが２類より低くなる。

4類：この部類に属する資料は多くなく、詳細に述べることは困難であるが立ち上がりはさらに低くなり、ヘラケズリは省略され、天井部・底部は未調整あるいはナデが施される。

5類：杯身は口径10cm以下、器高4cm以下、蓋は口径11cm前後、器高4cm以下である。杯身の底部はいずれも不定方向にナデが施される。

以上5類に杯Hを分類してみたが、杯の縮小化、立ち上がりの退化、ヘラケズリの簡略・省略化を辿る1類～5類への変遷は明らかであろう。これをもとに、杯G・B及び他器種を加え、6期に編年してみた。(図167) ただ、5期に位置付けた口径の狭い杯身の存在であるが、この時期に位置付けられる一般的な杯身と比較して立ち上がりが高く、この時期に相当するものかどうかに多少の疑問が残るがここでは法量の縮小化を重視してこの時期に位置付けておきたい。また、杯Gであるが、杉遺跡からは明確に杯Gと判断できる遺物は115·197の2点のみであり、蓋としたものの中にも杯Gが含まれている可能性が考えられるがここではこの2点を杯Gと捉えて考えていきたい。杯Gは竪穴住居8周辺から4期の遺物と共伴して出土しており、ここでは5期に位置付けておく。

高杯は3～4期に2段2方透かしをもつものが存在し、低脚・小型化してゆくこの時期の一般的な高杯とは様相を異にする特徴的な形態が見られる。また、弘田氏が畑の平古墳群出土資料の中で地域色の現れているものと指摘した脚端部を下方に強く引っ張るものが4期に出現していることは注目できる。高い立ち上がりをもつ法量の小さい杯身や、透かし脚端部に特徴をもつ高杯など特異な形態をもつものが多いが、これらを地域色と捉えることができるならばこれらの地域的な広がりと供給先を検討することが今後の美作地方の地域史の解明に大きな意義をもつものあろう。

さて、これらを畿内の編年にあてはめてみると、1期は陶邑編年のTK209型式に属し、飛鳥地域の編年では飛鳥Ⅰの小墾田宮推定地SD50中層の資料に近い。2期はTK217の古段階に当たり、飛鳥Ⅰの小墾田宮推定地SD50上層の資料に相当すると思われる。3期は飛鳥Ⅰの川原寺SD02の資料に相当し、4期はTK217の新段階、飛鳥Ⅰの飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層の資料に当たると思われる。5期は雷丘北方遺跡第5次SD3580の資料に似た様相を示す。6期は平城宮Ⅱの平城京左京一条三坊十五坪SD485の資料に類似する。

以上の編年案に基づいて、飛鳥地域の編年を参考に杉遺跡出土須恵器の実年代を検討すると、およそ6世紀末～8世紀前半頃にかけてのものであり、出土量は3期、およそ7世紀初頭をピーク減少していく傾向にある。集落の存続期間に関しては1期から5期までは連続的に営まれたようであるが、それ以降に関しては確実な遺構もなく、出土遺物も僅少であり、多少の時期差もみられることから断続的に短期間の小規模な営みがあったにすぎない程度であろう。

また、近年論じられている杯Hと杯Gの共伴関係であるが、岡山県内では杯Gの出現が遅れ、畿内より併存期間が短いということがこれまでの共通の見解である（註19)。杉遺跡における杯Gの出現時期は、畿内はもとより、勝央町畑の平古墳群や福吉丸山遺跡よりも若干遅れる傾向にあるといえる。次段階では全体的な出土量が減少し、以降の共伴関係については不明である。ここではとりあえずこれまでの見解と同様、杉遺跡についても杯Gの出現が遅れることのみを指摘しておきたい。

4．竪穴住居址ににみる生活様式

竪穴住居址は計29軒見つかった。そのうち3軒は弥生時代の竪穴住居である。ここではそれらを除く方形竪穴住居址について検討していきたい。

方形竪穴住居の時期については個々については割愛するが、出土遺物より、前述の須恵器編年にお

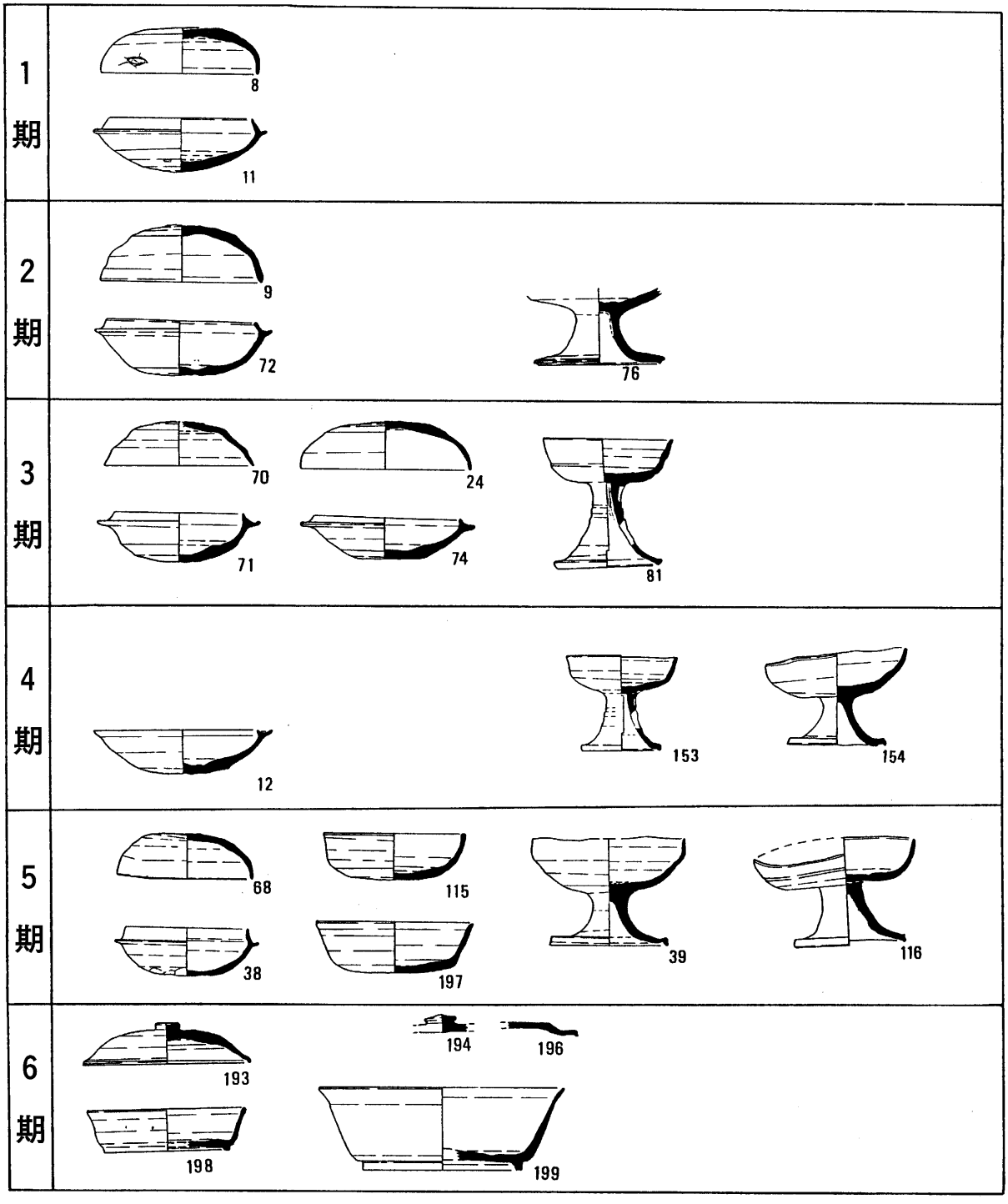


図167　須恵器編年図

ける１期から５期、つまり６世紀末～７世紀半ば頃、時代区分でいえば古墳時代終末期にあたる。遺物を伴わない住居址に関してもおおむねこの時期に相当すると思われる。柱穴は４本のものが最も多く、柱穴をもたないもの、２本のものも存在する。その他の屋内施設としては竪穴住居３・９・13・14・21において壁体溝が検出されている。そのうち床面を全周するものは竪穴住居13・14に限られる。中央穴は竪穴住居３・４・５・６・24においてみつかっている。中央穴については様々な用途が考えられているが、杉遺跡においては浅く掘り窪められ、被熱面・焼土を伴うことから竪穴炉として使用されたものであろう。

炉についてであるが、方形竪穴住居址26例中22例において屋内に炉が認められた。前述の竪穴炉以外はすべて床面に被熱面をもつのみであるが、いずれも床面のほぼ中央に炉が設けられていた。また、そのうち８例が複数の被熱面をもち、大抵が２ヵ所であるが竪穴住居12・18については数ヵ所存在した。ちなみに８例中４例が東壁に被熱面をもつ。その中で注目されるのは竪穴住居９・18にみられるカマド状遺構の存在である。県南部におけるこの時期の竪穴住居にはカマドが一般的に用いられているが鳥取県については皆無に近い状態であり（註20)、県境に近いこの地においては山陰の影響を強く受けていたといえよう。これらの住居址については、３期、４期の遺物が出土しており、この頃に南部の生活様式が徐々に波及してきたのであろう。また、カマドをもつ住居址においても中央に被熱面が見られ、旧習を残しながらも新たな文化を導入していく過渡期にあたるのと思われる。杉遺跡より直線距離で約1.2km南に位置する河内遺跡でも同様のカマドと中央に被熱面をもつ古墳時代の竪穴住居が見つかっている。出土遺物に乏しく詳細な時期決定をするには至らない状態であった（註21）が、同じ様相を呈し、時期的にあまり前後しない頃のものと思われる。また、移動式カマドについても杉遺跡からは出土しておらず、おそらくはカマドを用いない方法で煮炊を行っていたものと思われる。弘田氏は畑ノ平古墳群報告書中において美作地域の後期古墳副葬品中における煮炊具について注目し、器種構成の中にカマドが欠落していることを言及している（註22）が、おそらくは美作地域におけるこうした生活様式の背景が古墳祭祀にも反映していたものと考えられる。

５．古墳について

奥津町内における古墳はこれまで杉遺跡より直線で約４km北に位置する長藤に１基存在するのみであり（註23)、今回発見された古墳は町内で２基目の古墳となった。

出土土器より検討すると３期～４期に相当する時期であり、築造年代は７世紀前半と思われる。この時期の集落は２区・３区あたりに営まれ、約320m西に位置するこの位置が墓域として利用されていたと推定できる。築造時期・規模から推定して本来は周辺にもいくつか古墳が存在していた可能性が高いが、後世の攪乱が激しく発見するには至らなかった。

古墳調査後、苫田ダム建設予定地内の久田原遺跡において９基の古墳が発見された。築造年代は６世紀前半～７世紀後半と考えられており、石室内から鉄滓が副葬されているものも存在していたことから製鉄に関わる集団の首長の墓であったのではないかという見解を得ている（註24)。杉遺跡は同時期に営まれていた集落であり、杉古墳の築造年代についても久田原古墳群の１・５・６号墳とほぼ同時期と考えられ、少なくともこの２つの集団は同時期に併存していたものと考えられる。ただ、杉古墳については副葬品にその集団の特色を示すような遺物は見られず、杉地区に存在した集団の性格を副葬品から推定するには至らなかった。

いずれにしても、町内の古墳を概観すると吉井川上流部の急峻な中国山地の山懐に位置するこの地では古墳の立地条件に最適な土地が少なく、こうした川沿いの低地部においても古墳が一般的に築造されていたことが窺われる。

６．中近世の様相

（１）出土土器類の検討

杉遺跡における中近世の遺構・遺物は比較的多く出土しており、主に３区・４区に集中している。建物は掘立柱建物４・５が中世に位置付けられると思われるが、３区中央部や４区西部のピット群の

中にもうまく建物としてまとまらなかったものの、中世の土器・陶磁器類が出土する比較的深い柱穴が多く存在しており、いくつかの掘立柱建物が建て替えられながら存在したことを裏付ける。

出土遺物は多種にわたるが、包含層出土遺物が多く、遺構に伴う遺物は僅少であり、また、細片が多いため混入の可能性も高く、個々の遺構の時期を判断できうるものは少なかったためここでも出土遺物からみた遺跡の存続期間を検討していきたい。

中近世遺物の出土傾向の特徴としては土師器椀や勝間田焼椀等の椀類の出土が皆無であること、そして輸入陶磁器が比較的多く出土していることが挙げられる。美作地域では中世遺跡の調査例が少なく土器様相についてはまだ明らかでない部分が多い。岡山県内や、広島県福山市草戸千軒遺跡においては土師器椀がおおむね14世紀代まで存続しているが（註25)、草戸千軒遺跡でⅡ期前半に位置付けられる口縁部が受口状を呈する土師質土器鍋C（註26）や杯も出土しており、中世における杉遺跡は14世紀前半あたりを上限としておきたい。また、下限としては土壙26出土の小皿128や、包含層出土の椀229・230などの肥前系陶磁の出土が見られ、17世紀前半あたりに求められるであろうか。

また、細片であり報告書に掲載していないが、青磁椀等の輸入陶磁器が比較的多く見つかっていることも特記しておく。

（2）土壙墓について

土壙墓は3区北部に集中して見つかっており、いずれも多少の人骨片を伴っている。土壙墓1・4は埋土の上に墓標と思われる石の存在が確認できた。埋葬の形態はいずれも埋土に炭を含むことから火葬墓と考えられ、土壙墓2については火葬場所にそのまま埋葬したと思われる。

年代については土壙墓2の副葬品に「永樂通寶」が含まれており「寛永通寶」を伴わないことから中世後期に求めることができる。他の土壙墓についても同時期のものであろうか。また、これら土壙墓について、杉地区における歴史的背景に関連付けて検討するなら、第2章で述べたとおり、天正9年から10年にかけて杉地区の対岸に位置する西屋地区を中心に毛利方と宇喜多方による西屋城をめぐる激しい攻防が繰り広げられたことを考慮しなければならないであろう。井坂地区・杉地区においても激戦の舞台となり多くの屍が葬られたという言い伝えがあり（註27)、実際、今回の調査においては刀片もいくつか見つかっており、杉地区では観音寺裏に守備側の宇喜多方の軍監・平井助之進利政の墓と伝えられる「上の坊」や城主の若君の乳母がこの地で殺害され葬られたといわれる「下の坊」があり、発掘調査前においては水田の傍らに戦死者の供養墓と伝えられる墓が何カ所かみられた。これらの供養墓は現在の水田造成時に移動した可能性が強く必ずしも現位置を保っているとは考え難いが、この付近に葬られたものもあったと思われる。今回調査した土壙墓は前記「下の坊」よりわずか南に10数mの距離にあり、出土した銭貨の年代にもあてはまることから、西屋城の攻防の際の戦死者を葬った墓である可能性も考えられる。また、3区からは比較的大型の土壙がいくつか見つかっており、これらも土壙墓の可能性が高い。

7．その他の遺物

（1）鉄滓について

鉄滓は杉遺跡全体でコンテナ約2箱出土しており、そのうち約80%が3区からの出土であった。遺構からは竪穴住居5・8・12・18・20・23・24・28、土壙21・24・出土している。鉄滓が竪穴住居址に伴うものかどうかでこの集落の性格が大きく変わってくる可能性があるが、調査時において鉄滓の出土層位等を確認することができず、この状態で結論を出せば誤った見解を出しかねないので、これ

まで敢えて触れずにいた。遺跡内では炉３が製鉄遺構の可能性をもつが、周辺を磁石により精査してみた結果、金属の反応は僅少であり定かではないが、付近に製鉄に関するなんらかの施設があったことは間違いないであろう。炉３は中世の遺構であるが、出土鉄滓が古墳時代終末期までさかのぼるものなのかあるいは中世のものかについての結論は省略し、ここでは鉄滓の出土の報告のみとしておく。

（２）鉄鐸について

鉄鐸は５点、いずれも３区からの出土であった。鉄鐸については最近では行田裕美氏によって西吉田北遺跡報告書中において集成され、論じられているが、栃木県日光男体山山頂遺跡より131点出土しているほか長野県に多く出土しており、西日本各地にも出土例がみられ、韓国においても確認されている（註28)。岡山県下での出土例は前述の西吉田北遺跡出土資料２点のみで杉遺跡が２遺跡目となる。しかし、行田氏が報告書中で、「類例が少なく、目にする機会があまりないため鉄鐸と認識されない場合がある」と指摘しているように実際は未知の出土例がまだ存在する可能性が高い。西吉田北遺跡出土例は鐸身は杉遺跡出土**M38**に似ているがやや裾が広がり、舌は上端を輪状に折り返して吊手をつくっている。時期は５世紀後半に比定されているが、国内の出土資料は長野県出土資料以外おおむね５世紀～７世紀の中で捉えられる。杉遺跡出土例は古墳時代終末期～中世までの遺物を含む包含層からの出土であり、時代は特定できないでいる。しかし、国内における出土例と本遺跡の年代を考慮した場合、６世紀末～７世紀前半の可能性が高い。

用途については藤森栄一氏は、鉄鐸は銅鐸の末裔であり、６口１組を鉾に吊り下げ農耕や水に関する祭祀に用いられたと考えている（註29)。また、真弓常忠氏の説（註30）を要約すると、製鉄民の間では高殿の４本の押立柱の南方の柱に金屋子神をまつったとされる。五行思想では南は火の神の座であり、たたらも火を用いることから「南宮」とは製鉄の神の座を意味するという。『梁塵秘抄』には「南宮の本山」は信濃国をいい（註31)、信濃の諏訪大社が「南宮」と称したこともあり、製鉄に関与した神である。と述べており、その諏訪大社には鉄鐸が伝世されていることは注目できる。真弓氏の説については多少強引な感が否めず、そのまま鵜呑みにすることには多少の疑問が残るが、この説にのっとれば製鉄の神をまつる地から多量の鉄鐸が出土しており、鉄鐸が製鉄に関与する祭祀具の可能性も考えられる。また、鉄鐸が古墳時代から全国的に前述のような意義を持つ祭祀具として用いられたものであれば鉄産地であるこの地からの出土は大いに興味深い。

（３）馬形土製品について

杉遺跡からは土師質の土馬が１点（**C14**)、須恵質の陶馬が１点（**C13**)、いずれも３区から出土している。また、報告書には未掲載であるが**C14**とは別物の土馬の脚部分が１点出土している。こうした土製馬は、祭祀に用いられたものであり、本遺跡の中での出土状態は不明であるが、陶馬については須恵器の大甕片とともに出土していることが確認されている。久田原遺跡においても奈良時代の溝の中から大甕の破片とともに陶馬が出土したとの報告例もあり（註32)、大甕と陶馬がセットとなった祭祀が行われていたことが窺える。古代における祭祀のありかたを考える上で非常に有意義な資料であろう。

8．結　語

今回の調査において杉遺跡が縄文～近世に至る複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代に関しては遺物のみの出土であったが、縄文集落の存在の可能性を大きくしたといえる。弥生時代については中期後葉から後期初頭にかけて津山盆地を中心に吉井川上流域においても遺跡が急増する時期

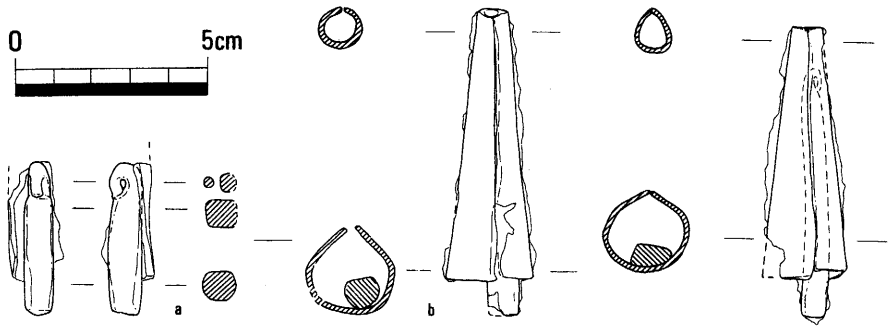


図168　津山市西吉田北遺跡出土鉄鐸（西吉田北遺跡報告書より）

であり、奥津町内においてもこうした時期に久田原遺跡や杉遺跡・土路江遺跡にみられるように河岸段丘面に集落が形成される。杉遺跡では弥生住居址についてはそれほど多く見つかってはいないものの出土遺物より、中期後葉から後期末にかけて断続的に集落が営まれたと考えられる。この時期の集落については規模が小さく存続期間も短いものが多いことから、限られた数の単位集団による一定の地域内での移動が行われたことが遺跡増加につながっているとの指摘もあるように（註33)、杉平野内においても時期により集落の移動が行われていたことが明らかになっている。また、V字溝の存在は、ある程度まとまった数の集団による集落が営まれていたことを裏付けるであろう。

古墳時代終末期頃にも集落が形成されているが、遺構・遺物共に杉遺跡内では最も多く見られた。住居址等山陰の特徴が色濃い集落であり、山陽地域の文化が波及してくる過渡期にあたる時期であったことが窺える。住居址には鉄滓を伴うものも存在したがその時期を確認することができず、また、関連遺構も見つからなかった。

古代とされる遺構は今回の調査では確認することができなかったが、陶馬・土馬等の祭祀遺物が出土している。残念ながらこれらの遺物については時間の都合上深く追求することはできず、古代祭祀の形態を解明するための一資料として掲載するのみで終わったことは残念である。今後の研究に生かせることを望みたい。

中世～近世初頭にかけては西屋城及びその攻防戦に深い関わりが想像できる遺構・遺物が検出された。西屋城の築造時期については文献等においても明らかになっていないが、掘立柱建物や、柵列、幾度も建て替えがなされたと思われる多数の柱穴や輸入陶磁の出土は、古くから交通の要衝であったこの地を治める支配者層の屋敷地が存在していたことが窺われる。それが西屋城築城に前後するものかどうかは今後の課題となるであろうが、近世初頭には墓地として利用され、古くから地元に伝わる伝説を実証する手掛かりとなった。

以上、杉遺跡における簡単なまとめを述べてきた。奥津町内においては現在も苫田ダム建設に伴う大規模な調査等が進められているが、断片的ながらも奥津町の空白部分が見えてきたといっても過言ではないだろう。そうしたなかでの今回の調査は町域南部の広い平野部だけでなく狭小な段丘部においても独特の生活様式をもって連綿と集落が営まれていたことが明らかになった。残念ながら、好資料に恵まれ、多くの方々にご指導・ご助言をいただいたにもかかわらず、調査担当者の力不足によりこれらを十分に反映できず多くの課題を残すことになってしまったことが悔やまれてならない。しかしこれから徐々に進展しつつある吉井川上流部における歴史の解明に向けて残された課題に取り組めるよう努力したい。

《註》

1　松本和男　「高下休場遺跡・西屋Ａ遺跡」『奥津町埋蔵文化財報告２』　奥津町教育委員会　1995

2　橋本惣司氏のご教示による

3　行田裕美　「西吉田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』　岡山県教育委員会　1985

4　岡田博・山磨康平ほか　「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書８』　岡山県教育委員会　1975

5　前掲３

6　前掲３

7　行田裕美ほか　「小原遺跡－津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告８－」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』　津山市教育委員会　1991

8　河本清・中山俊紀・安川豊史・行田裕美　「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会　1981

9　前掲７

10　中山俊紀　「京免・竹の下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』　津山市教育委員会　1982

11　『発掘された久田の埋蔵文化財』Ⅰ　建設省苫田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター　1997
『久田原遺跡現地説明会資料』岡山県古代吉備文化財センター・建設省苫田ダム工事事務所　1997･1999

12　橋本惣司　「土路江遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告１』　奥津町教育委員会　1993

13　田辺昭三　「陶邑古窯址群」Ⅰ　平安学園考古クラブ　1966
田辺昭三　「須恵器大成」　角川書店　1981

14　西弘海　「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ奈良国立文化財研究所　1978

15　村上幸雄ほか　「糠山遺跡群」Ⅱ　1980

16　横田美香　「須恵器の年代」『定北古墳』　岡山大学考古学研究室　1995

17　弘田和司　「西大沢古墳群　畑の平古墳群　虫尾遺跡　黒土中世墓　茂平古墓　茂平城」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111』　岡山県教育委員会　1996

18　團正雄　「福吉丸山遺跡」『勝央町文化財調査報告４』　1999

19　前掲16・17・18

20　宮本長二郎　「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版　1996

21　調査担当者である下澤公明氏にご教示を得た。

22　前掲17

23　前掲12

24　前掲11

25　中世土器研究会編　「概説　中世の土器・陶磁器」　真陽社　1995

26　鈴木康之　「土器」『草戸千軒遺跡発掘調査報告Ⅴ』　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編　1996

27　武本章司　「言葉の綾取り手玉うた」　1992
武本章司氏にご教示を得た。

28　行田裕美　「鉄鐸について」「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集』

29　藤森栄一　「銅鐸」　学生社　1974

30　真弓常忠　「古代の鉄と神々」　学生社　1997

31　前掲30

32　前掲11　調査担当者である岡田博氏にご教示を得た。

33　藤田憲司・柳瀬昭彦　「弥生時代」『岡山県の考古学』　1987

土器観察表

番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高				
1	竪穴住居1	弥生土器	壷	16.9			白橙色	細砂	良好	円形浮文4個＊6ヶ所
2	竪穴住居1	弥生土器	壷	17.3			にぶい橙色	細砂	良好	円形浮文3個＊5ヶ所
3	竪穴住居1	弥生土器	壷				にぶい橙色	細砂	良好	
4	竪穴住居1	弥生土器	壷	17.8			灰黄色	細砂	良好	
5	竪穴住居1	弥生土器	甕	22.5			灰橙色	細砂	良好	
6	竪穴住居1	弥生土器			8.6		灰黄褐色	細砂	良好	
7	竪穴住居1	弥生土器			5.8		灰褐色	細砂	良好	
8	竪穴住居2	須恵器	杯蓋	13.9		3.9	黒灰色	粗砂	良好	ロクロ回転右
9	竪穴住居2	須恵器	杯蓋	13.1		4.6	淡灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
10	竪穴住居2	須恵器	杯蓋	12.2			灰白色	細砂	良好	ロクロ回転右
11	竪穴住居2	須恵器	杯蓋	12.8	4.2		灰白色	細砂	やや良好	ロクロ回転右
12	竪穴住居2	須恵器	杯身	14.1		3.7	黄灰白色	細砂	不良	ヘラケズリ省略
13	竪穴住居2	須恵器	杯身	12.1		4.1	暗灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
14	竪穴住居2	須恵器	高杯	12.2			暗灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
15	竪穴住居2	須恵器	有蓋高杯	13.4			灰白色	粗砂	不良	ロクロ回転右
16	竪穴住居2	須恵器	壷				灰白色	細砂	やや不良	
17	竪穴住居3	土師器	甑	25.6			淡橙色	細砂	良好	
18	竪穴住居3	土師器	甕	13.2			淡橙褐色	粗砂	良好	
19	竪穴住居3	須恵器	甕	18.1			灰白色	細砂	不良	
20	竪穴住居3	須恵器	杯身	10.4		3.5	暗灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
21	竪穴住居4	須恵器	杯身	12.1		3.8	灰白色	細砂	不良	ロクロ回転左
22	竪穴住居4	須恵器	杯身	11.2		3.3	灰黒色	細砂	良好	ロクロ回転右
23	竪穴住居5	土師器	甕	14.2			黄褐色	粗砂	やや不良	
24	竪穴住居5	須恵器	杯蓋	13.5		3.9	明灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
25	竪穴住居5	須恵器	杯蓋	12.8		3.9	灰白色	細砂	やや不良	ロクロ回転右
26	竪穴住居5	須恵器	杯身	12.1		3.2	明灰色	細砂	良好	ロクロ回転左
27	竪穴住居5	須恵器	杯身	12.2		3.7	灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
28	竪穴住居5	須恵器	杯身	13.8		3.7	黄白色	細砂	不良	ロクロ回転右
29	竪穴住居5	須恵器	甕	22.4			灰色	細砂	良好	
30	竪穴住居6	土師器	甕				茶褐色	粗砂	良好	
31	竪穴住居7	弥生土器	甕	17.9			橙褐色	細砂	良好	
32	竪穴住居7	弥生土器	甕	13.9			灰黄褐色	細砂	良好	
33	竪穴住居7	弥生土器	高杯				灰橙色	細砂	良好	
34	竪穴住居8	須恵器	杯身	10.2		4.1	灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
35	竪穴住居8	須恵器	短頸壷	8.1		4.7	黄灰色	細砂	良好	
36	竪穴住居9	土師器	甕	23.8			暗黄褐色	粗砂	良好	
37	竪穴住居9	土師器	甕	22.1			暗黄褐色	粗砂	良好	
38	竪穴住居9	須恵器	杯身	9.8		5.1	淡黄灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
39	竪穴住居9	須恵器	高杯	12.1	9.6	9.8	明灰色	細砂	良好	
40	竪穴住居9	須恵器	甕				明灰色	細砂	良好	
41	竪穴住居10	土師器	甕	20.6			淡黄褐色	粗砂	良好	
42	竪穴住居10	須恵器	杯蓋	13.1		4.2	黒灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
43	竪穴住居10	須恵器	甕	13.1			灰白色	細砂	良好	
44	竪穴住居11	須恵器	鉢	12.5		5.7	黄褐色	粗砂	やや不良	
45	竪穴住居11	土師器	甕	12.1			橙黄色	粗砂	やや良好	
46	竪穴住居11	土師器	高杯		9.4		白灰色	細砂	不良	
47	竪穴住居12	土師器	甕	13.1			茶褐色	粗砂	良好	
48	竪穴住居12	土師器	杯身				灰黄色	細砂	良好	
49	竪穴住居13	土師器	甕	19.8			暗黄褐色	粗砂	良好	
50	竪穴住居13	土師器	甕	22.6			茶褐色	粗砂	良好	
51	竪穴住居13	土師器	甕	20.4			茶褐色	粗砂	良好	
52	竪穴住居14	土師器	甕	18.4			淡橙褐色	粗砂	良好	
53	竪穴住居14	土師器	甕	21.9			橙褐色	粗砂	良好	
54	竪穴住居18	土師器	甕	19.5			灰橙褐色	粗砂	良好	
55	竪穴住居18	土師器	甕	15.6			茶褐色	粗砂	良好	
56	竪穴住居18	土師器	甕	15.4			橙色	粗砂	良好	
57	竪穴住居18	土師器	杯	11.1		3.7	淡橙色	精良	良好	放射状暗文
58	竪穴住居18	須恵器	杯蓋	11.9		3.3	灰白色	細砂	やや不良	ヘラケズリ省略
59	竪穴住居18	須恵器	杯身	10.2		4.1	灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
60	竪穴住居18	須恵器	短頸壷	10.5		16.9	灰色	細砂	良好	
61	竪穴住居18	須恵器	高杯	13.7			黄褐色	細砂	不良	
62	竪穴住居18	須恵器	壷				灰白色	細砂	良好	
63	竪穴住居19	土師器	甕	19.3			橙色	粗砂	やや不良	
64	竪穴住居19	土師器	鍋	19.8		19.1	橙褐色	粗砂	良好	
65	竪穴住居19	土師器	甑	28.3	12.6	35.7	黄褐色	粗砂	良好	
66	竪穴住居19	須恵器	瓶				灰色	細砂	良好	一部自然釉付着
67	竪穴住居21	土師器	甕	20.1			茶褐色	粗砂	良好	
68	竪穴住居22	須恵器	杯蓋	10.9		3.7	灰黒色	細砂	良好	ロクロ回転右
69	竪穴住居22	須恵器	高杯				灰色	細砂	良好	
70	竪穴住居24	須恵器	杯蓋	12		3.6	黄白色	粗砂	不良	ヘラケズリ省略
71	竪穴住居24	須恵器	杯身	10.3		4.1	淡灰色	粗砂	良好	ヘラケズリ省略
72	竪穴住居24	須恵器	杯身	11.8		4.4	灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
73	竪穴住居24	須恵器	杯身	11.7		4.2	灰白色	細砂	やや良好	ロクロ回転右
74	竪穴住居24	須恵器	杯身	13.6		3.3	暗灰色	細砂	良好	ロクロ回転右
75	竪穴住居24	須恵器	杯身	11.6		3.5	灰白色	細砂	やや良好	ヘラケズリ省略
76	竪穴住居24	須恵器	高杯		9.9		灰白色	細砂	良好	
77	竪穴住居24	須恵器	短頸壷	11.4			灰色	粗砂	良好	
78	竪穴住居26	須恵器	壷				明灰色	細砂	良好	
79	竪穴住居27	土師器	甑				橙褐色	細砂	良好	
80	竪穴住居27	須恵器	杯身	11.9			黄白色	粗砂	やや不良	ロクロ回転右

番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高				
81	竪穴住居27	須恵器	高杯	11.6	8.6		黄白色	粗砂	やや不良	
82	竪穴住居28	土師器	甕	19.4			橙灰色	粗砂	やや良好	
83	竪穴住居28	須恵器	杯蓋	12.2			灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
84	竪穴住居28	須恵器	杯身	11.8			灰色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
85	竪穴住居29	弥生土器	甕	13.9			褐黄色	粗砂	良好	
86	竪穴住居29	弥生土器	甕	12.2			橙色	粗砂	良好	
87	竪穴住居29	弥生土器	甕	15.3			橙色	粗砂	良好	
88	竪穴住居29	弥生土器	甕	14			淡橙色	粗砂	良好	
89	竪穴住居29	弥生土器	甕	14.8			橙色	粗砂	良好	
90	竪穴住居29	弥生土器	壺		9.8		褐色	粗砂	良好	
91	竪穴住居29	弥生土器	甕	7.5			灰褐色	粗砂	良好	
92	竪穴住居29	弥生土器	鉢	14.1			褐色	粗砂	良好	
93	掘立柱建物4	土師器	小皿	8			茶褐色	細砂	良好	
94	井戸1	弥生土器	壺	21.6	5.2		暗茶褐色	細砂	良好	
95	溝2	弥生土器	壺				白橙色	細砂	良好	
96	溝2	弥生土器	壺				灰橙色	細砂	良好	
97	溝2	弥生土器	甕	19.2			灰黄褐色	細砂	良好	
98	溝2	弥生土器	台付壺	11.5			灰黄褐色	細砂	良好	
99	溝3	弥生土器	甕	17			赤褐色	粗砂	良好	
100	溝4	弥生土器	甕	28.1			橙色	細砂	良好	
101	溝4	弥生土器	壺	17.1			赤褐色	細砂	良好	
102	溝5	弥生土器	壺	16.5			黄褐色	細砂	良好	
103	溝5	弥生土器	壺	17.8			褐色	細砂	良好	
104	溝5	弥生土器	壺	13.8			暗褐色	細砂	良好	
105	溝5	弥生土器	壺	19.6			茶褐色	細砂	良好	
106	溝5	弥生土器	壺	15.8			茶褐色	細砂	良好	
107	溝5	弥生土器	壺	11.6			茶褐色	細砂	良好	
108	溝5	弥生土器	壺	18.2			茶褐色	細砂	良好	
109	溝5	弥生土器	壺	17.4			茶褐色	細砂	良好	
110	溝5	弥生土器	高杯				赤褐色	細砂	良好	
111	溝5	弥生土器	高杯	21.2			灰黄褐色	細砂	良好	
112	炉4	土師器	甕	26.1			橙褐色	粗砂	良好	
113	炉4	土師器	甕	15.4			橙褐色	粗砂	良好	
114	炉4	須恵器	杯蓋	12.6		3.5	灰白色	細砂	良好	ヘラケズリ省略
115	炉4	須恵器	杯身	11.1		3.8	灰色	粗砂	良好	
116	炉4	須恵器	高杯	13.2	9.8	8.9	灰色	細砂	良好	
117	土壙18	土師器	小皿				茶褐色	微砂	良好	
118	土壙19	土師器	小皿				茶褐色	細砂	良好	
119	土壙20	瓦質土器	鍋				灰黒色	細砂	良好	
120	土壙20	瓦質土器	鍋				灰黒色	細砂	良好	
121	土壙20	土師器	鍋				黄白色	粗砂	やや不良	
122	土壙21	勝間田焼	壺	17			淡茶褐色	細砂	良好	
123	土壙21	瓦質土器	鍋				黒灰色	細砂	良好	
124	土壙24	瓦質土器	鍋				灰白色	粗砂	良好	
125	土壙24	瓦質土器	鍋	29.6			灰黒色	粗砂	良好	
126	土壙24	土師器	鍋				灰黄白色	粗砂	良好	
127	土壙24	瓦質土器	鉢				灰黒色	粗砂	良好	
128	土壙26	肥前陶器	椀	11.8	5.2	3	緑黄灰色	細砂	良好	灰釉陶器・墨書「大」
129	土壙27	瀬戸系陶器	卸皿	16.3	7.4	4.4	淡緑灰色	細砂	良好	
130	土壙27	瓦質土器	鍋				灰黒色	細砂	良好	
131	土壙29	青磁	椀				淡緑青色	細砂	良好	
132	土壙30	瓦質土器	釜	33			黒灰色	細砂	良好	
133	土壙34	備前焼	擂鉢				赤茶色	細砂	良好	
134	土壙34	土師器	小皿	8	5.3	1.1	黄褐色	細砂	良好	
135	土壙34	土師器	小皿	7.2	4.9	1.2	黒灰色	細砂	良好	
136	土壙35	瓦質土器	鍋				灰白色	粗砂	やや良好	
137	土壙36	備前焼	甕				赤茶色	細砂	良好	
138	土壙36	備前焼	擂鉢				赤茶色	細砂	良好	
139	土壙37	土師器	小皿	7.8	5.5	1.6	灰褐色	細砂	良好	
140	土壙37	土師器	小皿	7.8	5.8	1.7	黒灰色	細砂	良好	
141	土壙37	土師器	小皿	7.8	6.2	1.1	灰褐色	細砂	良好	
142	土器溜り	弥生土器	壺	16.4	10.1	40.5	灰黄褐色	細砂	良好	
143	土器溜り	弥生土器	壺			20.2	灰橙色	細砂	良好	
144	土器溜り	弥生土器	壺	17.2			灰橙色	細砂	良好	
145	土器溜り	弥生土器	高杯				褐色	細砂	良好	
146	土器溜り	弥生土器	高杯	23.5			灰褐色	細砂	良好	
147	土器溜り	弥生土器	高杯	18.8			橙黄色	細砂	良好	
148	土器溜り	弥生土器	台付鉢		8.6		黒褐色	細砂	良好	
149	土器溜り	弥生土器	甕		6.5		褐色	細砂	良好	
150	土器溜り	弥生土器	甕	14.9			灰黄褐色	細砂	良好	
151	土器溜り	弥生土器	甕				灰黄褐色	細砂	良好	
152	古墳	土師器	杯	11.6		3.7	赤褐色	細砂	良好	
153	古墳	須恵器	高杯	9.4	6.7	8.3	黄灰色	細砂	やや不良	
154	古墳	須恵器	高杯	11.9	8.5	8.5	青灰色	細砂	良好	
155	古墳	須恵器	はそう	6.2		8.6	灰色	細砂	良好	
156	古墳	須恵器	短頸壺	6.2		8.9	灰白色	細砂	良好	
157	包含層	弥生土器	甕	14.9			橙色	細砂	良好	
158	包含層	弥生土器	甕	14.6			茶褐色	細砂	良好	
159	包含層	弥生土器	甕	14.5			橙褐色	細砂	良好	
160	包含層	弥生土器	甕	12.6			橙灰色	細砂	良好	
161	包含層	弥生土器	甕				褐色	細砂	良好	
162	包含層	弥生土器	高杯	16.2			橙褐色	細砂	良好	
163	包含層	弥生土器	高杯	23.8			橙黄色	細砂	良好	

番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	備考
				口径	底径	器高				
164	包含層	弥生土器	壺	13.6			灰橙色	細砂	良好	
165	包含層	弥生土器	鼓形器台	14.7			橙色	細砂	良好	
166	包含層	土師器	甕	24.1			灰黄色	粗砂	良好	
167	包含層	土師器	甕	21.4			橙色	粗砂	良好	
168	包含層	土師器	鉢	9.9			灰黒色	粗砂	良好	手捏ね
169	包含層	土師器	小型丸底壺	9.8			茶褐色	粗砂	良好	
170	包含層	土師器	鉢	12.9		10	淡褐色	粗砂	良好	手捏ね
171	包含層	須恵器	杯蓋	12.9		4.1	灰白色	細砂	良好	
172	包含層	須恵器	杯蓋	12.4		3.9	灰色	細砂	良好	
173	包含層	須恵器	杯蓋	11.1		3.8	灰白色	粗砂	良好	
174	包含層	須恵器	杯蓋	13.4		4.4	灰白色	細砂	良好	
175	包含層	須恵器	杯蓋	11.6		3.2	灰黒色	細砂	良好	
176	包含層	須恵器	杯蓋	13.2			灰褐色	細砂	やや不良	
177	包含層	須恵器	杯蓋	12.5		4.3	灰黒色	粗砂	良好	
178	包含層	須恵器	杯身	12.8		4.2	白黄灰色	細砂	やや不良	
179	包含層	須恵器	杯身	12.6		3.8	灰白色	細砂	やや不良	
180	包含層	須恵器	杯身	11.8		3.7	灰黄色	粗砂	良好	
181	包含層	須恵器	杯身	12.4		3.7	灰白色	粗砂	良好	
182	包含層	須恵器	杯身	12		4.5	灰白色	粗砂	良好	
183	包含層	須恵器	杯身	9.8		3.8	灰白色	粗砂	良好	
184	包含層	須恵器	杯身	9.7		4.1	灰白色	粗砂	良好	
185	包含層	須恵器	高杯				灰黄色	細砂	やや不良	
186	包含層	須恵器	高杯	13.6			灰色	粗砂	良好	
187	包含層	須恵器	高杯	13.9			灰黒色	細砂	良好	
188	包含層	須恵器	高杯		8.1		灰白色	細砂	良好	
189	包含層	須恵器	高杯		8.9		灰白色	粗砂	良好	
190	包含層	須恵器	高杯		9.4		白灰色	粗砂	やや不良	
191	包含層	須恵器	高杯		10.3		黄灰白色	細砂	良好	
192	包含層	須恵器	高杯		10.2		黄白色	粗砂	良好	
193	包含層	須恵器	蓋	11.8			灰白色	細砂	良好	
194	包含層	須恵器	蓋				灰白色	細砂	良好	
195	包含層	須恵器	蓋				灰白色	細砂	良好	
196	包含層	須恵器	蓋				灰色	細砂	良好	
197	包含層	須恵器	杯				白灰色	粗砂	良好	
198	包含層	須恵器	杯	12.4	10	3.5	灰色	細砂	良好	貼付高台
199	包含層	須恵器	杯	19.6	11.6	6.8	青灰色	細砂	良好	貼付高台
200	包含層	須恵器	杯		8.6		灰色	細砂	良好	貼付高台
201	包含層	須恵器	杯		11.9		暗灰色	細砂	良好	貼付高台
202	包含層	須恵器	杯		11		灰色	細砂	良好	貼付高台
203	包含層	須恵器	壺		11.8		明灰色	細砂	良好	貼付高台
204	包含層	須恵器	平瓶				青灰色	細砂	良好	
205	包含層	須恵器	壺				灰色	細砂	良好	
206	包含層	須恵器	皿	19.2	13.8	2.4	白灰色	細砂	やや不良	
207	包含層	土師器	鍋	45.2		14.8	灰黄色	細砂	良好	
208	包含層	瓦質土器	鍋	36.3			灰黒色	細砂	良好	
209	包含層	瓦質土器	鍋				黒灰色	粗砂	良好	
210	包含層	瓦質土器	鍋				灰黒色	細砂	良好	
211	包含層	瓦質土器	椀	13.6	6.6	3.5	黄褐色	細砂	良好	
212	包含層	土師器	小皿	7.8	5.5	1.4	赤褐色	細砂	良好	
213	包含層	土師器	小皿	7.8	5.6	1.4	赤褐色	細砂	良好	
214	包含層	土師器	小皿	7.7	5.2	1.6	赤褐色	細砂	良好	
215	包含層	土師器	小皿	7.7	5.5	1.5	赤褐色	細砂	良好	
216	包含層	土師器	小皿	7.4	5.2	1.4	赤褐色	細砂	良好	
217	包含層	土師器	小皿	7.8	5.6	1.5	赤褐色	細砂	良好	
218	包含層	土師器	小皿	9.6	5.9	2.1	赤褐色	微砂	良好	
219	包含層	土師器	小皿	8.5	5.6	1.4	赤褐色	細砂	良好	
220	包含層	土師器	小皿	8.4	5.8	1.5	赤褐色	微砂	良好	
221	包含層	土師器	小皿	9.5	5.2	2	淡赤褐色	細砂	良好	
222	包含層	土師器	小皿	7.8	5.4	1.5	赤褐色	細砂	良好	
223	包含層	土師器	小皿	7.9	7.2	1.4	赤茶色	細砂	良好	
224	包含層	土師器	小皿	7.3	6.2	1.4	赤茶色	細砂	やや不良	
225	包含層	土師器	小皿	7.4	5	1.4	赤茶色	細砂	良好	
226	包含層	土師器	小皿	9.3	5.6	1.7	赤褐色	粗砂	良好	
227	包含層	土師器	小皿	7.2	5.8	1.1	赤褐色	細砂	良好	
228	包含層	土師器	擂鉢	31.5	18.1	12	淡赤褐色	細砂	良好	
229	包含層	肥前系陶器	椀		3.8		黄褐色	細砂	良好	
230	包含層	肥前系陶器	椀		4.4		黄褐色	細砂	良好	
231	包含層	瀬戸系陶器	椀	12.9			黒茶色	微砂	良好	天目茶碗
232	包含層	瀬戸系陶器	小皿	11.2	6.5	2.9	緑灰色	精良	良好	緑釉陶器
233	包含層	白磁	皿	6.2	3.8	1.5	白色	精良	良好	
234	包含層	瀬戸系陶器	皿				緑灰色	精良	良好	緑釉陶器

土製品観察表

番号	掲載遺構名	器　種	法量(cm)				重量（g）	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			長さ	幅	厚さ	孔径					
C 1	竪穴住居 1	紡錘車	2.2	2.1	0.6	0.4	4.2	淡黄褐色	細砂	良好	土器片転用
C 2	竪穴住居 1	紡錘車	4.3	4	0.4	0.4	12.3	暗褐色	細砂	良好	土器片転用
C 3	竪穴住居 1	紡錘車	3.4	3.1		0.6	9.4	暗褐色	細砂	良好	土器片転用
C 4	竪穴住居 1	紡錘車	3.6	2.9	0.5	0.6	9.2	暗黄褐色	細砂	良好	土器片転用
C 5	竪穴住居 1	紡錘車	4.1	3.5	0.5	0.7	12.8	黒褐色	細砂	良好	土器片転用
C 6	竪穴住居 1	紡錘車	3.4	2.4	0.5	0.3	6.8	淡褐色	細砂	良好	土器片転用
C 7	竪穴住居 7	紡錘車	5.9	3.2	0.4	0.7	12.9	橙褐色	細砂	良好	土器片転用
C 8	竪穴住居 7	紡錘車	5.6	1.4	0.4	0.5	13.5	暗褐色	細砂	良好	土器片転用
C 9	土壙18	土錘	5.3	1.2	0.3	0.6	14.1	暗灰色	精良	良好	
C10	土壙20	土錘	4.5	1.4	0.5	0.4	12.8	暗褐色	細砂	良好	
C11	土器溜り	紡錘車	4.4	3.4	0.4	0.9	9.8	淡灰褐色	細砂	良好	土器片転用
C12	包含層	分銅形土製品	5.1	3.3	0.7		18.3	暗褐色	細砂	良好	
C13	包含層	陶馬	7.5	4.7	1.1	2.1	127.2	淡灰白色	細砂	良好	
C14	包含層	土馬	12.6	4.4	3.9		203.1	淡灰黄色	細砂	良好	
C15	包含層	土錘	5	1.8	0.9	0.3	14.2	暗灰褐色	細砂	良好	
C16	包含層	土錘	3.8	1.8	0.6	0.4	8	淡灰褐色	精良	良好	
C17	包含層	土錘	3.9	1.1	0.4	0.3	8.2	淡橙色	精良	良好	
C18	包含層	土錘	4.5	1.3	0.5	0.4	10.6	淡橙黄色	細砂	良好	
C19	包含層	土錘	4.4	1.4	0.5	0.4	12.1	褐灰色	細砂	良好	
C20	包含層	土錘	5.5	1.2	0.5	0.4	10.2	灰色	細砂	良好	
C21	包含層	土錘	5.7	1.4	0.6	0.4	11.7	灰色	細砂	良好	
C22	包含層	土錘	5.6	1.2	0.4	0.4	10.3	淡灰色	細砂	良好	
C23	包含層	土錘	5.3	1.3	0.5	0.3	11.2	暗灰色	細砂	良好	
C24	包含層	土錘	5.3	1.4	0.6	0.3	10.2	灰色	細砂	良好	
C25	包含層	土錘	5.3	1.4	0.5	0.4	9.2	暗灰黄色	細砂	良好	
C26	包含層	土錘	5.1	1.4	0.5	0.4	10.5	暗灰色	細砂	良好	
C27	包含層	土錘	5.8	1.5	0.6	0.4	13.1	淡灰色	細砂	良好	
C28	包含層	土錘	5.2	1.4	0.6	0.4	11.3	灰色	細砂	良好	
C29	包含層	土錘	5	1.6	0.7	0.4	12.8	灰黄色	細砂	良好	
C30	包含層	土錘	5.3	1.4	0.5	0.5	10.2	淡灰黄色	細砂	良好	
C31	包含層	土錘	4.6	1.7	0.7	0.4	14.1	灰褐色	細砂	良好	
C32	包含層	土錘	4.9	1.6	0.6	0.5	11.2	淡黄白色	細砂	良好	
C33	包含層	土錘	4.8	1.8	0.8	0.5	13.1	淡橙灰色	細砂	良好	
C34	包含層	土錘	5	0.5	0.7	0.7	20.2	暗灰褐色	細砂	良好	
C35	包含層	土錘	5.4	1.3	0.6	0.4	13	淡灰色	細砂	良好	
C36	包含層	土錘	4.5	1.1	0.4	0.3	7.2	橙灰色	細砂	良好	
C37	包含層	土錘	5	1.4	0.6	0.4	10.2	黄灰色	細砂	良好	
C38	包含層	土錘	4.7	1.6	0.6	0.5	12.9	にぶい灰黄色	細砂	良好	
C39	包含層	土錘	6.7	1.9	0.7	0.5	24.1	淡黄灰色	細砂	良好	
C40	包含層	土錘	4.9	1.4	0.6	0.3	10.2	淡灰色	細砂	良好	
C41	包含層	土錘	5.5	1.5	0.6	0.3	14.2	灰白色	細砂	良好	
C42	包含層	土錘	5.3	1.4	0.6	0.4	14.1	浅黄色	細砂	良好	
C43	包含層	土錘	5.7	0.9	0.4	0.1	7	黄灰色	細砂	良好	
C44	包含層	土錘	5.5	1.3	0.6	0.3	14.1	灰白色	細砂	良好	
C45	包含層	土錘	5.2	1.4	0.6	0.3	12.5	灰色	細砂	良好	
C46	包含層	土錘	5.4	1.3	0.6	0.3	13.7	灰色	細砂	良好	
C47	包含層	土錘	5.4	1.4	0.7	0.4	12.6	黄灰色	細砂	良好	
C48	包含層	土錘	5.2	1.2	0.5	0.3	10.2	灰色	細砂	良好	

石器観察表

番号	掲載遺構名	遺　物	材　質	法量(cm)			重量（g）	備　考
				長さ	幅	厚さ		
S 1	竪穴住居1	作業台		39.9	25.1	12.8	19680	
S 2	竪穴住居1	作業台		44.7	35.2	9.8	21900	
S 3	竪穴住居1	叩石		25.3	12.5	11.3	3390	
S 4	竪穴住居 7	石鏃	サヌカイト	2.1	1.3	0.5	3.2	
S 5	竪穴住居 7	石庖丁	結晶片岩	6	5.6	0.6	36.2	
S 6	溝2	石庖丁	結晶片岩	6	5.6	0.5	29.5	未製品
S 7	溝 4	石匙	サヌカイト	5.5	3.9	0.8	18.2	縄文時代
S 8	包含層	石匙	サヌカイト	5.1	1.2	0.7	3.3	縄文時代
S 9	包含層	石鏃	サヌカイト	2.3	1.4	0.2	2.1	
S10	包含層	石鏃	サヌカイト	4.8	2.2	0.4	6.3	
S11	包含層	石庖丁	結晶片岩	5.1	3.5	0.8	49.1	
S12	包含層	石庖丁	粘板岩	5	3	0.8	17.2	
S13	包含層	扁平片刃石斧	結晶片岩	5.2	4.1	0.9	3.4	
S14	包含層	石庖丁	粘板岩	11.7	7	1.7	144.7	未製品
S15	包含層	石庖丁	砂岩	14.8	4.4	0.9	92.1	
S16	包含層	石庖丁	片岩	8.8	3.8	0.7	51.4	
S17	包含層	砥石	流紋岩	4.8	2	1.6	16.5	
S18	包含層	砥石	流紋岩	12.8	6.6	3.7	562	
S19	包含層	砥石	流紋岩	5	3.8	2.9	119.5	
S20	包含層	砥石	砂岩	5.4	2.4	1.7	57.2	
S21	包含層	砥石	流紋岩	9.5	5.7	1.3	186.2	
S22	包含層	砥石	砂岩	8.3	3.3	2.6	108.9	
S23	包含層	砥石	砂岩	7.3	4.7	2.2	110.1	

金属器観察表

番号	掲載遺構名	器　種	法量(cm)				重量（g）	材　質	備　考
			長さ	幅	厚さ	孔径			
M 1	竪穴住居20	鎌	6.3	3.8	0.2		25.2	鉄	
M 2	竪穴住居24	鎌	11.7	3.2	0.3		41.2	鉄	長さは残存長
M 3	竪穴住居27	鎌	14.1	2.9	0.4		79.5	鉄	
M 4	掘立柱建物 4	釘	2.4	0.7	0.6		7.7	鉄	長さは残存長
M 5	土壙27	刀子	6.1	1.8	0.5		16.1	鉄	
M 6	土壙34	銭貨	2.4	2.3	0.2	0.7	2.1	銅	□□元寶
M 7	土壙36	釘	10.2	0.7	0.7		21.1	鉄	
M 8	土壙37	釘	8.2	0.7	0.6		21.5	鉄	
M 9	土壙37	釘	8.5	0.8	0.7		14	鉄	
M10	土壙37	釘	8.4	0.8	0.6		12.5	鉄	
M11	土壙37	釘	9.4	1.1	0.9		18.1	鉄	
M12	土壙37	釘	6.2	0.9	0.7		12.7	鉄	長さは残存長
M13	土壙37	釘	5.1	0.8	0.7		11.2	鉄	長さは残存長
M14	土壙37	釘	5.7	0.7	0.7		9.3	鉄	長さは残存長
M15	土壙37	釘	3.3	1 0.9			8.1	鉄	長さは残存長
M16	土壙墓 1	刀子	18.6	1.2	0.5		56.3	鉄	
M17	土壙墓 1	鎌	15.9	3.2	0.7		102.6	鉄	
M18	土壙墓 1	釘	6.4	0.7	0.7		11.2	鉄	長さは残存長
M19	土壙墓 1	釘	8.3	0.6	0.6		12.3	鉄	
M20	土壙墓 1	銭貨	2.1	2.1	2.1	0.7	1.3	銅	聖宋元寶
M21	土壙墓2	銭貨	2.6	2.6	2.6	0.6	3.7	銅	永楽通寶
M22	土壙墓2	銭貨	2.6	2.6	2.6	0.6	2.7	銅	永楽通寶
M23	土壙墓2	銭貨	2.6	2.6	2.6	0.7	3.8	銅	皇宋通寶
M24	土壙墓2	銭貨	2.5	2.5	2.5	0.7	2.3	銅	聖宋元寶
M25	土壙墓2	銭貨	2.4	2.4	2.4	0.6	3.5	銅	聖宋元寶
M26	土壙墓2	銭貨	2.3	2.3	2.3	0.6	2.2	銅	聖□□寶
M27	土壙墓2	銭貨	2.5	2.5	2.5	0.6	3.5	銅	元符通寶
M28	土壙墓2	銭貨	2.5	2.4	2.4	0.6	6.2	銅	景徳元寶
M29	土壙墓2	銭貨	2.6	2.6	2.6	0.6	3	銅	至道元寶
M30	土壙墓2	銭貨	2.4	1.9	1.9	0.6	2.1	銅	元豊通寶
M31	包含層	刀子	18.6	1.2	1.2		26.6	鉄	長さは残存長
M32	包含層	刀	16.2	3.2	3.2		107.6	鉄	長さは残存長
M33	包含層	刀	15.9	2.4	2.4		58.2	鉄	長さは残存長
M34	包含層	刀	8.4	2.8	2.8		52.9	鉄	長さは残存長
M35	包含層	刀	7.8	3.1	0.7		52.2	鉄	長さは残存長
M36	包含層	鋤先	7.9	7.7	1.5		102.3	鉄	
M37	包含層	鏃	6.9	2.4	0.8		33	鉄	
M38	包含層	鉄鐸	8.5	1.8	1.7		52.1	鉄	
M39	包含層	鉄鐸	10.1	1.7	1.6		42.7	鉄	
M40	包含層	鉄鐸	9.4	1.7	1.2		42.2	鉄	
M41	包含層	鉄鐸	7.9	1.3	1.2			鉄	
M42	包含層	鉄鐸	7.8	1.3	1.2			鉄	
M43	包含層	煙管	5.2	1.3	1.3		7.2	銅	
M44	包含層	銭貨	2.5	2.5	0.2	0.6	2.8	銅	洪武通寶
M45	包含層	銭貨	2.4	2.4	0.2	0.6	4.5	銅	洪武通寶

玉類観察表

番号	掲載遺構名	種　類	法量(cm)				重量（g）	材　質	備　考
			長さ	幅	厚さ	孔径			
O 1	竪穴住居 3	管玉	2.2	0.7	0.7	0.4	3.9	碧玉	
O 2	包含層	小玉	0.3	0.5	0.3		0.05	ガラス	

新旧遺構対応表

報告書名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居1	1区	住居址1	河田
竪穴住居2	1区	住居址2	河田
竪穴住居3	1区	住居址3	河田
竪穴住居4	1区	住居址4	河田
竪穴住居5	1区	住居址5	河田
竪穴住居6	2区	住居址6	河田
竪穴住居7	2区	弥生住居	日下
竪穴住居8	2区	住居址1	日下
竪穴住居9	2区	住居址2	日下
竪穴住居10	2区	住居址3	日下
竪穴住居11	2区	住居址4	日下
竪穴住居12	2区	住居址6	日下
竪穴住居13	2区	住居址9	日下
竪穴住居14	2区	住居址7	日下
竪穴住居15	2区	住居址10	日下
竪穴住居16	2区	住居址11	日下
竪穴住居17	2区	住居址12	日下
竪穴住居18	2区	住居址8	日下
竪穴住居19	2区	住居址5	日下
竪穴住居20	3区	住居址1	日下
竪穴住居21	3区	住居址5	日下
竪穴住居22	3区	住居址2	日下
竪穴住居23	3区	住居址3	日下
竪穴住居24	3区	住居址6	日下
竪穴住居25	3区	住居址7	日下
竪穴住居26	3区	土壙17	日下
竪穴住居27	3区	たわみ	日下
竪穴住居28	3区	住居址4	日下
竪穴住居29	5区	住居址1	日下
掘立柱建物1	1区	建物1	河田
掘立柱建物2	1区	建物2	河田
掘立柱建物3	3区	建物1	日下
掘立柱建物4	4区	建物1	日下
掘立柱建物5	4区	建物2	日下
井戸1	1区	ＳＫ115	河田
井戸2	1区	ＳＫ359	河田
溝1	1区	溝1	河田
溝2	1区	黒色土溝状遺構	河田
溝3	2区	溝1	日下
溝4	3区	溝1・2・3	日下
溝5	4区	溝1	日下
炉1	3区	炉	日下
炉2	4区	土壙3	日下
炉3	4区	土壙11	日下
炉4	2区	土器溜り	日下
柱穴列	4区	柱列	日下

報告書名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壙1	1区	ＳＫ376	河田
土壙2	1区	ＳＫ377	河田
土壙3	1区	ＳＫ378	河田
土壙4	1区	ＳＫ379	河田
土壙5	1区	ＳＫ380	河田
土壙6	2区	土壙1	日下
土壙7	2区	土壙2	日下
土壙8	2区	土壙4	日下
土壙9	2区	土壙5	日下
土壙10	3区	土壙1	日下
土壙11	3区	土壙2	日下
土壙12	3区	土壙3	日下
土壙13	3区	土壙4	日下
土壙14	3区	土壙5	日下
土壙15	3区	土壙6	日下
土壙16	3区	土壙7	日下
土壙17	3区	土壙8	日下
土壙18	3区	土壙9	日下
土壙19	3区	土壙10	日下
土壙20	3区	土壙11	日下
土壙21	3区	土壙12	日下
土壙22	3区	土壙13	日下
土壙23	3区	土壙14	日下
土壙24	3区	土壙15	日下
土壙25	3区	土壙16	日下
土壙26	4区	土壙1	日下
土壙27	4区	土壙2	日下
土壙28	4区	土壙4	日下
土壙29	4区	土壙5	日下
土壙30	4区	土壙6	日下
土壙31	4区	土壙7	日下
土壙32	4区	土壙8	日下
土壙33	4区	土壙9	日下
土壙34	4区	土壙10	日下
土壙35	4区	土壙12	日下
土壙36	4区	土壙11	日下
土壙37	4区	土壙1	日下
土壙38	4区	土壙2	日下
土壙39	4区	土壙3	日下
土壙墓1	3区	土壙墓1	日下
土壙墓	23区	土壙墓2	日下
土壙墓3	3区	土壙墓3	日下
土壙墓4	3区	土壙墓4	日下
土器溜り	1区	土器溜り	河田
古墳	5区	古墳	日下

付載　杉古墳から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座
井上貴央・影岡優子・海藤俊行

1．はじめに

岡山県苫田郡奥津町の杉遺跡の古墳から人骨が検出された。この古墳は低位河岸段丘の上に築造された古墳で、検出されたときには一部が破壊されていた。羨道部分は不明であったが、形式から見て横穴式石室であると断定された。この古墳は、現在利用されている田が開墾されたかなり古い時期に破壊されたものと考えられた。人骨は火葬骨で細片化しており、得られた所見は少ない。この人骨は、検出状況から考えて、古墳が築造されたより後の時期に火葬骨の埋納の場として散布されたものと考えられ、岡山県北部の古代墓制を考える上での一資料となるものである。

2．人骨の検出状況

石室内からは副葬品は検出されていないが、床には棺台の敷石と考えられる丸い石が4個検出されている。石室内からは骨片が散布した状況で検出されている。炭は検出されていない。検出された骨は骨片で白く変色しており、また骨の収縮や変形も著明である。また、骨の表面には亀裂を伴っているものが多いことから、火葬骨であることは明らかである。石棺床の上には砂混じりの黒色シルト質土壌が約3㎝の厚さで堆積しており、骨は主にその上面から検出されている。含まれている土壌の上下からは骨はあまり検出されていない。

検出された骨の検出状況を図1と図2に示した。頭蓋骨の部分に網点を入れて示したが、頭蓋骨は散布した状態で検出されていることがわかる。また、他の上肢骨、下肢骨も無秩序に検出されており、規則性はまったく認められない。また、このほかにも石室外の南側から同様の火葬骨が検出されている。

3．検出された人骨の部位

骨の取り上げ番号と取り上げた骨の部位を表1に示した。

頭蓋骨では前頭骨2点、側頭骨6点、後頭骨3点、頬骨片が検出されている。前頭骨には前頭縫合が認められる。眉弓はやや発達しているようである。頭蓋骨の縫合の閉鎖状況は冠状縫合と矢状縫合の一部で確認できた。縫合の外板は未閉鎖であるが、内板ではやや癒合閉鎖が進んでいる。そのほか、上顎骨片、下顎骨片が検出されている。下顎骨は左側で、歯牙は存在せず、歯槽が開存している。歯槽は第2大臼歯までの部分が存在するが、第3大臼歯に相当する歯槽は認められない。

上肢骨では、上腕骨片、左尺骨片、左橈骨片、指の末節骨が検出されている。いずれも骨片の状態で検出されており、骨最大長は計測できない。体幹の骨では椎骨片、肋骨片が検出されているのみである。寛骨は検出されていない。下肢骨では、大腿骨片、膝蓋骨片、腓骨片が検出されている。いずれも骨片であり、骨最大長を計測し得ない。

4．考察

検出された骨は、部位に重複がないことと全体的な骨の量から判断して一体分の人骨と考えてよさそうである。検出された人骨は細片化しており、火葬骨であることから、被埋葬者の年齢・性別を特定することははなはだ困難である。わずかに残存していた頭蓋骨の縫合の閉鎖状況から判断すると、被埋葬者の年齢は壮年と推察される。性別を特定できる骨は検出されていないが、下顎骨に残された

筋の付着痕がやや発達していることから考えると、男性骨であることがうかがえるが確言できない。また、骨最大長を測定できる骨が存在しないため、身長推定は不可能であった。

今回検出された火葬骨は古墳の築造に伴うものとは考えにくい。横穴式石室には棺台の敷石と考えられる石が4個検出されているが、骨片の分布範囲は木棺の位置と一致しない。また、骨と石室床の間に約3㎝の土層が介在していたこと、さらに、石室外からも火葬骨が検出されていることから考えても、今回検出された火葬骨は、本横穴墓が築造されてから後の時代に石室内に埋納された火葬骨である可能性が非常に強い。つまり、後世の人が石室を墓として利用され、その中に骨が埋納されたものと考えるのが妥当である。火葬骨の年代は、付随する副葬品があれば判定可能であるが、骨の形態学的特徴だけでは人骨の時期を特定できない。

本古墳から検出された火葬人骨のように、古墳の石室や横穴墓を後世に骨の埋葬施設として利用した例はいくつかある。筆者の知りうる限りでは、千葉県君津市市宿横穴墓、鳥取県米子市石州府古墳の例がある。

5．おわりに

以上、本横穴式石室から検出された火葬骨の状況を簡単に報告した。稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた奥津町教育委員会の各位に厚く御礼申し上げたい。

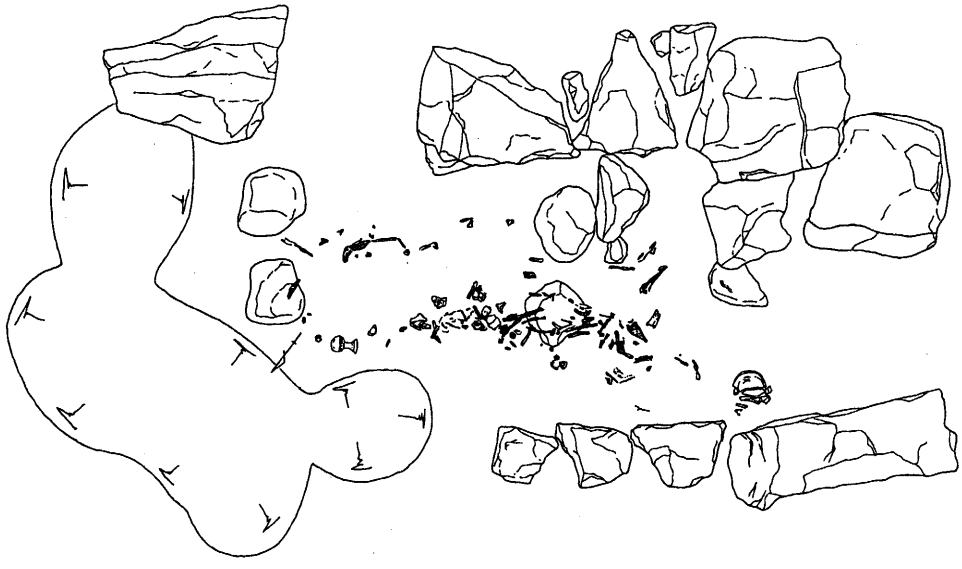


図1　杉古墳の人骨の検出状況

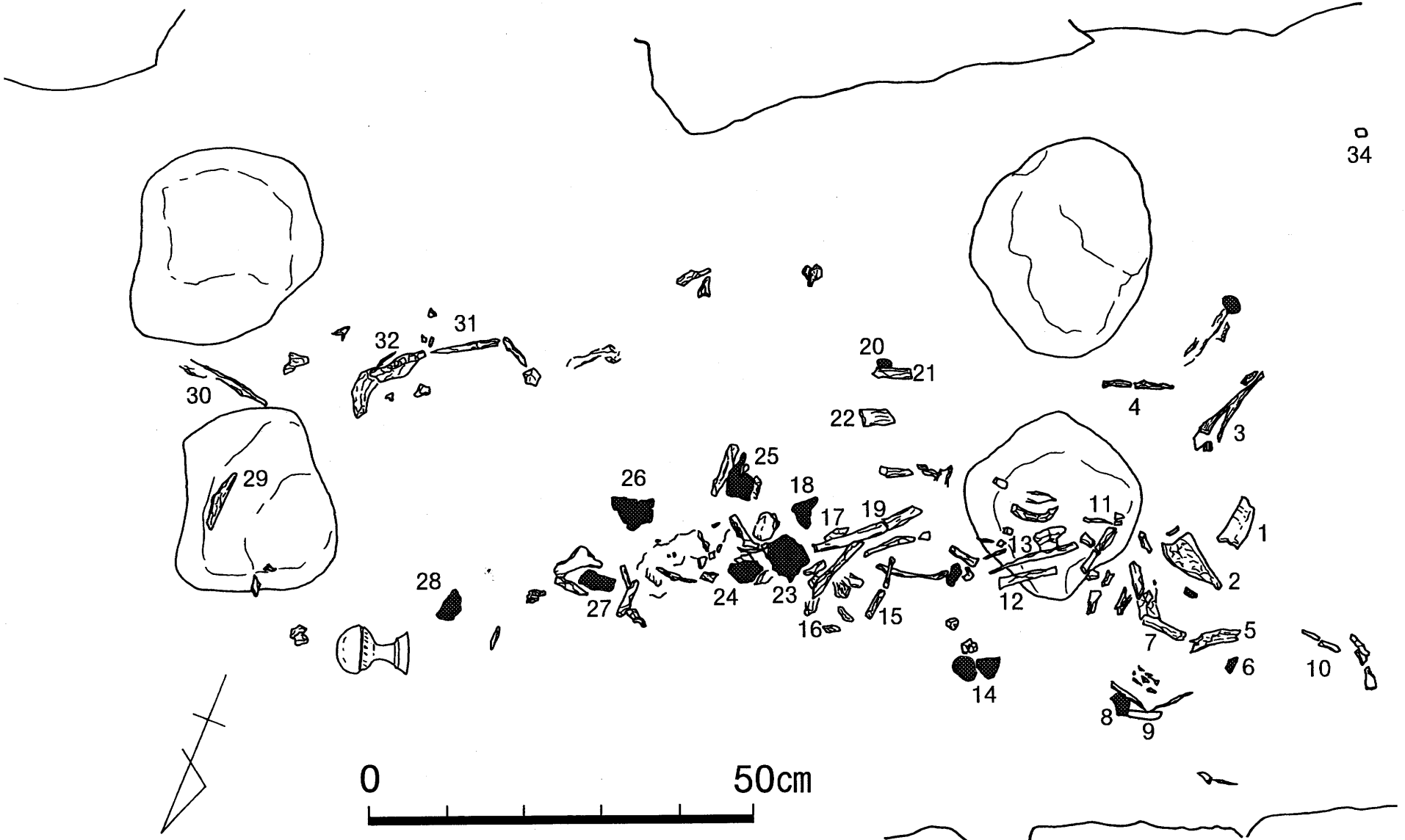
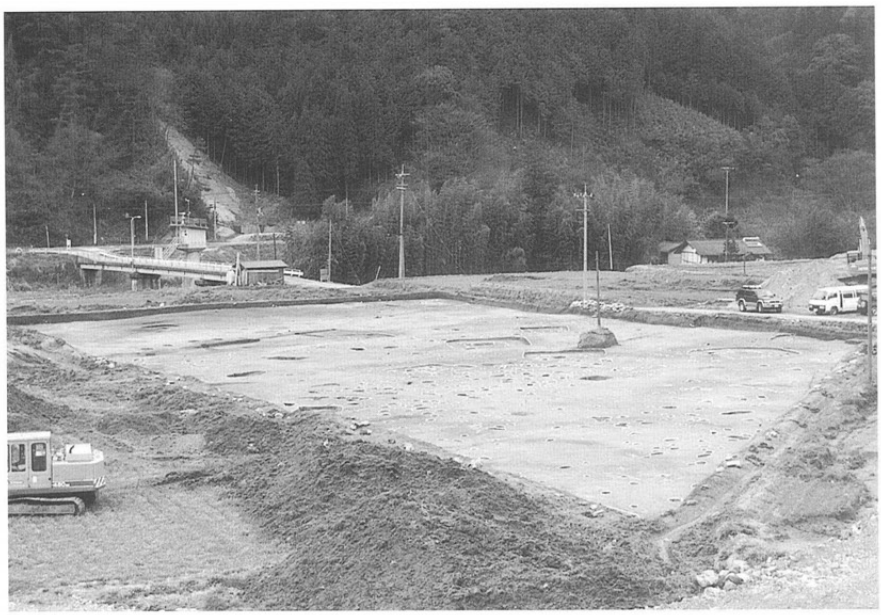


図２　石室内の人骨の散布状況（番号は骨の取り上げ番号で表１の番号と一致する）

整理番号	検出人骨の部位	備考
1	長骨片	
2	左尺骨片	
3	右上腕骨片（C-D欠）	
4	長骨片	
5	長骨片・骨片	
6	右前頭骨片（眼窩内側上部）	眉弓やや発達
7	長骨片	
8	側頭骨片	
9	骨片	
10	大腿骨片・頭蓋骨片・骨片	
11	長骨片	
12	尺骨（C）	
13	長骨片	
14	右側頭骨片	
15	肋骨片	
16	長骨	
17	骨片	
18	左側頭骨片	
19	脛骨片	
20	前頭骨片	前頭縫合あり
21	長骨片	
22	骨片	
23	左頭頂骨片	
24	後頭骨片	
25	頭蓋骨片	
26	後頭骨片	
27	骨片	
28	骨片	
29	骨片	
30	骨片	
31	右上顎骨片・頭蓋骨片・骨片	
32	下顎骨左側部・中手骨・椎骨片・右側頭骨片・骨片	
33	側頭骨片	
34	右頬骨・頭蓋骨片	
杉5区石室内（一括骨）	左鎖骨片・上顎骨片・右下顎骨片・後頭骨片・左側頭骨片・側頭骨片・頭頂骨片・左前頭骨片・肋骨片・椎骨片・手の末節骨・頭蓋骨片・長骨片・骨片	
杉5区石室床面直上（南側）	骨片	
杉5区石室南側骨だまり	頭蓋骨片・下顎骨片・椎骨片・左橈骨片（D）・中手骨片・指骨・長骨片・骨片	
杉5区石室外（南側）	頭蓋骨片・腓骨片・椎骨片・膝蓋骨片・骨片	

表１　杉古墳から検出された人骨の部位（番号は図２の取り上げ番号と一致する）



１．１区全景（南より）

２．２区西半（東より）

３．２区東半（南東より）

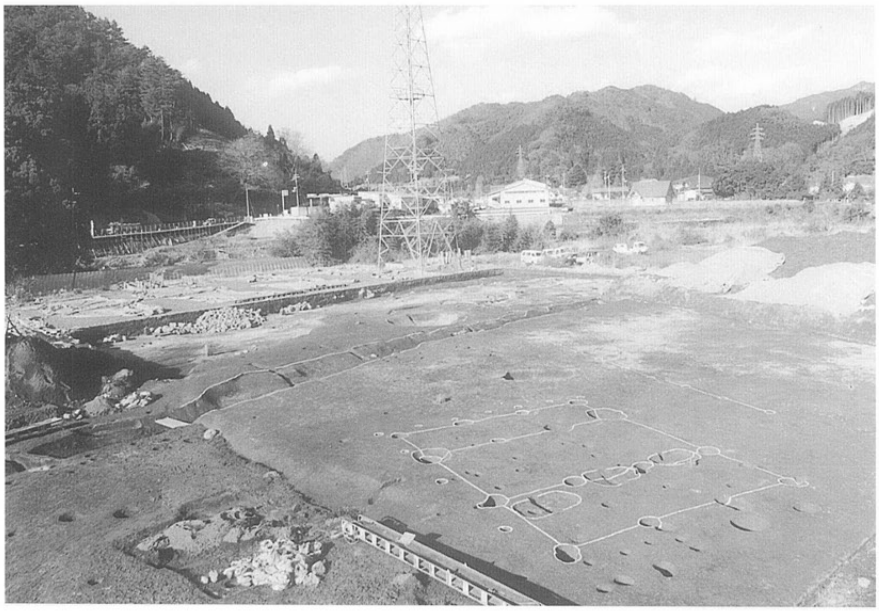
図版 2

1．3区北部（東より）

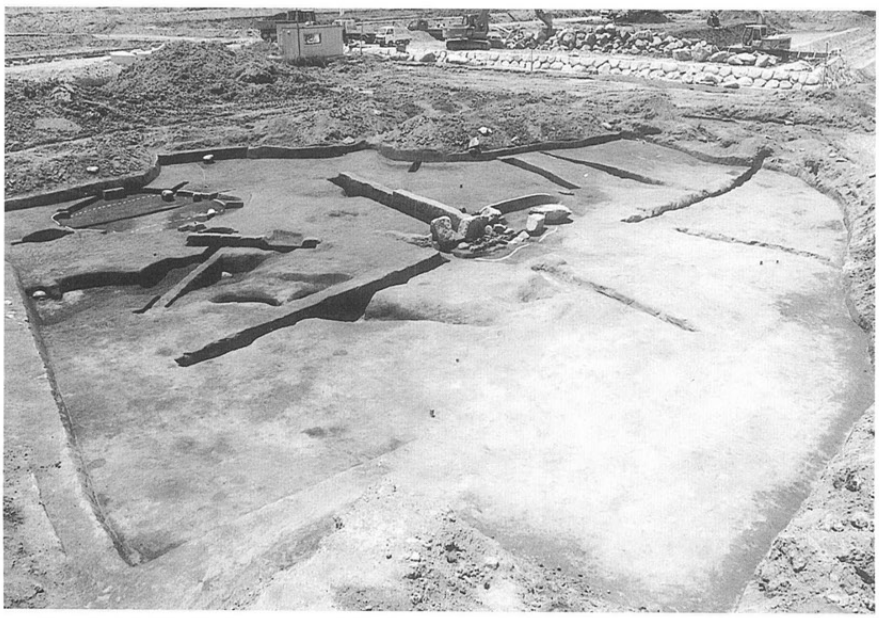
2．3区南部（南より）

3．3区東部（南西より）

1．４区西部（南西より）



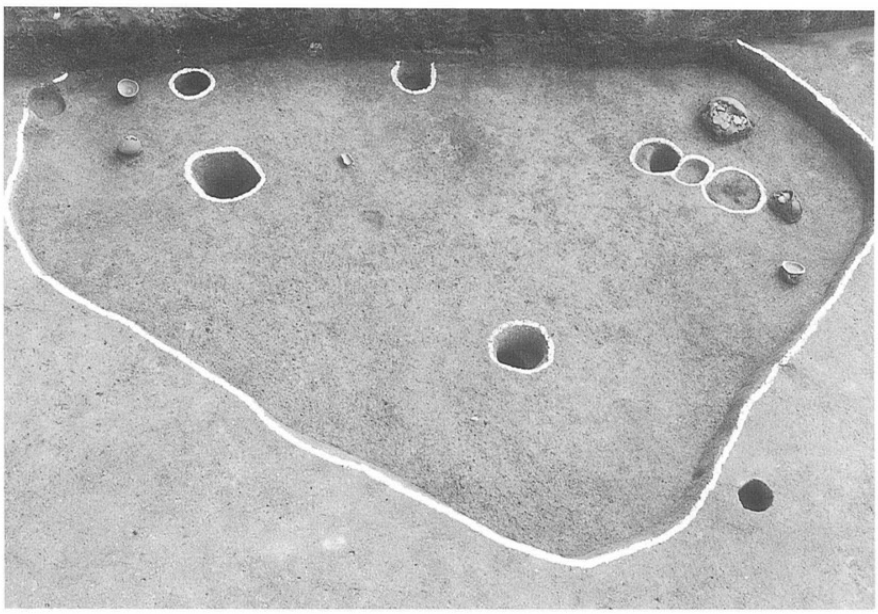
2．４区東部（南より）



3．５区全景（南より）

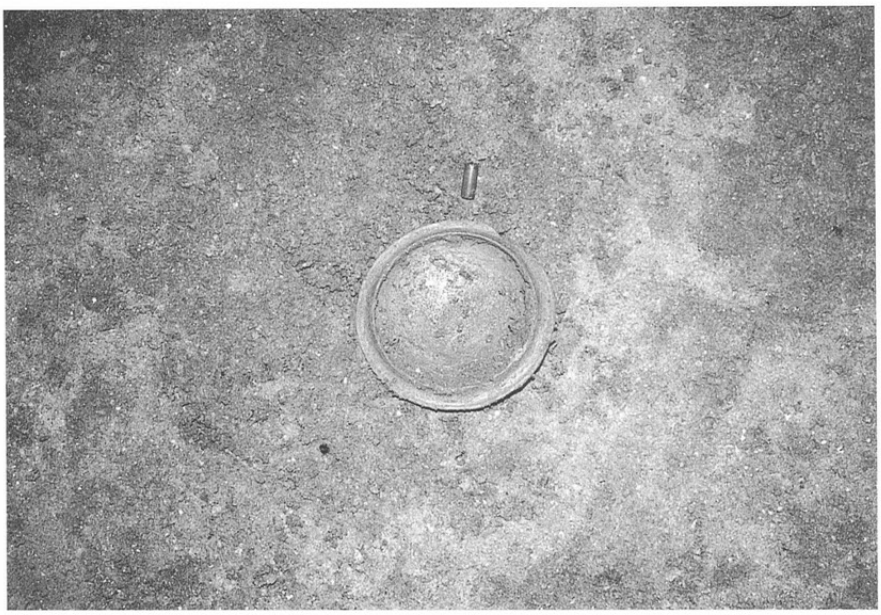
図版 4

1．竪穴住居 1（東より）

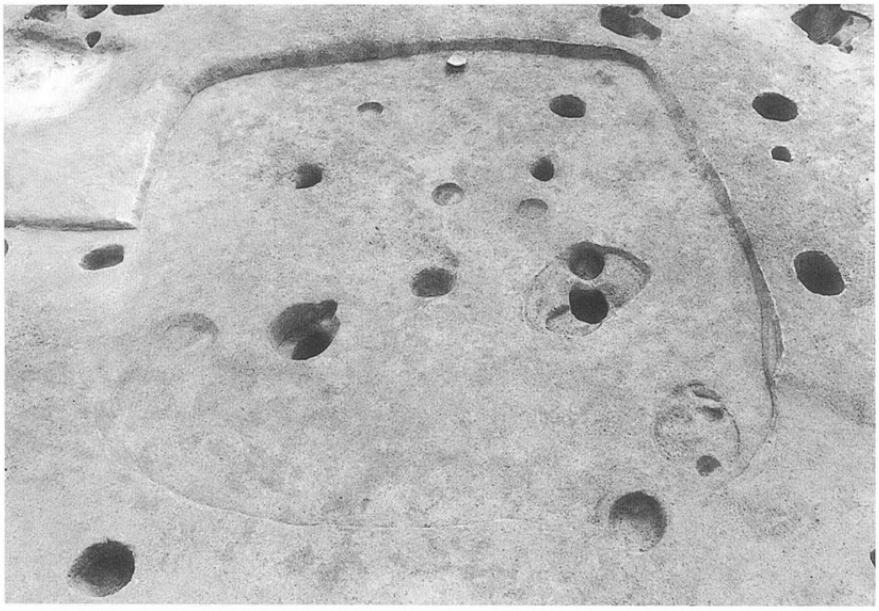


2．竪穴住居 2（北西より）

3．竪穴住居 3（北より）



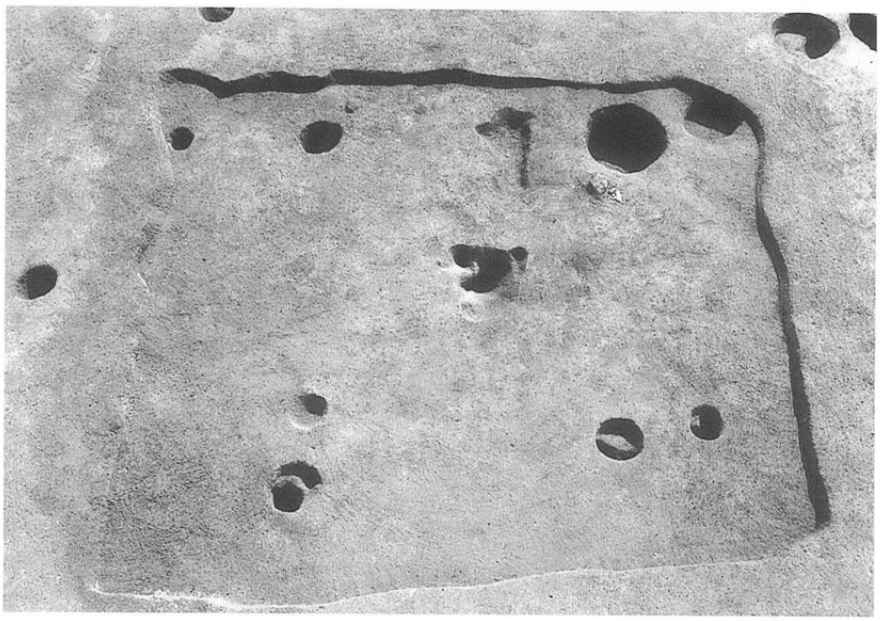
1．竪穴住居 3 遺物出土状況



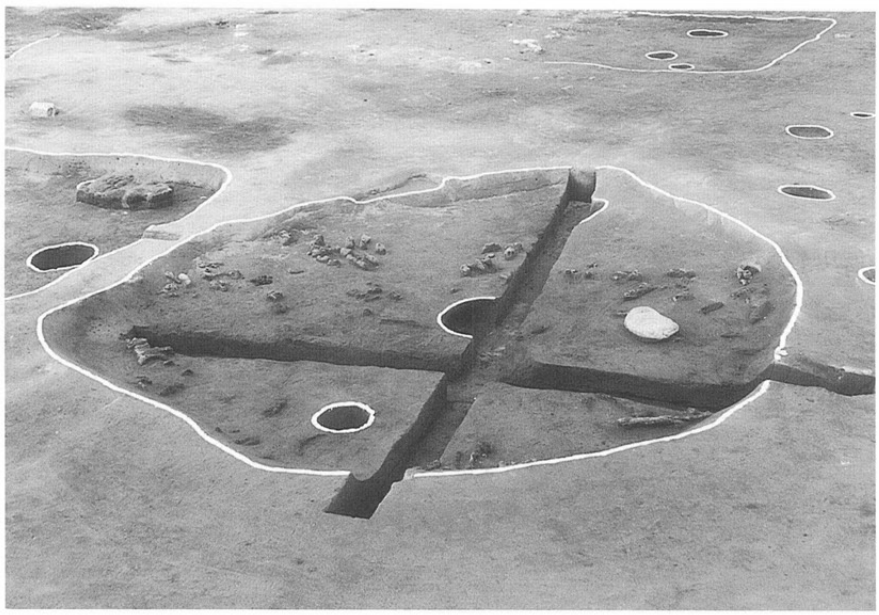
2．竪穴住居 4 （北西より）

3．竪穴住居 5 （東より）

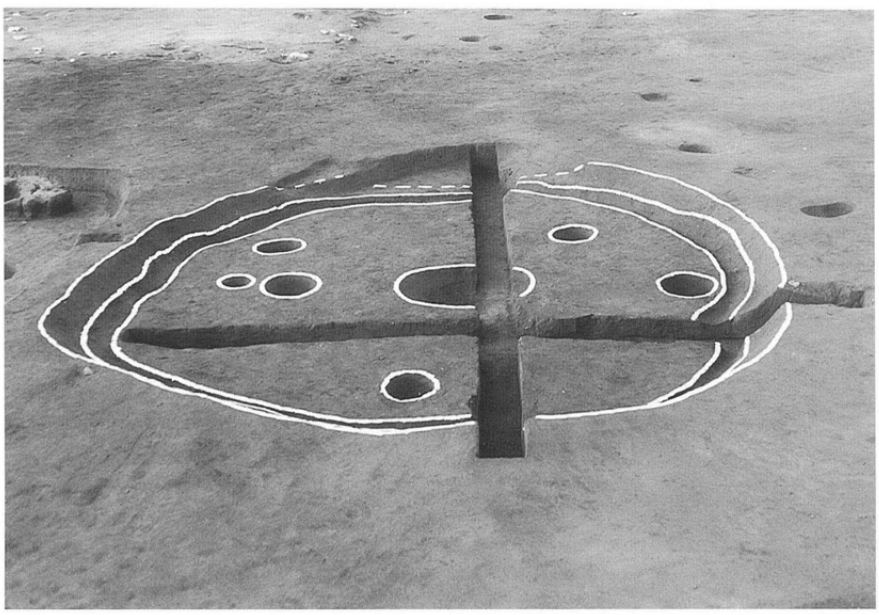
図版 6



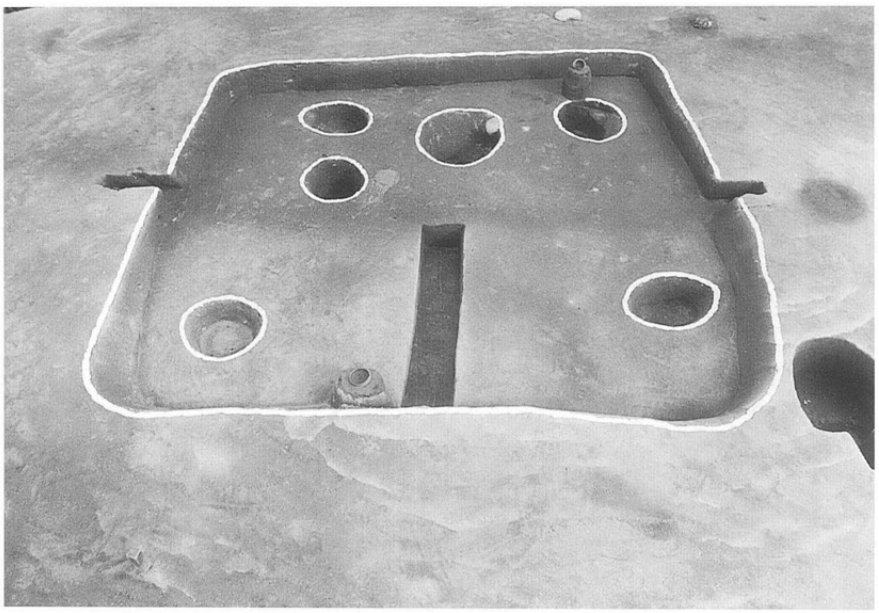
1．竪穴住居 6（西より）



2．竪穴住居 7（南より）



3．竪穴住居 7（南より）

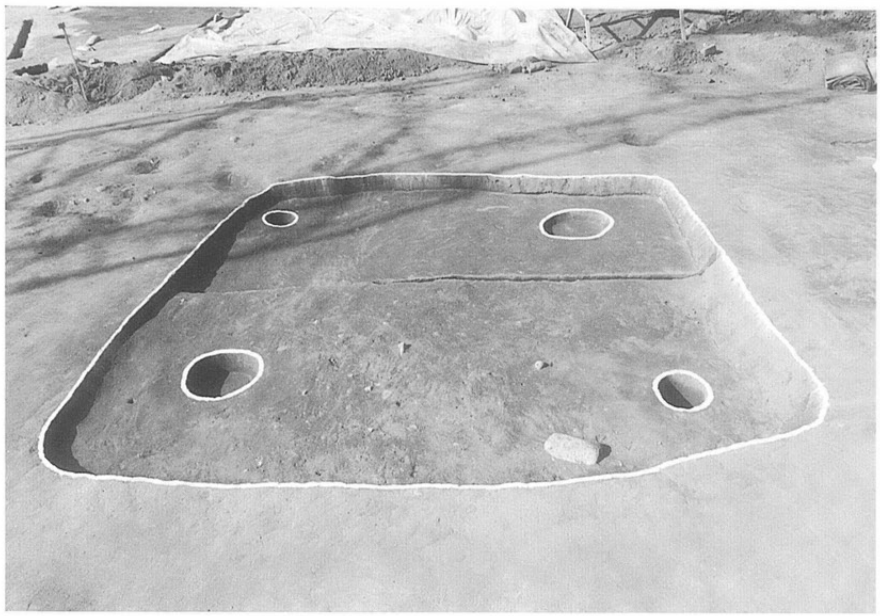


1．竪穴住居 8（南東より）

2．竪穴住居 9（南東より）

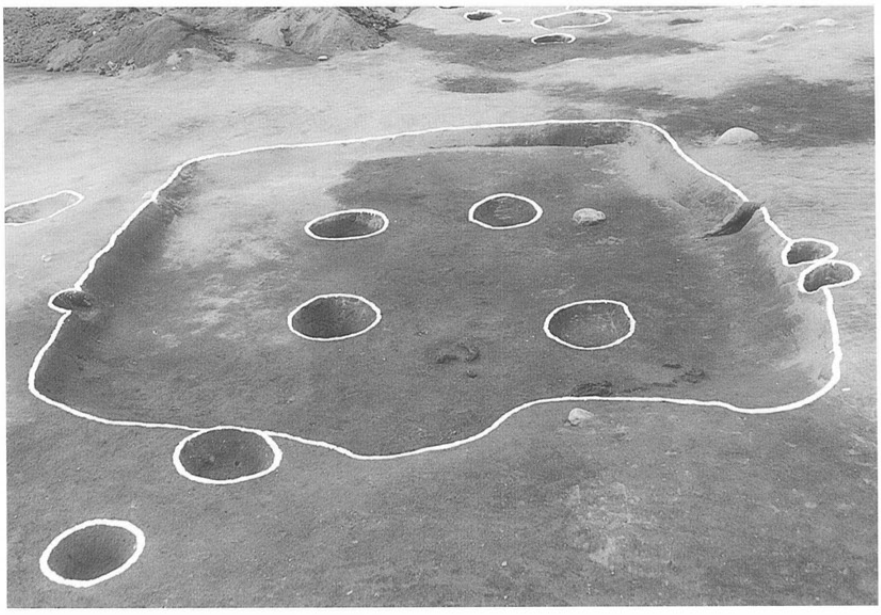
3．竪穴住居 9 カマド（南東より）

図版 8

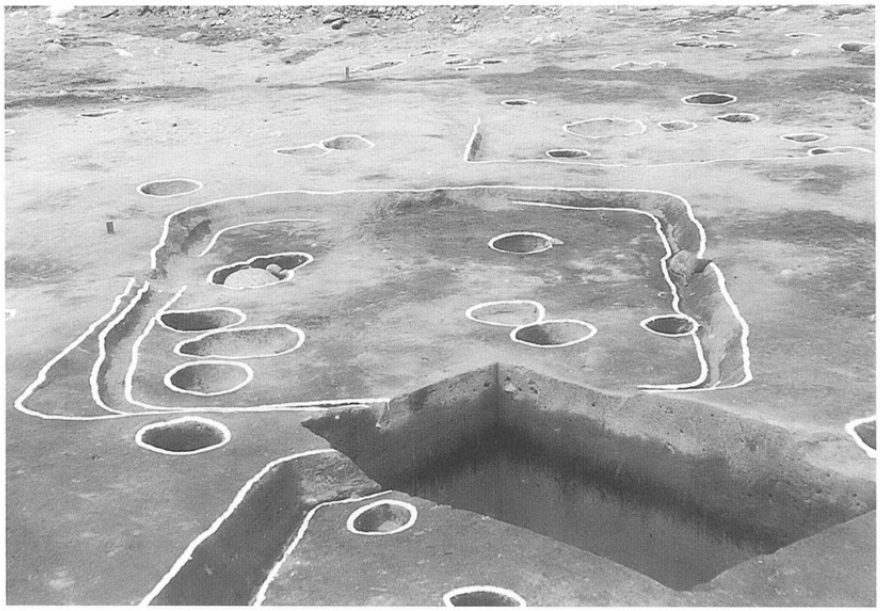


1．竪穴住居10（南より）

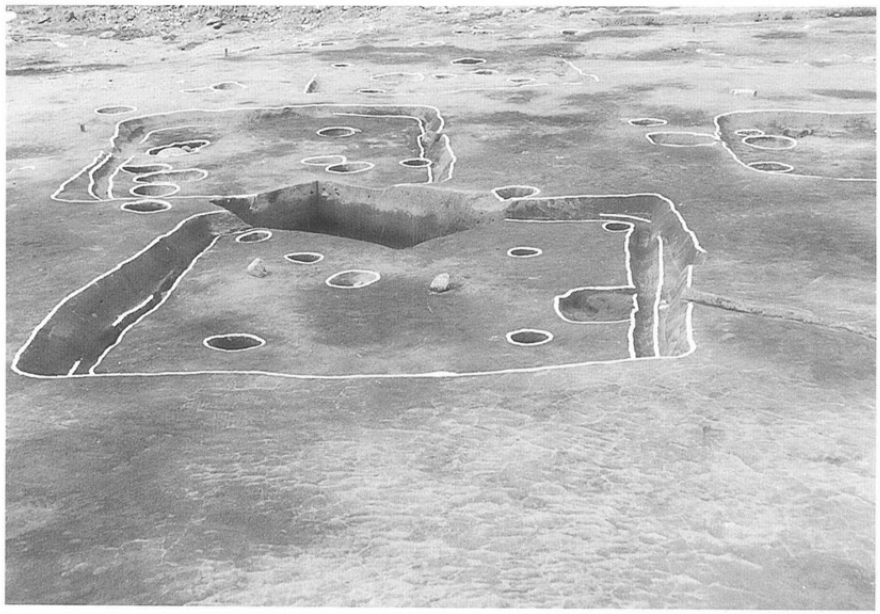
2．竪穴住居11（東より）



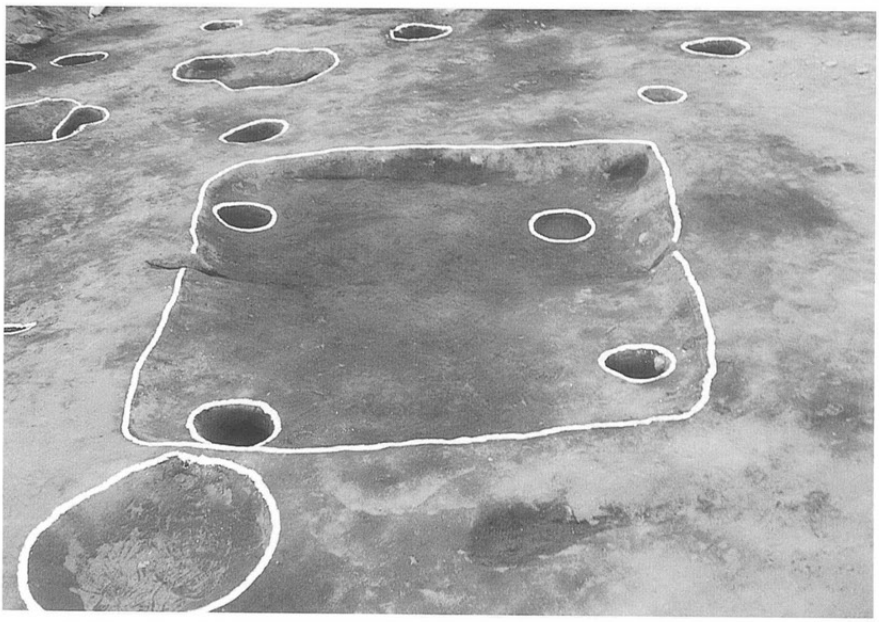
3．竪穴住居12（南東より）



1．竪穴住居13（南東より）

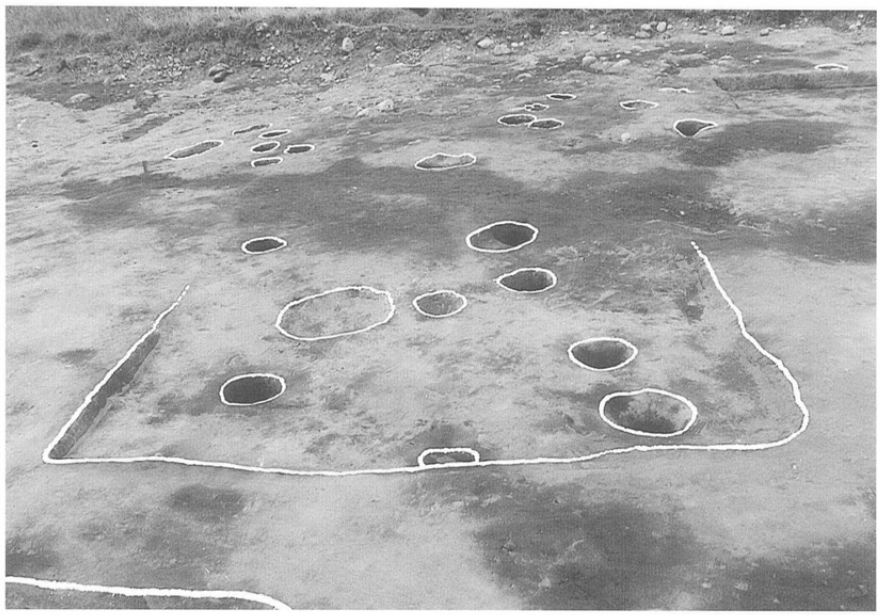


2．竪穴住居14（南より）

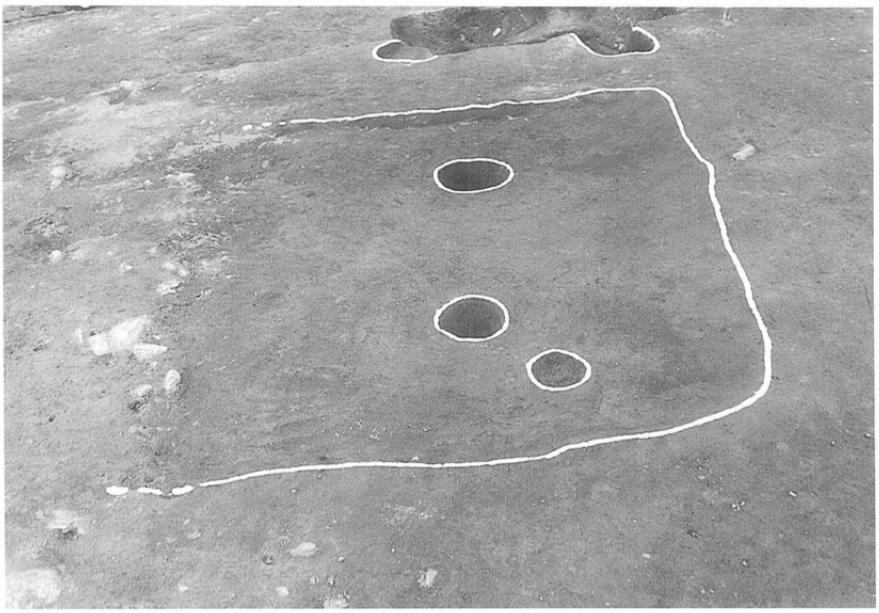


3．竪穴住居15（南より）

図版10

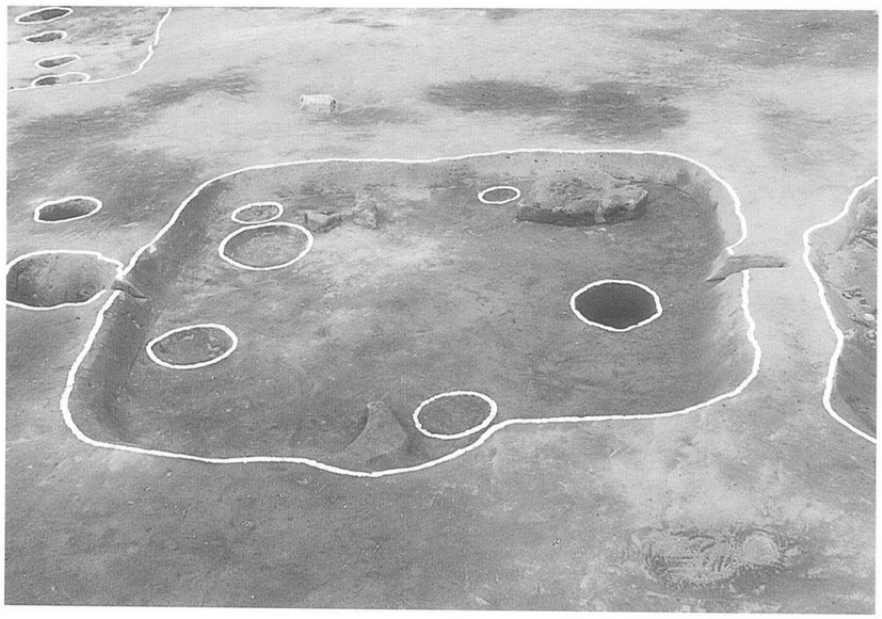


1．竪穴住居16（南より）



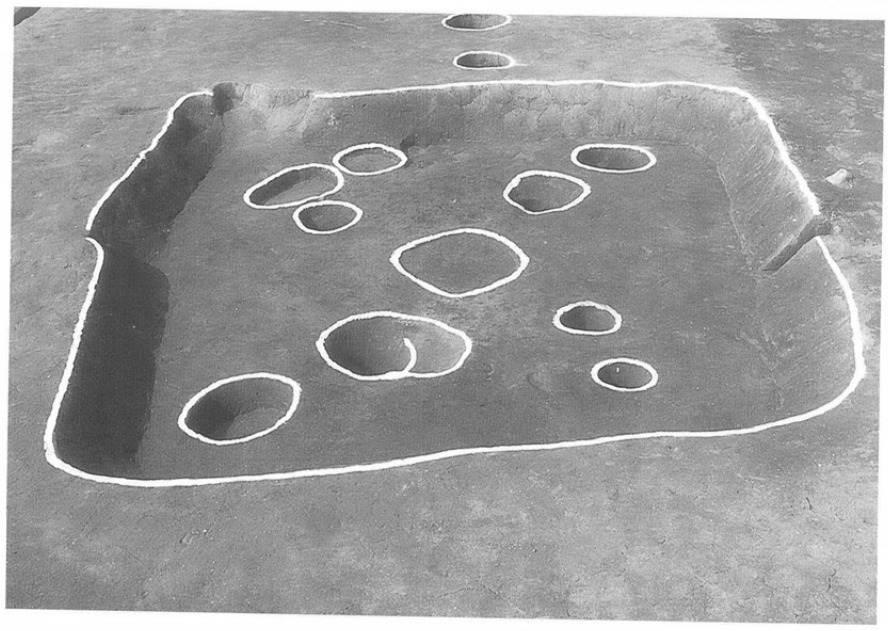
2．竪穴住居17（南より）

3．竪穴住居18（南より）



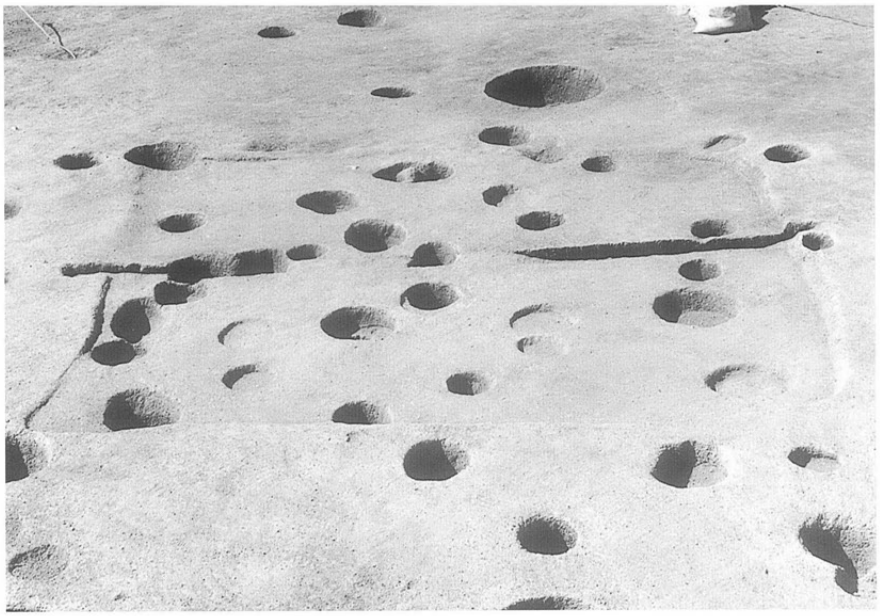
1．竪穴住居18（南より）

2．竪穴住居19（南東より）

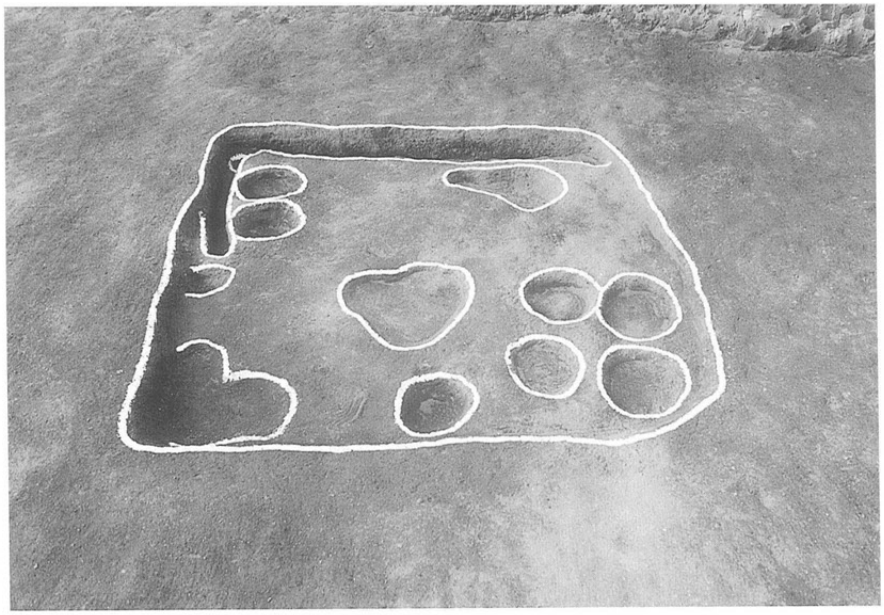


3．竪穴住居19（南東より）

図版12



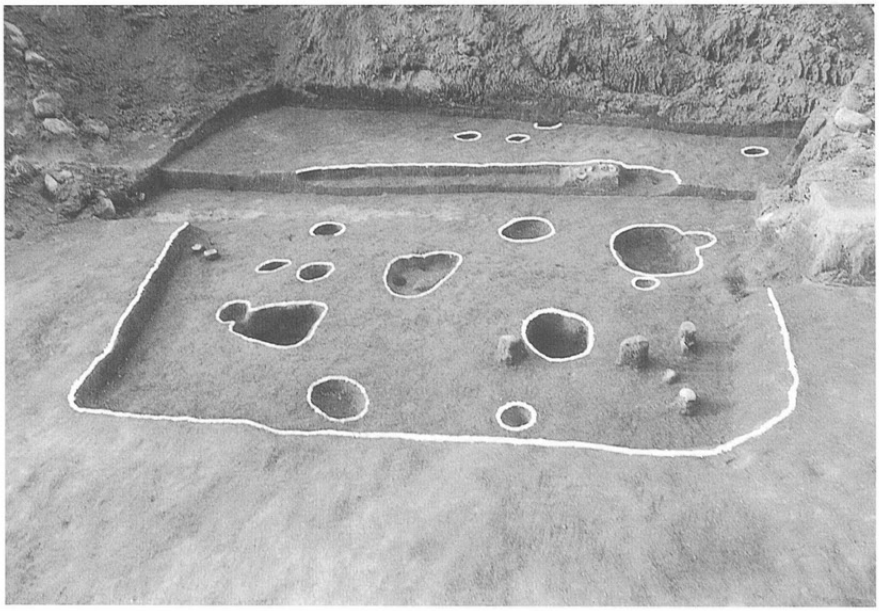
1．竪穴住居20（南東より）



2．竪穴住居21（南より）

3．竪穴住居22（南東より）

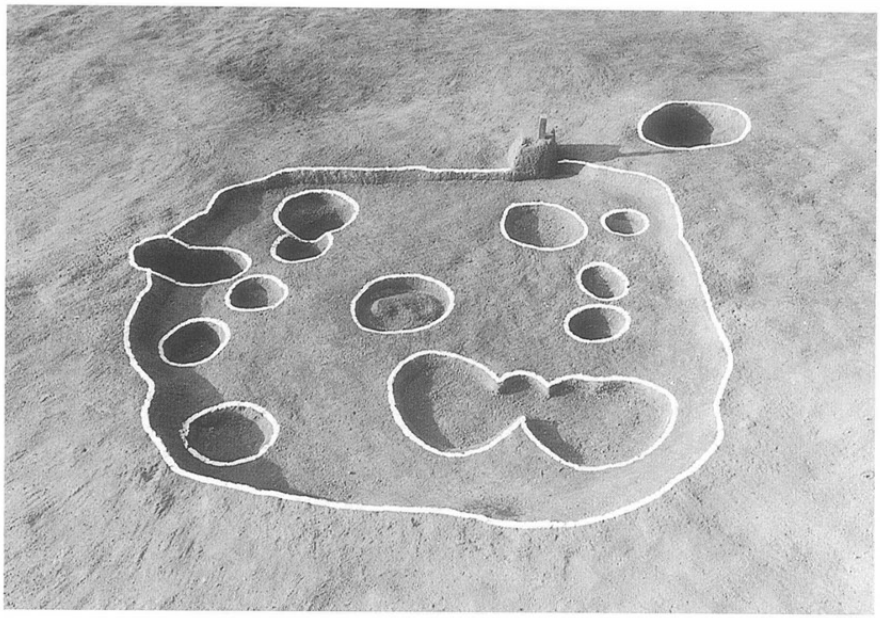
1．竪穴住居23（南より）



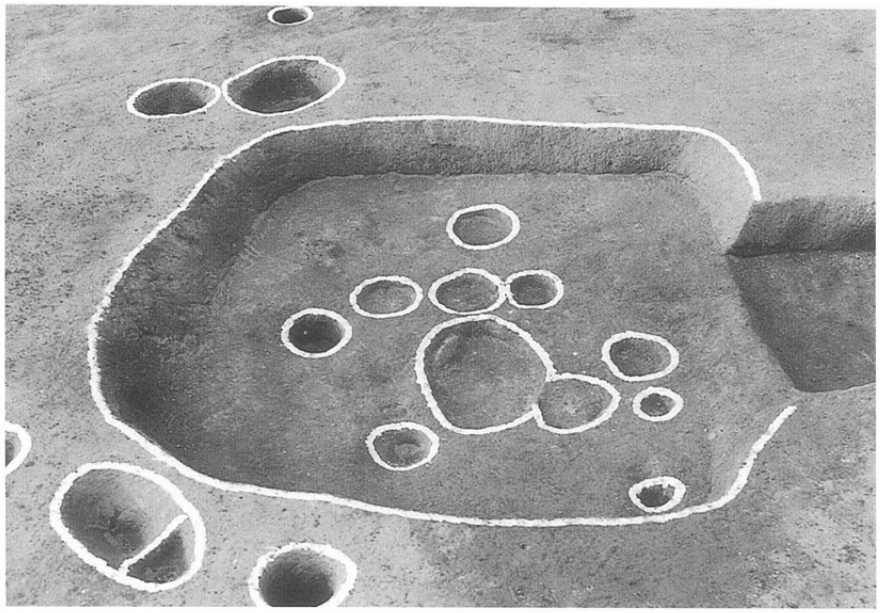
2．竪穴住居24（南より）

3．竪穴住居24出土遺物

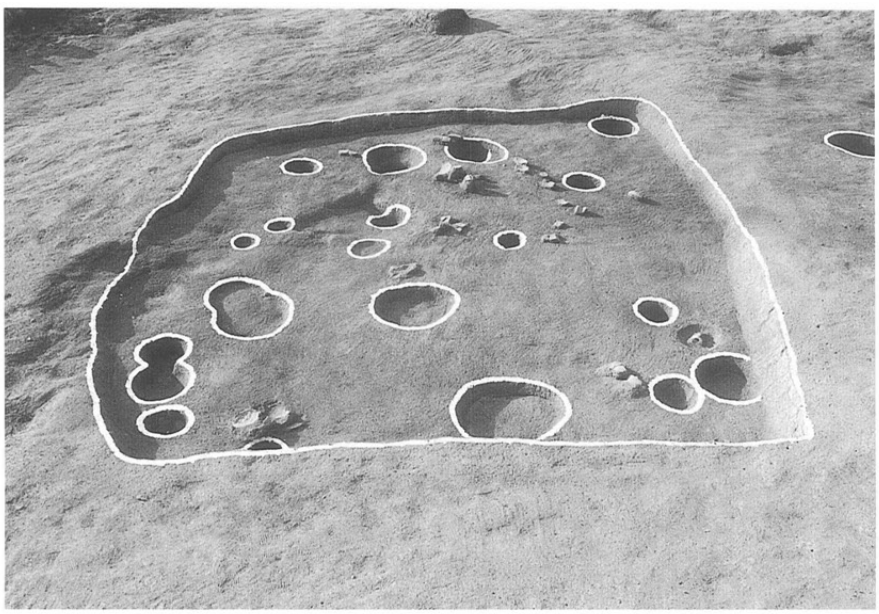
図版14



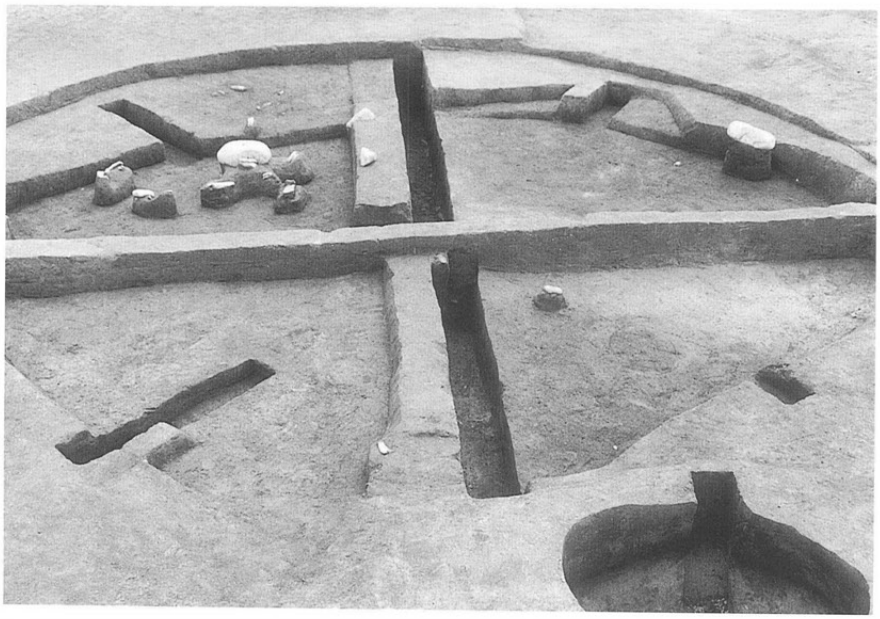
1．竪穴住居25（南より）



2．竪穴住居26（南より）

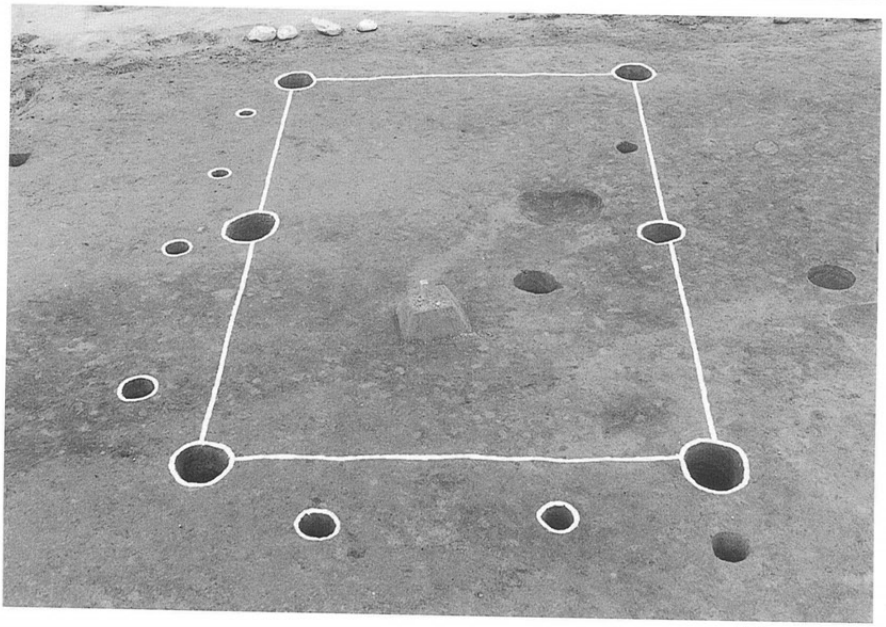


3．竪穴住居28（南東より）



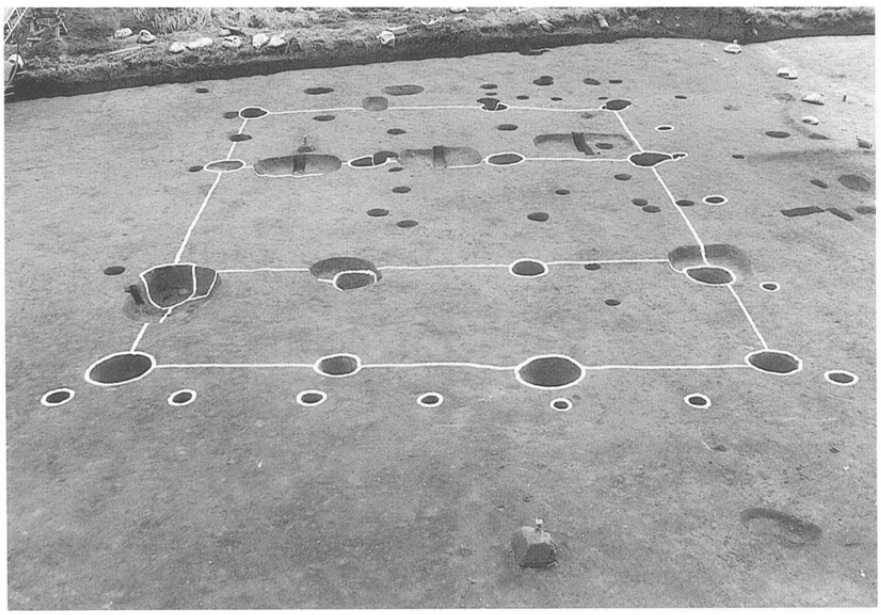
1．竪穴住居29（北より）

2．掘立柱建物1・2（西より）



3．掘立柱建物4（南より）

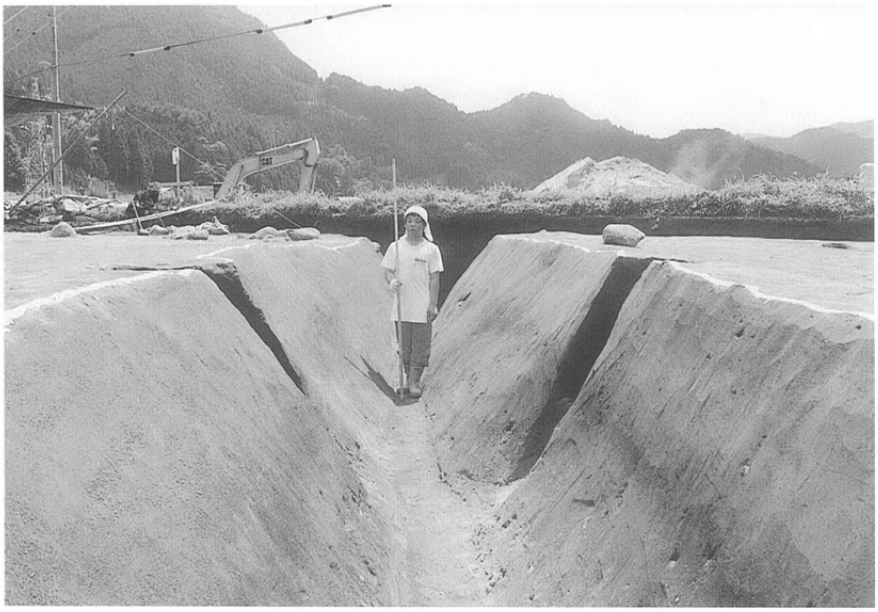
図版16



1．掘立柱建物５（南より）

2．溝４（南西より）

3．溝４作業風景



1．溝4

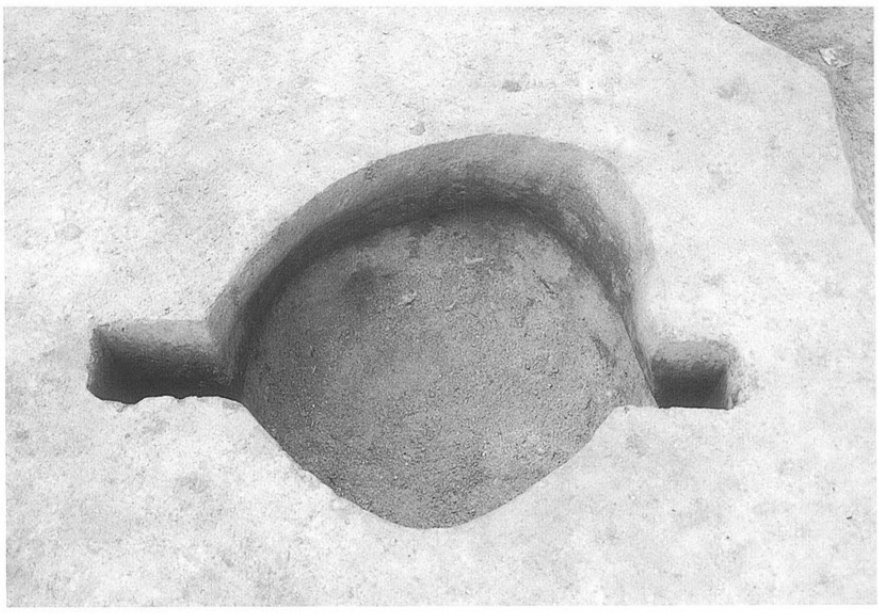
2．炉3（北より）

3．土壙26（南東より）

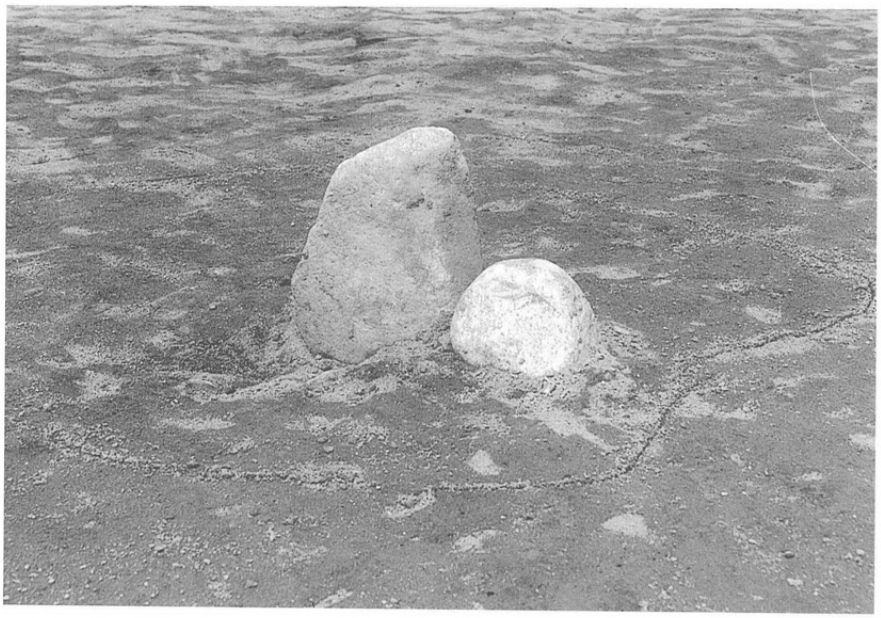
図版18

1．土壙27（北東より）

2．土壙38遺物出土状況



3．土壙38（北より）



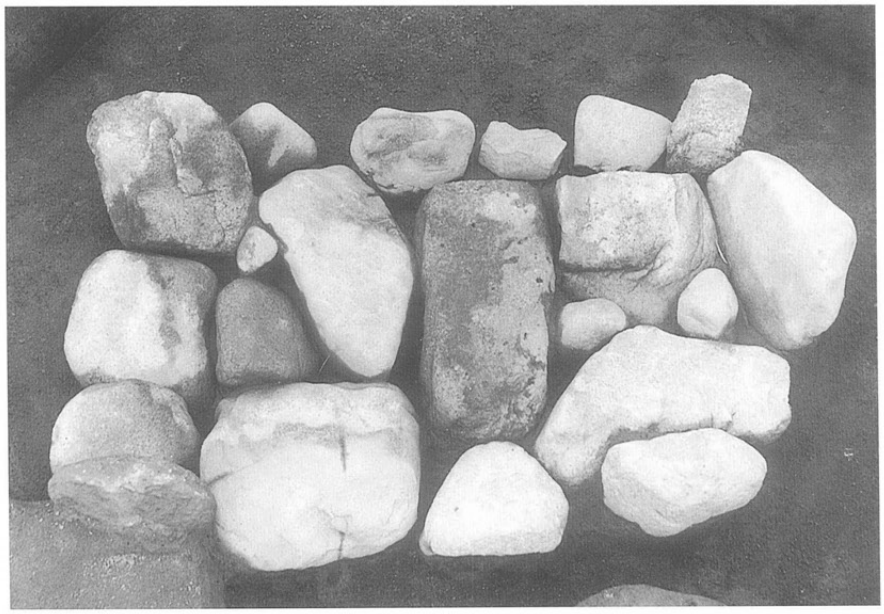
1．土壙墓１（東より）

2．土壙墓１（北より）

3．土壙墓２（南より）

図版20

1．土壙墓２（南より）

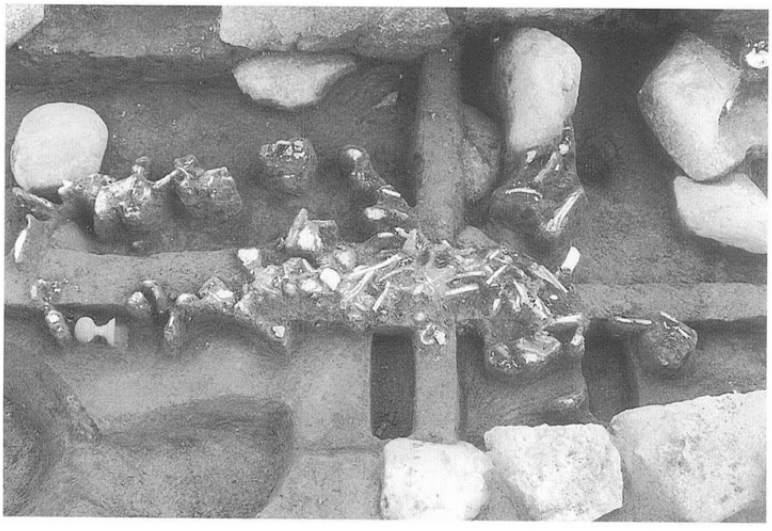


2．土壙墓２（南より）

3．土壙墓４（南西より）

1．土器溜り（西より）

2．古墳人骨検出状況



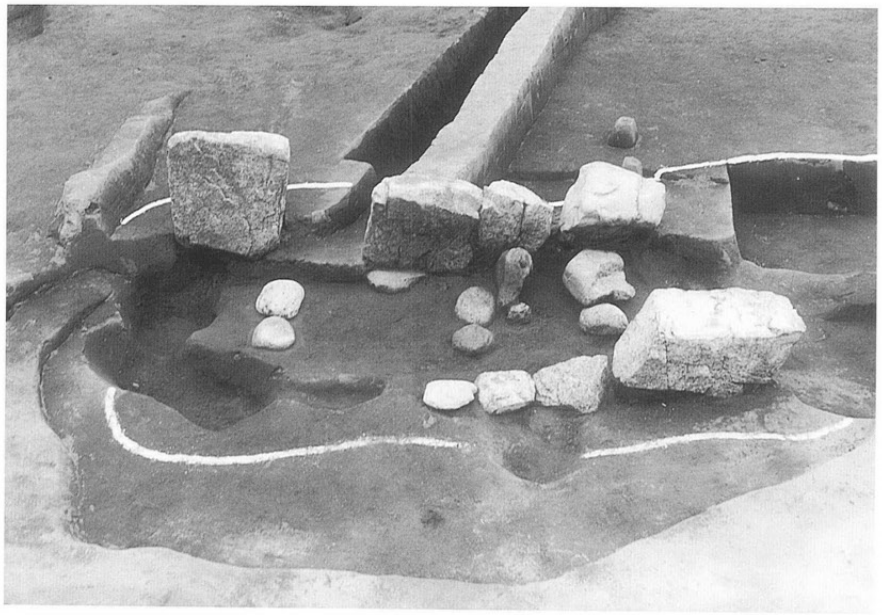
3．古墳・人骨（北より）

図版22

1．古墳遺物出土状況

2．人骨（下顎骨）

3．石室（東より）



1．石室（北より）

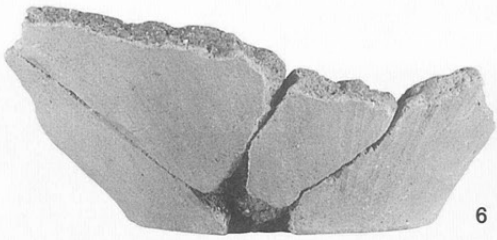
2．作業風景

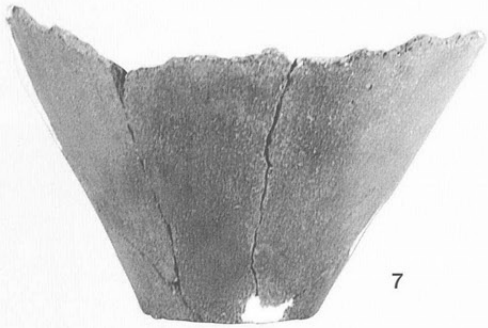
3．調査終了後

図版24

1

2


6


7

C1

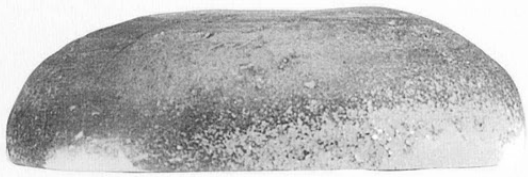
C2

C3

C4

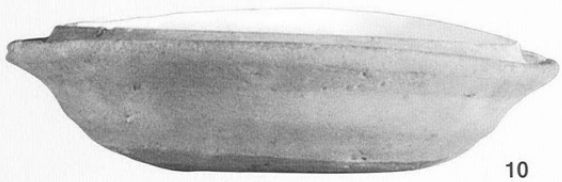
C5

C6

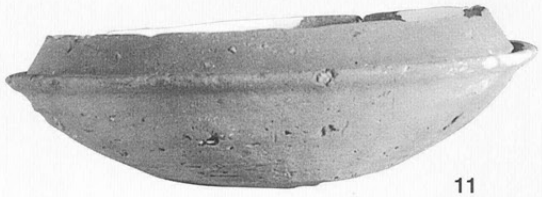

8

9

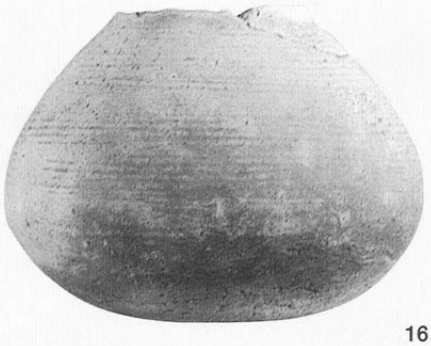
13底部


10

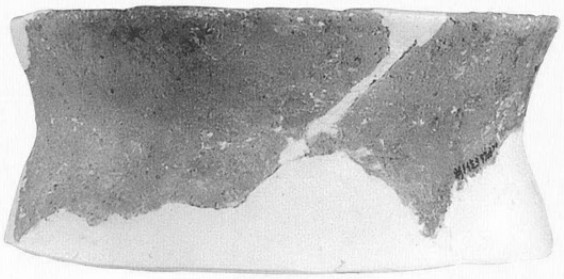
竪穴住居出土遺物



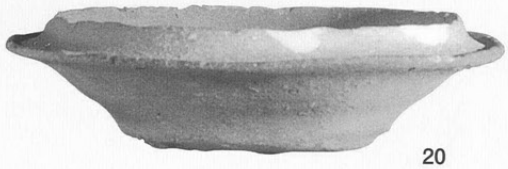
11



16

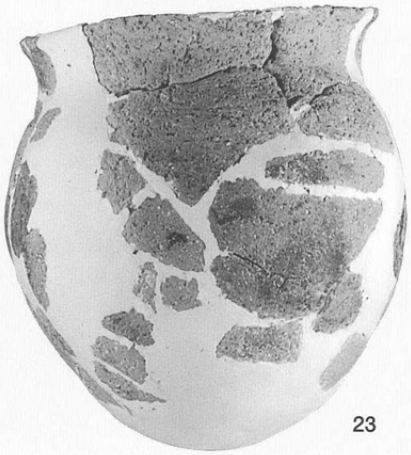


18

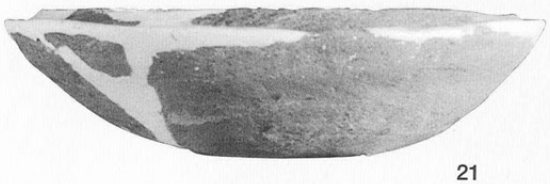


20

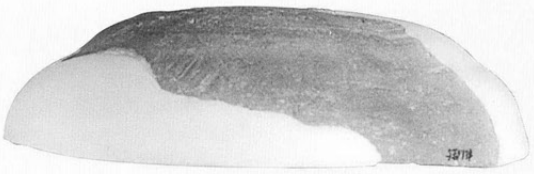
O1



23



21

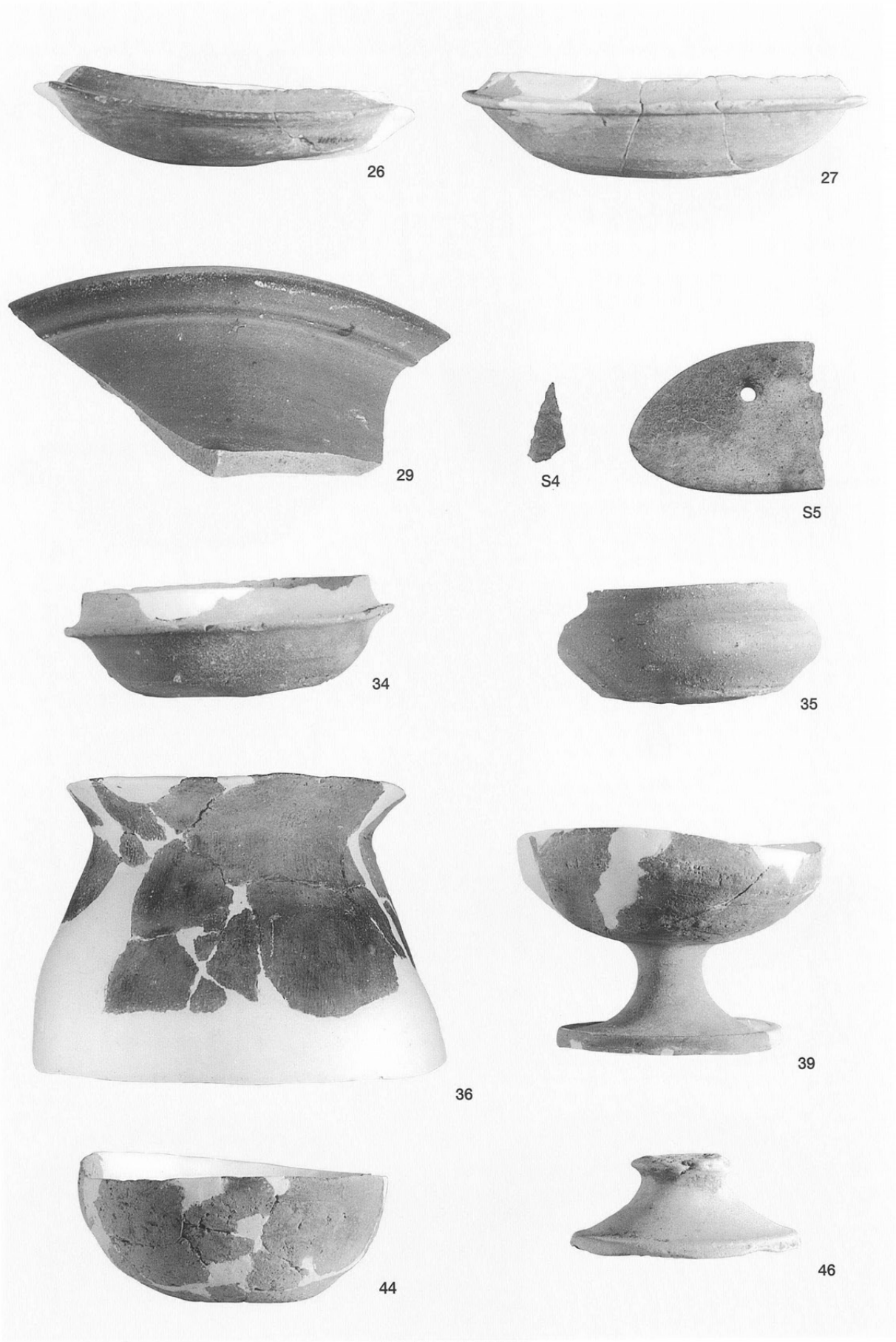


24

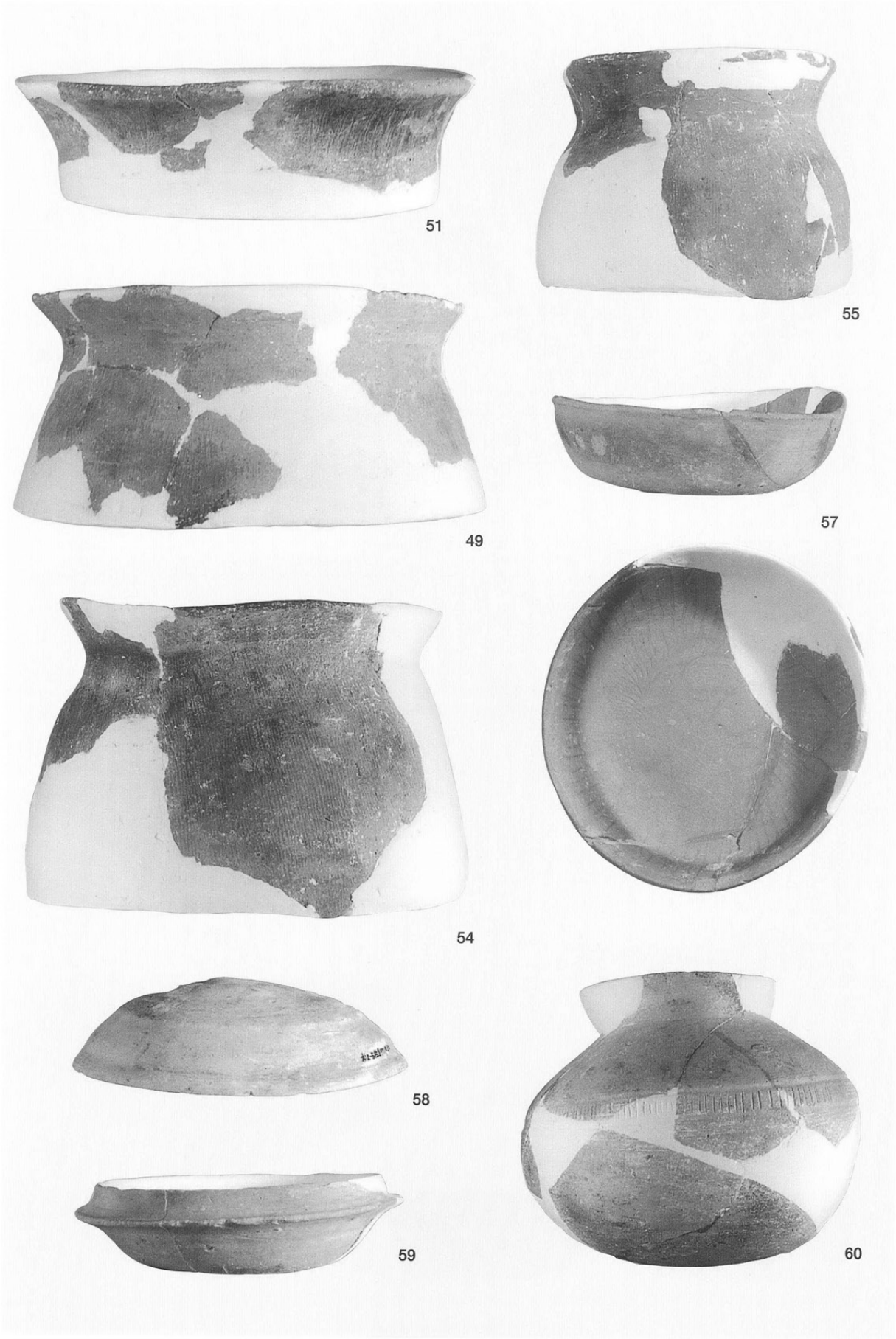
25

竪穴住居出土遺物

図版26

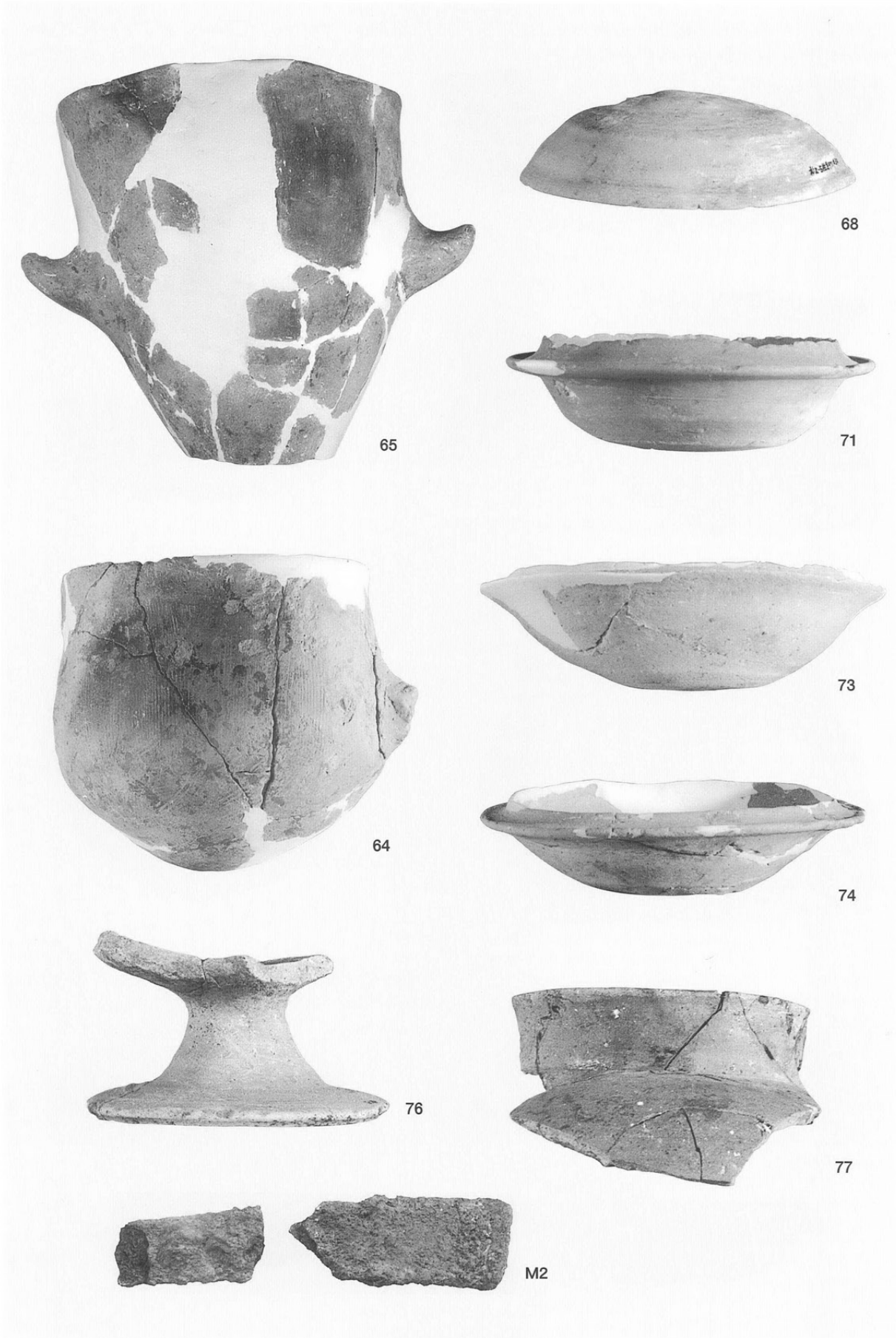


竪穴住居出土遺物



竪穴住居出土遺物

図版28

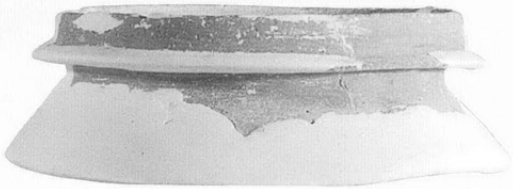


竪穴住居出土遺物

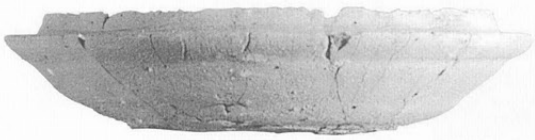
79

81

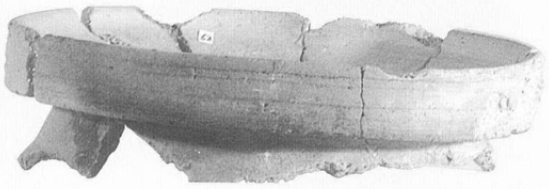
M3



86

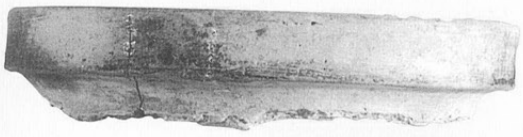


94



87

88



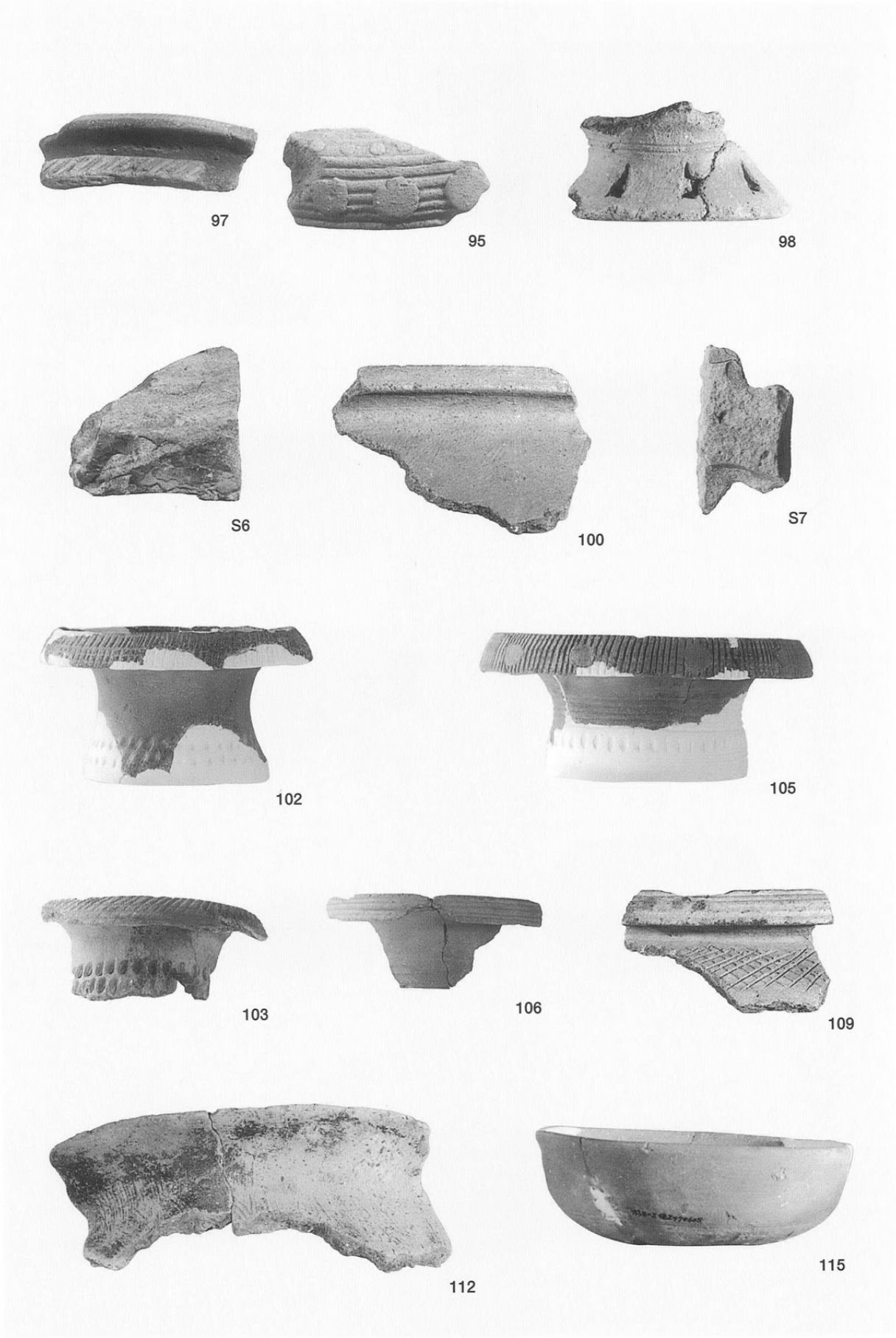
89

90

91

竪穴住居出土遺物

図版30

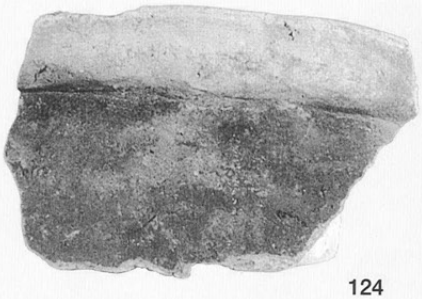


溝・炉出土遺物

116

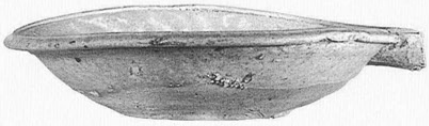
C9

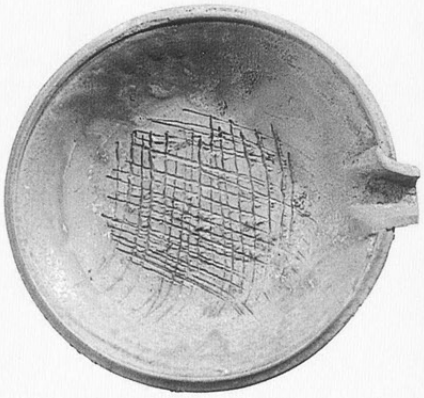
C10



124

127

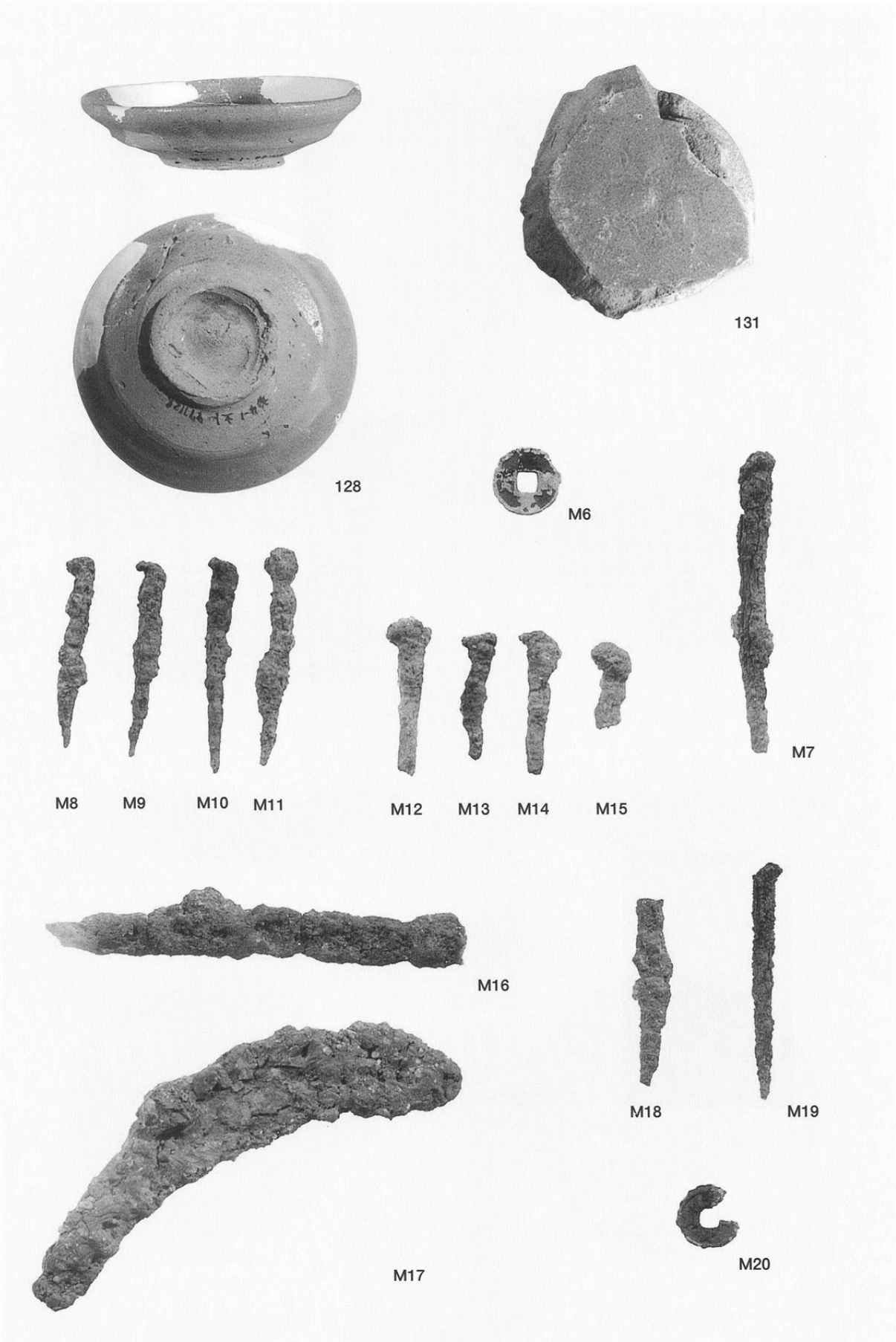




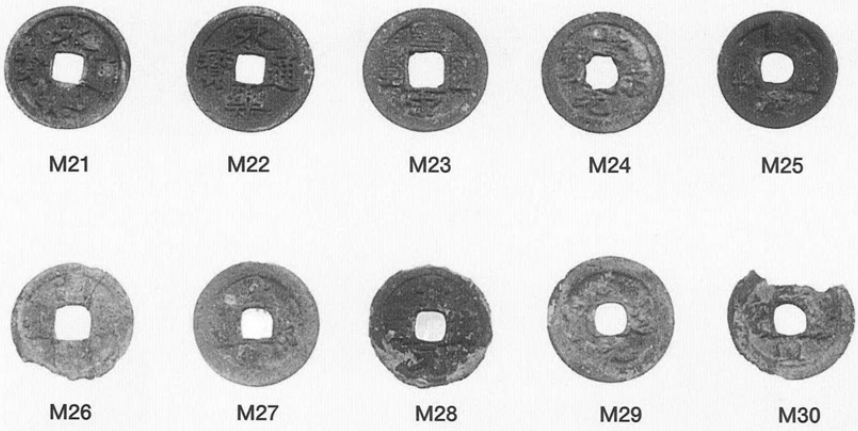
129

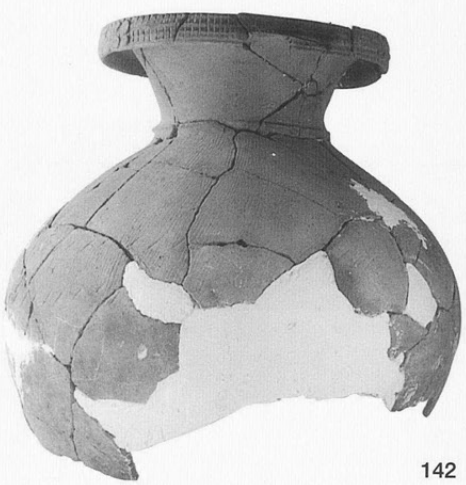
炉・土壙出土遺物

図版32

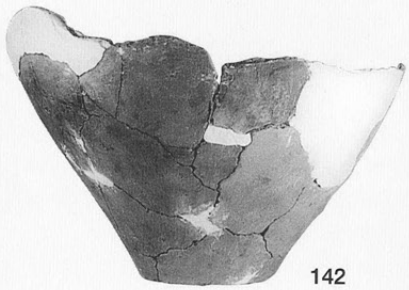


土壙・土壙墓出土遺物

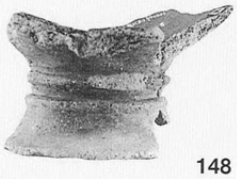


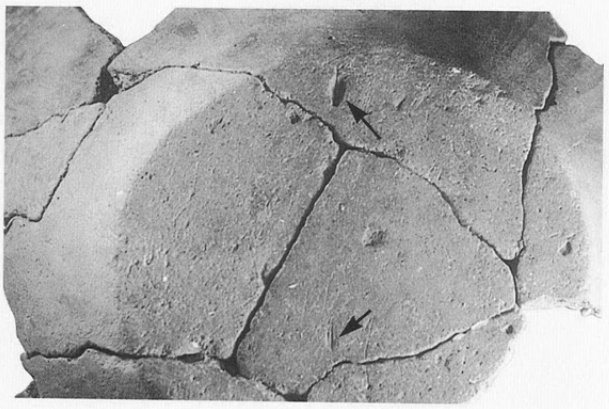

142

144


142

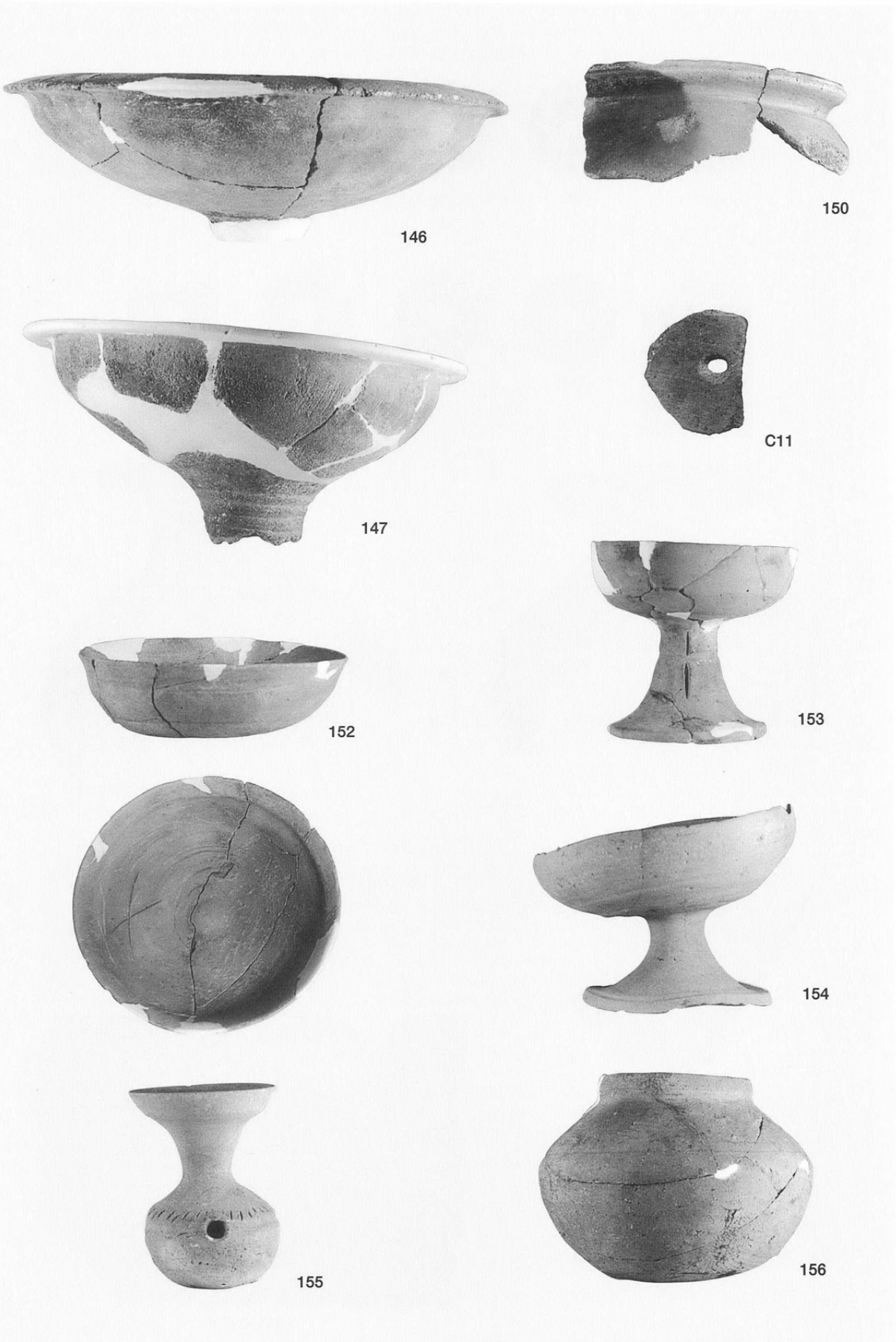
144


148

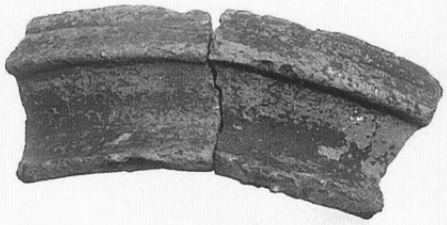

144底部籾痕

土壙墓・土器溜り出土遺物

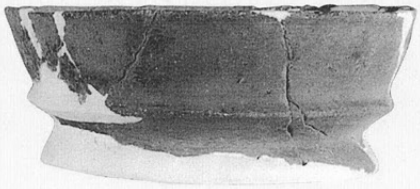
図版34



土器溜り・古墳出土遺物



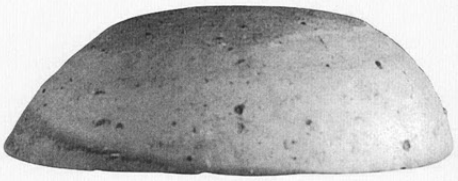
157



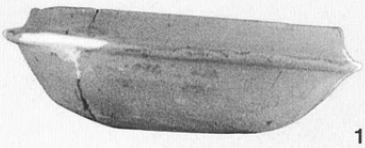
160

168

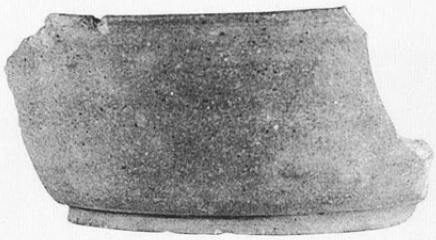
170



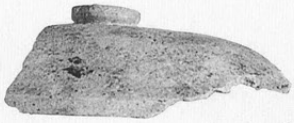
172



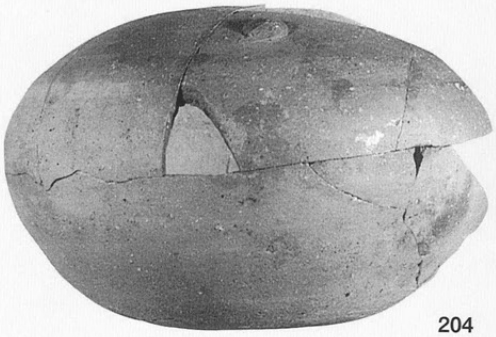
183



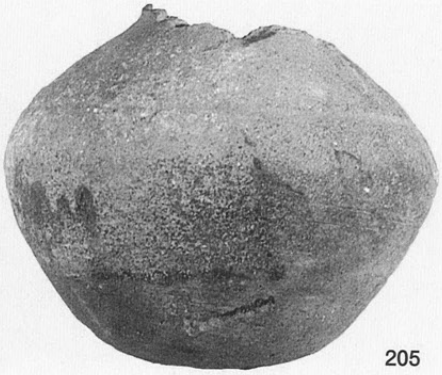
199



193



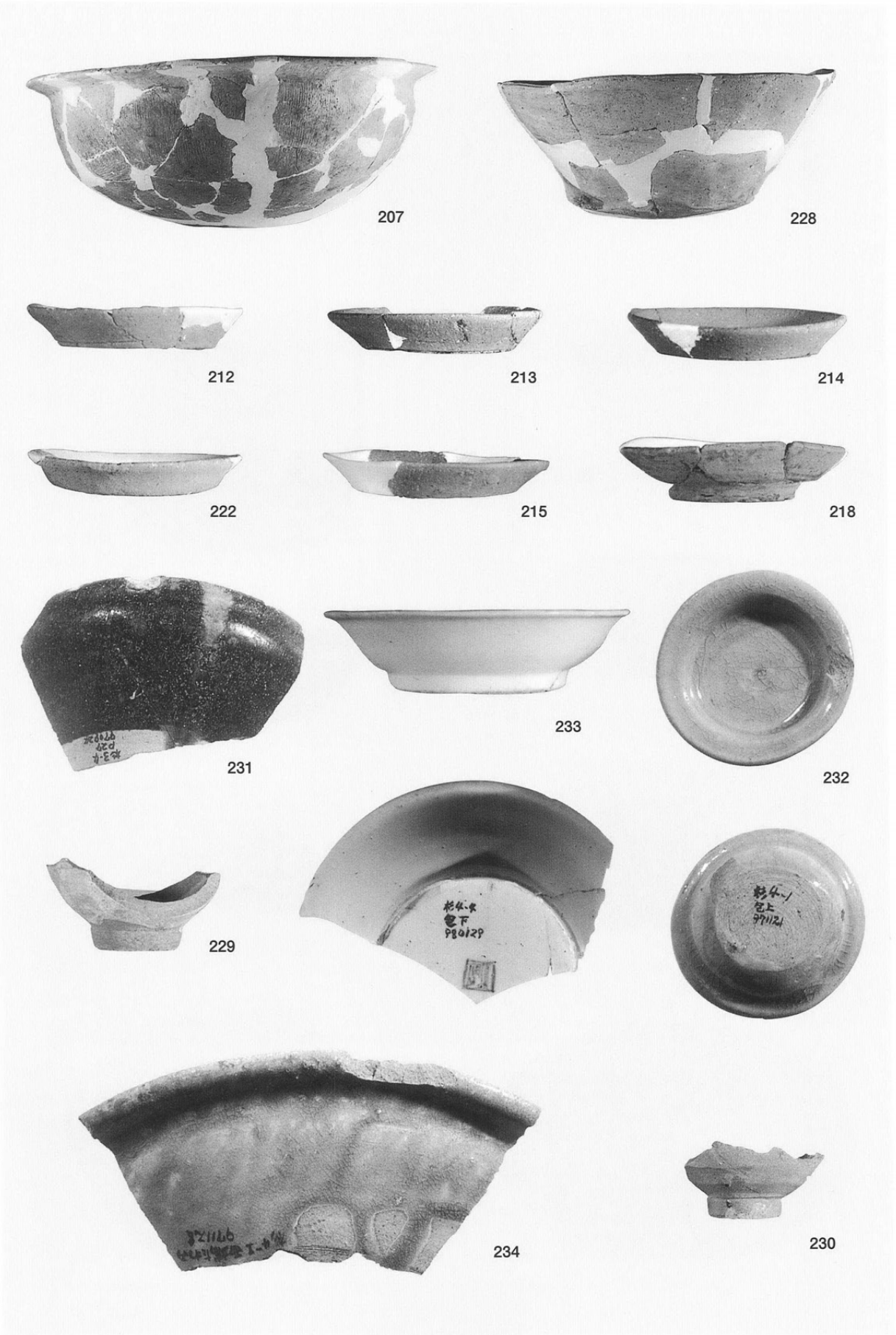
204



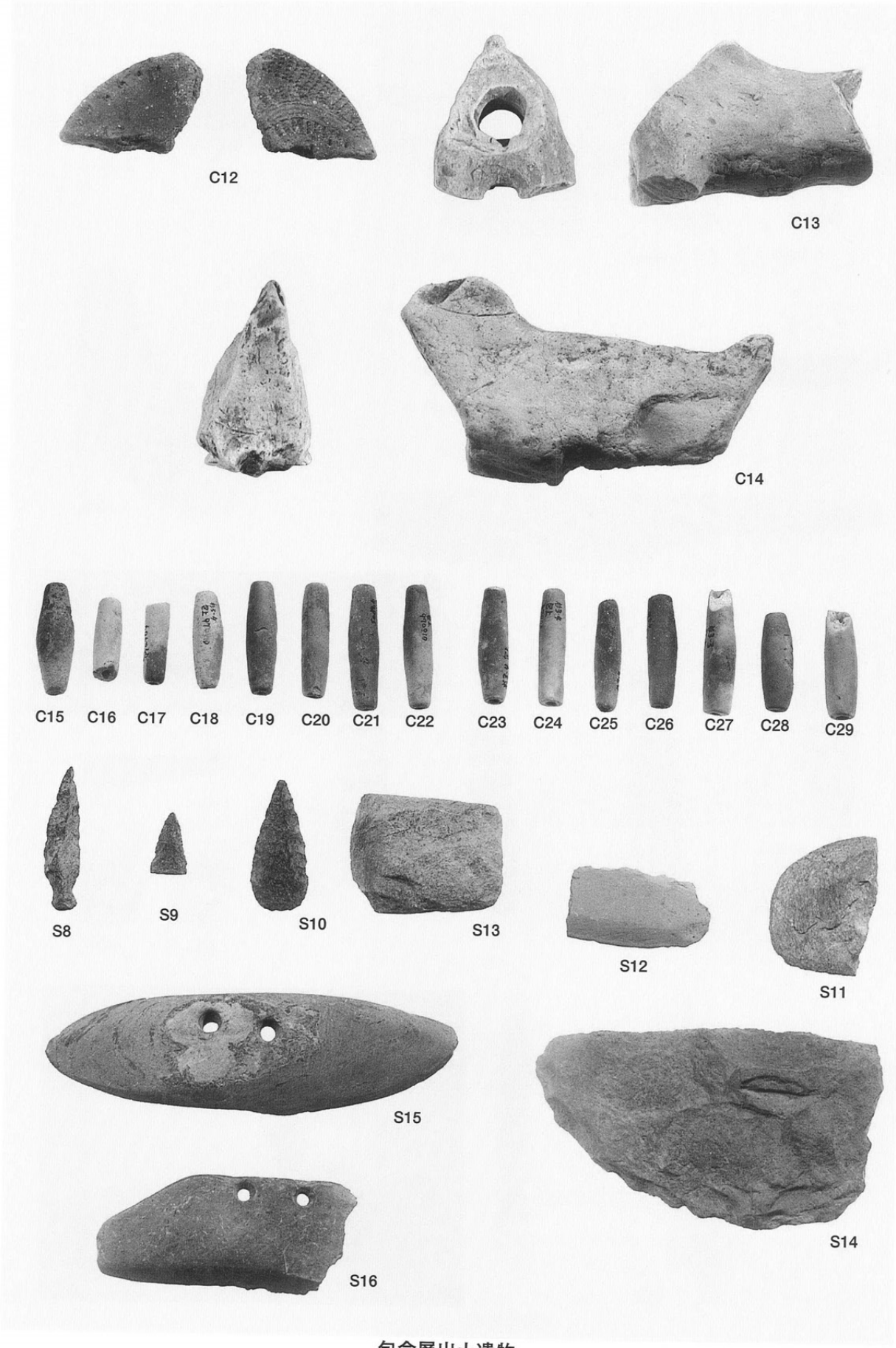
205

包含層出土遺物

図版36

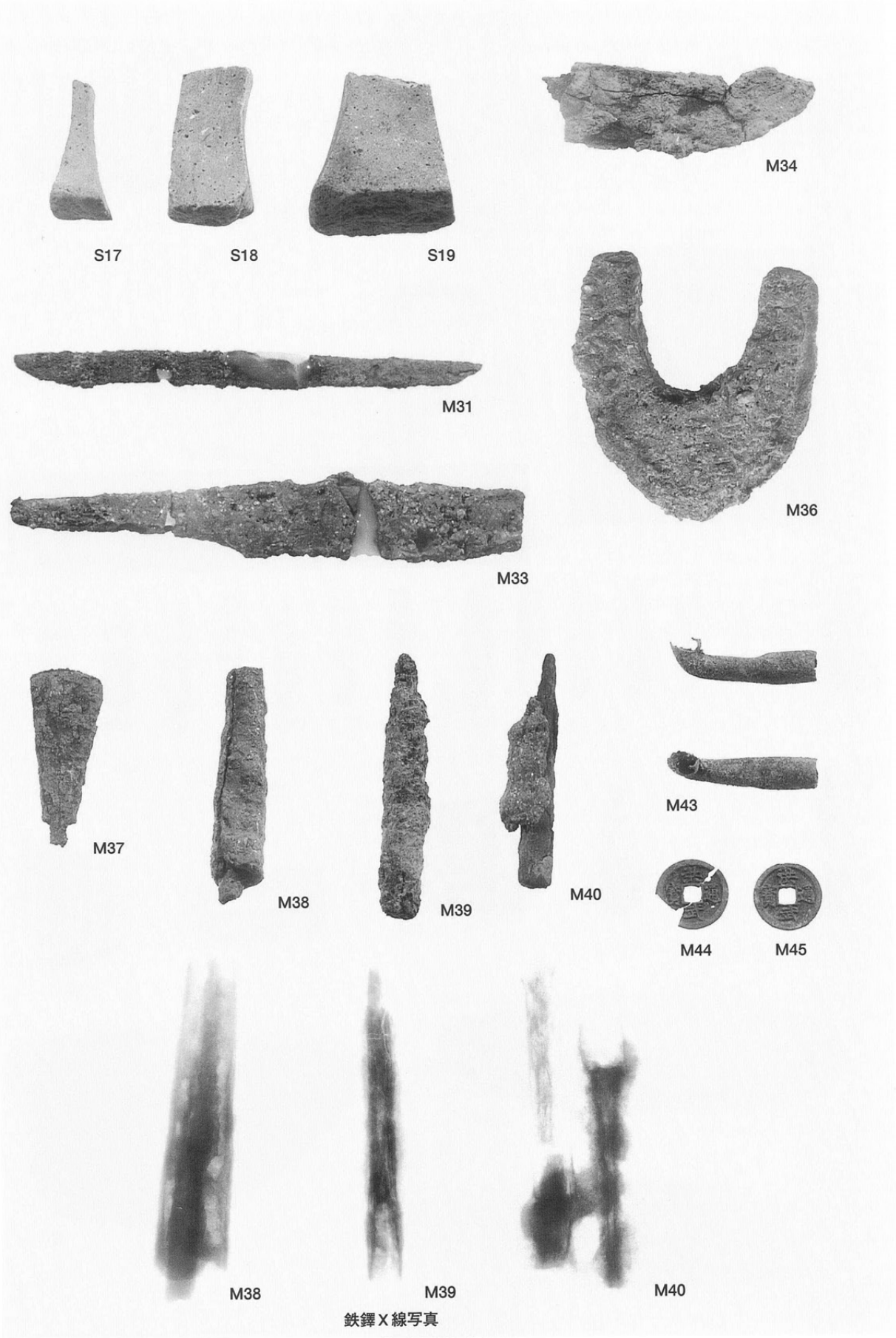


包含層出土遺物


C12
C13
C14
C15
C16
C17
C18
C19
C20
C21
C22
C23
C24
C25
C26
C27
C28
C29
S8
S9
S10
S13
S12
S11
S15
S14
S16

包含層出土遺物

図版38



鉄鐸X線写真

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すぎいせき
書名	杉遺跡
副書名	杉地区ほ場整備事業に伴う調査報告
巻次	
シリーズ名	奥津町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	4
編著者名	日下隆春・井上貴央・影岡優子・海藤俊行
編集機関	奥津町教育委員会
所在地	〒708-0421　岡山県苫田郡奥津町井坂495　TEL 0868-52-2921
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
杉遺跡（すぎいせき）	おかやまけんとまたぐん 岡山県苫田郡 おくつちょうすぎ 奥津町杉	33603		35° 10′	133° 56′	19961008 ～ 19980305	16,640m²	杉地区ほ場整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杉遺跡	集落 墳墓	縄文時代 ～ 江戸時代	竪穴住居29・掘立柱建物5・井戸2・溝5・炉4・柱列1・土壙39・土壙墓4・古墳1	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・輸入陶磁器・備前焼・勝間田焼・肥前系陶器・瀬戸系陶器・管玉・ガラス小玉・銅銭・石器（石庖丁・石鏃・砥石ほか）・金属器（釘・刀・鉄鐸・鉄鏃・刀子ほか）土製品（土錘・土馬・陶馬・分銅形土製品・紡錘車ほか）	

杉遺跡　発掘調査報告

1999年３月印刷
1999年３月発行

発　行　　奥津町教育委員会
岡山県苫田郡奥津町井坂495
TEL (0868)52-2921
印　刷　　サンコー印刷（株）